生田春月全集

第三巻

時代人の詩

新潮社

猫と女

のら猫が仔を生んだ。貴婦人のやうな様子
をした、尻尾の長い眼の濃い三毛猫が。
眼の下隈どりをしたあの女を想ひ出させる猫
が。
あの女の子供の手を引いて歩いてゐたやうに、
男はその猫の仔を懐み抱き上げた

（東京文房堂製）

遺稿詩の一篇（最後の旅のトランクから發見せるもの）

目次

時代人の詩

○

長篇

時代人の詩

禁斷の書に

禁斷の書、不許他見と
表紙に書きて、さびしく笑ふ。
つひに人には見せぬ詩を
われも書きしが、生きのびて。

ひとり書きつけ、ひとり歌ひ、
涙ぐみつつ、くりかへす。
禁斷の詩人となりて、
われもかへりぬ、いにしへに。

今はよしなし、生も死も、
戀も仕事も、あだなれば。
いかにかせむと夕影に
消えゆく風にこと問はむ。

さて、わが命、斷たばそのとき、
人は見よ、かかる惱みを、
あはれめよ、このおろかさを。
ただ言ふなかれ、善し惡しと。

昭和三年四月十九日

禁断を破る

禁断を破りて生きむ。
自れにも、世にも、人にも、
抗ひて、戦ひ生きむ。
敗れては禁断の人、
恥の外に生くる術なし、
苦の外に生くる道なし。

罪も恥も、われに尊し。
かくありき、かく生きたりと
あからさまに世に告り立てて、

嗤ふとも、むちうちぬとも
昂然と面上げ云はむ、
汝等のうち罪なき者我を打てと。
禁断の人なればわれ、
破る外に生くるみちなし。
世に敗れ、人に傷つき、
死を求めし人なればわれ、
よし、今は赤裸の人ぞ、
打てわれを、打つとも生きむ。

昭和三年五月二十一日

第一巻

死と戀の曲

——わが半生の挽歌——

All my faults perchance
thou knowest,
All my madness none
can know.

Byron.

第一編

×

潮は満ちたよ、月の出だ。
もう舟を出すべき時だ。
今出さねば、どうなるぞ。
行け！　行け！　行け！
行方は何處、何處の岸？
身のなり行きは、身の果ては？
何處であらうと、何であらうと、
かまふものか、かまふものか、
ただ、前きへ、前きへと
荒浪切つて、ましぐらに行け。
來るは死だ、待つは死だ、
長いあこがれの死だ、
愛する死だ。
そこに、わが戀、
わが女——
冴えて、冷たい瞳をあげて
その瞳の淵へとわれを誘ふ、
深い、深いその瞳よ、
溺らすか
死なすかわれを。
君ゆゑに、
けふの舟出よ——
この荒れに
櫓櫂もなしに。

×

僕の詩を罵つた詩人よ、
君たちは正しかつたよ。
僕の詩なんぞに
何の値打があるものか、
それはただのインキだ、
血ではなかつた。

だが今、やつと今、
僕は血で書くんだ、
死を書くんだ……
つくゑの上で詩をつくる、
まつたくバカげた事だねえ。
ペンを捨てろよ、
紙を捨てろ。
書くなら書くで
もつと大膽に、
もつと奔放に、
もつと強烈に、
もつと直接的に書け。
おまへの愛するものの上に、
その美しい肉の上に、
おまへの心の血でもつて。

僕は女性の心と肉體とに
詩を書くんだ、生の詩を。
女性の心にこの靈を、
女性の肉にこの肉を、
書くんだ、書くんだ、
注（つ）ぎ込むのだ、
溶かすのだ、
生命（いのち）を籠めて、
生命（いのち）を懸けて。

そして、死ぬんだ、
二人でか……
一人でか……
一人でも二人だ、
二人でも一人だ。
なぜだつて？
僕は既に詩を書いたんだ。

詩を生きよ、

死を生きよ、
わが詩、ただわが肉であれ、
わが死、またわが生であれ。

×

戀は肉なれ、
肉こそは
心の手形、
しつかり捺した
印判よ、
愛の誠の――。

愛する女、
登記ずみの
その肌に
觸るる刹那は、
劍が峯
越ゆる思ひ、
デッドラインを
今ぞ越すと、
生命をかけて
跨ぐかな
その生と死を。

戀は肉なれ、
肉こそは
誠のかため、
快樂にあらで
ただ痛苦、
陶醉にはあらで
死の思ひ、
されども捺さむ
生命もて、
心の、愛の證書の
印判なれば。

×

ビアヅレイの女よ、
黒と白との線がきで
冷たく細く銀線の
ふるへるやうなその心、
その冷たさが燃えるとは、
冷たい火だよ、おまへは、
燃える氷だよ、おまへは、
そんなに無邪氣で
そんなに魔性で、
あまりに細いそのからだ、
あまりに鋭いその心、
おまへはビアヅレイの女だ。

×

赤と黒の女よ、
羽織の黒に、着物の代赭（たいしゃ）
帶も赤と黒との晝夜帶、
フェルトの眞履さへ黒い表に、
鼻緒も赤い黒との裏おもて、
なんて赤と黒との好きな女、
おまへの心も赤と黒だ、
黒がおまへをおびき出し
赤がおまへを痛ませて、
ロマンティックな夢をみる。

スタンダアルを覺えてゐるの、
「赤と黒」の悲しい戀を、
戀と野心の赤と黒、
わたしの黒をおまへはとがめ
おまへの赤をわたしは呪ふ。
マティルド・ド・ラ・モオル、
あの傲慢な令孃に
おまへは實によく似てゐるね。
やつぱりおまへは敵（かたき）だねえ、
おれを滅ぼす女だねえ。
かまふものか、可愛いおまへ、

なんとでもしろ。

×

十八にして君を知り、
十九のときにまた會ひて、
二十(はたち)に長く別れしが、
二十五にして君を得ぬ。

されど悲しや、そのひまに
君はむかしの君ならず、
いまは人妻、人の母、
おきては二人をかき分くる。

心抑へて經(へ)ぬる間(ま)に
君はをとめの君ならず、
など空しくも過せしと
その五年(いつとせ)ぞ恨なる。

いまはやむなし、やみがたし、
他家(よそ)の垣根に忍び入る
世にあさましきたはれをと
なりてぞわれは果てなむか。

×

妻よ、ゆるせよ、この戀を、
やむにやまれぬこの迷ひ、
丁度十年目だ、病氣の再發だ、
あんなにそなたを苦しめた
十年前の狂ひ心が
また起きたのだ。やみ難く。

ああ、十年のあの刻苦、
あの信念は何處へ行つたのか？
男と思へぬ生眞面目(きまじめ)さよと、
働きのある人たちはわらうた程の
その品行方正も、謹嚴も、

一朝にしてくづれしか。

げにや、さだめよ、世の責苦、
一歩また一歩と追ひつめられて、
すべての望は空となり
すべての夢も砕かれた
あはれな男の最後の夢だ、
行かしめよ、せめて一期の思出に。

そなたの親しい女の友が
「どうしてもいらつしやいますか」と
ぢつとわたしの顔を見て
涙ぐみつつ云つたとき、
胸をしめられる思ひをしたが、
行かせて下さい、一生悔いのないやうに。

「いつまでも、いつまでも、昔のままの
わたしの尊敬してゐる方で

ゐらして下さいまし」といふ、
若い女の友だち、どうぞ許して下さい
罰しないで下さい、この悩み、
行かせて下さい、行かねば死ぬに。

ああ、この外に何をしよう、
社會改造なんぞは僕の任でない、
生憎僕はそんなえらい男ぢやない、
僕はつまらない、つまらない蟲けらだ、
なんの尊敬なんぞに値するものか、
そんな價値の幻影なんぞはぶちこはせ。

苦痛によつて苦痛を殺す、
これがおろかなわたしの手段、
さては絶望的飛躍とはこんなものだつたか
匹夫匹婦のこのみちだけか、
わらへ、わらへ、自らわらへ。
でも、その外に何をしよう。

妻よ、ゆるせよ、この戀を、
戀より外にこの傷手（いたで）
癒やし忘れるみち知らぬ
おろかな夫（つま）をあはれみて。
無事にかへつて來たときは
兩手を突いて詫びるゆゑ。

×

三十七で縊れる身か、
これが一期の運だめし。
せめて此世の見納めに
思ひ殘しのないやうに
十年忍んだ、忍駒（しのびこま）、
その忍び音（ね）も洩れ出でて、
戀もよかろよ、旅もよかろ、
酒も女もかまやせぬ、
へどを吐くまで、血を吐くまで。
ただ、本だけはおよしよねえ、
ただ、哲學だけはおよしよねえ、
そんなものでは救はれぬ、
そんなものでは死なれぬぞ。

勘平樣は三十に
なるやならずを、
なんのまあ、
三十七まで生きたとは
命冥加な奴だねえ。
ああ、よくもまあ、おまへさんは
このせちがらい世に、この年まで
貧乏詩人で生きて來たねえ。

×

梅川忠兵衛冥土の飛脚、
君とわれとは戀飛脚、
東海道を西ひがし。
君は上（のぼ）りて、われを呼び、

われは下りて、君を呼ぶ。
君をば追ひて夜を下り、
君に追はれて晝上る。

上り下りのその果ては
梅川忠兵衞冥土の飛脚、
近松が好きといふから近松で
二人道行きしたくとも、
君は特急、われは急行、
何處まで行つても追ひつけぬ。

ああ、飛行船はないものか、
飛んで、飛んで、飛んで、
落ちて碎けて、塵となる、
それが出來ずば、なすな戀、
戀の中空、飛ぶ小鳥、
啼いて、歌つて、死ぬときは
それが二人の極樂だのに、
君はひとりで飛び去るか、
われはひとりで死ぬべきか。

×

不義は法度よ
この世の地獄、
どうせこの身は
さらしもの。

鎗の權三は
刺されて死んだ、
おさん茂兵衞は
打首に。

死んで花實は
咲かずとままよ、
とめてとまらぬ
戀のみち。

重ねて四つの
おきてはられし、
戀の天國
それそこに。

×

晝の間の妻よ、そなたは、
晝の間の夫よ、われは。
いつも白日の光のもとで
なんてまぶしい、
燃え上るパッション——
あんまり明るすぎる
この部屋は、
そなたの瞳のやうに。

ただ、閉ぢよ、その眼を、
われも閉づる、この窓、

かくてなほ夜が來ずば、
人もや來ると、安らはで、
盗む接吻、つと離れて、
ささやきも、ひそめきも、
ままならぬ人の世の道、
人のおきてをかこちつつ。

夜とても、あかりのもとに
この宿の電燈はよしくらくとも、
並ならずはぢらひ深き
君が肌つつむにあまる、
君が膝、おもく押すとき
安からで、皮肉にゆがむ
わが口の苦き言葉よ、
パッション・アンダ・ゼ・ランプ——

そんな言葉、あるかしら、
あの人に訊いてみるわと、

負けないでかへす言葉、
その苦さ、好もしといふ、
この心、われもあやしや。
戀人とその戀人の
抱擁は、かくも內氣で
かくもひかへ目にあるべきものか。

×

うちとけてひと夜かたれず、
かき抱き抱き寢られず、
道ならぬ戀はくるしも。
人妻をおもふは罪よ、
罪ゆゑに夜每ひとり寢、
夜すがらの罰はあさまし。

世に多きそはひと夜妻、
君はいな、わかひと日妻、
いつもただ日影のもとに
その睫毛のゆらぐを見つつ
その頸の垂るるを見つつ
くちづけてかきは抱けど、
いつの日にかたくしめたる
その帶を君とりたまふ。

ひと日妻、朝も夕も
わが宿のわが妻ごころ、
わが膝に膝をかさねて
わが肱に肱をつらねて、
いそいそと思ひたのしく
身のまはり世話をたまへど、
あかりつく夜としなれば
更けぬまにかへらむといふ、
道ならぬ戀はくるしも
人妻は人のものゆゑ。

×

むかしの蘆屋をとめは、
二人の男におもはれて
どちらも苦しめたくないと
自分で自分の身を棄てたのに、
今の蘆屋をとめは賢いねえ、
どちらも苦しめたくないから
二人を同時に愛するといふ。

蘆屋の濱にと寄る波は
今もむかしも、變らねど、
あはれにしをらしかつた
あの蘆屋をとめはもうゐない、
心は二つ、身はひとつ、
わけて愛して世に生きる
今の蘆屋をとめは賢いねえ。

×

「なんにもしないで、
ただ、ぼんやりしてゐたいの……」
おまへは夢みる女だねえ、
このせちがらい世に生きて
何といふロマンティックな夢をみる。

北濱から道頓堀まで
道頓堀から北濱まで、
澤山の若い男を引き連れて
カフエからカフエへと、
二十歳(はたち)の夏のおもひでに
女王さまであつたのだねえ。

その日、二人も歩いたねえ、
おまへの勝利と夢のあと
つくづく見ては涙ぐむ、
「おばあさんになりましたわ」と
五年振りで會つたとき
ためいきをして云つたおまへの

あはれはわれも知るものを。

×

いたづらな女だ、
わるい女だ、

静かにぢつと籠つてゐた
この臆病な蝸牛(かたつむり)を
殼から引張り出して、
どうするのだ？
何處(どこ)へ捨てるのだ？
靑桐のもとの詩人を、
打出ケ濱の
砂濱のまつただ中に
はふり出しといて
わらふのだねえ、
その響く笑ひで。

×

われに選ばれ、われに滅ぼされむと
イソルデの言葉、イソルデの戀、
選び選ばれ、戀ひ戀はれ、
噛みつ噛まれて、血を流す。
それが戀かや、呪ひかや。

殺してあげると女は云ふ、
殺し文句はそれだけか、
そんなに冴えて澄んだ眼ぢや
ながしめはちときかないよ。
そんな冗談いふときも。

花間(はなま)にとまる蝶の夢、
はかない影のたはむれに
生命(いのち)をおとすおろかさよ。
それが飛べない戀の蟲
おろかなればぞ、われなれや。

×

あなたはわたしと一緒に死ぬと
あのとき約束してくれた、
死にたくおなりになつたなら
すぐわたしを呼んで下さい、
どんなに遠方にゐましても
わたしはすぐに行きますからと……

ええ、そのときはきつと呼びますよ、
いつの事かは分らないけれど……
いまは行かねばなりませぬ
あの人がわたしを待つてゐます、
許して下さい、かう云ふと、
ああ、ぜひもない、お行きなさい、
でも、わたしの言葉を忘れなでいでと、
さう云つて、二人は手を握つた、
しつかり手を握つて、誓ひましたねえ。

あなたはお芝居の好きな人、
もはや四十といふ年で
まだ千代紙を折る氣もち、
あなたの顔も身のこなしも
まこと道行きにはふさはしい、
あなたの戀はクラシカルだ、
つひにいつかはあなたと一緒に
最後の芝居を打ちたいと
ふと、あるときには、わたしも思つた、
思つたことはあるのだけれど……

いや、いや、それは一期の不覺、
僕はやつぱり男でありたい、
心中だなんて古くッさい、
それにあんまりめめしいぢやないか、
一人で死ぬ事が出來ないなんて……
男らしくもない、意氣地のない話だ。
死ぬならやつぱり、一人がいい、
あの聰明な、知的なAが

一人で死んだ氣もちは分る。

だから一人で、きれいさつぱりと、
あの人も殘しておいて、
あなたも殘しておいて、
妻もいとしや殘しておいて、
やつぱりひとりで死んだ方が
孤獨なわたしにはふさはしい、
それがわたしの死に方です。
僕だつて男のはしくれだ、
ゆるして下さい、
マダム！

×

われ自らをいたんで云へらく、
あらゆる流行品の敵たること、
これわが運命なり、
わが誇りなり、
わが悲しみなりと。
ああ、流行にそむくこと、
流行に抗すること、
流行を憎むこと、
今こそ、それはわが死である。

時代に逆行するものは、
時勢に順應せぬものは、
よく世に共に移らぬものは、
みな、滅びなければならぬのだ、
いな、敢て自ら進んで滅びるのだ。
この世を去つて
不易の世に、
そのまどけき夢の世に、
無何有郷に歸らむために。

今、親しくなつかしく思ひ出づるは
イサドラ・ダンカンの若き愛人、

あの勞農ロシヤの百姓詩人、
セルゲイ・エセーニンだ。
その利巧な友のピリニヤクが、
彼は時代と歩調を合せる事が、
出來なくなつたから死んだのだと、
たくみに評したあの自殺者の、
あはれな詩人のエセーニンだ。

緑のロシヤの夢を追ひて、
鐵と產業との新ロシヤの
冷たく鋭い空氣に傷つけられて、
その空氣にいかにして順ふべきか
それをば知り得ず、
もう耐へられず、
汝は死んだのだ、
死ぬ外に汝は生きる道を知らなんだのだ。

友よ、汝はよく死んだ、
汝はさすがに詩人であつた。
友よ、汝の苦惱を知る、
汝の幻滅の苦をば知る、
わが惱みまた汝に似る。
汝こそ我がタワリシチ、
時代の車輪に轢き殺された、
我れも汝の苦をば知る。
愛する友エセーニンよ、
われを迎へよ
その冷けき土の下に、
握手をしよう、
そして一緒に飲まう、
汝と我れとの好む酒、
死と幻滅との苦い杯を。

×

今年はおれもこれきりか、
年貢の納めどきがやつて來たか。

その生涯の失敗を
いさぎよく自認して、
いつそひと思ひに投げ出すか、
ここが思案の瀬戸際だ。
さあ、ようく考へろ、
もうそろそろ引上げてもいい
潮どきなのではあるまいか？

死ね、死ね、死ね、死ね、
死ね、死ね、死ねと、
すべてが今はささやくやうだ、
すべてが催促するやうだ。
これでもか、これでもか、
これでもおまへはまだ生きたいのか
なんて意氣地なし、
卑怯者、臆病者と！

見ろ、おまへの影の薄いことを、

おまへの信念は壞れたぢやないか、
おまへの立場はぐづれたぢやないか、
おまへの努力はフイになつたぢやないか。
見ろ、みんなおまへを嗤つてゐる、
おまへを憫れんでゐる、輕蔑してゐる——
なさけない男、無能な男、
死ね、死ね、死ねと！

我が半生をかへりみれば
はづかしい、醜さ、暗さ、
何處に颯爽たるものがある？
何處に高朗の風がある？
空し、空し、すべては空し、
ただ一場の夢である、
痴人の痴夢よ。
出來ぞこないの詩を書いた、
ろくでもない小説を書いた、
滅茶苦茶な評論を書いた、

それつきりだ、——
所詮、ひどい恥をかいたんだ。

おまへの思想？　なんの思想？
おまへの抱いてゐたものは
みな形のない泡ではないか。
空虚な唯心論の殘骸を
後生大事に抱きしめて、
時代後れの個人主義を、
卑怯未練な懷疑主義を、
どうしても、どうしてもぬけきれぬのか？
時代は動く、事大の風が
塵も芥もかき寄せる、
おまへはひとり取り殘されて
何處（どこ）に迷ふんだ、何とする？
機を見るにあまりに鈍に、
何の自信もないならば
生きるに足らず、生きるに足らず。

生きんがためには、何の思想？
思想は泡よ、
むしろ女の肉を抱け、
その生涯の失敗を帳消しにせよ
この戀の受難をもつて。

×

女性の肉に藝術を書くつて？
禁斷の女性の肉なれば
それは容易ならぬ事だ。
恐ろしい、危險な業（わざ）だ。
けれど、女性の心に詩を書くは、
それがこんなに冷たく燃える
熱くも凍る謎の心なら、
さらにさらにむづかしい、
人間業（にんげんわざ）の及ばぬ事だ。
それをおもへば、萬年筆で、
原稿紙に書く詩や藝術なんぞ

なんの他愛もないはなし。

ああ、萬年筆の詩人として
原稿紙の藝術家として
むざんな失敗したものが、
みぢめな蹉跌をしたものが、
どうしてこんな大それた
大事業が成し遂げられうぞ、
身の程知らずのバカモノ奴！

×

夢だ、夢だ、浮世は夢だ、
君がゐまひも、ささやきも、
二人で歩いたあの濱も、
せつない吐息も、目の濡れも
すべては過ぎる、すべては過ぎる、
ひととき過ぎればみな夢だ。

夢だ、夢だ、浮世は夢だ、
そなたは夢をゆめみる女
われはいつでも影の夢・
このうへ何處へ行くべきか
このうへ何の夢みるか。
夢の國へと、夢をみに。

×

今ぞ、われ立つ、生涯の岐路に。
過去のすべてをかなぐり捨てて
痴人の生を完うせむか、
なほもあやしき呪文をとなへて
賢者の石を求めんか。
薄倖詩人の名を殘して
いな、おろかな汚名を蒙つて
巷の泥にうもれんか、
なほもかすれた火をかき立てて
冷たく暗い世に生きて、

豹變學派（カメレオニスト）の人となり、
マルキシズムの旗下につき
唯物主義に鞍替へして
この身の安きを保たんか、
今ぞ、今ぞわれ立つこの岐路に。
苦し、苦し、いかにせむ、
百尺竿頭、立ちぐらむ、
もう進む餘地なし、一歩だに。

百尺竿頭、一歩を進めばいかに、
進まんか、落つ、
進まざるも、落つ、
その一歩、必死の一歩、
もうその先きはない
その先きへの
その一歩こそは、
死への、破滅への、完成への、
敗北の、その勝利への
絶望的飛躍ならずや。

げに、絶望よりの
その一飛びに
われは生きん、
死によつて、
死の中に
死の生を。

×

死なふは一定、
忍ぶ草には
なにをしよぞ。
譽れか、戀か。
戀は苦しや、
譽れは空し。
君なくて生くるも、
われは影のみ。

世の栄えも、
影の譽れぞ。
されども苦し、
空しや戀も。

三月二十二日—三十一日（蘆屋—東京）

第二編

×

一人し行けば、日は暮るる、
中年の日のあわただしさよ、
十年の業もあだなれや。
かくもはかなきすさびして
老いるはくやし、いたづらに
書物の蟲となりはてて。

若き日にながめし夢も
まぼろしも半らに潰え、
まだ目にのこる面影よ。
三十路を越えて、憂き秋の
見果てぬ夢を追ふ心、
何にかかけむ、君ならで。

君ならでわれをとらへじ
憂きわれの秋の日の花、
うすれたる日かげの中に
火のごとく燃ゆるくれなゐ、
それぞ死の色、君ならで
誰れかはわれを滅ぼさむ。

×

三十七のこの後は
何をたよりに生きなむか。
立てる足場も砂のごと
足の下より崩れ落ち、

ねがひかけたるただ一つ
戀も空しき夢ならば。
ただ、いさぎよく、この秋は
身をば捨てなん、かの海に。

また來ん秋の惜しやとて
秋をも待たで散りしひと、
空の名殘りぞ惜しまると
おもひをかけて失せしひと、
われは死なまし、その秋の
空のひかりに照らされて。

×

そのむかしわがまはりには
美しきをとめ集ひぬ、
そのをとめ一人一人の
行く末の幸を祈りて、
よき夫を求めたまひね
よき母となりたまひねと
かつ祈り、かつはいさめて、
とりなしの文をも書きつ
月下氷人の座にもすわりつ、
年老いし人のごとくに
つくせしも十年あまりの
まめやかのわれにありしか。

そのをとめ一人一人に
妻となり、母となりける
今日はなどこの佗しさぞ、
あたらわがいく春あきは
空しかる業についえぬ、
その業の、そのいそしみの
むくいしはこの傷手のみ、
いたみたる心のしばし
そのをとめ一人かへりて、
その妻のわが白髪ぬき

その母のわれをあやせば、
いかで今日くるはざらめや。

×

げに悲しみを癒すべく
神のおくりし君ならめ、
心に沁みて、たまゆらは
たのしき世とぞ思ひしを、
君があたへしその愛に
わが痛みなほ加はらば
神のおもひの外(ほか)ならめ。

×

「……まあ、いやねえ」
ほがらかな笑ひ聲が
遠い遠いむかうで、
その顏がちらちら、
あの白いきれいな齒が……

ぢれつたい電話、――
この聲が聞きたさに
三百哩の長旅を、
とどめる人をふり切つて
來たよ、來たのに、もう切れた。

×

「わたしは夢に金むくの
實(み)から生れた鳥をみた、
いづこの國にそのやうな
小さなおとりがゐますやら」
女はこんなに歌つて聞かす、
きのふも今日も、かたはらで。
ほんとに歌の好きな人だね、
おまへの歌はおまへの心、
歌で心をみな告げる、
女ごころのその謎を。

何處かこの世のむかうの果てに
歌でものいふ國でもあつて、
二人でそこに住んだなら、
暮しのことでも、用事でも
戀の言葉で云はうものを。
いいから、いちにち歌つておいで、
ここでもかまはぬ歌つておいで、
いやな事をば忘れるために、
そなたの夢をやぶりにくる
世間をへだてる網だもの。

×

「ゆうべわたしは大變不思議な
夢を見ましたの、それはね——
わたしが海邊で、水着の上に
薄い着物を一枚羽織つてゐたら、
誰かがそれをぬがしてしまつたので
海へ飛込んだら、大變痛かつたので
びつくりして眼がさめたら、
蒲團の外へころげてゐたの……
隨分をかしな夢でせう、
でも、それはほんとにみたのよ」
女はさう書いて、
くつくつ笑つて、顏を隱す。

その謎をとけと云ふのか、
謎ではないか、何てまはりくどい、
おまへはイギリスのレデイのやうだ、
何でそんなに人をぢらす。
さうよ、わたしははにかみやなの。
口で云へない事は書く、
一寸した事でも口では云へぬ。
男のシヤツやサルマタや
着替へはいかが、洗濯へやりましよか、
それはなほさら云ひ出せないで、

何て手數のかかる女房振り。
おあしの事なら、一層云へぬ、
夫の財布にさへも、この四年間、
まだ手を觸れた事さへない
そなたは何て變つた女房、
いいねえ、いつでも花嫁だもの。

×

砂も海邊の白さして
松も海邊の色淸く
山とは見えぬ山の宿、
六甲の苦樂園の春、
たつた二人の客なれば
なにを話すも勝手だものを、
廊下の椅子に腰かけて
てすりに凭れてぼんやりと
はるかに茅淳の海をながめて
いつまでもいつまでも二人で默つてゐた、
ふつとそなたは溜息して、
「大抵の事はみんなしたわ
道ならぬ戀までして……」と
かへりみて寂しく笑うた
そのときのあはれは沁みぬ
二十五の女のあはれ。

又の日は、かの寶塚、
みちみちの川は水なき
君はまことや逆瀬川、
われも逆瀬となり果てて
水も絕ゆるか行く末は。
人目を避けてイみし
武庫川の流れのほとり、
「あなたがベビイのパパさんならば」と
いく度び云つたその言葉、
又云ひ出でて、語りしは
遠く離せしいとし子のこと、

「いやだ、いやだ、こんな話
忘れませうよ」と首振つて
溜息をした人の母、
君はかなしや、われはなほ、
よしなき人に馴れ染めて。

×

ひと日は須磨のそぞろあるき、
砂を踏みゆく四つの足、
その足あとのはかなしや
波に消されてあともなし、
ふたりの戀もこのやうに
消えてあとなき日がくるか。

山へ行つたら默つてしまふ、
海では大きな聲出して
喋つたり歌つたりしたくなるわと
須磨の浦から舞子まで

歌つて、走つて、平たい石を
波に飛ばせて、よろこんだ。

きみは十五のをとめさび、
海が好きで、好きで、
海に行つたら何でも忘れてしまふ、
ある日はボオトを漕ぎ出して
沖で溺れようとしたといふ
海の夫人のものがたり。

須磨の浦から舞子まで
何を話して行つたやら、
涙は風に吹き去られ
話は波にうち消され
なんにも殘らぬ、みんな夢、
これがふたりの戀なるか。

×

明石の宿のかの主婦ぞ
君を妻とぞ呼びにけり、
げにひと日妻、つれなくも
醉ひ泣き伏せるその夫を
ひとり殘してかへりしか。

いつも何處でも夜となれば
われを殘してかへる人、
家のまもりのためと見て
なぐさめくれしかの主婦を
世にもうれしき人と見ぬ。

さびしくさびしく淡路の島の
灯かげ見ながらかへりぬと、
君のたよりは悲しくも
ままならぬ身を語れども、
かの一夜こそ堪へられね。

その朝、飯よそひつつ
お子さまはおありになるかと問ひ、
旦那は東京といふ事なのに
奧樣がおかへりになれるのは……
では蘆屋にとうなづいて。

奧樣がお待ちでせうに
早くお歸りなされよと
せき立てられて、悲しかりしが、
明石の宿のかの主婦ぞ
われにうれしき人なりし。

×

つめたいつめたいと云つてゐたら
つめたくないと燃えて來た、
子供だ子供だと云つてゐたら
子供でないと寄つて來た、
おまへはほんとに天の邪鬼だねえ。

そんなに氣輕に笑つてゐても
おまへは寂しい女だものを、
一日留守をしただけで
待つて、待つて、待つて
泣いておまへは歸るのだものを。

わたしは冷たい女ではありません、
恥かしがりで、大變臆病で、
小心者なのです、ほんとを云ひますと
書いて歸つた、おまへはなんて
いぢらしい女になつたのねえ。

でも、さすがにおまへだ、すり寄つて、」
いつも女王様であつたのに
今も家ではタイラントなのに、
何てわるい男だ、こんなに弱く
してしまうたと腹立てる。

こんな人のためにと、さんざ惡口いうて、
膝をつねつて、男の顔の棚おろし、
こんなに泣かせて苦しめて
さぞや憎かろ、くやしかろ、
うんと云へ、何とでも云へ。

×

そなたはあんまりねんねえで
あんまりふはふはしてゐて
あんまり罪がなくつて
たよりない、
それが二人の男を持つた
女のすることか。

ほんとに驚いた子供だねえ、
ねえ、あそびませうよ、
かけつくらをして

石投げをして、
戀人か、お守りかおれは、
何といふことだ。

いいや遊ばう、君がため
僕も子供になつてしまふ、
僕は十七、そなたは十五、
ぶらんこでも、繩飛びでも
おもしろければ何でもする。
これが戀かや、道ならぬ。

ガラガラのおもちやをたんと
ふりまはして遊びなさるがいい、
なにがおもしろくつてと
苦々しげに云ふ人よ、ゆるせよ、
この年でおれは遊ぶよ
ガラガラのおもちやを持つて。

×

妻よ、責めざれ、病人を、
心病みたる痴れびとを。
世に敗れ、業に傷つきて
ただかくあるに耐へかねし。

人は傷手のくるしみを
熱き酒もて忘るとぞ、
われは冷たき女もて
世のくるしみを消さんとす。

つめたき女、この氷る
胸と瞳ぞ、灼きつきぬ。
そは火なれども冷たくて
われは燃ゆなり水なれど。

水の性なり、九紫なり、
四綠、六白、ともに火よ、
これがさだめか、この三人、

消すか、燃やすか、たぎらすか。

人は傷手のくるしみを
ひと夜妻もて忘るとぞ、
われはよしなきひと日妻、
燃ゆる焔も下燃ゆる。

妻よ、責めざれ、ひと日妻、
机のわきにすわるとて
帶をとかざる戀なれば、
火は火をゆるせ、燃ゆるとも。

×

たとひ一寸(ちよつと)の間(ま)でも
冷たい女を燃えさせたのは、
勝利ではなかつたか、
貧しい生のわづかな勝利。

その誇る心おろかよ、
より大いなる敗北を
伴ひ來(きた)る勝利ぞと
今ぞ思ひ知つたか。

×

人の心のはかりがたくて
寂しく汽車に搖られてかへる
心の暗さ、佗しさよ。
あんまり早く燃えすぎて
みるまに灰になる心、
きみが心は薄紙か、
きみが情(なさけ)は藁火かや。

二日みぬまのくるしみに
追はじ、追はじ、この上は
齒をくひしめてもひきかへす
よしなき誇りと氣短かを、

愛も足らぬ、誠も足らぬ、
かたくなな心よと
きみは咎めて罪するや。

心と心と、なにゆゑに
かき抱きつるたまゆらも
相合ふことのなかりしか、
うたがひ、ねたみ、
底知らぬ淵をみるごと
知りがたく盡しがたしよ、
人の戀、人の心よ。

×

世のもたらせし苦しみを
忘れんとして、
戀に走りしおろかもの、
戀はなど苦しからずと
おもひしか。

いないな、戀は苦しとは
疾く知りたれど、
知れどよしなし、戀ならで
などこの深き苦しみを
消しえむか。

世の苦しみを逃れ來し
この落人を、
はたして戀はわがものと
とらへ、いましめ、うちひしぐ、
今は死ねとぞ。

死なば死ね、死なばうれしや。
死なれずば、
このいやましの苦しみを
何をてだてに癒やすべき、
戀よ、あらたの。

すでに心は火となりぬ、
このパッションを、
この火花、この火の胸を
いかにしづめむ、うち消さむ、
女にあらで、

罪によつて罪をつぐなふと
人は云ひけり、
一管の笛をば吹かで、
キイよりキイに飛ぶ指に
戀をたとへて。

女より女に走りしその人を
咎むべきわれかよ、
苦痛もて苦痛をしづめ
戀をもて戀を癒やさむ
今日のわれ。

ああ、痴れびととなりはてて
行くべき道をわれ知らず、
かく罪に罪をかさねて
はてつひにいかになりゆく
身ならむか。

×

今年はおれも三十七、
九紫の長流水、
八方塞がりとはよく云うた、
運氣一時に破滅して
背中に大石が落ちるとは！

干支だとか、運勢だとか、
輕んじ切つてゐたものが
運勢早見を出してみる、
迷ひだ、迷ひだ、血迷ひだ、
やつぱり痴人になつたのか。

ええままよ、死なうと、
石に碎かれようと、
好き勝手におれは生きるんだ、
これまであんまり影の薄い
あんまりみぢめなおれだもの。

いつもひかへ目で、
いつも遠慮がちで、
いつも內氣であるわたし、
人生を敷居高く暮して何になる?
ええ、糞を、おれも男だ。

×

男と男——
男と男がほんとに會ふのは
この時ばかりだ、
女を中に
對ひ合つて立つ時だけだ。

獅子と獅子、
牛と牛、
刃物と刃物——
男と男が
血をみる時だ。

なんでその原始にかへらぬ、
野蠻人の法則、
力の裁き、——
瞬間にきまるぢやないか
女を中に。

法律だ、
名譽だ、
世間態だ、
何てまはりくどい

二十世紀だ。

おれのものを何とする、
いや、おれの女だ、——
獅子と獅子、牛と牛、
男と男が出會ふとき
生命が火花を散らすとき。

そこまで何で行かなんだ、
おまへは男でなかつたか、
いやいや、丁寧に挨拶して
世間話をして別れた
男と男が、女を中に。
——二十世紀だもの。

×

“Now I'm free in my home!
Owakari ni narimasu?”

わかるよ、わかるよ、それだから
おまへは恐ろしい女だねえ、
だつて、あんまり無邪氣だものを。

ブロオクン・イングリッシュを
云ひわけしては書きよこす
人には見せられぬ恐ろしい手紙、
誘ひの、切ない息もふりかかる、
「蘆屋にはいいホテルもありますよ」

ヴイアルドオ夫人の二階住み、
ツルゲエネフの話を聞いて、
そのツルゲエネフにしてあげる
いらつしやいなとおまへは招く、
氣まぐれどころか、本氣だものを。

三人で借りる家よともうきめて、
夫と二人で見に行つて、その翌日、

わたしと二人で見に行つた、
おまへは恐ろしい女だねえ、
だつて、あんまり無邪氣だものを。

二階に一人、下には二人、
みんなベビイよ、わたしはママよ、
夢を樂しむおまへの傍で
どんな夢がはじまつたやら、
見るはおそろし、見なけりや見たし……

ああ、もう一日、なぜ待たなんだ、
おれは男か、もう駄目だ、
心は殘る蘆屋の濱よ、
君を殘して、齒をくひしめて
逃げたこの身を何とする。

×

おもへば十年のそのむかし、

もうやめると云つてやめた戀、
あんまり二二ヶ四の女、
あんまり勿體つけすぎて
味ない女のそろばんが
しんぞ厭やなり、なにッくそを、
一、二イ、三！　でやめられた。

戀は明石で終つたか、
心も知れず、身も苦し、
打切る、打切る、なにッくそを
云ひ殘しさへせで發つた。
ああ、今度は敗けだ、今度こそ
おれはほんとに愛したのだ。
君は可愛いや、いぢらしや、
二二ヶ四ではない女。

などその愛を疑ひし、
などその心を苦しめし、

など行くところまで行かなんだ、
あんなに出て來てゐたものを
家をこはし、身もこはし
君も殺して、われも死ぬ
それが出來ない、出來ずに發つた、
ああ氣の弱いおれだなあ。

だが、これが愛だよ、ほんとの愛だ、
十年前はしんぞ厭や、
いまは君ゆゑ、いとしさゆゑよ、
なんでそなたを殺してよかろ、
いとしそなたを生き地獄、
罪だ、罪だ、惡魔よおれは。
君がなさけを思へばいかで
親にそむかせ、子を捨てさせて、
世をば狹める憂き苦しみに
君をしづめて何んとする。
汽車で心は男泣き、
逃げて來たのもそなたゆゑ。

×

俺の愛する女はみなマダムだ、
俺を愛すると云ふその人も。
彼等はみんな處女であつた、
鮮らしい青い果物のやうだつた。
その若さ、その淸らかさを
上もない寶と愛でて、
つつましくただ見守つて
その手にすらも觸れないうちに、
そのをとめは人の妻となつて
人の子供を生んでしまつた。

肉をもつて肉を防ぐと
須磨子の愛人の云へる言葉よ、
四十歲の男の言葉
それが俺には云へなんだ。

道徳が俺の首かせ、
臆病が俺の足どめ、
もう愛する女はみなマダム、
今ごろ何をぢたばたする、
今となつては、もうおそい、
おまへの子供は何處にもない。

おまへの出る幕はすんだぢやないか、
それに今さら、何とする？
今は死をもて償ふ罪よ、
あまりに道徳をおもうたものは
あまりにおのれを庇うたものは、
世に許されぬ不義に墮ち
道ならぬ戀に死ねとぞ
戀の律法書にさだめられたか、
俺は四十歳のねうちがない、
子供だ、子供だ、おまへが子供だ。

×

俺は淸閑だとか、閑寂だとか、
風流だとか、枯淡だとか、
隨分云ひ廻つたが、みんなウソッパチだ。
みんなウソッパチではないまでも、
少しは見せかけだつた、ポオズだつた。
俺はそんな柄でもなければ、年齢でもない。
まだ若僧だよ、あくはぬけぬ。
人が云はずも、自分で云ふサ。

ただ俺を信じてくれ、
それは決して自分をえらく見せようと
たくらんだ業ではないと。
ただ、一生懸命に身を保たうと
何とか據りどころをこしらへようと
必死の努力をしたまでなのだ。
生きよう、生きようと、
肯定しようとしたのだつた。

それでなければ生きられなんだ。

だが、俺は生きるぞ、今生きるぞ、
清閑でなく、閑寂でなく、
風流でなく、枯淡でなく、
動亂の中に、狂氣の中に、
悲痛の中に、歡喜の中に。
大體、俺は西歐化した男だ、
悟りすました東洋人でない。
これが本當の俺だ、この激情、
この殺氣、この捨鉢が、俺の姿だ、」
絶望の綱の一端に踊る俺だ。

×

俺は破産した、
確かに谿れた。
谿れたからは、
誰も恐れぬ

空の鳥

失敗商人の子で
失敗詩人、
破産者の子で
破産者で、
めでたしめでたし。

何も持たねば
盜まれはせぬ、
ままよ、氣儘よ、
今は氣樂な
空の鳥。

×

拳銃を與へよ、
匕首を與へよ、
おれは血で書いてみせる

たしかに血で。
それが罪悪か、——

言葉にすぎぬ
レトリックにすぎぬと、
たしかに僕の詩を君たちは
罵つたぢやないか。

罵れ、罵れ、
あざわらへ、
ただ、その代り、
死を與へよ、
死を許せよ。

×

死よ、
おまへはうれしいか、
たうとう此處まで追ひつめたね、

たうとう此處で追ひついたねえ、
もう逃げようたつて逃がすものか、
惡女の深なさけだよ。

死よ、
だが、今、おまへが一等やさしい、
もう逃げないよ、逃げるものか、
おれはおまへのふところで
おまへの胸で眠るのだ。

死よ、
僕の最後の女よ、つめたい女、
おまへの氷つた最初の接吻(キス)で
安らはしめよ、冷却せしめよ、
あまりに苦しみしものを
あまりに燃えしものを。

氷の床の結婚式、

瞳（ひとみ）なき眼（まなこ）の凝視、
血の氣なき唇の接吻（キス）、
影と影との抱擁、
そはつひに解（と）くる時なし、
とこしへに、夢を夢みて。

四月四日――五日（東京）

第三編

×

風は西から吹いてくる、
西のかの國、花ざかり、
それに冷たい風が吹く、
思ひ切れとの風が吹く。
風は吹けども、この心、
思ひ切らりよか忘らりよか。
よしや夢でも、ただひと度びは
あんなに燃えた人だもの。

君がなさけは薄なさけ、
それとも思ひの苦しさに
耐へて忍んでつれなきか、
二人のために、その心、
わざと冷やしておくるのか。
怨んでよかろか憎まりよか、
よしや夢でも、その身を一度
ゆるしてくれた人だもの。

燃ゆる心を冷やしてくらす
われもそなたも、おなじのか、
冷やし薄めにや飲まれない
いのちの酒の火の杯、
戀は戀でも、かくし戀、
水の下行くその心、
東から吹くこの風も

思ひ切れとて吹いて行く。

×

土の上行く人、獸、
雲の上行く鳥と蝶、
ふたりの心は何處を行く、
土の下行く、水を行く。

人のこの世に住まれずば
住むによろしや水の底、
君に抱かれ君を抱き
いつも眠りて夢をみて。

人のおきてのゆるさずば
獸のおきて、それも厭や、
鳥と飛ばれず、とどまらず、
土の下行く、水を行く。

海はそなたもわれも好き、
住まばたのしや水の底、
水の底なる新床に
うれしき夫、戀の妻。

×

きみは罪なきをとめの心・
をとめ心に世に生きて
うれしき日々を、たのしき夜を
きみは夢みてすごす人。

きみは死ぬべき人ならず、
きみはいのちの戀の妻。
いのちを戀ふる死はくらし、
死はもよみぢにのがれ行け。

いのちはいのち、死は死ゆゑ
わかれわかれのこのさだめ、

それがこの世のおきてゆゑ
みにくき罪は消えて行け。

われは光にそむく影、
きみは影へとさす光、
くるしき瀬戸をのがれんと
わかれも告げずのがれしが。

のがれぬ心、いやまさる、
かへらぬ悔に、われ死なば、
きみはいのちのその歌を
わが墓の邊にうたふ人。

×

夏としなれば、かの濱に
きみは好みの水着の姿、
水に遊びて身を冷やし
砂にすわりて身を焦がし、
わがかい撫でしかの足を
入日に、潮に浸すらん。

いかなる靴にも入るといふ
九文三分の足よ、幅狹く
甲高なりしその足よ、
なほわがキスを覺ゆるや、
潮のごとく、陽のごとく
あつくも燃えしそのキスを。

×

夏に來ませときみは呼ぶ、
少年少女の身となりて
異人もまじる濱あるき、
きみは笑ひつたはむれん、
春のふたりの罪すらも
淸みたる波に洗はせて。

蘆屋はうれし、きみ住めば、
うれしからむと人は云ふ、
きみしあらねば縁(ゑにし)なく
すごせし里とおぼゆれど、
きみし蘆屋を捨てぬまは
わが起き臥しの里ならじ。

きみがほとりに佗び住みて、
つらきいのちの逢ふ瀬をも
せきとめられしその時は、
ただゆきずりのたまゆらに
ゑみ、ささやきを交さむと
おもひしこともありしかど。

されどせかざる夫(つま)ゆゑに
きみも家をば捨てかねつ、
われもきみをば引き出(いだ)し
家持たむとも思はねば、
友もあやしみおどろきし
はかなき夢にすごしけり。

都も、妻も、家も、書(しよ)も、
みなうち捨てて、ただひとり
世を佗び住まむこころざし、
いまはよしなや、濱蘆屋、
ふたり探せしその家も。
きみは蘆屋の人なれば。

×

涙もろくもなりしかな、
風に搖らるる葉の露の
こぼるる如く、ともすれば
目(ま)ぶちを濡らすその水の
あふれ落つるをとめかねつ。

あまき涙の詩人よと

世のそしりに心痛みしも
はやいくとせとなりにけり、
そのいくとせのいそしみに
涙も絶えし人なるを。

にがき皮肉の詩人よと
からき思想の人よとて、
さみしく笑ふ人とのみ
世におもはるる今日の日に、
おもひもかけぬこの涙。

涙はみせぬきみなるを、
などかかの夜は逆る
泉の如くはげしくも
胸を衝き出し咽び泣き、
女ごころのその涙。

うちさしぐめるその髪に
手をばささへつ、かい撫でつ、
口ごもりつつもなぐさめし
かの夜よりぞ、われもまた、
涙もろくぞなりにけり。

×

いのちをかけて會ひし人、
われを引き込む渦巻の
はげしき死ぞとおもひしを、
あまりをさなき君ゆゑに
戀は童とをとめ子の
罪なき夢のたはむれに
はかなく過ぎて、死ぬとみし
われをいのちにとどめけり。

いまはこころの妹よ、
遠くはなれし妹に
たより告げむとおもふのみ、

兄と妹のかたらひを
人も咎めそ、わかれては
あまり罪なき戀なれば。

×

彌生の夢も、卯月には
癒ゆるときなき傷となる。
詩を書きつけて慰むる
この日ごろこそ佗しけれ、
迸り出し叫びすら
いまは吐息となりにけり。

さしも心をしめつけし
はげしく辛き苦しみも
悲しみとこそなりにけり。
胸をやぶるとみしものを、
日を經るごとに悲しみは
底に沈んで深まさる。

われはこの世にありわびぬ、
人の心の波立ちを
求めて西に走りしも、
その苦しみに堪へられで
わかれも告げで去りしごと、
世をも去りてん、言告げで。

×

死なばやともにとかたらひし
妻のこころをわれは知る、
いのちを惜むきみならで
われをいのちに引きとむる
妻のこころは知るものを。

などかく死へと破滅へと
あこがるるかな、この心、
世の憂き事にくづ折れて

なにぞやかくも衰へし、
なにぞやかくも疲れてし。

生きるは惱み、死ぬは死よ、
戀と仕事と、生と死と、
西とひがしにわれを引く、
きみと蘆屋の人の手に
心二つにさかれしか。

かくて生くるが、人のため、
おのれのためが、死のみちか、
亡者となりて六道の
辻にし迷ふこの日ごろ、
心は風か、西ひがし。

×

春はさくらの
ちるものを、
などこの春を
ながらへし。

春はさびしき
心をも、
戀のおもひに
くるはせし。

秋としなれば、
日のひかり
澄みて、身に沁む
空のいろ。

秋ぞうれしき
ねむりどき、
肩に木の葉も
散るものを。

×

雨のごとくに
ちるさくら、
ふたりの戀も
ちるさくら。

春の彌生に
さきいでて、
風も吹かぬに
ちるさくら。

また來ん春を
たのみにて、
わかれわかれに
ちるさくら。

花を梢に
とどめなば、
憂しとみる日も
ありと知れ。

×

秋はうれしや、
菊のつゆ、
黄金ちらばふ
日のひかり。

とりいれどきの
せはしさよ、
中にみのらぬ
人ひとり。

秋はひとりの
旅がよし、
暮るる野もせに
醉ひ死なば。

落つる木の葉に
うづもるる
そのなきがらを、
誰れと知る。

×

くるしき春のゆくころを
くるしき人をあはれみて、
吉野初瀬の旅にとて
われを誘ひし人もあり。
悲しき花のちるところ
悲しき戀をものがたり、
やさしき人の涙もて
しばし心をなだめんと
おもひをかけしおろかさよ、
その弱さこそはかられね。

わが憂き事を聞き知れる
女の友をへめぐりて、
このくるしみを訴へつ、
女らしさのいたはりに
ややなぐさむといふ人は
いかにおろかの人ならん。
女ごころはかねて知る、
愛づる男にあらずとも
おのれをおきて人を戀ふ
男ごころを寂しむと。

わが憂さ告げし人よりぞ
吉野の里のたよりあり、
いとしき人を伴ひて
いかなる花の夢やみる。
はなればなれの花をみて
また會ふ日さへなきがごと、
ちるに心を動かせる
寂しき人を寂しとも

憂しとも思ふことなきか、
あまりのどけき文なれば。

×

紫のにほへる妹としるからに、
たちもたちえぬこのゑにし。
人もいとしや、われもまた、
身を全くするみちぞとて
蘆屋の驛に俥を走らせし
人とも見えぬこの腑甲斐なさ。
いまは身の恥、世のそしり、
いかにこの身を鞭つも。

戀の旅路は幾峠、上り下りの
足惱み、さしひく潮の寒熱よ。
手紙は來ず、もしや變事でも
ありはせぬかと危ぶみし四月九日、
死ぬにもまさる苦しき峠。

いたつきならぬいたつきの
床に仰向き、凝らす眼に、頬に、
流るる涙ぞ熱かりし。

あるに堪へかね、かねてより
罪びとの恥と惱みをうちあけし
おなじ惱みの女の友を
おとづれて、夜更くるまでも
しめやかに、苦しき戀の苦しさを
語りつ聞きつ、さしぐみし
そのときなりし、いつ入りしか
部屋を飛びつる、蝙蝠よ。

そのくろき姿ぞ、はためきぞ、
はたと胸衝き、凶事のきざしかこれと
恐るる友をさりげなくなだめしが、
蝙蝠の黑き僧衣の壁をわたるに、
つひに來りぬメフイスト、

遲かりし、わが戀よりも遲かりし
おろかなるメフイストよと
心に罵りて、苦く笑ひて、やや蒼ざめし
友の面をちらと見て、寂しかりけり。

×

戀は罪、戀は罰、
など罪びととなり果てし、
などかく罰に投げられし、
罪こそわれの罰なれや。

友とかたりし茶蘆屋の
かのカフエに聞きしうた、
みだらの歌をあらためて
われあまたたびくちずさむ。

人の女といふことば、
ともに死ぬとのそのことば、
げに死ぬときぞ救はるる
心をやぶる戀の罰。

戀は罪、戀は罰、
憂き人の子に知らしむな、
のがれがたなきこの罪を、
赦さるる日なきこの罰を。

×

肉を底まで行けば
心にぶツつかる、
心を底まで行けば
肉にぶツつかる。
それにぶツつからねば
まだ徹せぬのだ。
なまぬるい戀、
戀とも云へぬ
いろごとよ、

賢い人のする
いろごとよ。

それは汚ない
どろどろのどぶよ、
どぶにもきれいな
花は咲く。
花は咲けども
ふみにじる
男ごころは
戀知らず。

肉は心の表の心、
心は肉の底の肉、
それがわかれば
おろかな戀に
死んだ男も
莫迦にはできぬ、
戀と女を
知る人ぞ。

×

潮のごとく
盛りかへす、
このくるしみは
何ならん。
引くとしみれば
また差し込む
潮か、いのちか、
熱か、火か。

燃えた、
狂うた、
あんなに強く
燃ゆるそなたと
知らなんだ。

われも燃ゆるぞ、
今もなほ
きみをおもへば
血がたぎる。
どうしようぞ
何としよぞ、
抱くにはるけき
人のかげ。

今一度、
もう一度、（以下五行削除）
生命の血を、
注がむ生命を
生命の血を。

世のみだらなる
戯れどきには
知らざりし
かのときめきぞ、
狂ひ心ぞ、
あやし、心も
裂くるほど、
胸も堪へえぬ
高鳴りに
悶え悶えて、
死ぬ思ひ。

などかくわれを
苦しむる、
そのくちづけぞ
苦しむる。
くちづけよりも
なほ強く、
抱擁よりも
なほ深く、
なほその底に

その奥に
ひそめるものぞ、
われを惹く、
惹きてし止まず。

ただ死か、今は、
死と死もて
互の胸に
烙きつくる
その極印を
打ちし人、
野村隈畔、
有島武郎、
北川三郎、
みな生きた、
われもいつかは
その中に、
おろかの名をば
うたはるる
人にあらぬか。

あらじ、
あらじ、
われはひとりよ、
ひとり行く
寂しきいのちの
影ぞわれ、
いとしき人を
いとしき生に
とどめてひとり
行く人と
われをおもへど、
今日はなぞ
潮のごとく
盛りかへす
この喘ぎをば

何とせん。

×

鬢に眞白く光るもの
老いのつかひと知るものを、
おそろしいきざしだ、
人に押されて生きる身には。
鬢の白髮を見出して
謀叛を思ひ立つた
明智光秀の心もこれか。
かうしてはゐられぬ
ぢつとしちやゐられぬ、
起て、起てなきや死ね、
やりたい事はやつて死ね、
男だ、男の死ぬときだ。

思ひもかけぬ五年振りの
人のおとづれ、一目みて
はつと胸にこたへたのは
その眼、その眼の下まぶち、
黑き隈こそおそろしや、
われをとらへに來た女。
五年むかしのあどけない
男恐れぬ人ならで、
男の肌を見ても見ぬ
いまはなさけを知る女、
なにとてわれには現はれし、
わが心空しかりけるその時に。

きみは言葉をたたかはせ、
心に迫り、身に迫り、三日は四日、
むかしなかりし碎けた調子、
指をからみつ、身をからみつ、
わが身に觸るるをうれしき顏に
きみは白髮をぬいてくれた、
わが家の緣の日あたりで

すわれる後にきみは立ち、
探し探して、一本一本と、
その長い指もてかいさぐる、
百本近い白髪であつた。
いつのまにふえた白髪ぞ、
この一つ一つにこもる憂き苦労、
人知れぬわが艱難ぞはかられね、
きみもあはれとおもひしか、
いたましき人ぞときみもおもひしか。

白髪をぬけば、黒々と、
房々と垂るるわが髪の
いかに若くも、はなやぎし。
そをばうれしときみはみて、
われをいのちに誘ひし
その夕こそ、夢なりき、
白髪をぬきしその指のいとしさ、
かの夕にはわが指と組み、

わが爪と爪をくらべて
愛でし指、愛でしその爪
いつまでも離しともなく、
組みし指、ふるへたりしか。

いまは離れて合ひもえず、
このひと月ぞ夢とすぎ、
思ひ暮るれば、いつしかに、
きみがぬいてくれた白髪がまた生えて、」
髪のあたりにちらほらと
白く光るはわが痛み、
枯野の薄、三日の月、
ああ、かくて銀髪の人となるのか。
男の業も成り得ずて
戦ひ敗れ、せめてもの
愛する人とも合ひ得ずて
いたづらに朽つるこの身か。
今一度、またもう一度

きみに白髪をぬいてもらひ、
若がへるべき身にはあらぬか、
ふと取りし鏡を捨てて
春の夕をひとりさしぐむ。

×

關西から歸つてもう二十日、
花は靑葉といりかはるのに
なんでぼんやりしてゐるぞ、
泣くでもなく、笑ふでもなく、
本も讀まねば、仕事もせず、
なんで本意(ほい)ない日をすごす。

いや、いや、おれは働いてゐる、
戀といふ仕事をしてゐるんだ。
笑はば笑へ、莫迦とも云へ、
これがおれにはほんとの仕事、
人の事業の空しさを
底まで知つたおれの事業。
ついでに死といふ仕事をも
おれはぼんやり考へてゐる。
おれをだました人生といふ
この横着な惡女から、
どうしておれはのがれるか、
その手段(てだて)をも考へてゐる。

×

ひとり書齋に閉ぢ籠つて
靜かに知識を愛する人の
眞理に殉ずるその熱意、
その篤學をむくはれて、
助教授となり、教授となり、
獨創的な研究論文に
博士となるもさまたげず。
グンドルフ教授は「ゲエテ」、

おれは「芭蕉」、
日本文學の精髓は俳諧、
俳諧の權化は芭蕉、
それに目をつけたのは一隻眼、
そこに知力と理解との限度を見せたいと
そんな夢さへ見た男、
おのれを知らぬ莫迦者め。
だが今、おれにはそれがつまらない、」
自分が誰れだか知れもした、
出來もせなんだが、
今はしたくもない。
あばよ。夢よ。

または街頭に、工場に、
塵と煙と齒車の軋りの中で
渦卷く階級戰の猛鬪士、
死をも恐れぬ×××、
俠勇マラテスタめくアナキスト、
バクウニン、クロポトキンの傳統を
このボルシェヴイズムの世に支へ、
十七歲の感激の
その初戀を貫くべく
起たむと思ふ志、
共產黨事件の××に
福本和夫、佐野學、
みなつかまつたと聞いたとき、」
さすが心は動いたが
男の血汐も騷いだが、
おのれを知らぬ莫迦者め。
おれにはそれもつまらない、」
出來もせなんだが、
今はしたくもない。
あばよ。夢よ。

何て身の程知らずの莫迦者め、
雲を摑んで、摑みそこねた。

さても、おそろしい野心だつたなあ、」
そもそも、それがおれの考へた事か、」
恐れげもなく、何と大それた事を。」
野心家、野心がありすぎると、
おれの心を知りつくす
親しい友はみんな云ふ。
「今こそ、おれがはじめて知れた、」
おれの本體はこんなもの、
こんなちつぽけな、瘦せつぽち、
それがおれだよ、あはれなおれだ、」
子供のやうな女に惚れて、
ままごとをして、
ままごとのやうな密通をして、」
けちな戀歌五六十
書けば用事のすむ男、
何とあはれなおれだなあ、」
三十七にもなりながら。
あばよ。夢よ。

この人生の鬪技場に立現れて、
いつぱし仕事をやつてのける
まづ一人前の男よと思つてゐたのに、
おろかな戀の歌を書くのが、
さては、おれの使命だつたか、
とるにも足らぬつまらぬ男だなあ。」
たが、おれも選ばれた人間だつた、」
痴人として選ばれたのだ。
そんならまた、それでよい、
人のやらない事をやる、
法外、無法な男として
それでどうしてやり切らぬ？
大杉榮はやつたぢやないか、
ブルジョア道德を足下にふみにじつて
雄獅子のやうに吼えたぢやないか。
奴はアナキスト、英雄兒、
おれは弱蟲、

おれは莫迦、
話にならぬ、
話にならぬ。

大杉榮はそれでよし、
それほどキビキビやらずとも
もつと利巧に、もつと上手に、
掘れば掘るほどいくらでも出てくる
芋蔓のやうな色をんな、
戀より戀のドン・フアン、
今は勞農黨の代議士よ、
少壯三十三の辯舌、その頭腦、
脂ぎつた、はちきれる肉づき、
精力的なその容貌、
それが男だ、ほんとの男だ。
戀なんぞではへこたれぬ、
ほんの食後のお茶受だ、
疲れをやすめるなぐさみだ。

それに何ぞや、この男、
戀にいのちをかけるとは！
おれは弱蟲、
おれは莫迦、
男であれ、
男であれ。

おろかな戀の歌つくり、
おろかな戀のやさ男、
そんな柄かよ、色消しで、
金と力がないばかり。
おろかな戀に死ぬるのが
せめて仕甲斐のある仕事、
何とみぢめな男だなあ。
きさまだつて男一匹だ、
男に生れたしあはせに
たしか睾丸も二つはある筈、
ちつたアしつかりしろと

背中からどやしつけろ。
きさまも男か、男なら
男らしく生きろ、死にたけりや
なんにも云はずに、默つて死ね。
何をぶつぶつ泣言(なきごと)を、
愚痴を並べて何になる。
死ねずば生きろよ、うんと生きろ、
平氣で人の首をばちよんぎつてくる
生蕃のやうに、しやんと生きろよ。

×

エミイル・ヤニングスのメフイストが
そなたは堪らなく好きだと云うた、
ヴアレンテイノやら、ナヴアロやら、
そんな通俗ではない女よと
そなたは自慢をして云うた。

寶塚まで見に行つたその『フアウスト』、

そなたはグレッチェンではなかつたが
おれはたしかにフアウスト、
けちなけちなフアウストだ、
あんまり本を讀みすぎて、
世の中がかいもく分らなくなつて、
毒を飮むより仕方がなくなつたのだ。

そこに、メフィストが現れもせず、
いきなり現れたのがそなたであつた、
しかも、グレッチェンではない女、
そんならおれはどうしよう？
そなたを捨てて歸つてくる、
歸つてまた昔の本でも讀むか、
また研究でもはじめるか。

さてさて、なさけないフアウスト、
あくまで迷つて行けもせず、
さりとて信ずる事もできず、

さて、これからどうするぞ、
さて、どうするぞ?
天に問へ、地に問へ、
風に問へ、
問へ、問へ、問へ……

四月十一日―十七日(東京)

第二卷

影の彈く曲

――(死と戀の曲)續篇――

×

情熱の反省となる徑路を
まざまざと目に見る寂しさ、
われつひに熱し切り
燃え切るべき人にあらぬか。

反省の情熱にぶりかへすとき、」
堤（つゝみ）を切る水の奔流
とどめえじ、とどめえざれど
つひに一切を押流し得じ。

たちまちに、反省の力かへりて
押しとどめ、とどめ支へて、」
熱を冷やし、心を鎮め、
おろかさを見よとて笑ふ。

われつひに詩人にあらず、
痴人にあらず、痴人とも
なりえざる痴なき痴人よ、
詩人にあらで、死人のみ。

×

心細りて、今は寂しくよすがなく、」
あはれな詩人の悲しい戀を
あまた思ひ出しては、
せめてもの心やりとする。

人妻とともに死にたる
クライスト、湖畔の悲劇、
人妻にもてあそばれて
狂ひ死にたるかのレナウ。

その教へ子の母を慕ひて
アポロに打たれしヘルデルリン、
ジョルジュサンドにきずつきて
酒杯に溺れしミュセエ。

戀なればこそ、死にもする、
戀なればこそ、狂ひもする。
人妻ゆゑに、身をやぶり、
詩人なればぞ、世を捨つる。

をさなけれども君も人妻、
つたなけれどもわれも詩人、
われも死ぬかと、狂ふかと、
その二月ぞ、鳴り立ちぬ。

いまは心の空しさ、つらさ、
煙のごとく消ゆる思ひ、
むかしの詩人の悲しい戀を
思ひ出でては、ひとり慰む。

×

矢は弦をはなれたり、
何處へ飛ぶぞ、
その射手の力かぎりに
行く方知れず、
ただ、飛ぶのみ。

右も見ず、左も見ず、
眼なく、耳なく、
ましぐらに
閃きすぐる魂よ。
空しき生のただ中を
われは矢よ、
風の如く飛ぶ。

何ものかわれをとどむる、

地の上にわれをとどむる。
とどむるは鐵の手よ、
あらじ、鐵とはうらうへに
やはらかき、やはらかき
女の手よ。
その手まで、飛ぶいのち、
その手もて撫でられて
綿となるまで。

女の眼(め)、われを呼び、
女の手、われをとらふる
それも束の間(ま)、——
女すら、われをとどめじ。
魅せられたる魂、
憑かれたるもの、
われに、われにと
招くものあり、
惹くものあり。

そのものぞ、われを吸ひ、
そのものぞ、われを呑む。
その果ての果ての果てまで
とどまらじ、とどまりえじ、
おのれなきわれは矢よ、
火の如く飛ぶ、風の如く飛ぶ。

×

美保の關より隱岐さして
死の船出せし人ありき。
堂ビルホテルの七階に
わが戀聞きしかの友の
そのをり呼びし部下の人、
なじみの藝者を伴ひて
行衞不明になりたりと、
思ひもかけぬ友の文(ふみ)。
胸に影ひく二三日、

隠岐にありきとぞ、死にも得で。

美保の關より隠岐さして
死の船出せし人ありき、
わが小説の主人公
純一と敏子のごとく、
美保に遊びて死をかたり
海をながめて嘆きしか。
われに代りて行きし人、
わがなしえざりし死のわざを
企てたりし人なるを、
そのさだめこそいとしけれ。

などかの二人はとらはれし、
われに代りて行きたるを。
かかる恥をばまぬがれて
生くるがわれの幸なるか。
須磨の浦から舞子まで
海をながめて行きながら、
死をも語らでたはむれし
戀にも足らぬ、をさな戀、
われより若きその人ぞ
われよりもなほ生きたるを。

×

人の世の春を踏みゆく春の足、
春の素足は風のごと、
緑の中に匂ふ花、
生命の泉と溢れつつ。

大地は銀の盃よ、
あふるるものは生の酒。
醉へばぞ歌ひ、歌ひては
をどりも狂ふ春の人。

罪としいふな、たはれとも、

春のいのちに舞ひ狂ふ、
狂ふは罪か、めでたきを、
ただ擧げよかし春の足。

うちひそめけるささやきも
かがやく空にこだまして、
破るるごとき笑ひすら
しづけき涙となりはつる。

白きただむき、白き足、
搖れつさやげる風の歌、
ああ、春なればゆるせかし、
罪もめでたき生の春。

×

躓いても賞められる人、
飛び越すも罵られるもの、
不合理だ、いや、當然よ、
みんな前世のむくいなのサ。

貧乏くぢを引いた男、
默れ、默つてぢつと耐へよ、
何をするとも、おまへは駄目よ、
やればやるほど、わるいのサ。

第一歩にして蹉跌して、
踏み出した足の泥、
かへすよしなし、拭ふよしなし、
失敗、失敗、失敗……

×

人生を凹面鏡と思へ、
この醜怪な顏をした男、
おれだよ、おれさまだよ、
それがどうした、——それでよし。

戀をする身に、
ブルジョアも
プロレタリアも
あるものか。

戀に上下の、
へだてなし、
戀はみなふむ
人のみち。

燃えるか、燃えぬか、
まことか、うそか、
その差ばかりよ、
戀は戀。

それでも金だよ、
戀は金、
金がなければ
さやうなら。

色は好きでも
ひもじけりや、
戀をするより
飯を食ふ。

×

何をやらうとも、おれは影だ、
人が打たうと、罵らうと、
莫迦と云はうと、叩かうと、
影の身だもの、かまふものか。

おれは死人だ、死んだのだ、
おれは死んだよ、三月かぎり、
生の中で、死んでゐる、
死んでゐながら、動いてゐる。

みんなおれにはトオテンタンツ、
髑髏の眼から花が咲く、
骸骨の手で人を斬る、
それが戀だよ、事業だよ。

生が夢なら、身は影だ、
影が泣かうと笑はうと
聲もなければ、涙もない、
影に死はない、恥はない。

傍若無人におれはやる、
おれは勝手に彈いてやる
影のピアノで影の曲、
聲なき曲で、神と魔を。

×

赤裸の人ぞ、われは赤裸々。
裸ん坊で生れた赤ん坊が
なんでウソの着物で身を飾る？
なんで肩書きや地位や名聲で
その醜さをおし隱す？
ぬげぬげ、すつぱだかになれ、
赤裸がきさまの盛裝だ、
裸一貫――それで男だ。

赤裸の人として世に立つべく
われはかくあり、あらしめられた。
人に見せないところを見せて
わらはれようと、叱られようと、
これがおれだよ、おれの魂だ、
見れ、見てわらへ、罵れと
世にさらけ出せ、禁斷を破れ、
おれはこんな莫迦だと云つてしまへ。

われとおのれを禁斷して、
おのれの罪と恥とおろかさを

世に押隱し、臭いものに蓋をして
口を拭つて賢者ぶる、
何たる醜惡、何たる愚！
何のための禁斷、何のための顧慮？
それは卑怯だ、小利巧だ、
やつぱり弱蟲、いくぢなし。

弱蟲には死毒でも注射せよ、
松の葉を煎じてのませろ、
蛇を食はせ、蝮を食はせ。
おれに無いものが、生のすべてだ。
おれがおれでなくなるとき――
摩訶不思議なる更生が來る、
おれはおれを滅しつつ
より大いなるおれとなる。

無茶苦茶にかぎる、もう今は、
めくら滅法に、勝手氣儘に、
ひるむ事なく、突き進め。
猪突こそ、猪勇こそ生の許可證。
何であらうと、かまふものか、
一大勇猛心をふるひおこして
生に向へ、生に向へ。
赤裸の德、赤裸の宗教は玆にはじまる。

赤裸の人となりきつたとき
おれは凡愚の中の凡愚、
痴漢の痴漢、下々の下よ――
だが、それがほんとの人間樣だ。
この罪と恥と、それがどうした？
この情痴と罪業の火に身を燒いて
燒いたその灰から生れ出る
不死鳥のおれと知らないか。

×

ぶち割つた甕はつぐな、

その破片(かけら)をもつとこなごなにしろ、
こなごなにしながら生きろ。
失敗者は破滅へと身を向けろ、
破滅しながら、生きまくるんだ。
どうせオギヤアと生れたからには
やぶれかぶれの百年目だ、
けちな人生の屋臺骨の
ぐらづく位、どつかとすわつて、
尻をまくつて居直るんだ。
それがきさまの後半生だ、
きさまの生き方よ、死に方よ。

粉微塵(こなみじん)に身をたたきつける氣もちで
生きるんだ、きさまは生きるんだ。
わらはれようと、辱められようと、
叩かれようと、無視されようと、
かまふものかよ、かまふものか。
きさまは死ぬ筈の人間だつた、
あのとき死んでゐたきさまぢやないか、
生きのびて、いまは何んの死ぞ？
生のテロリストだよ、テラアを生きろ、
身を爆彈の如くたたきつけろ、
社會に自分を――そして云へ、
全體、このおれをどうしてくれる？

×

女に勝つものがほんとの男、
女に勝つものは世にも勝つ。
女なんぞは屁のかッぱ。
それに此奴(こいつ)は何とした愚圖ぞ、
いつも女に負けてる男、
負けてばつかりゐる男、
世にも負けた、仕事にも負けた。
妻にも負けて、あちらこちらと
引き廻されて、世話されて、
一人では何にも出來なくなつたのよと

女は齒痒げにかろしめた。
偶然な奴め、今度はまた
その女に負けて、死にかけた。
命をかけて、死ねなんだ。
それでのこのこ歸るとは何とした奴だ。

ドン・フアン修業にやぶれた男、
女に負けて、何がドン・フアン。
一人の女にすつかりとらはれて
一人の女に滅ぼされかけた。
誰れやらが昔云つたやうに、
悲慘を通り越して滑稽な男、
情熱地獄の亡者組。ほんとにさうだ。
ドン・フアンは女を愛しない、
おれは愛して、ひとりで燃えた。
女を愛するすべさへ知らずに、
戀愛沙汰はちと押が強い。
愛するとはだます事だと知らないで、
世に負けたやうに、また負けた。
いいざまだ、戀の道化者、
鈴つき頭巾のドン・キホオテ。

×

鈴つき頭巾の
ピエロ殿、
なんでめそめそ
してござる、
わかれた女が
戀しいか。

女が思ふやうに
ならぬと云うて、
あちら向いちや
チリンチリン、
こちら向いちや
チリンチリン。

なんて我儘な
ピエロ殿．
そなたをおもちゃに
して遊んだ、
それが女の
なさけだものを。

お泣きやるなよ
ピエロ殿、
泣けば女は
笑ふぞえ、
大切（だいじ）な頰紅（ほゝべに）
はげるぞえ。

×

女は遊びが大好きで
大きなおもちゃを喜んだ。

まづ手はじめは中學生、
それから會社員、銀行員、
阪神間の電車でも
知らぬ人なき女學生。
それから都に飛出して
靑年文士も二三人．
罪とも知らず、手管とも
云へぬ罪なきたはむれに
男ごころをもてあそび、
あぶなくなれば逃げてしまふ。
その奥の手にかかつては
男はポカンとするばかり。

花の大阪、タイピスト、
そのオフイスの男たち、
サラリイマンのサラリイも
カフエー歩きに足りかねる。
中にあはれをとどめしは

顔のみにくき大男、
長きたのみの甲斐なくて、
つひに近くの玉突きの
數取り女をはらませた。
そのかたはらについてゐた
一人は若くおとなしく、
家より家への求婚に
賢くも正々堂々と
處女なる妻をかちえたり。

女は遊びが大好きで
大きなおもちゃを喜んだ。
正式結婚のさびしさに
むかしの遊びがなつかしく、
遠い都にただひとり
爪をかけえで殘せりし
中年男をおもひだす。

今のおもちゃはあの男、
あれならおもちゃに仕甲斐があると、
おもちゃを買ひに出て行つた。
陰氣くさい、ぢぢむさい
中年男が、何とした事、
世をあぢきなき頭髯の
赤いさきをばつかまれた。

取れた、取れた、おもちゃが取れた、
女は喜んで、ふりまはす。
眼をばパチクリ、頭をフラリ、
首ふる、手ふる、足をふる、
おそい初戀、早い死を
はや覺悟して飛び上り、
とんぼがへり、宙がへり、
これが正氣の沙汰かとて
妻ははらたて、いさめれど、
むかしの遊びとわけが違ふ、

おれがどうしてもてあそばれる、
おれには許した女だものと
迷ひはなほなほ止みもせず、
女を追つて馳せくだる。

女は遊びが大好きで
大きなおもちやを喜んだ。
言葉や唇ではききめのない
中年男の心臓に
釘を一本打ち込んで、
この手つけなら大丈夫と
急いで西に逃げ出して
おいでおいでと呼び出せば、
果してフラフラ、フラフラと
東海道は三百哩、
目に見えぬ紐にたぐられて
首ふり、手ふりやつて來た
大きなおもちやを喜んで
女は遊んで驅けまはる、
中年男はおもしろや。

×

賢い友はすべてを知る、
世間も、自分も、女の心も、
ちやんと知つてゐる、なすべき事と、
なすべからざる事とをも。
中年の戀は苦しみばかりだ、
若い時のやうにスヰイトぢやない、
夢にも醉へず、溺れも出來ぬ、
それで動けば、身をあげて、
根こそげ持つて行かれてしまふ、
中年の戀は破滅だと、友は語つて
年下のおろかな友をいましめた
そのまごころも今は空。
今は惑へる痴人をながめて、
身をば破るな、心を變へて

仕事に打込めといさめてくれた。

智慧の人なる友の手堅さ、
家をきちんと統べくくり、
妻に愛され、兒を愛して、
戀に代へて、馬に乘る、
馬を走らせて健康をはかる。
なすべき仕事はキチンとしとげて、
おのれの分をよく知つて、
ちやんと見境ひをつけて世に生きる。
それがこの危險な人生のみちで
よく身を保つ所以である、
無事に老いるべき智慧である。
どんなに馬を走らせようと
つひぞ落馬はせぬ人だもの。
それにどうだ、馬にも乘らないで
おれはみんごと落馬した。

おれは莫迦ゆゑ、なんにも知らぬ、
まんざら知らないわけでもないが
死んだところでかまやせぬ、
死ぬのが本望。そんな無鐵砲もの、
子供もなければ、大した名譽もない、
どうせ一期は夢の夢よと
死より芽ぐんだ戀ゆゑに、
身を馬のごと驅らつて
行け、行け、西へと驅けたのだ。
戀の外には仕事がなかつた、
世に望みなく、ましぐらに
破滅の淵まで行つてみた、
行つて見なけりや分らないおれだ。
絶壁の上から飛び下りて、
しまつたと思つても遲いといつたおれだ。

まつたく、おれは落馬の名人なのだ、
そのくせ愛宕山の石段でさへ

久々なれば四方山の話の末に、
ふと思ひついて、わが手をとり、
手の筋を見てやると、灯に近づけて、
驚きましたなアと云ふもことわり、
この感情線の亂れはいかに、
何本も何本も、入り亂れ重り合つて
深くも刻んだその筋に、われも驚く。

此間、さる先輩につれられて行つて、
十人ほどの藝者の手を
荒木町で見てやりましたが、
みんなこんなに亂れてゐましたよ、
だが、男には全くめづらしいと友は云ふ。
おれも藝者か、藝者のやうな男か、
類のない多情多恨と云へば聞えがいい、
わるく云へば浮氣の相ぢやないか。
これがおれの心のあらはれか、
だからこそ、おれも詩人になつたのだ。

一氣に驅け上るつもりなのだ。
身の程知らず、世間知らず、
みんごと落ちて、頭を砕いて死ぬのが
おれにはふさはしい最期だらうよ。
業にも落ちた、戀にも落ちた、
女に落ちて、死ぬ氣も落ちて、
この上何で世に立つぞ。
うらめしいのは掌の筋よ、
この生命線の長いこと、
長壽の相よと占はれて
恥かしく、くやしかつたが、
短氣なことをするなと氣づかふ友の
智慧にすがつて生きようおれも。

×

戀の旅よりかへりしわれの
すこやかな顏をよろこび、
心やさしい俳人の友は

だが、智能線の正しく深くて
迷ひも亂れも統べられますと、
友は氣の毒さうに救うてくれた。
それでなければ、藝者のやうな男、
眞面目で通つたおれの顏が立たぬ。
友はさらにしらべて、生命線は長く、
中指と藥指さして縱にのぼる
この線こそはめづらしき線、
世に立つ兆だと云つてくれた、
世に敗れたるこのおれだのに。

また、これは私にもありますが、
この右へ斜めに流れる線は
他人の愛に干渉する線、
これのある人は、いい方では
他人の結婚の媒酌をしますが、また、
姦通をする危険もありますと云ふ。

成程、僕も媒酌は三組もしましたよ、
姦通だけはしませんがねと、
おれはしづかに、微笑んだ友の眼を、
澄んだ眼を見ながら小聲で云つた。

友はさらにまじまじと見て差し示す、
感情線の上、掌の横に
深く刻んだ横線の上の二筋、
あなたの生涯にはまだこれから
二人の女があらはれますよ、
一人は長く、一生に影をひきます、
一人はさつと横ぎりますと、
わが受難をば見通して、されども知らず、
その一人、君かあらぬか、また一人、
かのひとかとぞ、ふと胸に影を曳きしを。

×

かついさぎよく

散らましと、
おもふ心は
ありながら。

きみゆゑわれは
ながらへぬ、
燃えぬきみゆゑ
燃え盡きて。

いまは心に
夢もなく、
ねがひも世には
たえはてぬ。

春を忘れて
佗び住むと、
風のたよりに
ことづてむ。

×

五月となりぬ、
薔薇の月、
いのちの月をと
きみは呼ぶ。

いくたび呼びつ
招くとも、
われを充さぬ
夢のひと。

きみはその家を
捨てぬひと、
行けばいやます
わがなやみ。

蘆屋川邊の

さまよひも
くるしからまし、
きみは母。

×

春はすぎたり、
きみがため、
わがためなりし
日はすぎぬ。

むかしを今に
なさむとは、
あまりおろかの
ひと心。

相棲むことの
かなはずば、
會はぬは會ふに
まさらまし。

われは東に
きみは西、
ちればあとなき
春の夢。

×

ピエロも戀に
泣くものか、
泣けばピエロも
いぢらしや。

われもきみゆゑ、
年をへて、
小さきピエロと
なり果てぬ。

月にピエロの
なみだ戀、
蘆屋川邊の
影法師。

それを所望か、
もう一度、
そのアンコオル
なさけなや。

×

もう厭やだ、
をどりは厭やだ、
いくらをどつても
なんにもならぬ。

ピエロはすねて
わき向いて、
ぴよんとお辭儀して
今日はおしまひ。

×

會へばただ
よしなの話、
身をいかに、
この戀をなど、
ひと言もなく、
なんにも殘らぬ
無駄話、
ただ、をとめ子の
夢を抱きて。
よしなの戀や。

くるしい話は
避けるひと、
いつも白日の

夢をたのしむ
きみがかたへに、
すべなくすぎし
二月、三月。
可惜しや。

×

もどかしく
もどかしかりし
戀の侘しさ、
あぢきなき
ひとり寢の夜を、
閉ぢし瞳の
輪のやうに、
心に動く
人ありき、
來ませ來ませと。

とこしへに
捨てむと定め、
蘆屋をば
發ちし惱みに、
今こそと
その眼招きぬ。
夜明まへ
すぎし靜岡、
いざ今と
思ひたれども。

たちまちに
汽車は動きて、
君はなし、
戀もなし。
みな夢よ
朝のねむりよ、
われを救ふ

やは手、空しく
など來つると、
今はくやしや。

四月二十六日—五月二十日（用宗—東京）

第二編

×

あまりつめたき人ゆゑに
あまりをさなき人ゆゑに、
熱きこころにあこがれぬ
世を知る人にあこがれぬ。

かれがあたへしこの傷手
なだめ癒やすはその人よ、
かれがむかしの友なりし
ややとしかさのその人よ。

救ひを求め、いたはりを
求めてつひにたづねしは、
富士の裾なるきみがもと、
きみは心をかたむけぬ。

いつも空しく待ちぬるを
つひに來ませしうれしさよ、
君の心をわれ知ると
かすかにきみは囁きぬ。

かれが瞳はキラキラと
銀の冴えにぞかがやけど、
こなたの眸はギラギラと
濡れてうるみて燃えいづる。

ほの暗くなるへやぬちに
さつと潮の寄するごと、

黒くかがやくものありき、
ぢつと見られて堪へかねし。

あまりに熱ききみなれば
あまりなまめくきみなれば、
戀にもあらで、わが心、
ふとときめきに亂されぬ。

そのときめきぞ罪にして、
おもひもかけぬ疑ひに
ひとたびは怒り奮ひしも
いはれなしとは云ひかねし。

きみはあまりにうれしげに
あまり浮き浮きはしやぎし、
あるじの怒り、憎しみに
打たるる罪もおもはずか。

あはれはわれの影身(かげみ)にて
世のさだめこそわりなしや、
痛む傷手(いたで)を撫づる手の
人の指環に傷つきつ。

いのちを救ふ人とみし
きみはいのちの仇(あだ)なりし、
またも心を血に染めて
きみがほとりを逃れ來ぬ。

×

用宗(もちむね)のしろ山の湯に
さしかけし君がなさけの
相合傘、いまも忘れず、
そのなさけこまやかなれば。

濱ちかき海はけぶりて、
夕急(ゆふいそ)ぐ人にまじりて

傘と傘並べて行きし
その人はかくはせざりき。
ふみ越えしあとのをさなく、
歌ひつつ身をつくろひし
その暮の女ごころは
悲しともうれしともわかず。

年は三つその人を過ぎ
いくたりか男知るひと、
もしいまも君と越えなば
いかにかは君はなすらん。

湯の宿の暗き小部屋に
むかひゐて、その眼ながめて、
そのあとを見まくほりせし
その心、何の心ぞ。

×

「切れるものなら
ピンと切る、
切れぬものなら
一生切れぬ、
わたしや名古屋の
御城下育ち、
金のしやちほこ
伊達でない」

その氣性ゆゑ
きみは好き、
きみは才あり
なさけあり、
戀の意氣地も
たてひきも、
じやんと勝氣で
張りもある。

しやつきりしやんとして、

小股のキリリと
切れ上つた女、
名古屋女は
うすなさけ、
きみはあまりに
深なさけ、
それで名古屋に
をりかねた。

西と東と
風次第、
吹かれ吹かれて
やるせない
とまりどもない
身は亡者、
きみがなさけに
うかばうと、
きみをたよりに
やつて來た。

×

賤機山の坂みちを上りながら、
ふと立止つて、下から見上げて
「今の話をどうなさいますの」と
ぢつと見入つた瞳の言葉、
「今の話？」と聞きかへして
あまりに素早い心の動きに、
答を探して、見かへして、
わが心根をぢつとためした。

彌生の戀をきつぱり打切つて、
消すには消せぬ思ひのやり場を
何處(どこ)に求めてやすらぐと
迷ふ心を、君に招かれ來た心。
この戀いかに消すべきか、
さつぱりとあちらが絕てるものか、

絶つて寂しくないものか、
はつきり聞かうといふ心。

それがきつぱり云へようか、
燕返しに、ひらりとかはし、
かはして一圖に來られうか。
さうさう急に向き變へられうか、
それを思へば、口ごもる。
「あの人は引つ張つといて
急に突つぱなしてしまふ人ですもの、
これからずつと續けてゐらつしやれば、
滅茶苦茶におなんなさりはしないかと
心配でなりませぬ」と情(なさけ)をこめて。

この情(なさけ)をば求めて來た、
來たが、それゆゑなほ苦(くる)し。
もしもきつぱり絶てないものならば
君をこんなに引張り出して、

おつぽり出さば、罪が深い。
それは出來ない、それだから
この戀に戀が消せるものと
思ひをかけて來は來たが。
山のなぞへの茶の畑、
茶摘み女の紅い襷に
眼(まなこ)をとめて、しばしイむ
われの思ひを何んと見た。

×

富士の麓の逝く春を
われは探りに來ざりけり、
われを導くその人の
春の言葉を聞きに來ぬ。

げに逝く春のあはれをば
われにかこちて君泣けば、
われは空しくながらへし

この三春を嘆きけり。

賤機山の藤棚のもと、
富士をながめてかたりしは、
君がさだめのあやしさよ、
われの思ひのくるしさよ。

並べし肩を吹く風に
藤の花蕋はらはらと
わが肩打てばやは手もて
そと取り捨つるこまやかさ。

町のあたりを見おろして
涙に濡るるその眸を
おし拭ひてはほほゑめる
君はなさけに燃ゆるひと。

われをば救ふ君なれば
君をばわれも救はまし、
もしも東に來たまはば
君住む家をつくらまし。

蘆屋川邊の三人ずみ、
女のわれも苦しきを
いかで男の堪へまさむ、
心をやぶりたまふなと。

慰められつ慰めつ
長き日もはや傾きぬ、
いざかへらむと下り立てば
富士は二人を見送りぬ。

君は小柄の人なれば
わが肩ほどもあらねども、
二人して行くみちすがら
樂しと君はささやきし。

×

思ひ出の寺となりける臨濟寺、
その石段をのぼりゆく
小柄な洋裝の人の愛らしさ。
いつも顏見合せて歩く人、
身をすりよせて歩く人、
かかへて川も渡りたい
そんな氣さへもする人よ。
七年（なゝとせ）まへに見たをりは
戀に傷つき、世を狹め、
人にかくれて會ひに來た
しをらしい町むすめであつた。」

駿河はよい國、よいお寺、
臨濟寺の山にわたした長廊下、
ふたりで行けば、何とやら、
戀にはあらで、七年（とせ）ぶりの
夫婦の旅の氣もちがして、
地味な世帶（しよたい）の味もする。
おもへば變つた身の上だ、
きのふは神戸の元町歩き、
けふは禪寺、これも修業。
おれも禪をやらうとした男、
今はおさらば、いや、これが禪だ、
戀に狂へば狂ひ盡す、
行くところまでおれは行く。

京は紫野大德寺、そこの和尚が、
戀ではおれのお師家さんだ、
すわりに來いと度々云つてくれる。
老師、私も今度は突き拔けます、
どうしても突き拔いてみます。
一婆子（はす）が庵に住ませといた坊主の許（もと）へ
女の子をやつて、抱（だ）きつかせて、
何と云つたかと問うたらば、

枯木寒巖に倚ると云うた、
この糞坊主めと追ひ出して
庵(いほり)を燒いたといふ婆子燒庵の則、
あの見にくい則、あの公案も
おもしろいなあ、今度はおれも打破るぞ。」

そつとそんな事など思ひ出し、
また下りて行く長廊下、
そのかたはらの十六羅漢、
「あの中にはきつと知つた人に似た顏が
あるさうですのね」といふ人に、
西鶴の一代女は年とつてからお寺詣り、
五百羅漢がみんな知つた男であつた、
そんな話をふつとして、
君は小さな一代女、
わたしもけちな一代男よと
いい氣になつたそのたまゆら、
莫迦め、やつぱりきさまは駄目だ、
通りぬ、通らぬ、生れ變つても、
印可證明は下りぬぞよ、
戀の修業の居士にはなれぬ。
大德寺の和尚、何とする、戀は通らぬ。」

×

賤機山ははや暗く寂しと、
淺間(せんげん)神社に、遠くながめて
きはめねば知るよしもなき
富士のいただき、奧の院、
その一の、はじめの社(やしろ)、この戀も、
婚禮の式をここでも擧げるといふ
その境內の、池のほとりは夏がよし。」

茶店の奧の緣さきに
垂るる白藤、たそがれ闇に
くつきり浮いたきみが襟あし、
凄いほどの白さはことに、

かうも肌の白い人もあるものかと
かねて思うたなまめかしさが、
皐月の夕風にことさら匂ふ。

茶をくんで來た茶店の嫗さんに
むすめさんはときみ訊けば、
あれはお嫁にゆきました、
それはいいこと、しあはせねと
わたしの顔を見かへして、
ちよつとそなたは寂しさう、
云ふに云へない心のねぎごと、
どうして出したらよいものか。

ふたりで甘酒のみながら、
夕風のあまりの心よさに
かへるも忘れ、うすやみに
をりをり潮の寄するごと
さつとその眼に寄する波、
熱い思ひがまた寄せた。
どうしていのちが要るものか、
このまま別れてよいものか。

×

海の人、山の人、
げに何から何まで
こんなにも違つた二人が、
よくもよくもあつたもの、
わが生涯に會つたもの。

舞子の濱で、海が好きよと、
手拭ひさへあれば、このまま
足袋をぬいで入つてみるのにと
云つた人と別れて來て、
富士の麓に、富士を見て、
山と海とどちらがお好きで
いらつしやいますかと

問はれて、われは答へなづんだ。

海も好きですが、山も好きです、」
山から海へ、海から山へ、
今は山よと心で云へば、
わたしは山が好きですわ、
ずつと山が幾重にも幾重にも
重なり合つてゐるのを見ますと、
何だか身が吸ひ込まれて行くやうですと
山を見ながら君は語つた。

海の人、山の人、
海のやうにいつも波打つて、
騒いで、ふざけて、はしやいで、」
大きな舟でもくつがへす
あれは恐ろしい破壊性の女だ。
これは山影、山みちの暗い繁みで
ひそひそと囁くやうな、

それで下には火を持つ女。

キラキラとする冴えた深い瞳、
ギラギラとしてぱつと燃ゆる瞳。
中高の、きつぱりした知的な面、
少しやくれて愛らしい情の顔。
あまりに細く、銀線の身體と心、
小柄で、兩手に纏ひつく身と心。
何から何まですつくり違つた二人、
われはいづれを選ばうか、海か山か。

かつて男を愛さず、とらはれぬ人、
いつも愛して、だまされる人。
戯れ遊んで、笑つて、逃げる人、
しつぽり纏うて、泣いて、寄る人。
正式結婚をして、その家をなみする人、
戀に破れて、日蔭の女となりし人。
かばかり違ふ二人ゆゑ、一人に痛めば、

一人を求め、水に足りずば火にぞ行く。」

海の人、山の人、
山と海とどちらが好きと
云ふに云はれず、云ひかねつ、
海は芦屋の人なれば、
山は駿河の人なれば。

×

世話にくだけた色ばなし、
それでは戀になりかねる、
われも情事をもてあそぶ
やくざ男となりつるか。

いやいや、君はすぐ燃える、
二十八でもまだをぼこ、
そのしぐささへ仇めけど
色のはなしの罪のなさ。

いろのいろいろ、底の底、
味はひつくしたつもりでも、
男の口に乘せられて
わが身いとしむかあいさよ。

すぐ情熱につかれるのよと
火をば燃やさぬ人ゆゑに、
燃えるそなたに會ひに來た。
會へど戀ではないふたり。

戀の手前の色ばなし、
あんまりはめをはづすので
三十男もコップの蔭に
少してれたと君知らず。

おなじ住居に妻ふたり、
いまの暮しはさすがにつらく

いつも嘆きし人ながら、
東京ならばと口ごもる。

あなたのお傍に行つたなら
かうして暮すもたのしいと
云はれてうれしと思ひしが、
それが出來ようこのおれか。

人におそれ、世におそれ、
とりわけ自分におそれる身、
ただ苦しみに壓し倒され
君を嘆きに沈めなば。

やはりその家に君はゐて
妻の外なる妻の役、
一夜どまりの旅人と
われを見たまへ、人のため。

×

人の夫をおびき出し、
妻の心をきずつけて
そのにくしみを買へるひと、
妻のくらゐをおとしめて
隱してすごす心ゆゑ、
家の外なる戀もする。

妻のほこりをいたはりて
立てておのれを下におく
世にめづらしいしをらしさ、
女ごころのやさしさに、
君は戀にもきずつきて
日蔭の花となり果てし。

われは日蔭の花なれど
手折りてくれる人あればこそ

戀のよろこびも知るものを、
手折れる人の心まかせに
なさけに生きる心よと
觸れなば落ちむ花言葉。

水と魚とのそのこころ、
つらき傷手のたまゆらに
愛すればこそ觸れざりし
長きおもひのめざめしは、
わが咎とのみ責むるなよ、
われも罪ある身なれども。

されどあまりに燃えすぎて
後さきも見ぬ君ゆゑに、
君はあるじに打たれけり、
打たれてわれにと泣きて來し
そのいとしさをいかにせむ、
これをば捨てて何とする。

よしさらば身に引受けむ、
われも男と告り出でて
君をかばひて立ちしかど、
三十路に近き身の末を
おもへば君も動きえず、
しばしとわれをとどめたり。

妻をなみしてにくまれし
人は家もなみする隱し戀、
妻にしたしき人はまた
その性ゆゑの隱し妻、
爭ふべきに爭はで
ここに意外のこの意氣地。

おもへば奇しき人の世よ、
強く烈しく燃え立ちて
さばかり淡くすぎし戀、

その戀慾やすやはらぎを
求め來りてこのいくさ、
誰れかはわれを愚弄する。

×

人の女を奪りに來た、
奪りに來たのぢやないけれど、
奪りに來たと云ふならば、
奪らねば立たぬ男の意地。

女のみさをを疑つて
出て行けと云つて追ん出せば、
われゆゑ出されたその女、
引受けるのが男の意地。

君があるじは君を打つ、
甘い言葉が何になる、
男の愛はこれだぞと
ピンと頬をば張りとばす。

甘い言葉とはおれがことか、
何を云ふんだ、おれも打つぞ、
ただおれはかよわい女は打たぬ、
打つなら男を打つてやる。

男と男と、さあどうだ、
こつちが打つか打たれるか、
殺すかこつちが殺されるか、
一つやつて見ようぢやないか。

とんだ汚名を蒙つて、
ここでこのまますつこんで
男の意地が立つものか、
おれも男はすたらせぬ。

行きがかりとは云ひながら、

ゆるした仲でないとても
男となれば、女のために
これほど勇氣が出るものか。

急いで二階の寢間を出て
どつかとかけし應接間、
煙草くゆらし悠々と待つ、
糞落着きは何處から出た。

さても、をかしな事がある、
これがあの未練なおれかなあ、
さすが修業は出來かけた、
さあその意氣でぶツつかれ。

かう出たら、かう出てやる、
かう云つたら、かう云ふと
だんどりつけて待つ男、
これがめそめそ泣いた男か。

人の住家にとまり込み、
人の女を連れまはし、
主人(あるじ)に會はうとすわり込む
圖太い男は、何處の何者だ。

×

あるじは既に寢たといふ、
會はねば此のまま歸られぬ、
會つて身の潔白をあかさねば。
またおめおめと泊れもせぬ、
かかる疑ひ身に受けて
この家(や)に夜(よる)が明さりよか。

夫人ははらはら、途方に暮れ、
君は涙の目で拜む。
今夜はここでおやすみになつて
みんな明日(あした)の事にしてと、

たのまれながら、身の立場、
誰れが許して泊つたと
云ひ詰められたら何んとする。

夜は十二時、もう一時、
俥を呼んで、車上から、
あるじが起きられたらばお呼び下さい、」
こちらから電話もかけますがと、
妻なる人にたのみおき、
行けば五月も夜は寒し。

大東館の一室に、お茶をのみつつ、
見上ぐる額の書は誰れぞ、
「白雲深處」蘇峯の書。
ああ、蘇峯先生、この老文豪、
夫婦の道を說かれたる人ならずや、
故ありてわが恩人と仰ぎしを、
いま、この痴態を何と見らるる。

白雲深き處、住むは老僧か、
はた金龍の躍れるか。
雲の上よりわれを見て
いましめらるる眼のあるに、
穴あらば入らむ、何とせむ、
額を垂れて、夜の二時、
熱き淚ぞ頰には落ち來ぬ。

×

二臺の俥で迎へに行くと
云つた言葉は、よく云うた。
おれの男の意地もそれ、
君にかけたる愛もそれ、
おれの力をみんな出す。
泣きの淚で出る人を
玄關口で受取らば、
おれの男もしやんと立つ。

出すといふほど愛すれば、
打つほど惹かれてゐるならば、
誇りを捨てても泣くならば、
男ごころのためしどき。
今は幸ある君とみる、
おれの二臺は引つ込める、
いつも二臺の俥を並べ
あるじと二人で行きたまへ。

妻なる人の次ぎにゐて
いつも心を砕きつつ、
あるじ大切、家大切と
つとめ盡して、出るときは
夫と妻とで、君は留守居、
それはあまりにむごたらし。
かうもうれしいよい女、
なぜに粗末にしておくか。

古い馴染のおれだもの、
たのまれて來たおれだもの、
その共棲みの樣を見て
何で默つてゐられるぞ。
よしなき疑ひ、それもよし、
わが飛入りの藥が利いて
君が樂しき君とならば、
二臺の俥も伊達ぢやない、
いつも二臺は用意する。

×

篠つく雨ををかして
君と二人で相乘りの
自動車の越した橋、
安倍川の長いその橋、
今は照る日のもとを
俥でゆらゆら渡る、

その次ぎの汽車も待たずに
用宗の宿へ一散。

などこの儘に過すべき、
富士の麓に、富士のごと
動かであらば雪も消なむに、
とても消ゆべき雪ならば
わが立ちし後に消えよかし。
あまりに心は傷つきぬ、
傷手に重なるこの傷手、
いまは都に癒ゆるのみ。

ひとたび西を逃れ來て、
またもやここに逃るとは、
いかに箱根を越ゆべきか。
わが身にまとふこのさだめ、
思へば身の恥、生恥も、
ただその智慧の足らわばよ。

よし、かへらなむ、
賢からむは、それのみぞ。
寂しくも、荷物まとめて
用宗を立ちしその人、
いかにあはれに見えたらむ。

×

われはサディスト、マゾフィスト、
自分で自分をいぢめるサディストで、
自分にいぢめられて喜ぶマゾフィスト。
人は女をくるしめる、
女に苦しめられてほくそゑむ、
われはわが手にわれを打つ。

かくて十年は空しくすぎた、
清く、やさしく、美しく、
ひかへ目に、また押強い
あまたの女を見すごして、

ただ、自分の世界に閉ぢ籠り
われとわが身をしひたげて。

だが、今はわれも女にサディストぞ、
女のためのマゾフィスト。
大阪、神戸のマゾフィスト、
女の荷物を持つて喜んだ。
ここでは君が持つてくれる、
君はまことに女らしい女、
われをサディストにしてしまふ。

甘いささやきで足らぬもの
皮肉と毒舌が注ぎ滿たす。
やさしい愛撫で足らぬもの
荒いこぶしがウンと足す。
芦屋で言葉のナイフもて
刺しつ刺されて喜んだ。
ここでは君のその瞳、
われを灼きたり、身を灼いた。

×

人なき部屋に
ふたりゐて
もの云はぬ時の
きみが眼は、
などかく熱く
身にぞ沁む。

あまりに燃えて
なまめけば
戀のおもひの
なき人は
燃ゆるおもひに
くるしまん。

抑へてすぎし

人ならば、
われをおろかと
おもはずて、
さし向ふべき
人ならじ。

ものも云はずに
ふたりゐて、
なすべきことの
外になき
人とし今は、
われも知る。

×

思ひかけたは
深山の白百合、
折るにとどかぬ
崖の上。

われを誘うて
岩へと靡く、
靡くすがたを
見たばかり。

行けぬ、手折れぬ
深山の白百合、
なぜに山行く
眼についた。

見れば眼の毒、
手折れぬ花の、
山を下れば
忘らりよか。

×

異國の衣を身にまとひ

孔雀の如く装へど、
装はぬ深山櫻(みやまざくら)のつつましさに
心引かるる女よと、
新らしき女と人は指させど
戀する時はつつましう
古き古き日本の女よと、
きみはそのかみ語りしか。

きみはまことや日本の女、
モダアンならで、江戸情調、
ほろりと情(じやう)にほだされる、
黒繻子の襟、銀杏がへし。
意氣な湯上り中形に
白い素足もすつきりと、
ふたりですし屋も開きたい
きみは小意氣な町女房。

×

きみがなさけの手料理に、
口とりまでも氣が利いて、
さすが名古屋の下町娘、
世帶持ちよい色女房。

ひとりずまひの寂しさを
あんなに訴へられてゐて、
それでどうして知らなんだ、
知つてどうしてすッ込んだ。

一廻り下の九紫ですのねと
心ありげに云ふ壁上土、
いまはつつみの切れたわれ、
水は流れて、土浸す。

土は浸せど、とめる金(かね)、
今の辛(つら)さを聞けば聞くほど、
われは憎まれ、きみは折檻(せつかん)、

あるじは會はず、われは退場。

何處へ行つても、もう遲い、
何處へ行つてもぶッ突かる、
ぶッつかつてはけし飛んで
飛んでかへるはもとの巣よ。

花は手折れず、身が折れる、
木には攀ぢれず、地に落ちる、
おそかりし由良の助、
おあひにくさま、おへま樣。

×

酒の醒めぎは、戀の醒めぎは、
氣もちがわるい、重苦しい。
醉つたうちは愉快だ。
しらふならばきつかり、
この醒めぎはが一番わるい。

ふつかゑひは、たまらない、
どうしていいか、わからない、
胸がむかづく、頭が痛い。
莫迦め、二日醉は何でもないぞ、
迎へ酒を一杯やれば、すつとするよ。

迎へ酒、迎へ酒、
戀のふつかゑひにも迎へ酒、
わるゑひなら朝酒よ。
そこで女でへど吐いた奴が
またぞろ女に引掛るのを
莫迦と笑ふのはよすがよい。

×

本を讀むより女を讀むと、
大切な本もたたき賣つて
戀の旅路に出た男。

人は見かけによらぬもの
あんな眞面目なあの人が、
さても情痴になるものか。
なればなりやこそ男になれる。
それが出來なんだばかりにおれは
人に押され、つぶされて
隅の男となり果てし。

いまはやみくも、何のくそ、
これが修業だ、男の修業。
情痴の底まで行つてみる、
行つて駄目なら引返す、
車輪に引つかかつたら、そこで死ぬ。
あんまり本を讀みすぎて
少々莫迦になりかけた。
本はおさらば、もう讀まぬ、
これからはもう生きた本、
女ごころを讀みに行く。

×

女心は不思議なものよ、
妻を打捨ててとち狂ふ
うかれ男は厭やがる筈を、
どんな堅氣の女でも
そんな男に氣を引かれる、
あぶない男と名が立てば
女は惹かれて寄つてくる。

おれが堅氣であつた日には、
下から見上げてうやまうて
かたくなつてゐた人が、
心くるうた男のまへに、
いまは氣やすく膝を寄せ
心の祕密をうちあける、
ぱつとその眼は燃え上る、
堅いと見える人でさへ。

女心は不思議なものよ、
それをきはめてきはめえず、
いつになつても、けつまづく、
それが男のおろかさよ、
思ひもかけぬその人が
最後のしきりを踏み越えて、
燃えぬ女が燃えあがる、
女心は謎だもの。

五月二十二日―二十三日（東京）

第三編

×

あまりに早いそのテンポ、
銀座文化のそのテンポ、
かの風の日に突き切りし
きみが歩みのそのテンポ。

相許しつるあけの日は
はや西ぐににかへるとて、
銀座歩きに競ひてし
ふたりの戀のそのテンポ。

いまの日本のそのテンポ、
みんなあの日の風のあし、
きみがあしにも似通へる、
われも時代の戀をする。

喘ぎ喘いでついて行き
何のためとも知らぬモガ、
モボはマルクス・ボオイ組、
シネマ文化のそのテンポ。

きみの歩みの早いこと、

閃きすぐるスクリインの
そのおもかげの花に似て、
すぐに熱してすぐさめる。
につと笑へば、もう消える。

鑵詰文化の戀をする、
あらん限りの款待に
鑵をあけたら、それつきり、
五年しまつた戀の食卓。

ただやみくもに馳せすぐる
日本の、昭和の、時世相、
さればぞ戀も高速度、
息たえだえのそのテンポ。

マルクス・ボオイの戀をする、
階級鬪爭、共産主義、
その戰術よとごまかして
剩餘價値の戀をする。

×

急行列車の戀をする、
西と東と、かけ持ちに。
會へば別れる、さつばりと、
別れれば呼ぶ、その日文(ひぶみ)。

シネマ・フアンの戀をする、
なつかしの國、夢のひと、
クララ・ボウのおてんばも

×

いつも心にはびこれる
草は刈れども刈りきれず、
雨のあとにはまた芽ぐむ、
あまりその根の深ければ。

ただ、この草を刈りつくす
それをつとめのわが生、
草は刈れども根はのこる、
あまり心の暗ければ。

深く心に根をおろす
その草の名は何ならん、
春も夏も、秋冬も
しげりてやまぬ毒の草。

いのち蝕む草の毒、
心さいなむ毒の花、
戀かや、名かや、怨みかや、
それは花の名、草は死の草。

×

また行かじとは思ひしを、
おもはぬ事につまづきて
痛む思ひのやりどなく、
ただこのままに西さして
走り行かむとさだめしか。

西にて受けし苦しみと
充たされざりし寂しさを
やはらげむとて來しものを、
さらにいやます切なさに
またも元へと向く心。

されども、今はよしなしや、
迷ひの迷ひ、闇の闇、
おもひあきらめ歸りしは、
さすが男の智慧分別、
まだ脈ありと思ひしが。

歸ればいかに、都には、
ゆゑなき文をうたがはれ、

家の波風あらくして
かくては堪へぬその三日、
又もや西に逃げ去りぬ。

西は心の巣にあらず、
胸をそぐとは知るものを、
いや寂しとは知るものを、
これを限りの手を打ちて
長くその根を絶たましと。

手と手に投げつ受けらるる
キヤッチボオルの球のごと、
かくてはいかに果つるべき、
今はオールか、ナッシング、
それを定むと馳せ行きぬ。

×

梶原源太が二度のかけ、
生田の森の梅の花、
それは昔の戰ごと、
いまは戀ゆゑ二度のかけ。

前八年に、後三年、
それは義家、奥州征伐、
われは君ゆゑ、三月、五月、
はじめは十日、あと二日。

矢のやうに行つて、またかへる、
矢のやうに歸つて、またも行く、
君に惹かれて、傷を受け、
家をおそれて、落着かぬ

家はおもちや箱、引つくりかへし、
緣の下までロケエション、
西は西で、やり込め合ひ、
いつ打死の覺悟した。

梶原源太の花いくさ、
いうにやさしい武士（もののふ）の
さすがなさけは知るものか、
花を散らさぬ戀もある。

花は散らさぬ、われが散る、
家はこはさぬ、われが死ぬ、
いつも空しい鐵砲玉、
首を取らずに、またすんだ。

×

五月は三月よりも一層憂鬱だ。
三月は花の夢、
苦しい中にも心は燃えた。
夢かとおもうたその夕、
むなしく人のものぞと見すごせしを
今はおのがものよと抱きしを。

五月は靑葉、蔭ふかぶかと
心に落す影の空しさ。
かなしく、暗く、ほそぼそと、
夢の名殘りも煙となる、
ただ一本の莨（たばこ）の煙。

三月の人はをとめの輕きたはむれ、
そのをさなさは心を焦立（いらだ）たせしが、
思出たのしき須磨明石、
阪神のゆきかへりさへ若かりし。
五月の人はいつも母、
兩方からそのいとし子の手を引いて
芦屋川邊のさまよひに、
父ならぬ父のおもひは
何といふ不思議なものか。
このいぢらしくも可愛い子供、
それがいちばんの强敵だとは。

五月は三月よりも憂鬱だと
よく知つてゐたればこそ、
行くを拒んだ、行くのがいやと
度び度び云つてはやつたものを、
それでどうして行つたのだ。
やつぱり未練か、さればこそ、
きつと來るに違ひないといふ自信、
今日あたりいらつしやるやうな
氣がしてゐましたとのその挨拶、
これがあはれな戀の奴か、
行かねばならぬはめにはなつたものの。

行けば果して、いや苦し、
憂鬱の底のをりとはこんな味か、
それをぐつと飲みほして歸るは空し、
空しき夢のぬけがらよ。
五年むかしがなぜかへらぬぞ、
おれの子供でない子供、
その子に親しまれた小父さんは
昔なまけたばつかりに
おまへのお父さんになれなんだ、
今は戀より父の修業、
母は戀より子育てぞ。

×

三月はひと日の夫なりし、
五月はひと日の父なりき。
三月はただ苦しかりしが
五月は悲しくなさけなし。

いつまでもかくていつまで
われをとらへて離さぬか、
われをなさけなき身となして
男に持たむとおもへるか。

妻にもはなれ、家も捨て、

阪神間の片ほとり、
世を味氣なく佗び住みて、
たまの逢瀬をたのみにて。

何て蟲のいい女だねえ、
それがそなたの愛情か、
そなたの生活を飾るため
われは獨りで住むべきか。

いやいや、もうやめだ、
三月は夢を見に來たが
五月はふつつり切りに來た、
末たのみなきこの戀を。

×

銀座通りに、新宿に、
春のあらしも何のその、
少し外輪にあしはやく
きみがもすそはひるがへる。
人目をぬすむ忍び會ひ、
その火あそびの火がついて、
つい瓢箪から駒が出た。

芦屋川から、梅田まで、
夜の大阪、心齋橋筋、
淀屋橋には紫藤の
波に揺れたる忍び酒。
神戸元町、舶來の手套の指、
やや短かきをかこつほど
長さはきみが指ばかり。

三つの都をゆきかへる
春の出會ひは夢のあと。
いまは川邊の松林、
松のみどりに、隱れ花、
毛蟲も這へる五月となりて、

ランデヴウの名はよきも
三歳（みつ）の子供をつれしひと。
片言（かたこと）ばつかり、よその小父（をぢ）さん
好いてしきりに話しかける
子供を抱いて、手を引いて、
サラリイマンの日曜氣取り、
こんな出會ひがうれしいか、
それでもうれしがると思ふのか。
でも、仕方がないわ。

仕方がないと、いへばすむ、
ごめんなさいねと、いへばすむ。
それでも、こんなにしをらしく
男に詫びたことのないひと、
それがせい一杯のきみがなさけか。
とんだ女におれはかかつた、
とんだ男にわたしもかかつたわ。

×

青葉かげ
あまり深くて、
ひと顏も
青くふるへる
さつき闇、
中にさまよふ
きみの眼（め）は
メヅサに似たり、
ひと目みて
人は死ぬとぞ、
あからめで
われは向へど、
死にもえぬ
この女こそ、
メヅサより
われに恐ろし。

×

きみはマノンか、
カルメンか、
ヘッダか、あらず、
をとめにて
よろこびよみし
「初戀」の
ジナイーダよと
うちわらふ。

若き男と
遊びても、
きずつくことの
なかりしを、
などとらへしと
いふものか、
われぞこよなく
きずつくを。

×

雪には雪を
加ふとぞ、
花には花を
重ぬとぞ。

戀は戀ゆゑ
いろ褪する、
罪を消すべき
罪はなし。

おろかはわれの
性(さが)なれど、
かくばかりとは
知らざりし。

鷺は雪間(ゆきま)に
身をかくす、
われは人ゆゑ
あらはるる。

×

鐵は火ならで
鍛へ得じ、
赤く燃えたる
火ならでは。

男は熱く
燃えあがる
戀にあらずば
鍛はれじ。

堅き岩をも
打ち割るは、
はげしく落つる
鐵の鎚。

男ごころの
角(かど)とるは、
やさしく撫づる
女の手。

×

おもちやのピエロ
棚にかけ、
ピエロと並びて、
鈴を振る。

二人のピエロの
道化顔、
老いのピエロが
なほをかし。

昔は戀を
はかなみて、
世をば遁れて
山に入る。

今は巷に
立ち出でて、
恥をわすれて
をどり出す。

×

ままにならぬが
浮世のつねよ、
ままになるなら
死にはせぬ。

神祇釋教

戀無常、
とかく浮世は
裏表。

浮世は七分
三厘よ、
これがほんとの
智慧だもの。

よしやわざくれ、
身は朝がほの
夢の浮世に
ひとをどり。

×

淺草の觀音樣もさぞやをかしかろ、
添へぬを添うた仲のよに
お禮まゐりはふたり連れ。

戀ぢやござらぬ、男のいのち、
死ぬるいのちを取りとめた、
そのうれしさのお禮まゐり。
願掛けをした歸りに、立つた茶柱、
うれしと見た宇治の里の奥座敷、
今は無事に戻つた亭主とさし向ひ、
ほつと安堵に涙ぐむ、
こんな女房もあるものか。
女心のいぢらしさ、なぜに何とも思はぬぞ。
思はぬのではないけれど、男の業よ、
なればなれ、ならずば死ぬるやけツくそ、
とめてとまらず、ふみ迷ふ。

昔ふたりのなかだちしてくれた
かの老詩人の云へること。
男が三十七から四十すぎ、
心理的にも、生理的にも、
何でもかんでもやつてみたい
發作が起つてとめられぬ、
とめてとまらぬものなれば
あぶないけれど、やつてみる、
それがすぎたら、もう大丈夫、
しやんとした男になりますぞと
その經驗から教へてくれた。
さすが老巧な人の言葉、
掌を指すやうに、男の氣もち、
眞劍なこのやけツくそを云ひ當てた。
やつぱり平凡な男の歩く道か。

外の人ならば、つい何でもない事、
一寸食事をして來たといふだけよ。
それに命を賭けにした、
あんまり向きになる男、
その一向きを純でいいとは
どうせ莫迦さといふ事よ。
女の一人や二人で死ぬもの狂ひ、

まるで二十そこそこの子供だな。
當世男はもつと氣輕で要領がいい、
見よや、かの飛ぶ鳥落す流行作家、
パルナッシャンの詩人でも、
Aは二十人、Bは十八人、
Cは十人、Dは七人、
女房を三四度變へても平氣、
妾を持つたり、待合ぐらし。

それは働きのある人の事なり、
人がどんな事してゐようとも
それが言譯にはなるものか。
世間は世間、それで罪が輕くなりはせぬ、
あやまちはあやまち、恥は恥、
なんで償ふ、なんで申譯する？
死なんと一途に思ひ極めて
心にその手段をばめぐらしたとき、
死で償はむとの覺悟だつたが、

死なずにおめおめ生きのびた
今はどうする、なんとする？
今もをりをり死にたくなる、
抑へがたない自己嫌惡、自己苛責から、
いつそひと思ひにとは思ひつつ、
今はさすがに、身をかへりみて、この莫迦め。

ああ、いつそ莫迦になり切れたなら、
鎗のやうに尖つた心で人を刺し、
おのれも尖る氷のやうに溶け込んで
溶けてしまへばもとの水、
罪も消える、恥も怨みもあともない。
それが出來ずに戻つてくる、
戻らねばならぬ一念、願掛けて
觀音様にまかせたいのち、
この綱曳きの力に曳かれて、
何といふこれは不思議な盃ごと。
裏の鐘樓で鐘が鳴る、

男の迷ひに月も出た、
芝居がかりだなあ。とんだ芝居だ。
世をば芝居と見きはめて、
大根役者で生きようか。

×

檜舞臺にのぼれない
大根役者はのぼれない、
今は是非ないどん帳芝居、
田舍まはりの馬の脚。

馬の脚でも役者は役者、
手ふり、足ふり、眼玉むき、
われも役者と看板かけて、
たまに濡場の三枚目。

お椀の長芋、のつぺらぼう、
いゝあらを塗り込む白粉も
かくしてかくせぬ間拔づら、
瘠脛ばかりが目にぞ立つ。
まして女形は氣乘りせず、
つんとすまして形ばかり、
とんと呼吸が合ひもせず、
情もうつらず、濡れぬ濡れ。

檜舞臺にのぼれない
大根役者の是非もなや、
血糊をべつとり、銀紙の
太刀で芝居の腹切つた。

×

苦しみのためにわれは生れた、
苦しみは厭やだ、われは厭やだ、
身を燃やしても樂しまん、
喜びに死なんと誓ひしものを、

行けばわれゆゑ、戀も苦しよ。

どうにもならぬ、罪に生れて、
われが行きなば、エデンも地獄、
燃え盡きて、灰と冷えなば、
苦しみも燃えて盡くるか、
いな、消ゆるは火のみ、殘るは苦よ。

×

女をもてあそぶわざを知らねば
いのちをかけて戀を仕事に、
去れば去らしめ、招けば行いて、
わが拂ふべきものは拂へれど
きみはいのちを與へねば、
家を捨てても棲まざれば、
今は是非なし、きみよりさきに
わが好ける人に求めて
共棲まむとは思へりし、

それはぬしある人の花、
いつでも出るとは云ひながら
やはり義理人情にからまれて、
空(あだ)としなれば、今はいかに、
行くに行かれず、戻られず、
暫し佇む四つ辻に、心のたそがれ、
さつと理性の風が吹く、
待てる女のあるものを
なぜに忘れてかへらぬぞ。

×

おれはたしかに欺かれた、
人生に欺かれたと思ふ。
だつて、おれが眞劍に働いてゐたとき、
おれはただ人の憎みと蔑みと、
雨のやうな罵詈とを買つたばかりだ。
おれの生命(いのち)がけの最初の仕事に

最初の石を投げつけたのは、
友と名のつて、ころころ笑つて、
毎日おれを訪れ來てゐた
おれの一番愛してゐた男ではないか。

昔、おれが戀をしたときに
不道德として絶交を宣した人が、
のちには自ら蓄妾をして
おれの無能を嘲つたとき、
おれはたしかに欺かれたと思つた。

だが今、おれは確かにおれが惡かつた、
人の罪ではない、おれの罪だと知る。
おれの愛は足りなんだ、
おれの智慧は一層足りなんだ、
打たれても、罵られても止むをえぬ。

それが厭やなら死んでしまへ。
おれを賣つたものは世間である。
おれを罵つたものは全能である。
それに敵しなければ死んでしまへ、
死ねなきや、何でも出直して來い。

顏を洗つて出直せ、出直せば、
絶望から死身（しにみ）で出發だ。
虛無から影の出陣だ。
人の言葉が何の價値。
負けな、負けな、強くなれ。

×

おれは影だ。
影だから何でもする、
影だから何でも言ふ。
人を斬る、
人に斬られる、
人を刺す、

人に刺される。
かまふものか。
死んだものは、もう死なぬ。
影が勝だ。負けても勝だ。

おれは影だ。
影だから、今は圖太い、
影だよと、おれは居直る。
影を斬れ、
何の手ごたへ？
影を刺せ、
何の生血ぞ？
勝手にしろよ。
おれは不死身よ、やつて來い、
やツつけてみろ、笑つてやる。
おれは影ぢやない、
生きた人間樣だ。

血も出るよ、涙も出る。
だが、もうへこたれぬ、
おれはおれ樣、唯一の自我よ、
このおれ樣を何とする？
臆病で、弱蟲で、はにかみやで、
あのみじめなおれはどうしたえ？
何處かへけし飛んでしまつたよ、
今はおれ樣、何とでもしろ。

×

生きなば生きよ、だが、何のため、
あの大騷ぎは、ぜんたい、何のため。
家のうちは蜂の巢をつついた騷ぎ、
本も賣飛ばし、仕事も棄てて、
西へ走り、小走り、また走つて、
命は無いものと覺悟しながら、
またぞろ逆戻りで、氣がきかない、
元の杢阿彌で、それでいいのか。

苦しみは二倍になつた、
幻滅は二重になつた、
それでもやつぱり生きるには
どんな理由付けがあるんだ？
なんにもないよ、外にはない、
おれは死ぬ機會に會はなんだのだ、」
そこでもう今は、生きたいんだ。

死ねないのなら、それもいいが、
家を亂し、世を濁し、
人を苦しめ、己れを苦しめて、
今はその罪をなんとする？
仕方がない、おれのせゐぢやない。
勿論、おれのせゐではあるが、
何かがおれを誘ひ出し
何かがおれを愚弄して、
死の突端で、ふり棄てたのだ。
さうでなければ、死んだおれだ、

ひとりで死なうと思つたのだ。
女がほんとにヷンプならば、
それでも逃げて歸らぬほどに
おれがほんとにえらいなら、
花よりさきに散つた筈だ。

死ねない、死ねない、まだ死ねない、
おれはまだ役目がすまないのだ。
きつと、まだ途方もない、
莫迦な、奇抜な役目があるんだよ。
どうなる事やら知らないが、
とにかく、おれはそれをやる、
どんなつまらぬ役目でも引受ける。
文學と哲學とに失敗した男、
死と戀に失敗した男、
それでまだやる仕事は何か？
サンドキッチマンか、活辯か、
口さきばかりのマルキシストか、

太鼓たたきか、提灯持ちか、
知らない、知らぬがやつてみる、
とにかく、莫迦はいくらでも盡す。

おれは賢者でない、學者でもない、
教師でもなければ、哲人でもない、
思想家でもなければ、宗教家でもない、
英雄でもなければ、聖者でもない、
ただもうやくざなのらくらもの、
ただのルンペン・インテリゲンチヤ、
社會の屑、害蟲、穀つぶし、
それがわるけりやつぶしてしまへ。
有難い事には、デモクラシイの時代、
最後の一人の生存權とやらを
おれにも主張する權利があるらしい。
だが、いかに理想的な國家だとても、
働かざるものは食ふべからずだ。
さあそこで、おれは何でも働くつもり、
このやくざな奴に出來る仕事をよこせ。

×

婦人運動の大たてもの、
山が崩れてもびくともしない
えらい女の良人（をつと）となつて、
仕事もせずに十年くらした
心弱い友の語つたあの夢よ。
頭の中が大地震、
高い建物がぐらぐら倒れ
めちやくちやに崩れ合つた、
さても恐ろしい夢をみたものだ。
あの大震災よりもつと恐ろしい
頭の中の大地震、
それが今おれに起つたのだ。
おれの頭がめちやくちやになつて
十年、十五年かけて築いた
その建築もゆらゆらと搖れて崩れる。

おれの地盤がやはらかすぎたか、
または震動が激しすぎたか、
崩れる、崩れる、木ッ葉微塵、
理想も、信念も、思想的立場も、
今はめちやめちや、落花狼藉。
これをどうして建て直す。
これをどうして盛り返す。
それが出來るか、この氣力で、
この健康で、この落膽で。
何をしても駄目だ、
やるだけ無駄だ、
その絶望が犇々迫る、
その自棄心が胸を嚙む。
莫迦め何たるめめしさぞ。
弱蟲。何たる弱音(よわね)を吐(は)くぞ。
頭の中の大地震、
やわなやくざな市街はぶつ潰す、
へまなボロ建築をぶッ倒す、

丁度いい工合ぢやないか、
願つてもない大掃除だ。
間に合せもの、ごまかしもの、
きれいさつぱり片付けて
これからが本當の大仕事、
本建築に取りかかる、
それが男の腕だめし。
やつてみろ、やつてみろ、
絶望は丁度門出(かどで)よ、東海道は
五十三次日本橋、
京の三條でお茶飲まう。
絶望したならしめたもの、
自棄になつたら話せるぞ。
その捨鉢の糞力、
それではじめて天下無敵、
こはいものなし、
やッつけろ。
人がしなけりや

おれがやる。
何だ、突いてくる、
突きかへす。
くたばるまでは
くたばらぬ。
さあ來い、
畜生(ちくしやう)ツ！

五月二十四日―二十五日（東京）

第三巻

わが苦悶録

――いかに時代苦に生くべき乎――

第一編

×

富士の裾なる人にとはが記せし言葉、
今も鳴る、わが空しき胸に。
あの折り申した事どもは、
行きがかりからの言葉として
みんな水に流して下さい、
ただ、これからは一人の友として
あなたの生活に變化のある際には
しんみの御相談にあづかりますが、
今はあなたにすがる思ひも斷ち、
西の國なる人とも斷ち、
前半生をきれいさつぱり葬つて、
戀や愛や、苦しい事は、
みんな忘れてしまつて、
やつぱりしづかな生活にかへるつもり、
寂しくやり場のない氣持ながら
それは自分の弱さです、
僕も強い男にならうと思ふのです。

蘆屋の宿にしたためしその文、
出さでなぜに破りしぞ。
今はそれさへあだと見た、餘計な事よ、
おのが心に誓へばよし、
かく云ひやるだけなほ弱い、
なほ未練がある、心の惹かれる證據、
我が見てすらも、愚かなり、ただ默つて、
默つて、追つかけてくる文にも答へず、
五月かぎりに死んだ人、
戀の狂ひに死ぬときはめた
まさしく戀に死んだ人、
文に答へず、文をも破り
今は空しいもぬけのからよ、

今は心にもうなんにもない――
かくてすべては失はれたり、
失はれて、のこるものなし、
殘るはただ、苦みよ、痛みよ、悔いよ。

われを戀へと驅り立てし苦よ、
世に傷つきし幻滅と敗北の苦よ、
その苦悶は消されず、殘れるものを。
昔ながらのその痛み、
この年出水と溢れ出し苦よ、
すべて空しくなり果てて
いやましの力もてわれをせめぐを。
その苦しみの何なればかくも強き、
時代の苦、時代の激しき波濤の中に
もまれもまるる捨小舟、
いかに破れて流るるを。
世をば捨て、世をば離れず、
なほすがりつつ生きるものの苦

風は何處に身を追ふぞ、
波は何時、くつがへす。
いまは死さへもわれを捨てしか、
苦は捨てざるに、捨つるとか、
二倍の力もてわれに迫るを。

×

「やつたナ！」とわれは叫んだ、
去年の七月、芥川が死んだとき、
人には云はね、心の奥に
深くも食ひ入るものがあつた。
あの騷ぎの中で、何たる寂しさ、
さすがに彼だと見上げた心、
ひとあし先きにやられてしまつた、
當分おれは死ねなくなつた、
死を制しられたといふ思ひ。
彼もいかにか惱み通せし、
二年越しの計畫の周到さ、

芝居、技巧も咎めざれ。
冗談で人が死ねようか、
ただの技巧で死ねようか。

間口の狹い店をひらいて、
上等の菓子店出して
前垂かけてすわつて、
ただ一品だけを賣つてゐたかつたと、
おなじ江戸ッ子の親しみもて、
わが友に彼は語りしとぞ。
彼はあまりに眞中に出て、
あまりに間口をとりすぎて、
あまりに高く買はれすぎて、
その苦しみに倒されし。
われは彼ほどの才もなく、
あまりに軒の狹きが中に
隅の隅にと押しやられ、
日の眼も見ぬに萎れしか。

隅の人よと、なほ隅に逃げ込んで、
ひとりの世にぞ閉ぢ籠めし
その隱れ住む寂しさよりも、
そのひとり行ひすますを生意氣ものめと
麻雀遊ぶプチ・ブル文士に罵られ、
その獨善を、個人主義を、
健氣なプロレの人にやられて、
はさみ打たるる苦しさよりも、
この道行くも甲斐なしと、
自らあざむく迷路かと惑ひそめては、
出でむ、出でむ、世の中に出て
人に立交りて働かむと
思ふ心も、今は是非なし、
封じられたるは虚榮心のみ、
眞似とし見るも潔く死なんと思ふ心と、
しばし心に闘ひしが。

自ら恃むところなければ
死ぬぞこよなき生と見し、
死なずばわれは生くるを得じ、
生はおのれをいやしめて
世につまらなき者とする。
前科者の如くにも虐げられて
日蔭の男と生きむより、
世にも抗らひ、人も棄て、
罪をもをかし、火の如く
戀に死なむと燃え立ちし。
死ぬほど愛の强ければ、
女の愛の强ければ、
岩に碎けて散る波と
さか巻き打たむとねがひしか。

過去は空しき灰なれや、
わが十年は何のため
何を努めて生きて來し、
わがせし業(わざ)の空しさよ。
物みなわれを滅ぼさんとて
隅に押しやり斥けなば、
逆手(ぎやくて)を打つて、今はわれから
刹那にこむる永遠のいのち
飛行機乘りの宙がへり、
綱の上の輕業師、
悲壯なるはただ
轉落の刹那のみ、
一瞬、すでに紛微塵だ。
その一瞬に一切を掛けむと。

×

戀にあらずも死なんと思ひし、
死ぬる覺悟で踏み越えし、
命を賭けて飛び出せし。
人にありせば一日(ひとひ)のたはむれ、
世を厭ふ心久しきわれなれば、

戀はまさしく死への誘ひ。
死を覺悟せで、なにゆゑに
みちにはづれし戀をせむ。

死は熟せりとおもひしを
戀は生へと誘ひし。
塵の世ぢやもの、やみもせぬ
それはおさん茂右衞門。
世をたはむれの人の戀、
生へ誘ひ、また突き放し、
生と死と、死と生とに
迷ひ迷ひてやみばなし。

若しも女の出で來なば、
西の都に侘びすみて
をかせる罪のあとひきて
生くるもよしや、世と鬪ひ、
日蔭の戀をはぐくみて
強く生きむと定めしは、
さすが健氣の心なりしが、
女は弱し、救ひも空し。

かれは退き、これは止められ、
ただわれひとり、手をば空しく、
空しき心、燃え盡きて、
今ぞわれ死す、死にはてぬ。
ひとり罪をば贖ふと
心に染まぬ業もして、
生くる心を咎むるか、
あはれとみるか、卑しむか、
死にはてし灰の心に
殘んの生を生きむとするを。

×

食堂車の十二時まへ、
去るに去りえぬ最後の客、

ビイルに醉ひもめぐり來ず、
窓の外をばながむれば
暗きに水の音高かりし。

東海道はたよりあし、
されど死にたる人もあり。
トランクのみの殘りなば
手紙にのこるわが名前
黑き活字にふるふべき。

もし北陸の線ならば
かの親不知の岩の上、
わがなきがらは碎けてん。
ビイルの苦き舌ざはり、
醉ひをなさずに立去りき。

一挺の剃刀あらば
頸動脈を斷ちてんと、

男らしき死とぞ見たりし
川上眉山を思ひ出でしが、
なほ殘るものあり、惹くものあり。

思ひ極て眠りしが、
さむる眠りぞ是非もなし。
東京驛に下ろされし人の惱みよ、
たはむれ事とは思はざれ、
などたはむれに死をば思はむ。

×

都いでたつその午後に、
庭のおもてを往きかへり、
生きて歸るか歸らぬか、
またうち見べき木かぞとて
撫でしはまろきどうだんの
芽はなほほのに紅かりし。

死なばや死なむ、生きてなほ
二十年(はたとせ)なにをなすべきか、
なすも甲斐なき世ならばと
死ぬるいのちを投ぐるとて、
生れ出づべき芽を撫でて
わが眼はいかにうるほひし。

いまは青くも繁りけり、
夏のすがたは庭をこめ
緣さきに敷く花莚(はなござ)に
すだれを垂れて打水の
涼しき風にゐむかへば、
白日(まひる)の夢に醒めしごと。

蘆屋川邊のゆきかへり、
賤機山も夢なれや、
戀には破れ、身はやぶれ、
心も裂けて、ながらふる
わがさだめこそあやしけれ、
死なれぬものか人の身は。

×

心中者の片はしの
生恥さらす日本橋、
非人の中におとされて
生くる心はいかならん。

なほ生くるもの、生くるとて
そしりいやしむ人あらば
人のなさけを知らぬ人、
死骸をさへもむちうつか。

戀を果てまで行けば死ぬ、
戀が死ぬるか、身が死ぬか、
身が死んで戀を生かしたる
心中者はうれしきを。

一人殺して身が生きる
戀のもぬけのあさましや、
あさましけれど、弱けれど、
死ねぬいのちのなほあはれ。

×

世渡る術を知らざれば
敗れてわれは死を思ふ。
なす事する事みんな駄目、
死ぬが唯一の處世法。

正直まともに、閉まつた門の
あくのを待つてゐるひまに、
後から來たもの、もうゐない。
中では笑ひの聲がする。
みんな裏口から入つたのだ。

ぢだんだふんでも追つつかぬ。
みんな利巧に立廻る。
利巧でなければ生きられぬ。
それが此の世の不文律。

おれは駄目だ、おれは厭やだ。
その駄目なところがねうちだと
買つて下さる人もある。
おれが困れば困るほど、
おれのねうちが上るのか。

×

家を捨てむと思ひし男、
家どころかは、名も、業も、
命棄てむと思ひし男、
なんの未練があるものか。
ままにならねば、死ぬのが本望、
棄てる命は一つぢやないか、

死ぬるつもりで戀をした。
痴も至り盡せば莊嚴だ、
だが至らぬ、至らぬ、至らで止んだ、
半痴、半端で、逆戻り。

研究用にと、歐羅巴から、
長年かかつて集め、取寄せた、
糞や死骸のいろした書物
ぎつしりつめた書棚を後に、
古い机にまたむかふ男。
ぼやけた面よ、くすぶつた學究面、
なんの變哲もない奴ながら
今はむかしのおれぢやない、
名譽もいらねば、命もいらぬ、
捨身でピンと立つ男。

おれをつぶさうとした奴は誰れだ、
おれを打挫かうとした奴は誰れだ。

つぶさばつぶせ、挫かば挫け、
打つてかからば打ちかへす、
なんでおめおめ打たれるぞ。
おとなしくしてをりやぶッつぶす、
ひかへてをれば、はねのける、
勝手にしろよ、好きなやうにしやアがれ、
かまふものか、こつちもやつてやる。
裸一貫、命はいつでも棒にふる。

×

天下の痴漢、われひとり、
痴漢は駿馬に落されて
痴漢にさへもなり損ね、
哲學者になり損ね、
文學者になり損ぬ、
アナキストになり損ね、
死人にさへもなり損ね、
損ね損ねて、何になる。

ただこれだけは安心なものだ、
死人には、きつとなれる。

×

十四五年のそのむかし、
何の見どころありとてか
われを救ひてはぐくみし
堺枯川の恩を棄て、
などその許を去りつるか。

若き心の熱をもて
わが求めしは愛なりき、
人間愛の信なりき、
よしなき空想的社會主義、
それぞ若さの夢なりし。

木下尙江の「飢渇」もて
また「良人の自白」もて
養はれたる初一念、
基督教的社會主義
宗教の夢に惹かれしも
故なきことにはあらざりき。

科學的と聞けばうれしきも、
唯物史觀の味無きを
花も飾りもなきを憂く、
忌みしはいかにやはらかく
弱き心にありつるか。

唯物主義に徹すべく
あまりに夢を食ふ男、
沙漠の如きむき出しの
かの理論こそ、味氣なく、
あまり冷たく難かりし。

マルキシズムの世となりて、

時勢は古き闘士なる
堺枯川をも乘り越しぬ。
彼にそむきし身の、今は
この搖れ動く舟にして
岸邊も見えず、惑ふのみ。

×

人の心はけはしくなりぬ、
十年のむかしおもへば
震災のまへをおもへば、
いかに、いかに變れる世のさまぞ。

生活困難、貧富の懸隔、
不景氣は人の喉締むる、
けはしくなるも無理ならじ。
人は獸となり果てぬ。

道義はまたたく地に墮ちて
人は利得を問ふばかり。
問はねばいかで生きられむ、
ただ爭ひぞ至上の善。

獅子と狐と、猿と蛇、
力まかせに引裂くか、
だまして奪るか、打合ふか、
豺狼吼ゆる荒野の闇。

クラポトキンの相互扶助、
かくれし眞をばあらはせど
彼はあまりに朗けし。
人をば彼は神と見る。

今、アナキズムの力なく、
マルキシズムの榮ゆるも
などそのいはれ無からむや。
人の惡より根ざせるを。

悪こそ人の性なれと
刑法をもて、權謀もて
はかる韓非子、マキアヹリ、——
レニン、ムソリイニもその人乎。

×

みんな英雄、
おれだけ愚圖よ。
莫迦を云ふなよ、
おれだけなどと。
そのおれだけが
わるいのに。

いくら愚圖でも
おれだけならば、
やつぱりえらいや
大凡下。

人に差別の
ないものを。

愚圖とおもはで、
われだと思へ。
われはわれだよ、
えらくもないが、
まんざら莫迦でも
ない男。

一人前の
平凡人と
思ひ知つたら、
文句はないサ。
おれの値打は
おれが知る。

×

請負師の見積り書、
ちやんと書いて出せ、
入札で落ちるやうに
あんまり高くせず、
また、損せぬやうに。

高すぎもせず、安すぎもせず、
これが正札、懸値なし、
ぎりぎりけつちやくのところだ、
まけろと云つてもまけられぬ、
おれはいかさま商人ぢやないぜ。

おれの値打はこれだけよ、
それがわるけりや勝手にしやアがれ、
ちやんと自分の値を知つて、
その正札で世間を相手に取引する、
それが出來れば、しやんとした男だ。

×

女とふたりで家持たば
身の破滅ぞと知りたりき。
ただ、たはむるる事ばかり、
つとむる事を知らざれば。
いかで支へむ、世に立ちて、
事繁き人の、憂き暮し。

女もわれと共棲まば
苦しさ增すと知りたりき。
いくとせ長き日かずへて
知るはくるしき人の性。
その人並はづれた我儘が
とてもわたしに堪へられよか。

サラリイマンは無神經よ、
それにわたしがどんなに我儘しても
懇望されたのにと云へばすむ。
あなたは隠れて出會ふひと、

良人の資格はない人よ。
女のはらは、それだもの。

それで初手からたはむれ事、
なぜ眞劍になりすぎた、
何でも眞劍になる男。
女はおどろく、御免なさいね。
われもおどろく、この女、
妻にとねがひしたまゆらを。

いつもふたりで家持たば
苦しく、つらしと知りながら、
そのたまゆらを何とせし。
戀の迷ひか、男の愚痴か、
行けば行くだけ、苦しき戀、
それに果てまで行く心。
共棲みがたき女ゆゑ、
破るるならば、それもよし、
わが身破らば、罪深き
身の償ひともなるものを、
世にも背きて、苦しみの
限りを乾さば、足ると思ひし。

愚かさよ、それをまことと、
それを愛ぞと思ひしか。
女の上は、さらに思はで、
妻の事など、つゆぞ思はで。
二重のエゴよ、その心すべなし、
あやしや、これも見猿、聞か猿。

×

戀は誰れでもする事よ、
すれどよしなきないしよ事。
人に云つてもはじまらぬ、
そつとひとりで始末して

ひとり心に祕むる事。
戀はひとりですます事、
食べた御馳走の味はどうでも
おなかをこはして辛(つら)くとも、
云へば人には笑はれる、
莫迦な奴サと、かたづけられて。

それを隱さず、みんないふ、
自分のした事、あけすけに、
恥もわすれてぶちまける。
どうしてそんな莫迦してよいか、
せねばならぬが役目ゆゑ。

さては詩人とは妙なもの、
妙な商賣もあつたもの、
ないしよ事がないしよでない。
詩はないしよ事とはよく云うた、
なぜにないしよ事世に出すぞ。

世間を相手のないしよ事。
官吏、政治家、實業家、
軍人、敎師、みな公人、
公け事さへ云へばよい。
詩人は私人、ないしよびと。

ないしよの戀を隱さず云へば、
そこに出てくる人間性の
弱さ、愚かさ、あはれさを
なぜに讀者は讀むものか。
人の事とは思はずに
そこに自分の戀を讀む。

×

人に知られずたはむるる
人ぞまことのドン・ファンよ。

女をこつそり手に入れて、
よい潮どきにツイと切り、
何食はぬ顔、「いかがです、
何か面白い事はありませんか。」

女たらしの名を立つて
世に忌まるるは至らぬ人よ、
まことの色魔は知れずとぞ、
幾度、便所にかよふとも
云ふ値(あたひ)なき必然事(ネセシテイ)。

女もわれもきずつかぬ
それには別れ際(ぎは)が大切(だいじ)とぞ。
一年あまりも引きずられて
つい新聞にたたかれた男、
人はへまよと笑ひ捨つ。

ねがうてもなき別れ際、

女はわれに與へしを、
なほその先きを見まく欲(ほ)り
呼ぶに惹かれて行く男、
その愚かさぞ神に似る。

かつて人には許さぬ女、
われにすべてを許せしを、
そのまま忘れてしまひなば
女の誇りは何處に立つ。
それは弱さか、言ひ譯(わけ)か。

云はずば人の知らぬ事、
口を拭つて「よい天氣」
それですむ事、何なれば
天下に愚をばさらけ出す。
その阿呆こそ、詩人なれ。

×

おもちやのピエロが集まつた、
銀座から、日本橋から、神田から、
いかがでござると罷り出た。
さてもいろんなピエロがあるな、
道化者、クラウン、太郎冠者、
みんなおれには親しい奴よ。
泣けば笑ひ出す、ふさげば茶化す、
愉快なおれの仲間だもの、
これで一座を組織して
一つ劇壇に打つて出ようか。

不眞面目といつも人をばいやしんだが、
いやしんだおれが若僧、お坊ちやん。
不眞面目が眞面目を癒やす藥とは
今度はじめてはつきり分つた。
その不眞面目こそは、眞面目より
さらに悲しく寂しいといふ事も。
だがな、いつも一向きに、生命がけで、
眞劍勝負で、鎧冑で、大上段で、
それはあんまり切ない、苦し。
ちつとピエロになりなされ。

×

道化役者もなほ生くべきか。
その存在理由を有つべきか。
道化芝居のあるかぎり、
笑ひがこの世にあるかぎり、
彼も大切な立役者。

笑はねば人は生きられぬ、
うんと泣いたもの、うんと笑へ。
さしも心をしめつけた
その悲しみも、苦しみも
笑へばみんな溶けてしまふ。

涙を癒やすは笑ひだけ、

映畫を地で行くチャップリン、
曾我廼家五九郎、河の中、
ユウモリストになりたいな、
人を笑はせて生きたいな。

×

獅子がピエロになりました、
さても不思議な事もある。
末世末法、世はさかさまよ、
なんの不思議があるものか。
獅子は獅子でも、越後獅子、
越後の國の角兵衞獅子よ、
獅子をかぶつて、ひつくりかへつて
ちよいときまれば、ピエロ候。

金澤の名人八十吉つくる唐獅子の
きつかりふんだ四つ足のたしかさ、
その獅子鼻もがつしりとして、
きつと睨んだその眼の力。
これがわれわれぢやと、荒野を走る
われも一度は獅子でそろ。
獅子と見えたはその目の迷ひ、
實はピエロでございます。

鈴つき頭巾、赤頭巾、
麻の葉つなぎのメリンスの
チャンチャンコ、襟も、袖口も
眞紅な紐が前へだらり。
頰に頰紅、ぺつたりまろく、
鼻のあたまにおしろいつけて
一人前のピエロが出來ました。
さあさ、踊つたり、踊つたり。

牡丹にたはぶれ、獅子の曲、
それは長唄、おれはへた、
おれの十八番は何だつた、

ハイネ、ラフォルグ、毛唐流、
泣きの涙のげらげら笑ひ、
パントマイムでやりましよか。
月になげくはソロでそろ、
コロンビイヌは肘鐵砲。

獅子のたてがみあアをいな、
ピエロの頬つぺた眞赤いな。
雄獅子雌獅子は息さへ荒く、
あなたへひらり、こなたへひらり。
ピエロはひよつくり、ひよつくりこ、
コロンビイヌはあかんべい。
それでもピエロは面白相、
涙を出して笑ひます。
泣いたときよりもつと出る
涙はピエロの血だものを。

×

伊太利の詩人
ギニョオルが、
思ひついたる
道化人形。
その黒ん坊の
赤いおべべに
手を入れて、
首ををどらせ
手を振らす。
すぼけ頭の
黒ん坊踊り、
夏の日長を
遊んで暮す。
それで苦しみ
忘らりよか、
忘れねばこそ
あそぶのよ。
道化はごまかし、

しよう事なしの
ヒポコンドリヤの
對症療法。
ギニヨオルさんも
詩人と聞けば、
さだめし浮世の
辛さ切なさに、
思ひ付いたぢや
あるまいか。
鼻のピエロや
黒ん坊や、
踊れば吹き出す、
浮世のことは
こんなものだと
踊らせて。

六月一日―七日（東京）

第二編

×

思ひ極めば、行き盡せば、
行詰りは來る、思想にも、生活にも。
浮世を七分三厘とあきらめ得で、
眞を究め、その底を極めんとして、
生を思ひ、死を思ひ、
時代を思ひ、我を思へば、
すべては解き難き謎となり、
黒雲となり、夜となり、
行手は眞闇、過去は空しく、
努め努めた十年も
迷ひの中の迷ひのみ。
わが憑みしものはみな幻影、
みな自己欺瞞、氣やすめのみ。
シヤボン玉、ぱつと破れて
消えて口惜しき藝術の夢、
宗教も、愛も、精神主義も、

ただ砂上の樓閣のみ。
今はどうして生きていいか、
何を信じて生きていいか、
據りどころもなくなつた。
富にブラリ、引つかかる
一本の綱のいのちよ。
たのみの綱がブッツリ切れて、
落つれば地獄、死の淵よ。

有島武郎はなぜ死んだ、
野村隈畔はなぜ死んだ、
芥川はなぜ死んだ。
苦しくて死んだ、堪へ難くて死んだ、
時代の惱みにおつ潰されたのだ。
ブルジョア知識階級の苦悶の破綻だ、
哲學の破綻だ、藝術至上の破綻だ。
弱しと憫れめば憫れめ、
幼稚と笑はば笑へ、
利巧な打算と云へば云へ。
死人に口なし、後生樂、
死ねば、默つて云はせて置ける。
弱きは人よ、稚きは概念の使徒、
また、いくらか芝居や掛引はあつても
死ぬのはただの洒落では出來ぬ。
死はもこよなき詩だものを。
詩人ばかりはなぜ死なぬ、
詩人ばかりが太平樂か。
げに、われも死なずにながらへた、
よし死なずとも、
太平樂だと思ふなよ。
死にもまさる惱みもて、
われこの道に立ち迷ふ。
いかに、いかに生くべきかと。

死より心を生に向けて、
人生の大道へ出づれば、

何處へ行くべきか、
いかに歩くべきか、
左か、右か、
漸進か、急進か。
げに、恐るべき時だ、
非常の時だ。
この時代の疾患と
この苦悶の中に、
いかに生きむか、
いかに死なむか。
知らず、知り得ず、
決し得ず。
かくも空しく
かくも亂れて、
わが生の
死と相似たること
曾てなかりし。
支離滅裂、
收拾出來ぬ、
時代の動搖、
身の苦悶。

進むか、退くか、
左か、右か、
ただ中に
動かで立たば
保ち得べきか、
今日の難。
中正ぞ眞よ、
眞は中庸と、
不動の力、
泰然として
この時世に處する
信念の人、
善いかな、
されど我に非ず、

七度び生れ變るとも
我が成り得ぬ人よ。
我はあまりに傾くもの、
傾けばとどめ難し、
たちまち左、また右に、
極端より極端に、
白、赤、黒と入亂れ
い、
こまの如くぞ廻轉す、
キリキリ廻りて
とどまらず。

極端人と生を享けて、
世の正道にかなひ得ず、
額に反逆の極印受けて
貧と寒苦に育ちつつ、
權謀に立つ集團の
その强制にも反抗し、
今は身を容るところなし。

二重の罪に落ちしもの、
時代はこれを責め苛(さいな)む。
しかもおのれに信なくて
おのが迷ひを悲しめば、
世にもあはれの謀叛人、
起つか、斃るか、前後(まへうしろ)、
右も左も、とどまらず、
ただ、奈落へと
小石の如くぞ
轉落す。

無慙なる
石塊(いしころ)一つ、
その一つ、
何の意義ぞや、
意義ありや、
なし、
なし、
なし……

×

われらが日なるメーデーの
行列の中に加はつて、
青白い瘠せつぽち、ひよろひよろと
にやけきつたるインテリゲンチヤ、
勞働者の筋肉隆々として
色黑々とがつしりした中に挾まれ、
かぼそい聲で、懸命に
勞働歌の聲を合せて行く
その志しは、涙が出る、
何等可憐の光景ぞ。

それが左傾か、實際運動か、
なすはなさぬにまされども、
鐵の意志と、情熱とはそれならじ。
ただ名のみなる左傾はなにぞ、
人氣取りなら、よしなされ。

日和見、きよろきよろ見廻すは
醜し、醜し。されど、空言もて
得々たるはさらに愚かし。
死をも恐れぬ信念をかためずば
口にするさへ恥づべきを。

われは悲しや、やむなしや、
その信念をかため得ず。
時代はわれを踏み越すか、
越さば越せ、越させじと
何を努めて甲斐ありや。
おのれを枉げて、世に從ふ
それが男子の生なるか。
おのれが無くて、やすやすと
よく世とともに推し移る
その賢さが寂しくないか。

個人主義にまさる罪なしと

なべて世に定めらるるとき、
今もなほかつ、十年の昔ながらに、
個人主義の孤壘に立籠り、
インディヴィジュアル・アナキズム、
そこにその脚を立てむとす。
プチ・ブルジョアと罵らるるも、
わが生活の根柢を變へずして
頭だけ入れ替へて、それでいいのか。
プチ・ブル生活やりながら
プロレタリアは、しやらくさい。

かへるは我よ、わが一身、
わが生活よ、實踐よ。
それを棄て置いて、百の言說、
千の論議も空證文ぞ。
どんな暮しぶりしてゐるか、
それが大切だ、萬事はそれからよ。
我が生活の上にあらはるる
思想の力、その實踐、それぞ信念、
それがなければ、口先きだけよ。
最後は人よ、ただ人格のみ。

されど、人をば咎めるな、
どうして自分にそれが出來る。
彼もまんざら嘘ではなし、
時世時節よ、時節の風の吹き廻し、
左へ、左へ吹くからは
旗は左へ吹き靡く。
嘘から出ても眞はまこと、
方便も時に信念となる。
おのれを枉げずと誇るとも
わがこの惱みは、そも何ぞ。

政治はわれの天分でなし、
されど時代は政治に向ふ。
レヴォルトはわが詩なりしを、

詩は此上もない脆い武器。
文學といふ空鐵砲で
何を撃たうといきまくのだ。
時代の波にさらはれて
おのが足場を奪はれながら、
あがくをなどか賢しと嗤ふ。
おなじ病をあはれめよ。

×

わが白き手を
なんとせん、
やはらかき手と
女の賞めし
その手ぞわれの
罪なるを。

世のくるしみの
泥にもひたし、
辛き業にも
いそしむを、
などかく白く
やはらかき。

强き手、かたき
手のこぶし、
まつくろぐろの
毛むじやらぞ、
パンをつかむを
ゆるさるる。

白き手は引け、
女のやうな
手に呪ひあれ、
その手もて
なすはよからぬ
業のみぞ。

ペンより重き
もの持たぬ
手にぞ恥あれ、
その業もて
換へ取るパンは
堅くあれ。

×

人間ぎらひは
なんとする。
それは我儘、
勝手もの。

懷疑主義は
なんとする。
それは勇なし、
まことなし。

厭世主義は
なんとする。
そんならなぜに
生きるのか。

わが苦しみは、
みな罪か。
われは死ぬべき
人なるか。

死ぬぞ上なき
エゴイズム。
責任のがれの
卑怯者。

さらば機械と
生くべきか。

廻る限りを
廻されて。

機械よ、蟻よ、
はたらいて、
なんにも思はず、
生きるのだ。

×

世はもあれかし、
われの滅ぶも。
われ一人なる
世ならねば。

世にぞ生きるは
世に盡すため。
世をかへりみで
われありや。

されどわが身を
忘れ得べきか。
身すぎ世すぎは
誰がためぞ。

世はわがために
ありと云はねど、
われを滅ぼして
世はありや。

厭はしや、われと、
いつも、われとは。
われはつらなる
輪の一つ。

輪は重りめぐる、
世と、われとの

離しがたきを
われ迷ふ。

×

抒情詩人は
エゴイスト、
いつもわれ、われ、
ればかり。

わが喜びや、
悲しみや、
わが戀、わが貧、
われはかり。

わが私事（わたくしごと）を
無理强ひる、
抒情詩人は
ぶち殺せ。

本で覺えた
概念で
主義を歌へば、
許してやれ。

×

言葉だ、言葉だ、みんな言葉だ。
言葉だけでも、いいものか、
よくもわるくも、言葉の時代だ。
デモクラシイは代言政治、
三百代言、うそ八百、
なんでも宣傳、廣め屋時代。
人は個性が、何より罪だ。
たつた一つの合言葉で
人間全體が動く時だ。
スロオガンの時代が來た、
身體全體がスロオガンなのだ、

その存在全部がスロオガンなのだ。

流行だ、みな流行の世の中だ。
流行おくれは死の宣告、
息せき切つて追隨せねば
影を消されて、消える泡。
大百貨店ばかりが大繁昌、
味噌糞ごつたの圓本時代。
モガの斷髪、手に「資本論」、
ラッパズボンでジャズバンド。
人の振りみてわが振り直せ、
人がなければ、われもない。
劃一時代だ、個性はみな棄てろ、
機械人間、それで十分結構ぢやないか。

ブルジョア息子のカフエエまはり、
ブルジョア娘のソシアル・ダンス、
その享樂主義もみな流行、
みな個性なし、型通り。
社會科學研究、マルキシズム、
思想も、流行、個性なし。
個性は特權、また獨善と
理論もこれを否定する。
集團意識によつて生き、
その訓練を經て、はじめて可。
劃一時代だ、人間は自動機械だ。
思へばこれも、元はと云へば、
人間があんまり澤山になつたからの事だ。

×

人間機械が
出來ました、
自動人形、
もの云うて
物を賣ります、
勘定も

ちやんと間違へず、
いゝくすねもせず、
さらに愛嬌まで
ふりまいて。

機械人間が
出來ました、
アダム以來の
大發明、
神樣でさへ
舌を卷く、
おれのこさへた
機械より
なほ上等で
正確だぞと。

人間機械が
出來ました、

大百貨店では
はやくお買ひ、
一個の價が
何千圓、
人間樣より
ちと高い、
今に安くは
なるだろが。

×

時代に従ふべきか、背くべきか、
時代に従つて生くべきか、
時代に背いて死すべきか。
どんな時代だ、この時代は、
一切價値の轉換期だ。
すべては變る、すべては逆になる、
階級も、獨裁も、ひつくり返す、
思想も、道徳も、でんぐり返る。

天動說が地動說、
昨日の善が今日の惡。
文學の意義も變り果てた、
藝術の夢は昨日の花よ。
コンマシヤリズム、
アメリカニズム、
大量生產、請負事業、
小說は企業、詩も取引。
大衆文藝が正道となり
講談狸の腹皷、
トルストイの藝術論も
結局そこへ行くではないか。
自己探究、自己省察は個人主義、
個人主義は卽ち利己主義で、
チヤンバラ、捕り物、探偵小說、
興味本位の、危機一髮で、
大衆獲得と、收入增加と、
一擧兩得の超個人主義、

さすがにコンミュニストは經濟學者だ。
今や一切は經濟問題に歸し、
文學者は一個の技術工となつた。
恐ろしい地震ぢやないか、
どえらい變革ぢやないか。
今までの藝術觀はみな間違ひ、
みなブルジョアの自己欺瞞。
だが、人間性の私心は公然の祕密、
そこで新しいブルジョアが出る、
文學上のネップマン。
疑ふ、怪しむ、それが眞か、正道か、
政治的功利主義が果して藝術の母胎かと。
これが現代だ、この混沌と亂脈の時代、
この時代にいかに生くべきか。
われなほその道を見出し得ず、
ただ呆然として佇むのみ。

×

敗北、敗北、おれは負けた。
人に負けたか、女に負けたか、
人には負けぬ、時勢に負けた。
アメリカニズムに負かされた。
女には負けぬ、金に負けた、
金には負けぬ、身に負けた。
唯物主義に負かされた。
負けた、負けた、おれは負けた。
いくらおれが自惚屋でも
たつた一人でどうなるものか。

一生を擧げてアメリカニズムと
戰はうと誓つた男はどうした？
莫迦げた大言壯語の罰は覿面、
生活といふ重荷を負はされて
文章を賣つて生きるもの、
日毎の麵麭はただでは買へぬ、
それにはやつぱりアメリカニズム。

敵は身うちに食ひ入つてゐた、
金、金、金！　その外は空氣のみ、
空氣ばかりで、人は生きられようか。

生きるには、金を得ねばならぬ、
そして、金は身賣の報酬だ。
多く賣るか、少く賣るか、
高く賣るか、安く賣るか、
相手かまはぬプロスティテュウションか、
えらんだ一人二人に賣るかの差だ。
女性も、文人も、操はただに程度の差。
ひとたび自分をかへりみれば
人を責めることは出來ない。
人の矛盾を指摘するとき、
自分も矛盾で立つと知る。

アメリカニズムの拜金主義、
マルキシズムぞよくも見た、

唯物史觀よ、金、金、金！
夢を食ふ貘といふ獸、人間の貘、
詩人といふけもの、それを除けたら
みんなせちがらい世に生きるのだ、
なまやさしい事でやれようか。
哲學者だつて、禪坊主だつて
飯を食はねば生きられぬ。
そのおまんまが十分食へなけりや
その次ぎに來るのは何か、もう云ふな。

豐葦原の瑞穗の國、米が足りなくなつた、
それが現代苦。時代全體が行詰つて
ニッチもサッチも行かぬ日本だ。
どつちへ動くか、動きも出來ぬ、
どうなる事ぞ、なるようになると
哲學者らしく達觀すべきか。
否。ならせたいやうにならせるのだ、
弱蟲も、莫迦も、みんな起て！

みんな自分の權利を主張しろ。
そこでおれも負けちやない、
負けたるものも茲に勝つ。
出せば出すほど力は出る、
その力の上に、光榮ぞあれ。

×

何にでもなる、なつてよい、
ただ僞善者にだけはなりたくない。
おれが官吏や學校教師だつたら、
どんな苦しい事や間違ひがあらうと
みんな腹の中に疊み込んで、
そしらぬ顏して笑つてゐるだらう。
不幸にして（或ひは幸ひにして）
おれは詩人であつた、文士であつた、
そこで、おれはおれの生活を語るのだ。
くらやみの恥をあかるみに出す、
それがなんで莫迦だ、無鐵砲だ、

それが出來なくて、なんで詩人だ。
きたない事して、きれいな詩を書く
そんな詩人には恥あれよ。
おれは正直に云ふ、おのれを語る、
官吏や教員はよし僞善であつても
それはちつとも罪ではない、
生活の保證のためゆゑ當然である、
詩人が僞善者だつたら何になる。
一定地獄ものよ、げにその罰には、
詩の幽靈に憑かれ、死んだ文字細工。
おれは何にでもなる、なつてよい、
ただ僞善者にだけはなれないぞ。
それがわるけりや、勝手にしろだ。
むきだしの心臟のぴくぴく動く
赤裸の人ぞ、赤裸の苦悶、
ジァン・ジアックよ、われ汝に誓ふ、
われ汝の如くなさむ事を、
これぞわが生、わが生の意義、
痴人なほかつ世に生くべし。

×

短册かくが何よりいやよ、
そのいやな事なぜ強ひる、
書かせて賣つて食べるとサ。
金をくれなきや短册かけと、
きのふもけふもつきつける
朝鮮人の略屋さん。
おれのものでも金になるのか、
さりとは變な世ぢやないか。
だがもう駄目だよ、もうならぬ、
朝鮮人の略屋さん、
お氣の毒だが、もうならぬ。
どうぞ他處へ行つておくれ、
人格の高い方の處へ行つておくれ。
おれが持ちもの皆ふり切つて
痛快なのはこれだつた、

朝鮮人の略屋さん。

×

次位の人なら、絕頂が次位、
ビリの男は、勝利がビリよ。
落第すれば、今度は一番、
失敗すれば、それが成功。
尻尾にくっつひて生きるも生だ、
それが悟りよ、それが勝ち。
いつも俺が、俺がが鼻の先き、
なんて厭やな男だ。俺を忘れろ、
頭も忘れろ、尻尾も忘れろ。
首位もなく、次位もなく、
ピンもなく、キリもなく、
みんな平等一如よ。それで卒業。

×

われらの日なるメーデーの
この行列を外(よそ)にして、
戀に走れるものあらば
裏切り者と打つもよし。
戀はもとより人の性(さが)、
してわるいとは云はざれど、
搾取者の戀、被搾取階級、
それを眞似してよいものか。

戀とは有閑階級の遊戲ぢやないか、
甘つたるい痴話、聞いてさへ
胸くそがわるくなる、
戀はむだごと、たはれごと、
汗とあぶらで働き暮す
こちとらの知ることかい、
くそ面白くもねえ、畜生めー
それは正直眞面(まとも)な怒鳴り聲だ。

だが、その勞働者の口眞似して、

色のなま白いにやけ男が、
戀は個人主義だ、利己主義だ、
ブルジョアの贅澤な遊びの眞似だ、
大切な仕事をほつてとち狂ふ
そんなやくざ者ほつちまへ、
潰してしまへといきまけば、
何だか話が變になるぞ。

一體、その大切な仕事は何だ、
社會運動か、宣傳文學か。
社會運動は立派な事だ、
宣傳文學も無駄ではない。
だが、それゆゑに戀をすなとは、
社會的事件にのみ關心して
個人的興味は殺せとは、
古い道學者の說教と同じぢやないか。

戀だ、愛だ、結婚生活だ、
それは個人の私事である。
云ふ値なしと云ひ棄つる。
されど男女の愛慾は
人生の一小些事にすぎざるか、
死ぬる、殺すは、何故ぞ。
げに、人間の惱みよ、愛慾の
しづまるときのあらざれば。

勞農ロシヤに戀なきか、
ルナチャルスキイは何とせし。
私事ゆゑ不問に附するとか、
蔭でこそこそやれよとか。
政治家、實業家は大腹中、
戀などちつとも問題にならぬ。
文學者も政治家になるべきか、
詩人も實業家をば眞似すべきか。

文學否定の時代來りて、

戀はおやつと成り果てし。
コロンタイの赤い戀、
戀より仕事の結論は
平凡なれど、それゆゑ眞實。
仕事によりて結ぶ戀、
かのロシアン・ニヒリストの結婚、
その外は、みんな遊戯だ。

×

男と女がなぜ出來た。
男ごころと女ごころと
なぜにかうまで食ひ違ふ。
どう見たつて間違ひだ、
神樣のやりそこなひよ。

男の愛は甕(かめ)の水、
傾けるほど愛は減る。
それに受ければ受けるほど
女の愛は増すものを。

愛すれば冷え、
冷えれば燃える。
うそがなければ嫌はれて、
だませば喜ぶ、嬉しがる。

男と女がなぜ出合ふ、
愛と憎みがなぜ裏表(うらおもて)。
情が深いと早く飽き、
慕ふ女はうすなさけ。
みな神樣の手ぬかりよ。

男の愛が長ければ
いつも女はうれしきを、
女の愛が變らねば
男は愛に滿たされず。

心と心の食ひ違ひ、
どうにもならぬ、男と女、
そこで三角關係、悲劇と喜劇。
これは手落ちか、それとも何か
深いおもはくあつての事か。

×

大杉榮の迎へ酒、
酒を飲まない男であつたが
戀の迎へ酒のみすぎた。
女の熱情に引き出されて、
負けぬ心の妻ゆゑに
出てはかへるにかへられず、
からい酒から、甘い酒、
したたか飲んだはよいけれど、
唯物主義者らしく
金ゆゑ罪な事もして、
勝手な事もたんとした、
それがわるいと叩かれて
かれも男だ、居直つた。
ブルジョア道徳、何ものぞ、
結婚否定、それもよし。
四十の年を前にして
わが志をあはれんだ。
その人間らしさ、それもよし。
かの迎へ酒も、その主義に
時非なればぞ、成りがたき
思ひのゆゑぞと聞けばいたまし。
バリケエドで死なんだ
それを憾みに思ふなよ、
それも幸ある身の果てと
同志宮島資夫が情ある言葉に、
女のために死んだラサアル、
そのラサアルにも比ぶべき
英雄主義と貴族主義の
強い本能、もつてゐた男、

眼玉のギョロリとした男、
大杉榮を思ひ出す。

×

あんまり糞眞面目だから
甘く見られちまふのよと、
かあいい女詩人が來て云うた。
さすがに戀の苦勞をつんだ女
さんざ戀では泣いた女、
戀の初心者、みちびくと、
そんなに一氣にやらないで
小出しになさいとも云うた。
二人きりで遊んぢやいけません、
澤山とお遊びなさいとも云うた。

糞眞面目、糞眞面目
まつたく、おれはさうだなあ。
おれは野暮天、不粹者、

世間知らずの甲斐性なし。
この十年來、通人、苦勞人、
仕事師などに嗤はれたのは
みんなそれだよ、糞眞面目、
ほんとにいやな奴だねえ、
君たちぢやないよ、このおれがサ。

女詩人はおれの顏を見て笑ひ、
いつも靜かに、落ついて、
さとりすましてゐる人と
思うてゐたと正道にいふ。
そんなにおれが見えたのか。
戀の苦しみ訴へに來ても
つい云ひ出せないこはい人、
そんなにおれが見えたかなあ。
だが、いまはもう大丈夫と云へば、
生臭坊主だものと笑はれた。

五分刈頭でさつぱりしてよかつたのに、
今は頭髪をそんなにのばして
顔までにやけて見えると惡口いふ。
頭を打つてあげるといふ。
頭を打ちに來る人がたんとある、
一人に一つづつ打たれても
十人では十打たれる。
いくら女のやさ手でも
頭に瘤が出來さうだねえ。

かあいい眼して、まるい身體をして
鼻聲をして云ふ女詩人よ。
あなたと對ひ合つて話してゐると
おれの苦みが莫迦らしくなる。
酒に弱いやうに戀に弱いのよ、
もつと醉はないやうになさいな、
そんなに遠方にばつかり行かないで
ちつとは郊外へいらつしやいと、
あなたはいろいろ云つてくれる。
これでももとは戀の惱みを訴へに
來た女かと、不思議な今日を感じた。

×

郊外ずまひの美しいマダム、
あなたはますます若く美しくおなりだ。
ほんとに久し振りでしたねえ、
その間に、あなたはあなた、僕は僕で、
その情熱をよそに洩らしたのです。
このまま老いるは寂しいと、戀を戀して、
眼を輝かして云はれたあの時分に、
僕の殼はあまりに堅かつたのです。
だが、あの時分からあなたは若くおなりだ、
人魚でも食べたやうな人ですね、あなたは。

郊外ずまひの美しいマダム、
あんな女の何處がよくつてとも

あの人の審美眼をうたがふわとも、
あなたは若い女詩人に仰しやつたつてね。
戀は審美眼ばかりでするものでせうか、
でも、長年の友達のあなたに相談したら
あるひはもつと考へようもあつたでせう、
戀が相談してできるものならばです。
だが、なぜにマダムを訪ねなかつたか、
あの舞臺のやうな新築の應接室で
あなたの皮肉な批評を聞いたなら、
僕の狂ひはとめられたかも知れぬのに。

郊外ずまひの美しいマダム、
あんな女は熱しやすくつて冷めやすい、
冷めたい女ですもの、ああ熱しては
ひどい目にあふのは知れてるのにと、
あなたはよくもまああの女を御存知だ。
でも、かうして引返して來た同士も
やつぱり冷めたい部類ぢやないでせうか。

戀なんて云つても、後になると、
あつけなくつて、つまりませんわねと
皮肉に笑つて、あなたは云ふ。
あなたもつまらなかつたのですか、
僕はまた、戀なんてつまらないわと
何處ぞかに云ふ人もあるかと
ふと思うて、僕もつまらないのです。

×

戀はおそろし、
螢のひかり、
つかめば蛇の
眼だものを。

戀はおろかよ、
眞晝の夢よ、
さめて他愛の
ないものを。

迷へば迷ふ
男のこころ、
いのちかけても
よしなきを。

恥ぢて、おそれて、
それでも惹かれ、
なやむ女も
わりなきを。

×

いつも女は
娼婦の氣だて、
男は野獸で、
また阿呆。

熱く燃えても
つづいた末は、
金に終らぬ
戀はない。

いのちかけても
かけての末は、
裏切られない
戀はない。

これがさだめか、
まことの戀も
末を遂げぬぞ
あはれなる。

×

わが十年は空しかりしが
この三月こそさらに空しや。
十年の戰ひは敵と憎みを殘せしも

三月の悩みに殘るものなし、
一束のふみ、山なす悔い、
その外になし、何もなし

いや、まだある、もう一つ、
死ねないでしまつた命、
すりきれてぼろぼろになつた命、
このがらくたをどう始末する？
困つた、困つた、空しい三月の後に
こんな厄介なものが殘らうとは……

棄てられずば、持ち搬ばう、
かすかすになつた詩人の心も
いつかは役に立つこともあらう、
使へるだけは使つて見よう、
三月の悩みのあとの悩みに
裂けずば、多少の見込みあり。

なほ來れかし、世の悩み、
來つて彼をさいなめよ。
がらくたなれど、その命、
破れ琴なれど、その心、
十年の戰ひに堪へたらずや、
なほ堪へよかし、この時代苦に。

×

人生は、
劍の間の踊りだ。
うまく踊りぬけば
花環の雨がふる。
よく踊るものは
踏みそこなふ。
踏みそこなへば
突き貫かれ、
引き裂かれ、
血を迸らせつつ

なほも踊るよ、
死の踊り。

つねに危險の中で
生きるより、
生死を賭して
踊るより、
より大なる生はなし。
熊の月の輪、
槍のひと突き。
荒れ牛の角、
空手（からて）につかむ。
苦痛のゆゑの
最大快樂（けらく）。
致命の情熱、
必死の至藝、
そこに悲劇的燃燒はあり。

幸福は、
人をば生かす道ならじ、
幸福は死だ。
悲壯なる苦をば求めて、
死につつ生きよ。
額に拳銃を當てて思索し、
手に匕首をとりて詩作し、
絞首臺上に諧謔す。
かくて、詩人は炎上す。
虚無だ、虚無だ、虚無に徹して
全一の生は得べきに、
悲壯とも、苦とも思はず、
ただ身は影と思ひ極めて
地獄の中に天國を生きよ。

×

死ね、
死ねずば生きろ、

男らしく
生きられねば、
死ね……
今はそればかり、も一度云へば、
今は何もない、何もかもおなじ、
ただ壁の上に書きすつる
いたづらごとよ、らくがきよ、
いくら書いてもおなじこと、
へのへのもへの、
へのへのもへの、
へのへの……
への……
へ……

六月十日――三十日（東京）

第四巻

自由人の歌

――わが新生の序曲――

Ein neues Lied, ein besseres Lied,
O Freunde, will ich euch dichten!
Wir wollen hier auf Erden schon
Das Himmelreich errichten.

Heine.

生の行進曲

進め、
何處でもいいんだ、
心の向くがままに、
潮の流れに乗つて
かまはず進め！

なすべき事は山のやうにある。
ちつぽけな非力な奴も
まだ見棄てたものぢやない。
それも土臺石の一つだ、
石垣の間をふさぐたしにはなる。

なりそこねたとは何のこと、
これからなるんだ。
まだ何にもなつちやゐない、
白紙だ、赤兒だ、一年生だ、
進め、オイチニ！

昭和三年七月七日

自ら葬る歌

われを理解せるものありや、
かの松風と、この落葉と。
われを撫愛するものありや、
かの海風と、この激浪と。

松風颯々として、
秋すでに冬の如し。
海風茫々として、
わが薤露の歌に似たり。

山行かば草生す屍、
海行かば水漬く屍。

わが悩みを埋むるはかの落葉(らくえふ)か、
わが悲みを溶かすはこの激浪か。

われを理解するものありや、
わが聲はあまりに世と異(たが)へるを。
われを撫愛せるものありや、
わが心はあまりに頑(かたくな)なりしを。

よし、埋むべし、葬るべし、
失はれたる望、破れたる愛。
かへすよしなし、そのあやまち、
つなぐよしなし、一葉(えふ)の舟。

人里の灯(ひ)ははや消えんとす、
星は今最後(いやはて)の旅を送らんとす。
わが行く海は果て知れず、
わがなきあとは量(はか)り知られず。

昭和三年十月二十九日

第一編

×

わが最後の歌を、友よ聴け、
命の限りの歌なれば。
吹き込む息よ、絶ゆるなよ、
たとひ命は絶ゆるとも。

天に天日(てんじつ)、地に自由、
人は自由の子だものを。
ただ一人(にん)の奴隷あるも
この世を地獄と定むべし。

奴隷は起て、起つて×を斷て、
あらゆる×はぶちくだけ。
廣い天地に、なんの××、
人に××はないものを。

勝て氣儘に、みな食べろ、
金といふもの無くなつて
みなただになる、ただぞ自由、
金は自由の敵と知れ。

あゝ、金といふ鎖もて
人はつながれ、資本家と
勞働者との區別あり、
腹便々と、ぺこぺこと。

利を生む金の銀行を
勞力交換の銀行とせば、
人はみな友、手とりて踊れ、
金がなければ敵もなし。

××の旗はひるがへる、
家より家へとひるがへる。
××はすべて地に墜ちて
人はおのれの主なる。

かの喇叭手を覺ゆるや、
彈丸にあたりて、血を噴き出し、
なほ吹き鳴らす死出の曲、
われぞ自由の喇叭手ぞ。

×

若き日本は火となりぬ、
これぞ初戀、狂はしく
ただ抱かんと喘ぎ立つ、
愛する女、自由をば。

ただ抱かまし、その女、
すらりとのびしその身體、
憂き事しらぬ處女の笑み、
追へば遠のく、夢なれど。

鎖も、錠も、鐵も、火も、
いかでこの身をとどめえむ。
この戀いかでとどめえむ、
はじめの接吻(キス)に死ぬとても。

いかに姿は遠くとも
ただひと飛びぞ、汝まで。
飛ばば小さき蟲すらも
大(だい)なる影となるものを。

自由よ、自由、君がため
いざ起て、若き日本の子、
愛する自由のためならば
身はとらはれに死ぬとても。

×

籠の中なる自由人、
自由の鳥は籠の鳥、
籠は金網、幾重(いくへ)にも
身をとりめぐる鐵の枷(かせ)、
目に見えぬ籠、見えぬ網。
われも一羽の紅雀(べにすずめ)、
おのが運命(さだめ)を悲しんで
うたへば飼主(かひぬし)、餌(ゑ)をくれる。
なかなかよく鳴く奴(やつ)だ、
さあもつと鳴けと、水をくれる。
かうしていつまで生きるのか、
いつまでもとらへて置くものか。

籠の中なる自由人、
なんとあはれなこの男、
これが自由か、平等か。
ロシヤでさへも鐵の籠、
××は今でも竹の籠。
自由はない、何處にもない、
心の中の外(ほか)にはない。

心の中の自由が何になる。
奪へよ、奪へ、××だ、
×だ、×だ、火だ、その外は
みんな言葉だ、金棒曳きの
裏店婆あの饒舌だ。

籠の中なる自由人
放たるる日はいつの日か、
つひに放たれる日はないか。
ただ心の自由を口にして
檻の中にて死ぬべきか。
それはあまりにむごたらし、
あまり痛まし、なさけなし。
ただ死のほかに自由なくば
生くるに堪へぬ君とわれ、
いざ共に起つて、この檻を
うち砕くべき手段せん、
なさずば生も死だものを。

×

カネタラヌ、カネタラヌ、
かの蒼い顔した支那人の悲鳴が
おれの耳のまはりに鳴り響く、
だんだん高く、高まつて
雷の如くに響きわたる。

しよぼしよぼ痩せた小猿をつれて、
骨無しか、うどんのやうに
くるりくるりと身を曲げる
少年に藝當させて、支那人は
最後に刀をのんで見せる。

金を貰ひに廻ればバラバラ逃げる、
ニヤニヤ笑つてみな逃げる。
刀をのむより辛さうな
怨めしさうな顔をして、

カネタラヌ、カネタラヌ……

二階の窓から、西洋洗濯の職人、
高見の見物、ゲラゲラ笑ふと、
それを見上げてかの支那人、
カット眼をむいて怒鳴つた、
バカ、バカ、バカッ！

人氣もなくなつた路地のすみ、
ただしよんぼりとうづくまる
小猿と少年、支那人は
なほ眼をむいて怒鳴り立てた、
カネタラヌ、バカ、バカ、バカッ！

日本人も金足らぬ、
日本の國も金足らぬ、
四方八方金足らぬ、
日本中に響くこゑ

カネタラヌ、カネタラヌ、
バカ、バカ、バカッ……

×

泥から咲いた花がいふには、
何てきたない泥だらう、
みるから胸糞がわるくなる、
こんなものに取巻かれて
ゐなけりやならぬとは何たる不幸だ、
たまらん、たまらんと呟いた。
泥から養分吸ひながら。
——それが世に謂ふ藝術家だ。

藝術家、藝術家、何て素敵な名だらうねえ。
俗衆に何がわかるとお高く構へて、
傲然として、鼻眼鏡をひねる其奴が
とてつもない俗物なんだ。
銀行の俗物がまだましだ。

キヨロキヨロ四邊(あたり)を見廻しては
センセエシヨンをねらつてゐる
この廣告術の英雄、書齋の俗物が、
清高閑雅の詩人と呼ばれるのだ。
幻術、幻術、藝術家とは手品師よ。

一つ其奴(そいつ)に云つてやれ、
一體、貴樣は何で飯食つてゐる?
誰が貴樣を食はせてゐるんだ?
それで、まだつべこべぬかしたら、
ボイコットを食はせてやれ。
奴(やつ)は吃驚仰天、小さく縮むだらう。
おれは泥だよ、泥々樣よ、
胸糞がわるけりやもう吸ふな、
養分をやるものかと差止(さしと)めたなら、
花はガツクリ萎れてしまふだらう。

泥、
泥、
泥、
どろどろの泥、
どろぼうの泥を吐いたなら、
おなじ事だよ、君もおれも。
みんな糞を垂れるぢやないか、
たまには屁をこく奴もある。
其奴(そいつ)が藝術家! ゲイ、ゲイ、ゲイだ。
貴樣とおれの違ふのは、おれが正直に
泥の身分を守つてゐるのに、その養分を
貴樣がこつそり盗んで威張つてゐる事だ。

×

西班牙(イスパニア)びとウナムノが
云ふは悲劇的生命感、
われは虛無的生命主義。
生は悲壯なる消滅よ、
虛無ぞまことの生の生。

眞實無所得、一切空、
人間本來無一物、
それが分れば、一段の風光、
ても、すばらしい眺めぢやなあ。
捨身の勇氣、必死の戰、
自棄の建設、絕望的勇氣、
それも雲ぢやよ、靑山は悠々。
どれ、お茶でも湧かさうか。

何だい、いやに七むつかしい、
禪問答か、しかつめらしい
博士の、それが哲學か。
哲學なんぞはよしやがれ、
空ッ腹の足しにもならぬ、
飯だ、飯だ、冷飯だ、
哲學ぬきの唯物主義よ。
口とりなしのまぐろの刺身、
この眞赤な色を見ろ、

どうだ、血の色ぢやねえか。
こんな奴をぶん流すのだ、
敷石の上に、どくどくとよ。
どうだい、お前さんの哲學のずんと向うだ。
えらいぞ、えらいぞ、その通りだ。
その刹那が悲劇的生命感、
そのあとさきが虛無的生命主義よ。
本來空よと知つたらば
おれの命がなんで要る。
おれは百尺竿頭の人、
落ちるぞ、落ちるぞ、碎けるぞ。
いや、はじめから、落ちてゐるんだ、
碎けてゐるんだ。はじめから虛無だ、
虛無に徹するんだなんて餘計な事よ。
空氣枕の栓を拔いて押しつぶせ、
フッと出るもの、それがおれだよ。
やい、おれにも飮ませろ、おれの血を。

×

おれの道はいつもジグザグだ、
右に近づき、左に近づく。
しかも、つねに一本の道だ。
おれはいつでもおれの道を辿る。
おれはおれの道を行き盡す。
人の道を歩かなんだ、
それが、おれの罪だ、おれの誇りだ。
おれの道は邪道であつたか、
邪道でも、おれの道にはかなつてゐる。
誰でも自分の道を行くものは正しい、
自分の道こそ運命の道。
孔子の道も、老子の道も、
つひにおれの道ではない、
おれにはおれの道が正道。
いかに荊棘の林に入るとも
つねに一條の路はあつた。
おれは行くよ、おれの道を、
おれの道を行き盡す。

×

男子の途(みち)は絶壁だ、
ただ一條ぞ、斷崖の上、
出遇はば一人は落ちぬべし。
もし霧深く立ち罩めなば
目さきはまつくら．
下手に動かば粉微塵だ。

そんな霧が、闇が來(く)る
男子の生涯にはきつと來(く)る。
三十、四十、戰ひの後、
戰ひのまつただ中に、
滿身の創痍(きずい)、息切れして、
喘ぎくづをるるそのとき。

そのとき、女が來る、
女が來て救ふ。
女の愛と刺戟もて、
疲れいたみし心にも
生の勇氣が盛りかへす。
かく、百戰の戰士は言ふ。

げに、力ある生命の人、
武者小路實篤もかくありしと。
世の道德は何をいふとも
彼みづからの道德に生き、
おのれを生かし、世に勝つた。
彼ぞ男子の男子なる。

それに、このおれは何とした、
おれは弱蟲、死なうとした。
世に敗れたれば、女に行き、
死へと向つて戀をした。

女は救ひとならず、
救ひともならぬ女よ。

世をば恐るる弱蟲を
理性が來てはひつ掴む。
乾いた、灰色の理性が
戀の霧立つ絶壁の
今一歩にて引き止めた。
あはれなるわれでありけり。

×

愛するといふ事は餘程の得だ、
だから裏切りでむくいられる。
女の裏切りを憤る奴は
自分を愛した事を忘れたのか。

愛するといふ事はひどい苦行だ、
だからその代償にえらくなれるのだ。

愛の苦しみを訴へるものは
そこでどんなに自分の人間が出來るかを思へ。

愛するといふ事は罪ほろぼしだ、
あまりに我儘な人間に神が命じた事だ。
愛を罪だと思ふものは、愛せぬときの
人間がどんなに罪深いかを知らないものだ。

×

正(ただ)に心緒(おもひ)を述ぶる歌、
絶えて久しくなりにけり、
何しに人は書くやらむ、
心にもなき戯(ざ)れ歌を。

萬葉ぶりの歌つくる
大人(うし)はも世には多けれど、
いのち切(せつ)なき節(ふし)ならで
よしなしごとの冷たさよ。

つめたく離れて見るならば
歌はずとてもやみなんを、
歌ふおもひのなかりせば
默(もだ)して雲を見るぞよき。

萬葉びとの切なさを
いまのこの世に生かす歌、
言葉にあらじ、ひた燃えて
とめてとまらぬその心。

×

十年前のその人は
海のかなたに住むといふ。
遠き潮路(しほぢ)のホノルルに
なほそのかみを思へるや。
わがこの春の波立ちを、
蘆屋ずまひを、新聞の

文藝欄の六號記事に
見出でて、またも戀せしとはと
かの日の知り人へ消息して、
さすが思ひは深しとぞ。

おれより一つ上だつたから
ことし三十八の筈。
少し猫脊の人であつたが、
洋裝は似合ふか似合はぬか、
布哇(ハワイ)はアメリカ、出張所、
中年のマダム、わが靑春の
まる一年を捧げた時の、
わが唇を吸つて、われに吸はせた
あの日の色香は殘れるか。
あまりに世間に氣兼ねして、
しんぞ嫌やだよ、やめにした、
とは云へ、一度は愛した女だものを
憎い心はわれもせぬ。

さてもホノルル、よく行つた、
愛した女が、切れたのち、
やつぱり阿佐ヶ谷、高圓寺、
あの沿線にうろうろして
いつ迄もおれの名前がついて廻る、
それは堪らぬ後味(あとあぢ)、恥さらし、
それに布哇(ハワイ)は有難し。
思ひの外に氣の利いた
君も女であつたかなあ、
自分はとまれ、歲月(さいげつ)の距離
ましてや空間(くうかん)の距離の哀感を、
Pathos of distance.(ペエツス・オブ・ディスタンス)をおれも身に沁む。

おもふは三月、かの六甲の
苦樂園へとのぼるみち、
その山みちの半ばにて
ミス・ロビンが云ひ出(いで)しそのことば、

「ことによつたら、わたし、
シンガポオルに行くかも知れないの、
いま、あの人にその話があるのよ、
でも、いやねえ……」
それは女の手だてとは思うたが、
追つかけて來た文にこたへず、
きつぱり斷つたあとの半年、
若しや誇りの强い女の
おのが心のままになる
そのパアトナアをすすめ動かして
遠く行きしにあらざるか。

シンガポオルと、ホノルルと、
さらばわが身は幸ある身。
海山へだてて遠ければ
迷ひの夢も溺るべし、
行けぬ異鄕と知るからは
過ぎにし夢もなつかしし。

われ惡夢と忘れしを
なほも思ふか、十年經て、
冷たき女、冷たさは
あとがほのかに溫まるかと、
ふたたび冷たき火にぞ燒かれて
またもうかぶは鹽辛い笑ひだ。
シンガポオルに君も行け、
さらばわが身は幸ある身、
われも波路のかぢまくら。
わが愛せし女は遠く行く
みな行きつくす、波の上。

×

戀し戀しは
昔の夢よ、
風のたよりも
今はない。

戀のまことは
嵐の花よ、
ぱつと開いて
ぱつと散る。

戀はえせもの、
燃やせば燃える、
燃え盡くまでは
もう消えぬ。

戀は花火よ、
闇ならうれし、
ぱつと燃えたが
うつくしい。

戀し戀しは
昔の夢よ、
今は忘れて
逢ひもせず。

×

わざわざ泊りに
來たものを、
背中あはせで
なんで寢た。

お七吉三も
したものを、
なぜにそなたは
返事せぬ。

誰に遠慮は
ないものを、
いい子ですます
氣だつたか。

返事せぬのは
したことよ、
それに默つて
なんで寢た。

×

心抑へて、ひかへ目に、
世ををづをづと、遠慮がちに、
ものもはつきり云ひもえで、
いつも白けたしらふの心で
一度もほんとに醉ひもせず、
義務と責任の山に押されて
世渡る人の寂しさよ。

島村抱月、彼をおもふ、
おれの容貌が似てゐるといふ
島村抱月を、いつも思ふ、
どんなに寂しい人だつたかと。
一度、ただ一度會つたその人の
蒼ざめた顏の寂しさ、今に忘れぬ。

おなじ裏日本の寂しさを
その性に受けて、おのれを抑へ、
いつも靜かに落着いて過せば、
學者肌よと人はいふ。
その學者の中の人間が
つひに堪へえぬ日は來るを。

君にも、おれにも、三十すぎて、
四十を前に、何んとせう。
四十二にして微塵となつた
頑な心、何で惜しまう、
なんの男が、裸一貫、飛び出せば、
それが生だよ、君も男だ。

松井須磨子に生きんとて
行くは恐ろし、かへるは辛し、
幾度びか死を決しては
戸山ヶ原をさまようて、
山の手線の鐵路へと
飛び込まうとまでも思ひ極めた。

芝居者と身は成り果てて、
西に東に、さすらひの旅、
荒い世間の風あたり
揉まれ揉まれて頬のこけ。
本はおさらば、世間を讀みに
出は出たものの、なんと讀む、
おかど違ひの大學教授。

須磨子我儘、我は強い、
先生なれど、藝術座の女王、
云つて聞かねば怒鳴り聲、
荒い喧嘩も外まで洩れた。
さて、スペイン感冒、あの藝術座の、
あのガランとした中に病み臥して、
ひとり寂しく息絶えた。
なんと寂しい人だつた、抱月、
なんと寂しい一生だつた、抱月。

一生を棒にふつた男、
それが君だよ、君だけか、
島村抱月、おれもさうだ。
棒にふつたゆゑ、君は生きた、
おれは空しい棒手振り、
おなじ裏日本の冷たい風に
吹かれ吹かれて迷ひ出た
寂しい男でありながら。
だが、ほんに給仕上りだつたねえ、
君も、おれもよ。

×

おれは道德の上に立つ。

大きな事をいふな、
きさまは道德を破つたぢやないか。

たしかに、おれは道德家ぢやない、
だが、おれにはおれの道德がある。
道德がなくて、何の苦悶ぞ、
しかも、苦悶がおれの生の意義だ。
道德こそは、人間の苦悶の結晶體よ。

それは面白い、それを聞かう。
すばらしい珍説らしいからな。

さうだ、珍説だとも。
君の道德は强制の道德だのに、
おれの道德は自發の道德だからなあ。
君は世間の目色に從ふ、
おれはおれの心の聲に據る、
おれの道德は自由の道德、
未だ來らぬ日の道德だ。
一切の他律を撥無して、
自律に生きる悲痛の道德。
人の目いろを見て生きるな、
世間の習慣、虚僞はみな捨てろ、
論語、バイブル、みな無用、
八萬五千の經文も、みな鼻紙よ。
おれのこの胸の中にある
おれの自我、おれの本心のみがおれの眞實……

おつと待つたり、その本心が、
君の讀んだ本から來てゐたらどうする？
何處までが君の自我で、
何處からが他人の自我か、

どうしてそれを定めるのだ？

それは拔目のない賢い問ひだ、
よくいいところに氣が付いた。
おれを本讀みと思ふからさう云ふのだらうが、
影響ならば、本ばかりからは來ない、
むしろ生きた人間の人格の
直接的な感化が大きいのだ。
周圍の影響もある、境遇の感化もある。
だが、それらを一々撥無したら、
丁度らつきよを剝くやうなもので
おれの自我はなんにも殘るまい。
自他の區別は、結局、論理の遊戲だよ、
一切合切、みんなおれだよ、おれの世界だ、
だが、それではあんまり際限がない、
そこで、おれはおれの心眼の篩でもつて
世間の凡てをふるひ落す、
その殘つたものがおれの自我だ。

何だか一寸アイマイだが、
まあよし、次ぎへ……

そこで、おれがおれの自我を
ふるひ落して、守るやうに、
他人も他人の自我を守る。
おれはおれの自我を尊重するために、
他人の自我を尊重するのだ。
人を制せず、人にも制せられず、
人の邪魔せず、人にも邪魔されず、
いたるところで自分が主人、
その絕對自由境に立たうとする
これが自由人の道德なのだ。

何だかスティルネルの說のやうだな、
スティルネルもそこに難點があると思ふが、
それは結局、獨り角力で、自己滿足で、

一向、世間に通用しない
自分免許の屋根裏哲學で終りはせぬか。

おれは必ずしもスティルネリアンぢやないが、
スティルネルが屋根裏で死なうと死ぬまいと、
その哲學には、一文も增減はすまい。
おれだつてさうだ、おれがどのやうに
みぢめな最後を遂げようと、
おれの道德は死なぬ、寧ろ生きる位だ。
君は何かといふと世間、世間といふが、
社會と云はぬだけまだ可愛いよ。
社會といへばえらさうだが、結局世間だ、
世間は他人で成立つてゐる、
他人は自分ぢやない、自分の考へと
一致はしない、むしろ多くは反撥する。
それでこそ、悲痛の道德なのだ。
おれは他人を制しようとは思はぬに
他人はおれを制しようとする、
他律の世界はおれの自律を認めない。
そこで叛逆だ、戰ひだ、苦悶の渦だ、
おれはおれを生かすため、單身赤手、
絕望的勇氣、生命の悲痛の燃燒……

大分、詩になつて來たやうだな、
君は詩人だから無理もないが、
どうも論理がアヤフヤなやうだ。
まあいい、それより一つ手つ取り早く
君のよく云ふ生活の實踐はどうだ？
そこで、君の戀愛はどうした？
その戀愛上での實踐談を聞かう。
そこで君がどんなに自分の道德を生かしたか、
どんなにその自律に忠實であつたか、
まづ以て、それを聞かうぢやないか。

云ふまでもない。何より云ひたい事だ。
元來、おれは曾て女を誘惑した事がない、

大抵はむしろ受身だ（これは恥かも知れぬが）
十年前の女でも、この春の女でも、
女が好いてくれたら一緒になる、
なれぬと云つたらそこで別れる、
しつこく女につきまとうて
女を强制するなんぞは嫌やな事だ、
强姦なんぞは大罪惡だ。
だが、悲しい事には、女の天性は
一押し、二金、三男、
押して、押して、押し倒す、
押しの强さについ負ける。
十年前の女のやうに、どんなに濡れても、
男の手落ちになるやうに、後で責め得るやうに、
强姦のかたちでなくば身を許さぬ
そんなタクチックを持つのもある。
それはおれの趣味でない、なかつたが、
今はおれの道德でない。どうだ、立派ぢやないか。
その代り、思ふ存分の事は出來ない、
それがおれの悲哀だ、おれの苦悶だ。
結局、おれも君の大好きな世間道德に
よく合致する殊勝な男なのだ。

さうは云はさぬ。十年前は知らぬこと、
今度はちと事が面倒だぞ。
それにタクチックも違つてゐた筈。
それをどうする、どう云ひ拔ける、
一體、君は現行の婚姻制度を何と見る？

婚姻制度？　愈々、お突きと來たな。
そんな制度なんぞ、明日の日が來たら、
アンシャン・レヂイムの假髮、塔の髮、
鯨骨入りの幽靈衣裳のサロンだらう。
だが、おれは必ずしも全的否定はしない、
任意の結合は許されねばならぬ．
その範圍での婚姻は可し、
若し多少でも强制が伴ふならば

その制度は正に呪はれてあれ。
その一方がどうでも嫌やになつたなら
きれいさつぱり別れる事だ、
他に好きな異性が出來たなら
そちらへ行くより途はない筈だ。
また、若しやつぱり元木がよくて
歸るをこちらも望むなら、
また、もとの小鳥はもとの枝、
嫌やなら仕方ない、よその枝。
それがいちばん自然ぢやないか。

だが、さううまく行かぬのが人生だ、
他處へ自由に飛んでゆく方はいいが
飛んで行かれる方はどうする？
姦通する方はおもしろからうが
される方の氣持はどんなものだ？
若し假りに君が女に逃げられる方の
つまらないくぢを引いたらどうする？
姦通される夫の役目に廻つたらどうだ？

おれは女に逃げられる男の氣持は
ついぞまだ考へた事はなかつたが、
夫に捨てられる女の心は
實に長い間、深く考へて來た。
そして、おれは重ねて、妻ならぬ
よその女に戀したけれど、
つひに妻を捨て去る氣になれなんだ、
おれのやうな頼み甲斐ない男をも
夫と思へばこそ頼みにしてゐる
一人の女が捨てられぬ、
それで十年前は煮え切らず、
その覺悟が定らぬうちは女は出ないで、
妻が國へ歸つた後、はじめて泊りに來た、
來たが、女よ、もう遲い、
こんな捨身の手を打たれて、
われから殊勝に身を引かれて、

それをいい事に、その虚につけ込んで
この女に手がつけられようか、
それがおれには出來なんだのだ。
おれもその夜は苦しかつた、
脊中合せで寢るまでは……

何だか嘘のやうな話だな、
だが、君の性格では、それも有り得る、
つまり、女のその夜のタクチックと、
細君に捨身の手を打たれ
先手を打たれて負けたのだらう。

まづ、そんなところだらう、
今ではおれもさう思ふ。
だが、もう二三日さうしてゐたら
あぶないところではあつたのだ。
さうかな　……二三日もしたら……

君も不思議な男だなあ。
だが、その君が十年後、
背中合せで寢なんだのが
おれには一層不思議だよ。

なんの不思議があるものか、
あたりまへぢやないか、
おれもその間に十年歳をとつてゐる。
それに事情がすつかり違ふのだ、
女の性格も違ふのだ。
第一、おれの道徳が違つた。

では、フライエ・リイベの道徳か、
大杉流の英雄主義か？

いや、さうぢやない、絶望なのだ、
十年前もさうではあつたが、
今度といふ今度は、おれは死だ。

君はようく知つてゐる筈ではないか、
おれは事業に裏切られ
自分の才能に裏切られ、
前途の闇におびやかされ
社會に犇々しめつけられて、
なんでその儘持ちこたへられよう。
おれは弱いのだ、おれは死だ、
一縷の望み、一條の活路を
おれは戀に見付けたのだ、
戀に死なんと決したのだ。
死ねばすべては無に歸する、
善惡、美醜、總決算、
それゆゑおれは何でもやつたのだ。

死ねば何をやつてもいいといふのか？

さうは思つたわけでもないが、
もう止める力がおれになかつた。

それでもやつぱり自律の人かね。

他律だ、自律だ、それは言葉よ、
もうそこまで行けば何もない、
理窟なんぞが歯が立つものか。
おのれも、人も、もう無かつた、
ただ滅茶苦茶よ、勝手にしやアがれ、
おれは自分で自分をぶつ潰す、
それが惡けりや地獄まで追つて來い、
そんな氣持だつた、今から見れば
たしかにおれはあのころ狂氣だつた。

そんなら、もう問題はない、
道德の範圍の外ではないか。

いや、それでもおれは苦しんだ、
人の惱みが身に沁み込んで

ああ、おれがあの男であつたらと
おもへば、おれもなんとする。
引返す外に途(みち)ないぢやないか。
善くも悪くも、これがおれの道徳、
おれの戦ひ、おれの宿命なのだ。
おれは悔いた、二重に悔いた、
今も心が端(はし)はし痛む。
もう、こんな話はよさう、
あんまり考へるのが苦しいから。
君もそんなに弱いかなあ、
やつぱり君も自由人ぢやないね、
いちばん囚はれた人間かも知れぬ。
道徳だなんて、結局、性格サ、
君の苦悶は君の性格の分泌物だ。
君も可哀相な男だなあ、
今はおれも君を咎めぬ……

×

一八九二年――一九二八年。
この二つの年の間を貫ぬく
一條(すぢ)長い苦悩の流れを
我れと名づけて、詩となした。
詩となしたれど、懶(ものう)い夢よ。
見ねばよい夢、ヘツポコ詩。

三十七年、何と長たらしい
ヘツポコ詩人の冗慢詩
一萬三千五百五行、
黒ばつかりの地獄の日暦(ひごよみ)。
一條(すぢ)おそろしき物が流れた、(蛇の路)
一八九二年――一九二八年。
十一月十五日――十八日(東京)

第二編

×

禍ひはただ獨りでは來ぬといふ。
不幸は群れをなして來るといふ。
西暦一九二八年、昭和三年、
これは何とした年であつたぞ。
とどめを刺しに來た年か、
おれを救ひに來た年か。

一月、滿地の霜、夜寒に、わが愛弟、
若いペシミズムの詩人は死んだ。
おれが死んだら、その兄貴と二人で
棺桶を擔いであげると云ひながら、
そのおれに寒い野邊送りをさせてしまつた。
幡ヶ谷の火葬場に、薄日がさして、
骨上げの骨しらじらと、わが骨も
燒かれぬうちに碎くかと痛みて寒く、
しらじらと涙も凍る、梅の花、
おれは怨むぞ、なぜ死んだのだ、
何をおれに殘して行つたのか、
わが孤獨を更に深ませて。
やるせない涙が、女々しう頬を傳うて
男泣きに泣いた、おれを泣かせた、
享年二十五歳、霜林滿翠信士、
おまへも若い詩人で終る運だつたかと
その十九日、その二十日、
おれは彼が遺した詩稿を讀んで、
「春の日は地に消え去り
夏の日は河に流れき、
杳かなる空を飛ぶ鳥
幸ありとわれに告ぐるも、
など行かん、今日この秋に……」
かく誦して、われも行かんと、
年越しの死のねがひゆゑ、
また更らに、涙こぼれた。

二月には、死んだ心に、思ひもかけぬ、
かの冷たく深い瞳のマドモアゼル、

ミス・ロビン・小鳥がおれに飛んで來た。
いたづら鳥が、飛んで來たのは何のため。
おれの空しい心を巢と見たか、
おれの心に火を點けて、ぱつと燃えるを
おもしろい惡戲ごとと興じたか。

卑怯だわ、臆病だわと、尻ごもる
男心を鞭つて、笑つて泣いて、
よくもおびき出したよ、火となした。
接吻してあげたい唇なのねえ、
わたし、どんな事でもしてあげるわと
後先もみぬ燃え方は、何のためとも
知らぬ生命の激流に、ふたりもろとも
溺れる覺悟もないくせに、溺れた聲で、
甘い若さの囁くを、われも返した。
今日を限りに生き死なば
長きねがひも今ぞかなふと、
二つ合せて鳴らしなばいかにか鳴らむ、
戀の悲曲に、死の狂想曲に、
生きた心臟の鼓動を奏でた日、
その音樂に、年を經て膏肓に入る
書物の病を癒やさうとして、
わが心は深い傷手を受けた。

三月は、夢と狂と、醉と痛みと。
今はとめられぬ、轉げ出した石。
池のほとりの炬燵はまだ寒かつた、
海のほとりに、降る雨も酒の色して、
ぱつとまぶたも紅らんで、
なほ、なほ、なほにからむ指、
その指こそはわが愛でし指
わが魂をぬき取つた指、
手も可愛く、足も可愛く、
可愛く可愛く、頸すぢから爪先まで
接吻で蔽へば、理性も蔽はれて、
罪の中に、茫然として立つ男と女、
最後の閾をふみ越えて、その翌日、

その三日、風吹きすさぶ心の街、
はやもわたしは歸るといふ、
歸らねば迎へに來ると云つて來たわ、
どうしても歸らねばならないわとて
慌しくも逃げ歸るその心やいかに。
別れの前夜、今も忘れぬ、
江戸川べりのさまよひに、
冷たい靄の夜町に、肩を並べて、
「花嫁さまはなぜ悲しいの、
文金島田に結びながら」と、
悲しい悲しい歌をうたつて聞かせた、
別れはつらいと云ひながら。

三月は、それではすまぬ、わが受難、
汽車の窓から、いつまでもいつまでも
見えずなるまで出してゐたあの長い頸、
辛い別れのその人と、入れ違ひに來た、
われを誘ひやまぬ年上のマダム、
その人のためとて用は神田まで、
共に上りて、晩餐の酒のみだれに、
わが戀語れば、しどけなく膝をくづして
わが手をとつて、ぢつと見入つて、
戀せぬ人と思うたが、なさる氣ならば、
どうせ死ににお行きになるのなら
わたしと一緒に死んで下さいと
云はれて、何と云つていいのか。
あの女はとても死にはせぬ、
死なねばならなくなつたならこの女よと、
ふと迷うて、輕い誓ひの罸なるか、
更けて歸れば、英語交りのロオマ字の文、
「どうぞ早くいらして下さいね、
一日千秋の思ひで待つてゐます、
あたしこんなに Vehemently Passion
もつた事はじめて！」と讀み出して、
狂亂の妻の嘆きのいかにいたましく、
切なく辛い、われであつたか、

二階の隅の四疊半、いつも一人寢、
かき抱き寢る人思ひ、たへられぬ、
たへられねばか、晝も夜の夢、
三人ずまひに、一緒の暮し、
わたしのベビイよ、自由よと
この世を夢とたのしむ人に、
そのまた夢を伴奏する
これがわが身の果てなるか。
いや、いや、かうしちやゐられぬ、
死にもする苦しみの文、代筆の
義弟の文句さと胸に、刃を刺すを。

逃げ歸る、こたびはわれが逃げ歸る、
卑怯もの、臆病ものか、おれはどこまで、
京にも寄らず、かのマダム、
死ねば今こそ、その人を京のほとりに
訪ねもて、死出の戀路は今こそと
思ひも寄らず、その人の戀はたはむれ、
消すに消されぬ男の狂ひ。

三月は、それではすまぬ、男の受難、
來ませ來ませと呼び招く、日文夜文に、
狂ひ歎く人をつれなくふりきつて
何しにわれは行くものか、
命を捨てに行くものか、
行くところまで行つて死ぬ、
覺悟はすでに世に壓し潰された
ひととせ前の持越しだ、
行けば命はないものと思うた命
なくならず、蘆屋川邊の苦しさは
暗い海邊にイんで、波に波打つ心の惑ひ、
夜更けて阪急、松の葉かげに躍るわが影、
これがわれかと、束の間は
ころよい松の枝ぶりをしらべもした。
何といふ涙、何といふ君は咽び泣、
髮を撫づれば嬉しげに、少女の笑ひ。

死のたはむれに伴ひて、たとへば紀州、
白濱あたりでとらはれて、新聞種に、
生恥さらすが落とばかりに、
ただ、濱名湖の波がしら、
ここに一人がいざとばかりに
思ひしが、さても、さても卑怯な、
これが世にあさましい生物の生きる四月よ、
四月は空しき心、さらに空しく、
苦しきあまりの行き戻り、西は戀しく、
その俤のいかで忘るる、忘られずと
文さへ來るに、その文の度びのいさかひ、
いとしき妻も今は敵よ、その敵
その憎しみの思ひの人は心知られず、
いさかひの種なる文の二日絶ゆれば
心は知れず、臥し寢ても涙はらはら、
はらはら心、郊外に女の友を訪ねて
その苦しみを吐息して、その歸るさよ、
小夜更けて、人影もないその驛の、
その驛頭に走り來る電車のもとに、
ただ一瞬、身を投げんとして、はつと眼覺めた。

五月、堪へ得ず、救ひを求め、
ふたりの古い交りの中の一人の
なほ古く馴染める人の情の深さ、
危ふき橋をわたらずに
坦ら草路を導く人よと
行けば、靜岡のかの人、
やさしき迎へ、瞳の燃え、
とどまりたまへその戀を
命絶ゆべきその戀を、
君がやさしき東の人を
痛め傷つけたまひそよ、
ただその儘に、君が命を
生かしてあげたいとのその情、
妻ならぬ妻の暮しも東はうれし、
うれしとポッと顏を紅めて、

かの停電のレストオランに
あまりに心の近づけば、
妻ならぬ女なれども、やはり妻、
人の女を何とするぞと
怒り憎しみ——男と男、
獅子と獅子とのにらみ合ひ、
おもしろしとは思へども、身の哀れ、
隠れて君を呼び出して、
盗むとまではさだめえで、
あまりの心の苦しさに
またわれ逃るる外なくて。

歸れば、いかに心なき若者の業
靜岡あての葉書に書いた
文取次ぎを疑はるる怪しい文句、
餘計な事を書いたものよと
笑つてすまぬ妻の怒りに、
もう駄目だ、これではすまぬ、
やつた事なら詫びても足らぬ、
やらぬ事まで身に引受けて
苦しむ、苦しむ、苦しみは厭や、
厭やだ、厭やだと、また癇癪、
どうでをさまりつかねばままよ、
一かばちかやつて見る、
あまりに重なる打撃に狂氣、
ふたたび、西へ、急行列車、
ああ、また重たい二つのトランク、
おれの惱みと罪を詰め込む、
それにどうして死を詰めなんだ。
行けば女の家あての手紙の廻送、
人目につけば、一度にわかるわが動靜、
さて、どうなる事ぞ、どうともなれと
やつぱり腹はきまらぬか、
きまればどんなにみぢめな立場、
それがありあり見え透くものを、
惡夢だ、惡夢だ、またも碎けず歸れば、

難波の春は夢なれや、東も夢よ、
舟橋までも、喧嘩して。

六月、
七月、
八月、
苦しい三月、夏ならぬ夏、
一生の梅雨、太陽と絶緣しては、
わが生涯の不作の年か、これもよ、
ただ詩を書きてなぐさむる
それもすべなみ、その妨げの
よしなき仕事、人々の羨み語る
金の蔓をばたぐるとて、何か殘らむ、
幾年長き借りがねなれば、
棒引きのあはれを人は知らざらむ。
衰へし身には無理なる日夜の業、
精も根も盡きて、夜半に倒れて、
苦しきあまりの飲む酒に
思はぬ病、戀の病の
齒をくひしめての荒療治、
もう行かぬ、手紙も出さぬ、
追ひかけて來た文もそのまま、
今は君より他の人へと
心癒やしの戀すると
殘せし文に、怨めしく
あまり寂しいあきらめの文のあはれさ、
いぢらしの文もそのまま、
その戀ぞ、この病かよ。

九月はじめに、病の床に倒れて
これもまた、わが一生に知らざりし
身のうづき、夜更けの痛み、
呻き、惱んで、頰は落ち込む。
戀の痛みも、業のうづきもみな忘れ、
身の痛みもて鎭むとふ心の痛み、
身の痛み消すべき力なかりけり。

去年(こぞ)あたりよりぐらつきし
精神主義の薄弱な土臺の崩れ、
今ぞこの身に犇々と沁む
唯物主義の生きた說法。
死なんと思ふ心育てて
死ぬに死なれぬこの病、
わが自死自葬は、一つの業(わざ)よ、
起てぬこの身で何の旅。
むかし小說に書いた如くに
身を大洋に乘り出して、
暗い波間にどんぶりこ、
自分で自分の死骸の始末する、
葬式も無用、墓も無用、
かの唯物主義者エンゲルスが
死骸を燒いてその灰を海に蒔かせた
その心意氣もて、さらにうれしき性空庵主、
波濤裡に洗浴し、潮に隨つて流れ去る
その水葬のつひにわが運にあらぬか、
死ぬために病氣療養、
それは大莫迦、それは道化(だうけ)。

かくて十月、なほ病怠りもせず、
藥瓶さげて、病院通ひのニヒリスト、
自動車の中に橫臥(よこぶ)す道化の姿、
これがわが身か、死を戀ふ人か、
さてもさても、なさけない靑蟲、
蝶とならずに死ぬものか。
飛んで死なずに、這ひ死ぬか。
疊の上の四つ這ひの死が
われの運かと、運命の意地わるさを
今更に喞(かこ)つおろかさ、十月よ、
わが心の願ひの月を、病と泣けば、
思ひもかけぬ老いの母、
われに代りて死んでしまつた。
麻布の家に、弟の看護(みとり)のもとに
ややよろしきと聞きしもの。

小夜(さよ)のまなかに息絶えて、
ふたたび葬儀、今度は桐ヶ谷、骨拾ひ、
すわりも出來ぬ身を這はせて
長男のいかにかはせん。
死顔をのぞけば思ひ、いやに亂れて、
心から愛された覺のない母ながら、
わが母なれば、腦脊髓の故障のゆゑに
狂ひを見せて死にたりや、いとし、
死亡診斷書に痲痺狂の病名見れば、
今更に身うち寒けく、
十七年前に別府にて失せにし父の
死ぬ前のその狂態も思ひ合はされ、悲しむは、
われも狂うて果つべきか、
既に狂へるわれかとぞ。

さて、十一月……
病やや怠りたれば、何とせん、
三月(つき)の長きいたつきに
日毎おもへる世上のこと、
わが虛無的生命主義の
發露を何に結ぶべき、
わが囚はれの痛ければ
自由の夢ぞ花と咲く。
今ぞ、賽は投げられた、
わが心の中の革命は熟したり。
長き年月(としつき)はばみたる
わが疑惑もここに砕けたり、
われは變れる人となれり。
なすはなさぬにまされるを、
非力、無能の小詩人にも、
自由の皷手の譽れあり。
われは死ぬべき人なるを、
何にか死なむ、いかに死なむ、
狂氣と死との子のわれも、
病癒ゆれば、戰の人、
街頭に出てなげうつは

血の色なせるわが一心、
一心こめて吹けと誓ふ。
聞け、かの聲を、四方より、
わが身を攻むる苦惱の聲、
わが心肝に徹する聲、
その聲今は聞きたがへじ。
自由のためにわれ死なむ。
いかにか死なむ、何と死なむ、
歌ひ歌ひて、歌ひ死なむ。
歌のなかばに絃斷たば、
そは裂帛の聲たらむ。

西暦一九二八年、昭和三年、
これはいかなる年なるか。
われを殺しに來た年か、
われを生かしに來た年か。
死にはじまつて死に終つた年、
われを苦惱に保たんと
母と弟を代りにせしか。
女の戀に死なせずに、
自由の愛に死なするか。
自由の國の來るまでは
なほも此世にとどむるか。
死なしめよ、死なしめよ、
自由のために死なしめよ。

×

云つたよ、親切な友はおれの顏見て、
おれの病床で、今年は隨分見てゐても
はらはらするやうな、見かねる程の
隨分多事だつた年ながら、
結局、得な年だつたですねえと、
いろいろいろの意味を含めて、
友はかすかに笑を含んで。
得か、得か、損得は思ひの外ながら、

無事安穏な友から見れば、
舞臺の役者、紙治か梅忠か、
眞劍勝負も意氣な芝居と見られたか。
おれは役者の柄でなし、ただ苦しみよ、
苦しみながら、そこで得するものは
やはりその苦しみの本人、おれだつたか。

わが身大切、家大切、妻もいとしや、
業も捨てられず、名もうれし、
人は見切りのつかぬもの。かまふものか、
どうでもなれのやけっくそ、ぱつと燃えれば
それが得だよ、崖のふちまで行つて
落ちずにすんだら、こんな得はない。
いや、いつそ落ちてしまつたらなほ得よ。

思へば、おれの一生も、結局、
得の一生ではあるまいか。
人のやらない事をやつたんだもの、
人の味ははぬ苦を味はひ、
人の恐れる道を踏んだんだもの、
思ふ存分暴れ廻つて、それで死ねば
おれは得人、しあはせものよ。

×

おれの絶望は尙早だつたか、
おれは餘りに早く生れすぎたか、
いいや、ずんと遲すぎた、
おれの絶望はどえらい延着なのサ。

絶望は生の全的把握だ、眞の希望だ、
絶望に徹するのがおれの悟りだ、
絶望を生かすのがおれの智慧だ、
絶望を踏まへて立つのがおれの信實だ。

おれだ、おれだ、あはれなおれだ、
文士連はおれを空氣と見なし、

詩人連はおれを煙（けむ）と見た、
それがおれだよ、お笑ひ艸だ。

ああ、この「おれが、おれが」がおれの病だ、
なぜ、この「おれが」が脱却できぬ、
そんな小つぽけな世界に囚はれて
なんの自由人、ただの愚痴人よ。

おれの絶望の本音（ほんね）はそんなものか、
いや、いや、それは本當のおれぢやない、
もつともつと奥に眞のおれがゐる、
眞の絶望——それぞおれをば死なしむる。

世間は絶望の墓だ、人間業（にんげんわざ）の胃袋だ、
おれは絶望から自由をつくり出す、
おれは絶望から破壞を打ち建てる、
おれはおれの生命を燒却する。

ミハイル・バクウニンがおれの師匠だ、
破壞慾はすなはち建設慾よ、
こはせ、こはせ、ぶちこはせ、
こはせば空華（くうげ）、虚無ぞ薫（くん）ずる無何有郷（むかういうきやう）。

×

虚無的生命主義者とは
アナキストのことよ、
アナよ、アナよと擔ぐは知らぬ、
おれは矛盾のアナキズムだよ。

二つのすつかり反すものが
よくも一つになるものだ。
唯物主義か、唯心主義か、
個人主義か、社會主義か。

物の底には心が潜み、
心の果ては物となる。

個人が社會で、社會が個人、
白と黒には分けられぬ。

社會的個人主義、
唯物的唯心主義、
それが矛盾か、不合理か、
合理なんぞは糞くらへ。

主義を立てれば早や違ふ、
主義のないのがおれの主義、
虚無的生命主義もただ生き方よ、
アナキズムも、ただの名前。

麺麭(パン)ばかりでは生きられない、
麺麭がなければ生きられない、
それで基督教も共産主義、
宗旨が要(い)るからアナキズム。

おれの同志はただおれだけよ、
ひとりなりやこそ相結ぶ。
おれは混沌、おれは矛盾、
めざす方角(めあて)でとりむすぶ。

×

社會主義者も、バビロンの
娼婦の胸に眠りなば、
そのくちづけに溺れなば、
いかで自由の使徒たらむ。

バビロンの娼婦巴里(パリ)をば
憎みて足らぬ人ありき、
われらのピエールは何故に
巴里の都を憎みしぞ。

あらゆる虚僞と虚榮とに
人の心を驅り立つる

大き都のあるかぎり、
人は奴隷となりぬべし。

自由の旗の立つところ、
都も鄙もあらざらむ、
富者も貧者もあらざらむ、
主も僕もあらざらむ。

大き都のあるところ、
金は人をば奴僕とし、
政治は衆を欺きて、
自由は塵と散りぬべし。

カアル・マルクスは政治家よ、
政治は倫理とかかはらず、
道義は無價値、人情は
人の弱點に過ぎざらむ。

カアル・マルクスは強權家、
都會は強權の摩天閣、
產業主義の齒車は
つひに自由を嚙み殺さん。

そのマルクスぞ、プルウドンを
生ける矛盾と呼びたりし、
さればぞ熱き人間味、
血と淚ある人と知る。

牧童なりし農夫の子、
自由の豫言者、正義の使徒、
つねに孤獨の人なりし、
わがプルウドン、今ぞ甦れ。

×

思想は鳥だ、
一度飛んでしまつたら

もうつかまらぬ。

思想をつかまへろ、
もう逃がすな、
それがおまへの命なのだ。

つかまへた、つかまへた、
この論文を見ろ、この詩を見ろ、
おれの思想はもう逃げぬ。

莫迦め、それが何の思想なものか、
思想をつかまへるといふことは
それを自分の生活に實踐する事なのだ。

×

阿呆の理詰でアフォリズム、
ヒョイと頭に閃いたらば
もう變へられぬニイチエを、
半哲學者と、教授連。
變へねばならぬ、變へるほど
短かくなるはロシフコオ。

裏の裏いふアイロニイ、
逆手でひねるパラドクス、
人間心理のあらさがし。
生の眞理を道破すると、
ひよいと淑女の裾をまくる
不作法者よ、アフオリスト。

みんな自れにかへると知らず、
さてこそニイチエも阿呆になつた、
シヤンフオールどのは頸(くび)切り自殺、
死に損うて、阿呆理詰(アフオリズム)。
おれは阿呆のなり損ね、
此奴(こいつ)の一生がほんの阿呆理詰(アフオリズム)。

×

おれは紙上の戰術家、
實戰に出たら、何のこと、
ふだんの廣言、ぺちやんこよ、
いつも人生の批評家で、
岡目八目、疊の水練サ。

戀のいきさつ、女の心理、
究め盡したつもりでも、
本で覺えたなさけなさ、
千變萬化、一人一人でみな違ふ
心の隈々、本には載らぬ事ばかり。

そこで行爲のアフォリスト、
阿呆理詰ぞなさけなや。
ただ一面の片手落ち、
かうも云へると知らないで

えらい手ぬかりしたものよ。

戀は八幡の藪だもの、
女心は謎だもの、
何でやすやす出られよう。
いつも迷うて、ヘマばつかり、
女はさぞやをかしかろ。

×

この頃のおれの顏は
時々とても凄くなると、
おれの顏をぢつと見てゐた
妻は溜息してぞ云ふ。

惱ましげな眼つき、
とてもぢつと見てゐられぬと云ふ、
そのときおれの考へてる事を
聞いたら何と云ふであらう。

それは稲妻が閃くときだ、
嵐が内部（うち）を横ぎるときだ、
おれの心は聲も立てずに
傷ついた野獸のやうに吼えたける。

×

かんしやく、かんしやく、
大鹽中齋のかんしやくか、
北村透谷のかんしやくか、
たちまち外に爆破せぬ
それだけ内に籠るもの、
若しも破れたそのときは、
人をも殺し、身も殺す。

二つの××、二つの××、
つもりつもつたかんしやくの
堰（せき）を切つたる奔馬の流れ、

恐ろしいやつ、凄いやつ、
マラア・ダントン、ロベスピエール、
將（は）たやニイチエ、クライスト、
破れ、破れ、世も、我も。

×

走りの男、走り出る、
ハ、ハ、シエンで、流行（はや）りで、まあいいわねえ、
貴婦人方は御寵愛
ハイカラ男、どんなもんだと大氣取（おほきどり）。

走りの男、よく走る、
まあいい時に出て來たねえ、
もちつと遲けりやあがつたり、
誰も振向いちやくれなかつたらうぜ。

走りの男、走り過ぎた、
もうおまへの時代は終つたぞ、たつた三日で、

トウが立つたらそれつきり、
どうだ分つたか、貴婦人方は移り氣なものよ。

×

おれの祕密の心の鍵、
世には出されぬ詩三百、
その禁斷の詩稿の束、
四五十篇と讀まないうちに
讀ませてくれとせがんだ人も、
もう讀めませぬ、苦しいわと
女はみんな泣き出す。

おれの惱みを讀んだ女は
あの人も、この人も、
涙ぐんだ眼でぢつと見て、
おれのあはれな姿を見て、
かうまで迷はした女を憎いと云ふ、
その手段が憎らしいと云ふ、

女ごころはさもあらず。
男の命をかたむけて
かうも狂ふが堪へられぬ、
なんてしあはせなその女、
わたしはそれにと、つひつひ寂しく、
戀がほしや、戀はれたや、
こんなにわたしも戀はれたや。

何て性惡な男、それを心得て
おのれの戀の祕密をば
女に讀ませて泣かせるか。
それほどおれは色魔かしら、
いや、そんなにえらくはないおれよ、
おのが惱みの詩がうれしくて
泣いてくれるがうれしくて。
さても弱い男の心、

さうと知つたらなほ恥かしや。

×

熱き心に
あこがれて、
燃ゆる情に
きずつきぬ。

日より日にけに
冷えまさる
人は氷と
なりぬべし。

靜岡の夢、
蘆屋の夢、
胸に痛みは
殘れども。

これぞ人の世、
濡るるとも、
風には乾く
雨の旗。

×

云はずにすんだ
戀もあつた。
云うて悔いたる
戀もあつた。

さとらぬ顔に
すぎてのち、
今ぞくやしき
戀もあつた。

あまりに近く
なりすぎて、

戀とならない
戀もあつた。

男ごころの
あやしさよ、
わが見し人は
みな戀し。

×

男一人に女二人、
二人のお客を乘せた自動車が
走つて行くは普請中の下谷、淺草、
家並の上の雲を見てゐた男はふつと
差向ひにかけた女の顏を見て、
深く感じたやうな調子で云ひ出した、

「二人とも死に損ひですねえ、僕もあなたも、
あなたがあの日カルモチンをのんでゐたら、
僕もあのとき濱名湖に飛込んでたら、
かうしてこんな樂しいドライヴも
出來ませんでしたねえ」

その三十すぎた女は深くうなづいて、
「ほんにかうして生きてゐるのが
不思議なやうな氣がしますのね」と
見合せた顏と顏、見合つた眼と眼、
死の淵をのぞいた互ひの眼の中に
二人は何を見て取つた？

ありありとさらけ出された心の祕密、
第一人者になりたかつた、
人氣役者になりたかつた、
それが破れた、なり損ねた、
それがもとでの戀の惱み、仕事の傷手、
死ぬに死なれず、生きられず。
ニヒリストだよ、疲れたのだよ。

生きてゐてよかつたとも思ひ、
わるかつたとも思ひますのね、
何か厭やな事があれば
あの時死んでゐたならと思ひますよ、
かうして生きてゐてよかつたとも

その人の言葉を受けて、今一人の女、
死に損つた男のそばの妻がいふ、
「死なうとしかけた人といふものは
いつまでもまた死ぬ氣になりやすい、
またひよつとして死なうとするさうですから、
お互ひに氣を付けて下さらないと……」と
氣遣はしげに夫と友の顔見くらべて。

自動車はその時わたる駒形橋、
めづらしや隅田川、もう秋寂びた水の色、
雲も動かず、大氣は澄んで靑く、
川面(かはづら)冴えて、黒きさへ寒い氣もする、
ゆるゆるのぼる荷船(にぶね)の影さへも。

二月(つき)病み臥してゐた男の眼(め)に、
心に沁みるその死んだ生(いのち)の姿、
いつのまにか秋も更けた、
春は秋こそと心に譬へるものを、
木の葉も既に、河岸(かし)の並木に散り殘る。

どろどろと濁つて流れる川水を、
川を見に來た今日のドライヴ、
吾妻橋からまたもどれば、
堂ビルホテルの七階から
大阪の友と女と三人で見た
堂島川が思ひ出される、それは男の、
妻にはいかに情(なさけ)ない、悲しい夢よ。
男の夢は罪だもの、

男の迷ひは破滅だものを、
妻のある身で、家もつ女、
それは大無理、横紙破り、
破れかぶれの失敗者には、戀も空しく、
やつぱり心を惹くものは自然の色か、
まだ十分には歩けない病後の身でもつて、
わざわざ川の水を見に來た。

女の亭主持つのは業(ごふ)だもの、
女のひとりは苦だものを、
去るに去り得ぬ惱みもあるに、
ひとり住まねばならぬ人、
その人の過去は知らねども
話しともないその憂き苦勞、
みにくからぬ顏に暗い影さす
秋の日の暮るる心を君知るや。
鐘樓で告げる夕の鐘、
聞けば床しい宇治の里、

妻がひとりで物案じした
夫と妻とでしんみり話した
その離れた部室で、少しお酒も召しあがれ、
三人三樣(みたりみやう)の胸のうち、底に殘した酒の味。

淺草の觀音樣のお告げには、
必ず妻子(つまこ)のある人と
二世の約束するものでない、
まこと戀のなさけの觀音樣よ、
妻と子供のある男、
夫と子供のある女、
決して決して、さうはよくよく知るものの
とめてとまらぬ戀の道、それが浮世よ、
夫と子から奪ひ取つて、妻ならぬ妻、
恥ぢず恐れず昂然と世に立つ人もあるものを。

女は友のことを云ふ、
妻になるよと夫を捨てて

今は妻ならぬ妻の苦しさ、
それまでが樂しい戀よ、その戀人と
名を變へて泊り歩いた戀の旅。
男が一度通つて、汽車から眺めて
泊つてみたいとあこがれた
あの笠置溫泉、河に面した宏壯な旅館、
淸冽な水、まどかな山の間にて
何と囁かれたか、戀の夢路の話を聞けば。

その睦まじい戀人同士の姿が偲ばれ、
その幸福はいかばかり、醉ひもいかにか、
男は一瞬、雲と湧き湧く
何とも云へず寂しい心、
おれのせぬ事した人よとぞ
ねたましく、悔いの氣持を、抑へかねた。

僕はそんな事一度もした事がない、
愛した女はあんな女、まして自由のきかない身、

いつも取殘されて、夜はひとり寢、
戀よ罪よと騷がれても
戀の甘美な蜜はついぞ吸はなんだと、
それが男の本性か、つい喞てば女はにつこり、
「では今から二人でやりましよか」と
冗談云つて、ちよいと男の眼いろ見る。

「男はお金をつかへばつかふほど
面白いものださうですね」と
まこと男を知り盡し味はひ盡した
女は輕く碎けた色の苦勞染、
地味な中にも何處か仇めいて、
むづかしい學問をこれがやる人か、
死にたくなるも無理でなし。

カルモチンの百錠を
いまも帶の間に入れてゐるとか、
いつでも死ねるその人が

いつそ二人で死にましよかと
云へば冗談ですませるものか。
そんなに云つた人は外にあつた、
一緒に死なうと云ひ寄つた
その人を思ひ出し、心中の申込、
はねつけられたらいかい恥、
すまない事をおれはしたと、
誓ひを悔いて、男は一寸ふさぎ込む。

おれは何といふ男である事か、
妻を愛してをりながら、なほ物足らず、
若い女から女へと、生活を變へるつもりで、
我も知らずに死ぬる相手を求めたのではあるまいか
死ぬなら一人と定めてゐるではないか、
愛すればこそ、一人で死ぬる、
妻のために生きる事が出來ないならば、
せめて一人で、それが妻をいたはる男の情、
一時の迷ひ、氣の弱さ、許してよとぞ。

酒は飲みたし、飲めはせず、
ちよいと杯に口をつけては
いや、飲んではならぬ、戀の酒、
男は銚子を取れど、二人とも女、
少しの酒にはやいい氣持、
どうぞ生きてと妻の眼のいろ、
生は樂しいその女、
なぜにこんな男につれそうた、
世を厭ひ、自れを厭ふ男につれそうた。

生をうれしむ女を中に、
死にたいと思うた女と
死にたいとねがふ男と
差向ひ、ふつと默つて、三人が
庭を眺めて、夕早い鐘を聞いてゐる
何といふ不思議な時と心があるものか、
わたしも失敗者、あなたも失敗者、

一緒に死にませうよとも云はないで、
諸行無常の聲を聞く、わが世、わが夢。

×

死なうといふのは
希望する事よ、
希望しなけりや
死さへもない。

希望なきこそ
大希望、
絶望のどん底、
これぞ自由境。

おれは死ぬるよ、
死なうとせずに。
おれを忘れて、
世に生きる。

自由、平等、人の夢、
善悪、苦樂、人の業、
その一切の彼岸に
おれは立つのだ。

十一月二十日――二十四日（東京）

第三編

×

新生は苦しきものか、
よみがへる術は難きか。
起たんとてまたもよろめく
傷つける兵卒あはれ。

生は蜥蜴の尾ならぬか、

われは蚯蚓に似ざりしか。
切れてはいかで生きられむ、
身の半らかは、その尾すら。

蛇に咬まれし腕は斷る、
女に、友に、世の業に
嚙まれし胸は何とせん。
毒は身うちにめぐるとも。

斷ちに斷ち斷ち、切りに切り、
ほだしの情、心の惹かれ、
古ききづなはみな斷ちて
生くるは人に許されず。

古き木の葉の落ちぬまは
萠えづる芽はもなきものを、
枯葉を惜しむ心から
もとの姿に冬枯るる。

新生は死の苦に似たり、
墓ならで人を生かさじ。
傷つきて、野路に斃れて、
若艸と萠ゆるなきがら。

×

イスカリオテのユダぞわが伴、
ユダの性をば身に受けて
裏切りものの身の果てよ、
人の憎みの重なれば
われもあはれと思ふなり、

ユダは惡魔に次ぐ惡魔、
髯黑々の憎らしき
相貌いまにゑがけども、
まことは細く青白き
神經質の人たりけん。

われと罪して縊(くび)れしは、
あまりに弱き身の果てよ、
その弱さこそいとしけれ、
銀三十にて主を賣りし
ユダの悲しみいかならん。

主をば賣るべく定(さだ)められ、
悔いて死ぬべく定められ、
後(のち)の世ながく墮地獄の
憎みの泥に埋(う)めらるる
その運命(さだめ)こそいとしけれ。

運命(さだめ)なればぞやむなけれ、
など生き難く悩みてし、
田地を買ひて庵(いほり)して
餘生すごすもよきものを、
ユダの誇りは高かりき。

耶蘇にかけたる夢も夢、
おのれにかけし夢も夢、
耶蘇に代らむ力なく、
あざむかれしか主の愛に、
惑はされしかわが野心に。

おのれの無力、世の空しさ、
みな幻とやぶれては、
痛む誇りの堪へがたな、
ただ死をこそとあこがれし
ユダの悲しみ知るものを。

×

風の吹く日を武蔵野の
芒の中をさまよひて、
つれ立つ人もあらざれば
芒とともに身を折りぬ。

野川の水のささ濁り、
流しはあへぬ、芒の穂
やがて飛び散るはかなさは
われの命に似たりけり。

春はかすみの夕ぐれて、
淡路島山うすれゆく
岸にもだして彳みし、
明石の海を思ひ出でぬ。

などかの海を思ひ出し、
またも見るべき身ならぬを。
思ひ切ろやれ、忘ろやれ、
涙にくもるその眸も。

×

蘆屋、打出の名を聞けば、
かすかに胸の痛み出づ。
春は冬となりつるを
またも迷ふか、死にもえで。

涙のもとに別れなば
なほ慰めもありなんを、
ひとや逃るる罪人の
ごとくもなどて逃れしか。

寂し悲しと嘆きてし
後追ひ文も返しせず、
強き心はわがものと
などみづからを恃みしか。

胸にかき消すまぼろしの
ふと目のさきにちらつけば、
いのちの重み堪へかねつ、
冬枯草のここちする。

×

また見ぬ夢よ、
見たるまは
苦しくつらき
夢ながら。

今日ぞ死ぬかと
絶ゆるかと、
ひたもの狂ひ
嘆きしか。

すぎてはすぎて
くやしやな
などとどめえぬ
夢なるぞ。

また見ぬ人と
おもほへば、
思ふもつらし
戀しとも。

×

會ひみたるまは
少女(をとめ)さび、
あまりをさなく、
かこたれし。

燃ゆるとみれば
また冷ゆる、
情(なさけ)の弱さ
つらくして。

これが戀する
人かとて、
もの足らざりし

人ながら。

今はも君に
まさる人、
世になきまでに
思ふとは。

×

勞働爭議、家庭爭議、
後の方の爭議がなほむづかしい。
或る家庭では、爭議の果てに
どうかすると男は云ふ、
おれは頭を剃つて坊主になる。
まるで坊主になりさへすれば
まるくをさまる世のやうに。

頭まるめりや角も折れるか、
折れて女はなほさら辛く、
涙ぐんで無情を怨みだす。
坊主になるとはそりや譬へ事、
シンボリカルに云つたのサ、
いまさらの靑道心が何になる、
三日坊主もちとむづかしい。
頭を剃るとは煩惱を斷たうといふ事サ、
坊主になつたとて、昔のやうに
行ひすましてゐられるものか。

頭を剃つて坊主になる、
男の逃道も昔はあつたものを。
今はお寺さん、商賣上手、
俗より俗は上手だものを、
なんの生臭、臭けりやよしやれ、
その發心は難いかな。
いまさらさらに、何坊主、
いつそ頭をもつとのばして
主義者アタマ、主義者面、

西郊沿線をほツつき歩かうか、
手にはブハアリン、唯物史觀。
頭をのばして主義者になるサ、
男の逃道、今はこれだよ。

坊主頭と、長髪と、
髪は伸びよか伸びまいか、
迷つて横に縮れ出す。
髪はないよりあるがまし、
煩惱、執着、あるがまし、
髪をのばし、髯をのばし、
意慾、權利を高揚し、
奪はれたものを奪ひかへす
これが人間、鬪爭は人の宿命、
髪は剃つても生えるぢやないか。

勞働爭議、家庭爭議、
後（あと）の方の爭議がなほむづかしい。

或る家庭では、爭議の前に
いつでも男は叫んで云ふ、
おれは頭髪（あたま）を伸ばして主義者になる、
勞働爭議がもつと樂（らく）だからな。
女は青菜に鹽かけて、それはまつぴら。

×

無風帶だよ、
日本の國は、
旗はぐたりと
垂れさがる。

日本海から
吹いて來た風は、
みんな氷つて
雪となる。

太平洋から

來る風だけは、
さつさつさつと
吹き通し。

それでも旗は
ぐたりと垂れて、
何處を風吹く、
金が吹く。

×

子供が大切な玩具をぶちこわすやうに
おれは自分自身をぶちこはす。
自分の一生を滅茶苦茶にしてしまつてやる。

無始から無窮へとつづく
人間社會の大不調和を、
おれはこの一身にぶちこはす。

××、××、その外はみんな無意味だ。
運命に、（神あらば）神に、强權に、
ただ逆らひて奮起せよ、

巍然たる殿堂に×を、
麥酒樽の老軀に鐵を、
それが出來ずば、我と我身に火を鐵を。

×

二十七から三十七、
青春の火のとき、熱のとき、
男盛りを、何ですごした？
纎もせずして、何をした？
胸に空虚はもちながら。

ただ一管の筆を執り、
一管の笛をば吹いてすごしけり。
萬卷の書を讀まんとて

その千卷に壓し倒され、
一卷の書の意も得ざりけり。

今さら何の物狂ひ、笑はば笑へ、
おれの心はやむにやまれぬ、
絕體絕命、切端つまつたそのあがき、
山も崩れよ、身も滅びよと、
なぜにこんな心になり果てた？

蘆屋の人が、五年前、
皆を騷がせた時も、默つて見てゐた。
食べに連れて行つた時でも、
可愛い妹を見るやうに
ただいつくしんでゐたものを。

靜岡の人が男と別れて來た時も、
近所に家を借りようとして
毎日來てゐたあのころも、

つゆ動かうとはしなかつた、
好きよ好きよとは思ひつつ。

年上の女の友に呼ばれた時も、
あなたももとは有名な詩人の妻、
わたしも詩人で困るゆゑ、二人の仲は
閾を越さないでゐませうと、
きつぱり仕切りを置いて來た。

そつと下からのぞくやうにして
顏を見上げて媚びる人、
淚にうるむ大きな眼の
その人の大きな白い手を
握らうとさへもしなかつた。

柱にもたれて、膝をくづして、
つゆもしたたる眼つきして、
なまめかしくも、につと笑つて、

婚約しようと思つてゐますのよと
ささやくやうに云はれた時も。

ながし眼のよく利く切れ長の眼で、
ひどい男に別れて嬉しく、寂しく、
意氣な浴衣のしどけなく、
三味をかかへて遊びに來て、
色つぽい眼をした時も。

長襦袢の寢みだれ姿、かまやせぬ、
白い××××××××、
わが蒲團を踏んで、枕もとまで、
新聞を持つて來てくれた、泊り客、
男好きするその人に寄られた時も。

可愛らしい眼でやさしく笑ふ、
惚れつぽい情熱的なその人から、
何處か靜かなところで、二人きりで
お話したい事がありますからと
呼び出しの手紙を貰つた時も。

來る度びに美しい花束を
そつと玄關に置いて、
さしうつむいて、ほそぼそと
絶え入るほどに語り出す
奈良のをとめを見た時も。

火鉢の手に手を持つてくる女、
甘い聲出してあまえる女、
地味な世話女房めかしくもつれる女、
あまたの女に惹かれても出ぬ朴念仁、
七むづかしい堅造とばかり思はれて來た。

好きよ好きよと云はれても、
わが身あさまし、はれがまし、
世はもおそろし、身はいとし、

つひに燃えずにすむと思うた
石炭のかけらあはれよ、何の事。

戀愛詩人の名を取つて
乙女（をとめ）に媚びるよと罵られ、
世に忌まれたるをかしさよ。
女をおそれ、女に恥ぢる
弱い男のおれだのに。

そのおれが、これは何の事、
十年たつて、三十七、
こんな事にならうとは、
こんなひどい男にならうとは、
神樣のいたづらか、それとも必然か。

男盛りの十年を、戀もせずして、
書物の蟲ですごしてしまつた。
その十年の謹愼、精進が何を與へた？

ただ、嘲弄と、侮蔑と、冷眼と、
無視と默殺とばかり。態（ざま）ア見やがれ。

二十七から三十七、
世の歡樂も遠ざけて、いつもコツコツ
努め努めて、その空しさ。態（ざま）ア見やがれ。
おれは莫迦だ、おれは阿呆だ。
叛逆、叛逆——そして死ね。いい見せしめよ。

×

おれは我儘、勝手もの。
誰が何と云はうと、
何と責めようと、
何の遠慮があるものか。
やれ、やれ、やれ、やつてやり過ぎろ、
やり足らなければ、死ぬときに、
後悔先きに立たぬと知れ。

好きな女は手に入れろ、
嫌やな男はぶちのめせ。
押へ付けて來りやはねかへせ、
因業爺なら絞り出せ。
人のおもはく、何の糞、
思つた事はみんな云へ。
お江戸構ひは覺悟の前よ。

滅びたところで、それきりだ、
死んだところで、それでよし。
思ふ存分、あばれ廻つて、
わめいて、ほざいて、毒付(どくづ)いて、
末は何處ぞで野たれ死(じに)。
面白からうぢやあるまいか。
おれは我儘、勝手もの。

×

暗い人生、

まだ暗くなる、
だんだん暗くなる。
灯(ひ)をつけろ、灯を。
灯がつけられねば.
火をつけろ。

それでダメなら
どうとでもなれ、
なんとでもしろ。

生は暗だ、
人は影だ。
ぱつと燃やせよ、地獄の火。

×

凍えた心臓は燒いちまへ、
鐵でなければ燃えるだろ。

紫水晶の心臓はどんなに美しくとも、
見かけだふしの死んだ心臓、
そんなガラクタ、ぶち砕け。

ただ人間無限の苦惱のために
ぴくぴく動く心臓だけが、
生血(いきち)の通つた生きた心臓だ。
いのち高鳴るその心臓の
火もて淨めよ、世の惡を。

×

ロオザは薔薇よ、薔薇なれど
サロンの、戀の花ならず、
强權を刺す刺(とげ)の花、
自由の愛に血と咲いて
嵐には散る鐵の花。

波蘭(ポオランド)の日、瑞西(スヰス)の日、
獨逸の社會民主黨を
制せんための假(か)りの結婚、
ただ名ばかりよ、その夫(つま)は
ただ自由のみ、平等のみ。

健氣なるロオザはうれし、
その血もて藝術を書き、
詩を愛し、詩をば生きたる
ロオザは深き學者なれども、
鬪ひの女、希望の女。

×

わがロオザ・ルクセンブルグ、
いまだ生くべき道知らぬ
この國の少女(をとめ)あまたに、
正しく强く生くる道、
君よ敎へよ、その血もて。

サン・シモンは飢ゑて水を飲んだ、
その著作の草稿の寫字料のために、
着のみ着た儘、着替はみな賣つて、
部屋暖める火もなくて、凍む夜も
凍まぬは心、燃ゆれども火とならず、
絶望のあまりに、自殺せんとして
その一眼を射殺して、理想は殺し得なんだ。

フウリエもそれより幸福でなかつた、
友人の施しでやつと生きた一生、
すり切れた灰色の服のポケットから
長い麵麭と、瓶の頸とをのぞかせて、
パレエ・ロアイヤアルの柱廊を行く
その姿をよく見たものだと、わが友ハイネは
いつもの皮肉な微笑もなしにおれに話した。

さて、わがプルウドンはどうであつたか、
うまうま濡手で粟の金儲けしたか、
貸家を建て、貯金帳をたのしんだか、
何のたはごと、みぢめなものよ、
一生貧乏に追はれ通し、苦み通し、
サント・ペラジイの牢屋で思ふ
金と縁ない人民銀行、勞働切符。

大なるユトピスト、空想家こそ
われらの師なれ、先覺なれ。
その犧牲のみちを踏みしめて
いざ、後繼がん、追ひ行かん。
理論はいかに異るとも、
民とし民と歩み立つ
その赤心は同じきを。

×

人の一生は
をかしなものよ、
平地の波瀾よ、

人の業(わざ)。

ヒョイと生れたら
もう仕方なし、
千波萬波の
苦が走る。

やめろ、やめろよ、
人間様を、
やめたら人間
何になる。

佛になるか、
神になるか。
なんにもならぬ、
土になる。

×

終點までの
終電車、
赤電車には
誰が乘る、
蒼ざめた死と、
火の戀と。

戀の害火は
死を照らす、
鬼火メ　メラ、
硫黄の香、
地獄臭いぞ
赤電車。

もう行つちまへ
死も戀も、
終りは近し
急行車、

おれは行くのだ、
ニヒル、ニヒル。

×

人と人とを別つもの、
それは利己主義、資本主義。
人をば人に結ぶもの、
それは未來の×××××。

今ぞ地獄よ、ステエト時代、
未來は極樂、協和の時代。
地上樂園、もし夢ならば、
みるに甲斐あるよい初夢よ。

百億圓の紙幣も、不渡手形、反古同然、
巨大な機械は人の油を搾る機械。
血の通はない紙幣、機械はほつといて、
みんな働け、その手もて。

資本家のためには、もう働くな、
ただ、働けよ、わがために。
農夫はつくれ、わが食を、
人のためには、耕すな。

みんな自分の家に住み、
土に根を置く土着、土民、
よい隣人から隣人へと
麵麭をわかちて、暮さうよ。

×

虐げられたもの、敗られたもの、
みんなおれの友だ、おれの仲間だ。
社會の下層に沈淪して
浮ぶ瀬もなき人ぞわが友。

來れ、來つて團結せよ、

さあ一つやつて見ようぢやないか。
俺達の力を見せてやらうぢやないか、
どえらい事をしでかしてやらうぢやないか。

おれは失敗者、それゆゑ失敗者の友だ。
石田三成を、維新の敗者を愛するやうに、
一八七一年巴里コンミュウンの敗者を愛す、
また現在、勞農政府治下のアナキストをも。

おれは何でも虐められてるものを愛す、
義しくして敗れたものを愛するのだ。
この僞瞞と搾取の世のカラクリ、この挽臼に
粉砕されたものよ、集れ、束になつて懸れ。

×

科學は貧者の友でなし。
貧乏人をますます貧乏にして
金持を一層金持にする
有難い學問ではないか、科學とは。
いやよ、科學は公平無私よ、
冷々、淡々、金には靡く、
女の性に似たりけり。
強く出てくる男のものになる。
腕より金の力ぞまさりけり。

金さへあれば何でも出來る、
醜婦も十日で美人になれる。
盲目も眼があく、跛もなほる、
さても便利な世になつた。

科學の發達、とめどなし、
光線燈、隆鼻術、
皺のし、睫毛のし、毛の調節、
美容術ますます進歩して
心は醜くなるばかり。

科學は世界をすつかり變へた、
何でも出來す、何でも變へる。
社會的不合理だけはなぜ變へられぬ、
人間の利己心ばかりはなぜ消せぬ。

今に金持はみな美男美女、
貧乏人は醜男醜女の時が來る。
今だつて現にさうではないか。
金がなければ美人は娶れぬ、
美人でなければ美い子は生まぬ。

鳶が鷹を生んだら玉の輿、
金持の妾になるが落ち。
金さへあれば何でも買へる、
女の操どころか、魂さへも。

この世に金のある限り、
女の操も、美醜も金次第、
神も佛も、學問さへも金次第。
科學よ、富者の暴威を制し、
貧をば救ふ學となれ。

×

不貞の夫、不貞の妻、
古い神の怒りの言葉だ、
新しい律法の恕さぬ言葉だ、
恐ろしいショッキングな言葉、
何と弱い言葉になつた事よ。

今や、時代は亂婚時代、
國際的の雜婚時代、
貞操解放、不貞の貞、
不逞日人、ふてくされ、
不逞女をモガといふ。

不良マダム、モダン・マダム、
退屈奥様—— 擬似戀愛
眞性はときどき心中沙汰、
戀愛至上、愛と死の勝利、
それがわれかや、むかしかや。

玆に、椿事ぞ起りたる、
弗のアメリカ、ケンタツキイ、
アメリカ女は金が戀よと思うたに
女心はおなじきものか、大切な大切な夫、
人に奪られてなるものか。

アイダ・クロスといふ女、
夫を奪つた憎い女、
夫に罪はないものを、
この女めと、ピストルの
ただ一撃ちに射殺した妻の復讐。

妻を奪つた男を殺しても
夫を罪とは認めぬ州の不文律、
今は夫を奪つた女を殺しても
妻を無罪と認める不文律、
夫人は釋放された陪審制度。

重ねて四つは古い日本の律法、
女敵討よ、槍の權三も
不義には死ぬる罪のつぐなひ、
訴へて牢屋へぶち込むなんぞは
とても手ぬるし、まはりくどし、
憎い相手を一撃に殺せばすむを。

それは愛か、所有欲か、
わかちて云へぬが人ごころ、
一夫一婦は習慣か、自然の理法か、
知らねど今の戀愛遊戲、
彈丸が飛んだらどうなるぞ、マダムよ君は。

×

おれはいつでも思ふのだよ、
曾つておれの愛した女たちと
一緒に集つて、お茶でものみながら、
ゆくすゑこし方のことどもを
何くれとなく話し合つて、
何のこだはりもなく、
互ひに互ひをいつくしむ
老い先きもあらばと。
だが、それは出來ない相談だ、
なんとなさけない寂しい世だらうなあ。

自分の愛したものたちが
爭ふのを見るのはつらい事だ、
せめて、自分が死んだなら、
みんな仲善くしてはくれないだらうか。
せめて、彼女たちが互ひに集つて、
自分たちを愛してくれた
一人の男の事を語り合つて、
早く死んでしまつた一人の詩人の事を
しみじみと思出話する日もあらば、
おれはどんなに、どんなに嬉しいだらう。

二人比丘尼の故事もあるではないか、
宿世のえにし、ざんげの心、
さらりさらりさらとした心で、
今は怨みも憎みも捨てて、
仲善く、なつかしく、打ちとけて、
いたはり合つて、慰め合つて、
生きてくれたら嬉しいものを。
みんな此世の因緣事、
袖ふり合ふも他生の緣とやら、
まして一つ男に肌ふれた女だものを、

それが出來たら、おれは無上の幸福男、

わが一生も空しからじよ。
世の人みなのわれをたたへ、
愛と自由の詩人よと
あがむる事のあるべきや。
あらじと知れど、よしあらむとも、
不朽の名などえうもなし。嬉しうもなし。
それよりおれの愛した女たちが
おれの記念を他の女に憎まうとせずに、
仲善く暮してくれたなら、
おれはどんなに嬉しいぞ、成佛するぞ。

×

蘆屋の宿の小机に
ふたりで凭れ、泣き笑ひ、
まなこつぶりてかいだきし
かのくちづけは長かりし。

朝は朝ごと、夜は夜ごと、
かたへにすわり、お茶を入れ、
わが書く文字を讀むときは
うれしとみたり、うれしさに。

女の友をたづねたる
留守に待ち待ち泣きてゐし、
泣きてかへりし寂しさは、
妻にはあらぬ妻ごころ。

一夜あかせしことなくて
過ぎてくやしき君なれど
共寝の夜々を重ねなば
淺き情ぞつらからむ。

×

われにとどかぬその手紙、
人に焼かれしその手紙。
あはれは深し、わがもとに

行かむと告げし手紙とは。

いく月深きくるしみを
知らで、つめたき君とみし。
君こそいかなに冷めたやと
われをうらみてありけんか。

斷ちてふたたび相見じと
思ひきめたる日の後に、
わが目に觸れで燒かれたる
文のあはれぞ身に沁みる。

これぞ運命よ、秋ふけて
蘆も枯葉となりにけり。
君は何をば告ぐるとも
心も冬となりつるを。

×

冬が來た、冬が來た、
なぜ冬なんぞが來たものか、
秋には命絶えもせで
冬に遭ふとは、あさましや、
死に殘りの蟋蟀一匹、
今は野ざらし、雨ざらし。

夏の朝々、秋更けるまで、
だんだん小さくすがれつつ、
家の垣ほに、立木の枝にのぼつて
咲いてゐた朝顔の蔓も黄色に
うら枯れて、さむざむともう十二月、
霜は庭面を白く結んで
心に枯れ殘る思ひも枯らす。

西郊沿線のマダム連、
プロムナアドの時も過ぎた。
畠には、大根が雪と積上げられて、

太い大根を二三本抱へてゐる
ちりめん皺のマダムも、
寒さが今年は身に沁みる。

東北ではもう五尺の雪、大吹雪、
ラッセル車も出動するといふ、
府下では醉つた大工が凍死した、
街頭でははや慈善鍋が出たと聞けば、
寒い、寒い、心の底までさむざむと
春は遠い、遠い夢とうすれて。

京都のマダムは、御大典の御客様で
忙がしさに、春の誓ひも忘れたであらう。
靜岡の人は、東京へ來たい來たいと
毎日せがんでゐるが、許しが出ないといふ。
許しの出ないのがもつともだもの、
毎日そのやうにせがんでは。

蘆屋からあの日、おれの訪ねて行つた
西灘の人も、暮には來るといふ。
その留守を侘びた人だけは消息もなし、
ないもない筈、道は氷にとざされて
戀の息吹も凍る冬、夏の手紙は
弟の手に、こつそり燒かれてしまつたものを

七月ごろに立て續けによこした手紙、
東京に出たいからとのその相談、
今はからずも聞いて、本意なさ、味氣なさ、
音沙汰なしと思うたものを、
何の心で、今更に出て來たいとは。
なぜにそんなにいつも手違ひ、
いつも手遲れ、それが女心か知らねども、
夏さへ既に遲いものを、冬となりては。

六甲の山なみ圓くなめらかに
霞む三月、武庫川の春淺く、

水はそぞろにせせらぐものを、
隈をゑがいた瞳もうるむ
そのかたはらで、わが世苦しとかこちたる
あれがおれであつたか、とぼとぼと
今は枯野の十二月、ひとり歩いてゐる
襟卷の老人姿、これがおれであるのか。

行き會へば、息さへ寒し、白々と
夕闇に浮く人の顏、人の吐く息、
ショオルの紅い色につつんだ
少女も、茶つぽい澁い好みの
人妻も、君に似たのはないものを、
みな寂しさうにうなだれて
家路を急ぐ足どりも春と異なり。

あの人も、この人も、
鼻のあたまに黒いマスクをかけて、
感冒の豫防、
接吻の禁斷、
握る手も手套ごしの
ああ、もう冬が來たのだ。
おれの心もマスクをかける、
死んだ戀と望みの喪章のやうに。

冬が來た、冬が來た、
おれの心の冬が來た、
冷えて凍えて死ぬだろか。
人の末路は悲しいぞ、華かな人ほど、
からもあはれであるものか、
死なれず、死なぬ、業の深さは。

まだ死ねないのか、
死ななんだなと、
冬の顏は冷たくあざわらふ。
それが人間だもの、
望もなしに生きるもの、

もつとみじめになりたいか。

霜枯どきの十二月、
人間一匹の賣物、
よもや買手はあるまいに、
暮の巷に店ざらし。
鳥肌立つて、あかぎれして、
今は心も吹きさらし。

待合むさしの、
藝者小せん、
さぞや春着の支度も辛からう、
ピンとも云はぬこの不景氣で、
取引の戀は、冷酒、
切賣の肉も冷えた、
置炬燵に火も切れたやうだ、
男の胸の火も消える。

カラカラに乾いた十二月、
あんまり空氣が乾燥しすぎて
鼻加答兒にやられやすい、
ちと雪でも降ればと思ふ。
電池も切れたか、火花も出ない、
情熱の限りを出した、出し盡して
もう何にも殘らぬ冬、冬、冬。

一つ書付けを出して置かう、
今年中の不徳と災難と、
ありとあらゆる無理押しの
總決算にも、厄拂ひにもと
茲で一札入れて置かうか、
冬が來た、冬が來た事
右之通に相違御座無候也。

×

愛よ、愛よと騒ぎすぎた、

憎みが本當だ、人間的だ。
憎みと憎みが打ち合ふのだ、
欺し合ふのだ、滅ぼし合ふのだ。
國際戰爭、階級鬪爭、
そこまで行かずとも、つい目のさきに
日々毎日の個人鬪爭、
憎みに憎み、眼に眼、齒に齒の不文律。

人生は永遠にこの通りだらう、
人間の欲情は變りなく、利己心も不變、
不死の强奪、不死の詐欺、不死の賣淫、
神は永遠の不在、彌勒の出世は空頼み。
それでもやつぱりおれのやうな莫迦が
出て來て性懲りもなく精神主義を
唱へるだらう、自由々々と叫ぶだらう。
たとひ變革、變革をいくら經たとて
自由はつひに出現せぬだらう。
それでも叫ばう、求めずにはゐられぬものを。

宇宙は一大欺瞞、大ゴマカシ、
人間社會は大カラクリ、
うそもほんとも差別なし。
それでも、なんでよいものか、
惡けりや惡いと云へよ、齒に衣着せずに、
その噓を一つ一つほじくり出せ、
ほじくつて天日にさらせ。
その代り、憎まれるのは必定だぞ、
こちらも憎め、憎み憎みの罵詈雑言
アリストファネス、
セルヴンテス、
ジョナサン・スキフト、
モリエール、
ハイネよ、
おれも……

×

九十九に對する一、
その一に一切は懸かる。
われらの努力、
われらの苦鬪、
一切萬事の當てはづれ、
それは覺悟の前の今日。
世はも空しと知りつつも
なほも奮發、
なほも惡戰、
これぞ人間の愚かさの
極まる果てのたふとさぞ。
人間の業（わざ）の成果は
ただに偶然、
まぐれ當り、
かくと悟れば、百發百中、
それさへ物の數ならぬ
九十九に對する一よ。

×

默殺人物、默殺人物、
おれは舞臺の黒ん坊か、
舞臺裏の黒法師、
それに苦情は何のため、
それぞ極刑に値する、
默殺もて殺す外なし。

われとみづから身を潛め、
名を隱し、顏をつくりかへ、
裏へ裏へとまはり行く
潛行運動、地下運動、
それぞまことの生だもの、
無の中の全を生きばや。

×

玉石全身百雜碎、

玉も瓦もみな粉微塵、
おれの命をぶッ砕け。
砕いて、砕いて、吹き散らせ、
無だ、無だ、完全の無だ、
その無をさらにぶッ砕け。

生をば出でて死に入れば、
人は死を出て生に入る。
おのれに最も貴きゆゑに、
ただ擲てよ、生の夢。
かくてぞ眞の大自由、
その自由さへぶッ砕け。

×

「心法双忘するも猶ほ忘を隔つ、
色空不二なるも尚ほ塵を餘つ、
百鳥來らず、春また過ぐ、
知らず誰か是れ住庵の人。」
その性空老人、わしは好き。
蜀の山奥から何んで出た、
なぜに華亭に住持した、
船子和尚が戀しいぞ。
弘誓の舟のわたし守り、
渡し渡して水に入る、

用がすんだらおいとまの
沒蹤跡の處がうれしいぞ。
山居、住庵、笛と偈句、
衣三つに鉢一つ、
僧俗二つの姿をはなれ、
凡聖測れぬ遊戯三昧。
船子和尚がうれしいぞ、
坐脫立亡、水葬にも足らぬ、
自分で自分のおともらひ、
薪も、穴掘る手間も要らぬ、
大手を振つておさらばぢや、

どうだ、愉快ぢやあるまいか。
どれ、わしもおいとましませうと、
木の盆に布の帆を張つて、
靑龍江上、漂々と出る。
ヒョウヒョウとして吹くは鐵笛(てつてき)、
これが藝當のしをさめか、
吹くは何の曲、無生(むしやう)の曲、
一曲終つて、もう見えぬ、
ただ江上は山の影。
性空老人、生死遊戲(しやうじゆけ)、
いいところに行きなされた、
用がすんだらどんぶりこ。
性空老人、わしは好き。

大虛大江相映射，

十一月二十七日―十二月十日

（東京）

×

明星影裡明星發。
圓寂光中絕纖塵。
誰唱一聲無生曲。

第五卷

赤裸人の歌

――「自由人の歌」續篇――

第一編

×

新しい歌を、より善い歌を、
友よ、君等に歌つてやるぞ！
我等ははやくも天國を
この地の上につくるのだ。

ハインリッヒ・ハイネはかくぞ歌ふ、
わが友ハイネ、君は善し、
呪ひと憎みはいかに云ふとも
君は自由の詩人であつた。

われも、われも自由の詩人である。
呪ひと憎みはいかに云ふとも、
われは歌はん、わが歌を、

新しい歌を、より善い歌を。
わが新しい歌は生の歌、
闘ひの歌、狂ひの歌、
罪の自由に死を賭けて
おろかをさらす赤裸の歌。

わがより善い歌は鐵の歌、
火の歌、紅い血汐の歌、
自由の夢によみがへり
地に天國をおもふ歌。

ハインリッヒ・ハイネは戀愛詩人、
甘い吐息と涙の詩人、
感傷詩人とののしりし
民衆詩派のおろかさよ。

まこと、ハイネは自由の詩人、

諷刺と罵殺の社會詩人、
社會惡を、人間惡を
怒りてやまぬ火の詩人。

社會詩人のおこるとき、
民衆詩派はあともなし。
歌へよ、友よ、鐵をもて、
火をもて、毒の矢をもちて。

われも、われも自由の詩人である、
赤裸の詩人、諷刺詩人、
神魔の楯をまはしつつ
歌へ、心の血をもちて。

×

おれは自由を求めてさまようた、
三十七年さまようた、
この牢獄の廻廊を。

ならぶは監房、鐵格子、
青い窶れた顔ばつかりだ。
これが自由の棲家なのだ。

だまされた、だまされた、
おれは神様にだまされた、
それから人間にだまされた。

何處に自由があるんだ、
この地球の上に。
あつたらおれを縊れ。

自由はないぞ、人間奴隷、
自由が見たけりやあけて見ろ、
空の財布の中にある。

×

一つの國家の興亡も、
大きな社會の轉變も、
小さな詩人の破滅も、
貧しい琴彈き夫婦の心中も、
差別はないのだ、あるものか。

文學が滅びようと、
××が起らうと、
小さな島國が大平洋にずり込まうと、
よしや地球が割れようと、
どうでもいいんだ、餘計な事よ。

何の不思議があるものか、
蠅が一匹死んだとて。
おれは勝手な詩を書いて
好き勝手に歌つてみたんだ。
それから先きは、こつちの知つた事かい。

みんな食ふだけ食つて死ぬ、
みんなするだけしたら死ね。
人も、獸(けもの)も、それでよし。
みんないいんだ、おれの詩が死なうと、
何處かの王樣が殺されようと。

×

地獄の底へと逆落(さかおと)し、
おれの新生、それがよし。
なるやうになれ、
なんとでもなれ、
ただ、廻せ、ころがせ
火の車。

おれは夢みた、えらい男が
火の車に乘つて、
女どもをつれて
取り卷きをつれて、

坂を驀地にころがり落ちる
眼ずわつた蒼い顔。

えらい男はみんなあれだ、
力一杯ころがして、
地獄の底へと逆落し。
おれも男だ、負けるものか、
破滅を目がけて落ちて行け、
なんの一生、こんなものサ。

×

去年の三月、
蘆屋の宿で會つてから
もうかれこれ一年、
子供のときから親しき友の顔
みればなつかし、今は又、いつもわがため
善かれ、安かれ、つとめよと
盡し勵ますこの友を相見る不思議、
會へば何から物語らうか。
去年の春の物狂ひ
しみじみと思ひ出されて、
今の落着き、恥かしし。

あの夜、
蘆屋川まで送つて行つて、
別れる時に、丁度雨もよひ、
大分道が遠いから
これをさして歸りたまへと
無理に貸してくれた蝙蝠傘を
かへすひまなく、持ち歸り、
五月持ちゆき、會ふ間もなく
また携へてかへりしは
をかしき喜劇、身に近く
その一本の蝙蝠傘、
いかに狂ひを見てありし。

世間話の二つ三つ、
友はいきなり聲をひそめて、
アカダマにミツルと云つて
出てゐるのを知つてゐるかと、
おれの顔を見た眼色。
一度は空耳かとも疑つた、
どうしてそんな事があるものか、
去年あんなに東京からも逃げ歸り、
家と子供にしばられて、
二人で家を持たうとも
云ひ出さなかつた女が、
今更どうしてそんな事。

先月だつたよ、電話をかけて來てね、—
こんな處に出てゐるから
遊びに來てくれといふものだから、
あんな處には恰好がわるくて行けないのだが、
行つてみると、ほかのテエブルの
係りだつたがやつて來て話した。
踊りがあつたので、一寸話しただけで歸つたが、
十月ごろから出てゐるらしい、
友達と二人で梅田の邊に下宿してゐるさうだ、
子供はどうしたと訊いぜら
それは訊かないで頂戴と云つたせと、
友は笑つて、おれの顔を見る。

なんといふ女心と、心の隅に
むらむら起る憤り、腹立ちの雲、
どうせ家をこはすなら
なぜあの時に、さうはせなんだ、
自由になれぬ身のゆゑに
あれ程の不自由、あれ程の焦立ち、
今おもうても自分があはれなものを。
一夜共寢にあかしもせずに、ただ人妻の
忍び會ひ、いかに苦しく辛かりし、
それがぬしなき賣物の花、

藝者を凌ぐ女給かと思ひみるとき、
怨みは誰れに云ふべきぞ。

思ひ當るは、去年の九月ごろ、
家を出て上京したいからとの相談の
いろいろたのみもあつた手紙
思はぬ事の手違ひに妻の弟の手に入(はい)り、
こつそり見て燒いてしまつた事を
十二月になつてふと聞き知つて、
急にあはれが深まさり、
急いで出した手紙は返しもなし。
ないも道理よ、もうその時は
蘆屋はなれて一人暮しの身だものを、
若しやそのころ、家をば出る
覺悟がきまり、きめられたのか。

それなら、それで道もある筈、
たとひ返事は來なくとも、

ふたりで行つて忘れはできぬ家、
友の家訪ねてことわけ頼むもよし、
何として訴へるみちをとりもせぬ、
眞實足らぬか、女の誇りか、
あれは誇りの強い女だもの。
世間も知らぬ、愛も知らぬ、
人のなさけをしみじみと
味はふこともない女、
ウェートレスになつた方がいいのだ、
そんな生れの女だと。

あの友が訪ねて來てくれた夜、
暗い海邊から引き返して、
蘆屋にただ一軒のカフェに立寄つて
おそくまで話をしたときに、
そこで十八の彼女の面影を偲ばす
ウェートレスを見かけたが、
八年のちに、一人の子まで生んだのち、

二十六にもなりながら、
大阪も道頓堀の眞中で
女給になつて出ようとは。
なんの心ぞ、女のものずきか、
二十六歳のウェートレス。

だが、若しおれの罪ならば、
どうせ一問題おきた事だから
おれの事が心にわだかまつて、
家の中が面白くなくなつて、
別れてしまつたのだらうか。
別れてみても頼るものもなく、
八年前に親の家を飛出して來た時も
女給にでもならうと思つた程だから、
ついカフエエに飛込んだのか。
そんならかはいさうな事をしたと、
ままならぬ浮世の不如意の怨みにつれて
あはれと思ふ心も湧きあがる。

それにしても、あの女は
少女の時代に胸をやられて
今でも少し弱いのだから、
日本でも有數な健康地帶である
蘆屋を離れたくないといふも道理と、
東京ぐらしの身分ながらに、
おれも蘆屋に住まうとまでも思うたものを、
なぜその蘆屋を捨てて、處もあらうに
あの埃つぽいゴミゴミした
梅田あたりに下宿ずまひ、
女心は量られぬ、智慧があるやらないのやら、
さだめなりせばよしなきを。

ただ一瞬の無言の中、
頭の中は激し渦卷けど、
さあらぬ顔に、アカダマの
カフエエ振りを訊いてみつ、

辛さうに見えはせぬかと訊いてみつ。
その痴れ心汲み取つて、
何か云つてやりたい事があつたら傳へようと
何處まで親切な友であらうか。
なほいろいろに訊きたい事、
友の知らぬ事まで訊きたいものを、
山のやうな仕事を持つた友は急ぎの
ほんの十五分間で、後は明朝。

忙しい友もお茶のんでくつろぐ朝、
丸の内ホテルの九階に上つて行けば、
堂ビルホテルの七階が思ひ出される。
三人連れで、その何號か、入るなり、
アラ、不思議な事があるわ、この部屋は
わたしがセクレタリイをしてゐた折り
鈴久が借りてゐた部屋よ、
いやな爺さんよ、あたしに
足の爪まで取らせるんだものと、
云ひし女の顔を思ひ出して、
アカダマの化粧の顔を偲びやつては、
これがおれの女であつた事か。

友は明日發つ急ぎの旅の
重なる用にと出る前の半時間、
おろかな友のおろかな戀の
おろかな未練とあきらめと
優柔不斷なおろかさに費す事を
あへて厭ひもせずに、話し聞けども、
あの日、二人の樣子に家持つものと
見て取つて、若し東京にゐられぬならば
こちらに來給へ、生活の保證は
おれがしてやるからとまで、
友情の強い言葉さへくれたのに、
今の始末を何とか見る。

それにしても煮え切らぬ女だねと友は云ふ。

煮え切らぬ男だと、腹の中では
おれの事を思つてゐたかも知れぬ。
われが見てさへ煮え切らぬ、
家持つでなし、住むでなし、
ついそのままに切れたのか
慌しくも歸つては音沙汰なきに、
どうしたわけかトンと腑に落ちず、
實際的な友はさだめし、をかしな男、
をかしな女と思うたらう。
をかしな奴よ、をかしいけれど、
そこが悲しい宿命よ、一緒にはなれぬ女。

あの女はいつも夢みて夢を食ふ
夢の女であるものを、
地味な世帶の話はきらひ、
世帶の苦勞はなほ　　きらひ、
いつも遊んでたはむれて
世をスポオツと興ずるを、

すべてを忍び許す夫さへ棄てられたとは。
若しこれが靜岡の人だつたなら
などをめをめと歸るべき、
女もなどか歸すべき、
あの五月さへあとで迎へに來しといふ、
今はふたりで新世帶、かくはあらじよ。

女なんていふものはつまらないものサ、
さういへば男だつてつまらないがと、
友は世を知る中年の人の言葉、
われもおなじく思へども、
戀や愛や苦しみは十年前に卒業し
今は平和な家庭の中に
慈父とをさまる友と異ひて、
そのつまらなさ、おろかさに、
そのくだらなさに惹かれもし、
過ぎにし夢を忘れんとして
女あはれと思ひ込む、

われぞあはれと友は見む。

若しまた電話でも掛けてくるか
會ふ機會もあつたらと、
わがアドレスを渡したる
そのおろかさぞ限りなや。
とは云へ、たよりを賴みもせじ、
心を後にのこす女の君ならじ、
われも今さらたよりせじ、
あまりむかしの儚かりしを。
若し大阪に行く日もあらば
そのテエブルに君を見て、
すぎし夢路を語るとも
辛くはかなくなりぬべし。

新しき來客あるに、そこそこに
別れを告げて部屋を出づれば、
友は送つて來て、しつかりやり給へ、
思想的な作品を見せて貰ひたいと
いつに變らぬ勵ましの
うれしく肝に沁むがまま、
今年こそ僕も生れ變つたつもりで
今迄書かなかつたやうな作、
突き拔いたものを書いて見せると
雄々しくおれも答へたが、
その時ぞわれも一人前の
男の顔に見えたりや。

エレヱエタアのところで
友の子供の事聞けば、
うれしげに語る父の顔、
長男ははや中學を出るといふ、
この早熟の俊才は
われより一つ上だけで、
早き結婚、早くしなほして
今は賢き妻に愛され、

また一人出來た、仕樣がないと
云へどさすがに嬉しげに、
これぞまことの愛ならめ。
男女の愛の大方は、エロスの神のいたづら。

丸の內ホテルを出ながらに、
「あれは遊ぶのにはいいが
結婚する女ではない」といふ
今朝の新聞の小說で讀んだ文句、
ふと思ひ出して、まつたくだ、
あの女もそんな女だ、
女給が一等似合つてゐる、
これを靜岡へ知らせてやらう
あの人は何と云ふだらうと、
煙草に火をつけて、足を早む。
これが人の世、人の心も
浮雲(うきぐも)、いかにか變るやらん。

×

きみは難波(なには)のカフェエに
夜ごとの笑みを贈るとぞ、
去年(こぞ)ふたりしてさまよひし
道頓堀のカフェエに。

アカダマのミツル、ミツルとぞ
替名を呼べば、女給等の
あまたの中にとりわけて
一際細き姿みゆ。

夫を捨てて、子を捨てて、
などかかる身と成り果てし、
好みし業(わざ)とするとても
一際弱き身をもちて。

人妻ゆゑに苦しくも

たふとき君とおもひしを、
わが手の珠の空しくも
潰えて失せし心地して。

シンガポオルと思ひしを
道頓堀とは、あまりの事に
はじめは耳をうたがひし
わが愚かさをなんとみる。

家をば捨てて行くゆゑに
迎へたまへと告げたりし
文の返しもあらざれば、
思ひあきらめせし業か。

ブルジョア息子とりことし
よきパルティをもくろむか、
日々を祭と興じつつ
世をたはむれにすごす氣か。

いかに女の一人にて
事問ふ人もなしといへ、
とるべき道もありけんを、
二十五過ぎての女給とは。

いまひとたびを相見ては
きみが怨みをきかましを、
道の絶えたる、絶やしたる
わが悲しみは云はずとも。

われには辛ききみなりし、
きみには辛きわれなりし。
おろかや、いかに今もなほ
ふるき傷手を抱くとは。

神のめぐみのあらざれば
戀は惱みと氷りしか、

冬立ち春もちかづけど
またとかへらじ去年の春。

ただひと年のへだたりに
道は岐れて西ひがし、
千里の外にきみをみる、
きみはこの身も忘れてん。

きみを難波のカフエエに
今見るとても、きみなれば、
行かばいやまし苦しきを
行かじ、思はじ、運命ゆゑ。

女に破れ、カフエエに、
夜ごと苦杯を嘗むる人、
かのあはれなるルリアンの
如くもわれは果つる身か。

古き詩人はかくもあれ、
われには強き義務あり、
きみを女給と見すごして
今はも業に生くる身ぞ。

×

その身一つをもとでにて
世に生くるもの、女をば
あはれと思へ、そのほかに
恃むところはなきものを。

笑みの限りと、ながしめと
媚びの限りをもとでにて、
金ある男をとらまへて
安き世すぎを思ふとも。

家の背景なきならば、
レベッカ・シヤアプも不憫なれ、

おのれの才と容姿もて
道拓くよりみちなきを。

サラリイマンの薄給に
堪へぬ女の愛なきを
などか咎むる、博士らも
戀も理性と說くものを。

その身一つを恃みにて
夫を捨てて出し女、
いかにか生くる、その果てを
ただ冷やかに見るべきか。

いかに豪家の若夫人、
重役の妾となるとても、
あはれは深き女の身、
見ざれ、責めざれ、怨まざれ。

×

冷たく細く
くねるもの、
美しけれど、
凄いもの、
われをば巻きて
締めつけぬ。

いまも惡夢に
うなさるる
赤と黒との
だんだらは、
いや恐ろしき
蛇のいろ。

きみは辰どし
蛇の性、

われも辰どし
相巻かば、
食ひ合はば何か
殘るべき。

なにも殘らぬ
蛇の戀、
ただ一滴の
涙こそ
精の雫に
似たりけり。

冷たく細く
ふるへたる
そのたまゆらの
波打ちに、
かけし命の
火の雫。

蛇も女も
冷きほど
毒は深しと
きくものを、
きみは毒すら
なかりけり。

今はも毒を
得たりしか、
今はも誰れを
嚙まんとか、
乾くをいとへ
蛇の女よ。

×

戀は空しい、

女は苦い、
それがわかれば
世の中は
みんな空だよ、
空々閑々、
女の腹のよに
がらんどう。

ソロモンさまは
色事師、
色のいろいろ
味の味、
よくぞ究めた
四十八手、
戀の表裏も
かけひきも。

ソロモンさまは
通な方、
女に惚れて
惚れられて、
女ごころの
たよりなさ、
底の底まで
嘗めつくす。

それから今に
何千年、
智慧のためいき
絶えやせぬ、
風も、流れも
みんないふ。
戀は空しい、
女は苦い。

×

男がえらく
なる道は、
女にふられ、
だまされて、
コッピドイ目に
あふだけよ。

女の笑ひと
ながしめと、
甘い言葉の
猫撫聲で、
もてあそばれたら
しめたもの。

それで男に
なれぬなら、
そこでうかうか
はめられりや、
男の一生
臺なしよ。

浮世のことは
みんな嘘、
女の言葉は
みな手管、
嘘のまことが
戀の味。

×

There died the best of passions,
love and fame……
まづ、フエームが死んだ
ついでラヴ。
まづ、夢が死ぬ、
ついで愛、

のこるは枯葉、
一抹の灰。

おれは枯葉よ、
カラカラと
眞冬の空に
鳴つてゐる。

みんな死ぬのだ
生きものは、
みんな灰だよ
燃えたなら。

×

絶望は
詩の尖端、
絶望は
死の端緒。

絶望とは
どんなものかと
訊かれたら、
その鼻を指せ。

絶望の
息だよ、これは、
凍つても
フツと出るもの。

死なねばならぬ
端目になつても、
絶體絶命の
危地に入つても。

行くに行かれず、
かへられず、

それでも生きるのが、
絶望的勇氣。

これでもか、
これでもかと
身を痛めつつ、
なぜ死なぬ。

死もまた
生きんとする意志だ。
絶望を生きよ、
死を生きよ。

×

「一昨日上京致しました、
十日位滯在の豫定でございますが、
主人も一緒でございますから
その中に暇をみて……」と

鉛筆の走り書き、
ところも宿の名もあらず。

たうとう來たなと口のうち、
別にこれと云つて用はございませんが
ただお目にかかりたいばつかりなんですの、
昨年の夏以來ずつとその心構へをして來ましたと
一月半は、密かに手紙に書きし言葉、
思へば女の一念よ、よくぞかなひし。

去年の五月、あはれにも
本意ない別れをしてのちは、
夏、秋、冬と病み臥して
辛きいのちを絶たましと
極めし時に、斷ちかねし
君がなさけのそのきづな。
文にあはれも告げにしが。

生きてまた會ふ君なりし、
世にも空しく生きのびし
わが未練をば嘲りもて
來りし日々のわれながら、
今ぞしみじみ生きのびし
われをば幸と思ひぬる。

火鉢のまへにすわるひと、
合へる目と目にこもらする
無量の思ひ、なにをもて
この悲しみを告げもせん、
うれしき餘りの悲しみを、
さりげなき言葉のはこびはかどらず。

出すか出さぬか、若しかして
來ずに會はずにかへるかと
案じたものを、よくぞよこした、
彼もさすがに男である。

二人きりで話しちやいけないが
三人で話すならいいからと
出してくれましたと、君が言葉。

隣の部屋にも女客、
さりげなき世間話もどかしき、
靜岡はもう梅も盛りをすぎたこと、
今年は何十年ぶりの寒さとか
めづらしく氷が張つたといふ事や、
答ふも問ふもうはのそら。

ただ打見てのものがたり、
かくもはかなき逢ふ瀨にも
かくも思ひが燃ゆるとは。
これぞまことはわが初戀、
などかく胸の迫るらん、
しみじみ泣かむの思ひする。

十八、十九の若き日の戀、
そのときめきに似たれども、
戀のしよわけを知る人の
低きささやき、出會ひの定め、
わが文字書きし紙きれを
小さく裂きつる指さきの
ふるはぬほどの靜心。

君が涙をまたも見ぬ、
生きてこの瞳を相見るか、
わが顏に苦の影ありて
君を涙に誘ふらん、
薄手に透ける君が顏
黑くうるめる瞳をみるときは、
われもしみじみ涙ぐまるる。

君はかしこき人なれば、
紅と白とのチユウリツプ、
思ひ二つに見せたるか。
友と友とのかたらひの、また暫くは
逢へぬ別れよ、豫定が變り、明後日は
歸らねばなりませぬゆゑ
今日はこれから土産物を買ひに廻つてと
外套を着る姿あたたか。

白木屋の五階の休憩室に
いかほどわれを待ちにけむ、
ぢつと俯向いてゐたその姿、
明治製菓で、ブラジルで、
去年は人を待ちし身の
いつも君こそうれしけれ、
戀のトリツクあらざれば。

去年の暮、女の友二人と歩いたとき、
新宿の布袋屋で、手套買ふ人を
待ち佗びて、一杯餘計に珈琲を

のんだその折り、一人のマダムが
手套の前で、その友に笑つて云うたとぞ、
男はうんと待たせてやつた方がいいのよと。

それはたはむれ、ふたりは戀よ、聲をかくれば、
誰れかはかくもはかなき仲と見む、
夫と妻との買物の忙しき歩み、
出づれは去年、丁度このごろ、
ミス・ロビンと玆を歩きしと
過ぎにし夢に、今日も夢。

あの日は風の吹き暴れて、
足長き人のもすそは亂れ
フエルトの草履高くあがりて、
裂けなむほどの笑ひ爽か、
今日も東京、風は寒けれど
君がなさけの火の近さ。

あるじの用もこのあたり
ふたり歩むはあぶなしと、
上れど木原店の鳥料理、
三時半から五時までの
その限られし時間のうち、
何を語らむ歎かなむ
いとど語るべき事は多きに。

杯とらぬ心づかひ、
思ふにまかせぬ身の上を
察するほどの身のあはれ、
などもどかしきわれならむ、
死をば超えたる身ならずや
さこそは思へ、醉はめぐらず。

三年のむかし、君は來て
藥王寺町にありし日に
など動かざりし心の石、

くやしと云へば、君もくやしく、
あの折りになぜまたと呟きつ、そのあとで
あのひとの方が積極的に出ましたの？　と
そつと笑つて君は訊く。

友をば今になつかしむ、人とうらうへ、
かの寶塚のさまよひに、などか彼女は
この人のこと云ひ出でて、
つくりを野暮と云ひ、洋裝は
見ねば知らねどどうせ似合ひはせぬものを
わたしはわざと着ないのにと云ひたるか、
わが好ける人ぞと前きに知るゆゑか。

神戸と名古屋、異れば、
好みも習ひもへだたれど、
今名高き和裝のモダン・ガアル、
おなじ神戸にありしと聞く
かの女詩人に會ふ度びに、赤と黒との

好み近しと見る人と、君を思ひくらべて、
うれしきものの數々あり。

姿めづるも、愛ゆゑか、
なになればかくもいとしきぞ。
君をおもへば涙ぐむ
これぞまことの戀ならめ。
いとしいとしといふ心、
心と心と、戀と戀、
救ひと救ひ、夢と夢、
君ぞ共棲む人ならめ。

市(まち)のはづれに宿とりて
こつそり君を呼び出して
逢はうといつも思うたと
われが語れば、君もいふ
わたしも始終さう出來たらと
思ひ思うてゐましたと、

かくも思ひは合ふものか。

打てば響くは、君がこと、
心すばやく、こまやかに、
深きは人の思ひ遣り、
からもやさしい心いとしや。
くちづけだにもかはさねど、
ただたまゆらの逢ふ瀬ゆゑ
さらに思ひぞ燃え立ちぬ。

まこと君こそいのちの妻よ、
おなじ日蔭の身となさば
何をか救ひ、潔く相手に會うて
譲り受けむと談ずべき筋道立たず、
君をいとしと思ひなば
まことの妻に君こそと。

家をば捨てて、都落ち、
世のそしり、はた何かせむ。
好きな女のためならば
たとひこの身は滅ぶとも、
一生を棒に振るとても、
今の苦しみいやますも。

ただ、君を抱かむ、君がため
今ぞ書かなむ、生の劇。
君はわれもて、われは君もて
その新生ははじまらむ、
去年は死の戀、今年こそ
死にはあらずて、生の曲。

まだ語るべき事の一つだに
語らぬうちに、大變遲くなつてと
慌しくも君は立つ。
是非なきさだめ、そのために
君は半年心構へつ準備しつ

思ひかなへし今日の日は、
はや別れねばならぬとは。

慌しき別れであつた、
慌しき……これが別れよ。
また逢ふはそもやいつの日、富士の麓に、
去年のごと、またも對決、
男らしく今度は君をゆづり受けむか、
力もて奪ひ取らむか、それはそのとき。

今は買物さげたマダム振り、
慌しくも別れの會釋、
君を乘せたる自動車の
東をさして消え去れば、
われも北へと走らせて
車の上の夢心地。

うれしかりしか、悲しきか、

分きて云はれぬ胸のうち、
君よ幸あれ、恙なく、
わが家ならぬ家にかへりて、
心東に馳するひと、
君を思へば涙流るる。

×

心は千々に破れたり、
硝子のごとく碎けたり。
土のおもてに光るもの
踏まば足をばきずつけむ。

愛をあまたに分ちなば
薄るることもあるべしと、
あまたの人と相見れど
薄れぬことぞ、いかなれば。

愛は掘井に似たりしか、

いかに人をば抱くとも
むかしの愛は盡きざるか、
盡きぬは痛み、死ぬは愛。

去りしむかしのかへらねば
鏡に殘る影もなし。
心は裂けて、その半ば
きみが優手に拾はれぬ。

わが悲しみを訴へし
女のあまたのやさしきに
わが世うれしと思ひしが、
中にもまさるきみなれば。

硝子のごとく落ち散れる
心の破片かき集め、
むかしのわれにかへさむと
手をば切るをも厭はずと。

きみがなさけの深ければ、
われの涙もいや滋し。
破れし心の一切れも
失せてあらざれ、きみがため。

×

きみは二十九、われはまた
三十八ともなりぬれば、
をさなき戀はせまじもの。
わがをさなきは性なれど、
うれしや、きみは若くとも
われには母とぞおもはるる。

まことや、きみは若かりし
かの日もいとど大人びて、
初戀人をひきまはし
心くばりて、とりなして、

馴れぬ都のすまひにも
人こそ知らね、いそしみし。

きみをかたへにみるときは
家をば統ぶる姿あり、
空しき名もて世に立てば
憂き事しげき身なれども、
わが足らはぬをおぎなひて
きみはいとよくなしまさむ。

戀はせつなきなげきにて
きみは涙に濡るるひと、
ただ火のごとは燃え立たで
家をも身をも保たむと、
はやり心を鎮めてむ、
きみを家居に呼ぶまでは。

×

ふたたび家は持ちたれど
わたしの家といへぬ家、
妻と呼ばれぬ妻ばたらき、
いつも世間に氣がねして
二人の世帯も持たれない
女のつらさ、しみじみと
きみはなげきつ訴へた。

はじめも妻のあつたひと、
都に出てもかかりうど、
家と妻とに惹かれて往ぬる。
いまは一人できりまはしても
妻の下なるかくれ妻、
どうした神のみこころか、
いつも日蔭に咲かうとは。

それをあはれと思へども
われさへ妻のある男、

たとひその場の意地だとて
どうして引受けようと云つて出た。
ひとりの家を持たずとも、
やはり世間の隱し妻、今の男でも
馴れの初手(しよて)にはしてゐた事よ。

きみがなげきは、女のなげき、
たつた二人の家庭をもつて
天下晴れての夫婦なら、
手鍋さげてもうれしいものを、
どうしてそれが許されぬ。
きみもいとしや、身も悲し、
わが身ふたつはないものを。

×

君をはじめて
見しときは、
君ははたちの
町むすめ。
まだ咲きそめし
初花の、
雨にたわめる
惱ましさ。

その初戀の
つらければ、
生れし市(まち)も
くるしくて。

戀の取沙汰
やかましく、
家の見張りも
きびしくて。

そつと隱れて

出て來たと、
葉よりのぞける
花のかげ。

君はいのちを
かくるひと、
戀はいのちを
けづるもの。

いまは盛りの
すぎし花、
見るにむかしの
なげかるる。

七年、八年、
なになれば、
ふれですきつる
わが心。

君はいつでも
忍び音の、
洩れでぬほどの
下なげき。

その忍び音の
洩るるとも、
われにはつらき
思ひあり。

いのちかくるは
おそれねど、
君がいのちの
たふとくて。

×

またも二月は

めぐり來ぬ、
チユウリツプの花の
咲くころは。

妻が憎みの
「フラツパア」
彼女が來りし
その二月。

彼女がおくりし
チユウリツプ、
紅きは罪の
深ければ。

三月、五月、
ひととせは
惱みの花ぞ
身に咲きぬ。

×

またも二月は
めぐり來て、
いのちの人ぞ
おとづれぬ。

きみはかしこく
世に長けて、
紅きに白を
添へたるを。

紅はこの家に
ゆるされず、
きみがなさけは
仇なりき。

白きはいまに

殘れども、
紅(あか)はむざんや
むしられぬ。

×

チユウリツプの
虐殺、
チユウリツプの
慘死。

花には罪の
なきものを、
たれかつくりし
花言葉。

愛の情熱(なさけ)の
その紅(あか)を
いかにか消さむ
きみどわれ。

心へとかへれ
血の色。
手をとりて燃えよ
火の色。

×

紅いチユウリツプよ、
呪ひの花よ、
妻が憎みの
罪の花。

紅(あか)はわるいぞ
よくないぞ、
白くなれ、
白くなれ。

洗はば白く
なるべきか、
雨もシヤボンも
何のその。

すすぐ力は
なかるべし、
おのが心の
紅ければ。

×

蜻蛉つりに
行きませうよと、
友をさそうて
行くさきは、
大きな蜻蛉の
とまり枝。

おもひもかけぬ
御客來、
ほうと口あけ
見とれるは、
小說かきの
大男。

これは大した
でつかい蜻蛉、
ツッてやらうとは
そら恐ろしや、
十九や二十の
小ぶくろで。

神戸じこみの
いたづら娘、
皮切りもすんで
もういまは、

一人前の
ふらつぱあ。

かはいらしいが
にくらしい、
おれも蜻蛉と
みられたか、
三百哩も
つられたか。

蜻蛉つりに
さそはれないで、
今度は蜻蛉に
飛込まれ、
どうして助けて
よいのやら。

あつちへ行つたら
おそろしい、
そつと隠れて
ゐらつしやい、
きみはなさけの
蜻蛉つり。

×

あはれなるかなこの男、
なんでも逆に行く男、
なす事する事、みんなへマ、
いすかの嘴(はし)とくひちがふ。

十年あまりを何で生きた？
沈香も焚かず屁もひらず、
つとめつつしみ、何をした？
何もせなんだ、死んでゐた。

女ぐるひも、道楽も

せずに何した、なまけ業、
おれが無能とくだらなさ、
われが見てさへあきれるばかり。

それに早くも決算期、
なさけ容赦もあらばこそ
大きなふるひで、ふるはれて、
埃はわけなく吹き分けられる。

大正十五年間の總決算、
出來ぞこなひの詩が十篇、
おれのいのちはこれだけよ、
一體、おれは何をしてたんだ？

仕事はみんなしのこした、
そのうへ戀までしのこした、
若しも戀路に決算あらば
あはれなるかなこの男。

愛する人は愛するがゆゑ、
好きな人はまた好きなゆゑ、
きらひな人はきらひゆゑ、
行かずにしまひ、今は悔い。

今はいのちを傾くる、
なぜあのときに行かなんだ？
ただかりそめに忍び會ふ、
人が自由であつたとき。

また、藥王寺町にすまひして
あるじが國へ歸つたあとは、
いつもひとりでゐたものを、
あんなに招かれ招かれて。

おろかや、これがわがさだめ、
いつも一人の女なら

何をも知らぬをとめなら、
動かぬ心、そのためか。

處女をいざなひ汚(けが)すこと、
われには堪へぬ罪なるを、
ものうちこはす喜びを
喜びがたき、そのためか。

人の庭をばうらやみて、
はじめて花を見とるるか、
人の畠にしのび入り
盜むを罪とおもはぬか。

おろかなるかなこの男、
罪よ罪よと身を責めて
なほまた罪を重ぬるか、
愛するものを痛ませて。

くるしき人を救はむと
なほも不幸にいざなふか、
おろかや、これが正氣とは、
この不可思議をなんとみる。

なんでもヘマに行く男、
なぜまたヘマに徹せざる？
さかしら顏に世に立てば
ヘマぞこよなき罪なるを。

戀もあきらめ、名も斷ちて、
人にわらはれ、あはれまれ、
阿呆面(あほうづら)して世に立たば、
汝れもはじめて救はれむ。

×

野心からしてなされる事は
みんな無意味な罪惡だ、

しかも大抵の善い事は
みな野心からしてなされるのだ。

情熱の詩人兒玉花外が
大鹽中齋の墓を歌ひては、
日本(やまと)の國にただ二つ
君か後(しり)へに唄はれむ。

人は幼稚とそれを嗤(わら)ふだらう、
だが、天下國家を口にする
賢くずるい政治家たちも、
結局、それと五十歩百歩なのだ。

かの無産黨の頭首とて
あの苦鬪、あの獻身も
熱誠ばかりでやつたらうか、
デマゴオグよと敵は嘲る。

その嘲るものもデマゴオク、
みんな野心のかたまりよ、
野心がなくて、何がある、
人間生涯、自己主張。

おれが自由の詩を書くも
兒玉花外とおんなじ夢よ、
日本のハイネの名に醉うて
ハイネを氣取る幼稚さよ。

ただ、野心ばかりで成されなば
その事業には恥あれよ。
はじめの野心をほろぼして
その目的に達すべし。

野心ばかりで歌ひなば
わが詩は灰にことならず、
いかに言葉は飾るとも

いかでか人を動かさむ。

×

卑俗世界、卑俗世界、
世は建直し、世直しと
卑俗のお告げぞ、有難や、
三千世界、一時にひらく梅の花。

卑俗は革命、卑俗は救ひ、
理性の女神は淫賣婦、
貴族性とは一切の虚飾の美名だ。
プロレタリアは卑俗なれ、
卑俗を下等と思ふ下等な根性、
根ツから掘り出せ、ぶち砕け。

卑俗で文藝を征服した
大衆文藝、講談社、
それは反動、貴族趣味。

卑俗で世界を征服する
ヤンキイどものアメリカニズム、
それはブルジョア資本主義。

おいらの卑俗はウソもフンドシも
ぬいで捨てたるフリキンよ、
アダム以前の犬の戀、
神の芝居の神聖卑俗。

世界の卑俗化、卑俗の傳道、
無袴黨(サンキユロツト)よ、冷忍(レエニン)の禿頭よ、
基督教の傳道より
どれ程立派か知れやしない、
ポオロもペテロも要(い)るものか、
襤褸(ぼろ)とペテンで澤山だ。

歌へ、歌へ、卑俗の歌を、
向う通るは女優ぢやないか

青い眼鏡が氣にかかる……
イートンクロッスうれしいね
ちよいと貸しましよ左の手……
それは當世銀座節、
卑俗どころか、高踏詩人
西條八十の詩ぢやないか。

そんなら、テヤテヤ、テヤテヤ、
イサカリンリン、好かれちやドンドン、
お客の性なら毎晩來い、
藝者の性なら棲とつて來い……
それは磯節、まだ足らぬ、まだ足らぬ、
まだまだあんまり高尙すぎる。

そんなら八木節、浪花節、
安來節ならようまつしやろ、
女肥つて鰌すくひ、アラ、エッサッサ、アラ、エッサッサ
あほだら經はどうぞいな。

いいや、ジャズだよ、ジャズ、ジャズ、ジャズ、
白人どもはちかごろ黒人よりも
まだ××××が生えて、
もう十三で性にめざめ、
離婚、姦通、××××、
みんなジャズのせゐ、ジャズ、ジャズ、ジャズ、
熱帶世界の神聖卑俗、
それはアメリカ、次ぎは日本。

日本はいいなあ、アメリカ出店、
貧乏國の資本主義、
借金だらけの借金から
冷忍頭が光り出す、
ジャズで踊れよ、協賛踊り。

卑俗は勝利だ、壓倒的勝利だ、
道德、人情、ヘッたくれ、

大阪言葉で、どうだつか、
儲かりまつかでやツつけろ、
大阪言葉で色話、それぞ卑俗の頂上よ、
卑俗たれ、卑俗たれ。

これぞ痛切な自己叛逆、
おれはあらゆる卑俗でもつて
おれの魂を窒息させる。
一切の苦悶を毒殺する。
これぞ我が生、我が生の道、
卑俗、俗悪、悪趣味萬歳！
生活萬歳！　人間萬歳！

昭和四年二月一日—十七日
（東京）

第二編

×

おれは赤裸にみんな云ふ、
おれの古傷、怪我のあと、
おれのいのちの全心に
三十八の刀傷。

おれが眉間のこの傷は、
かの光秀が受けたといふ
滿座の中の男の恥、
消すに消されぬ無念の傷。

おれが片頬のこの傷は、
藪の中から投げつけられた
つぶてがかすめて行つた傷、
身には覺えのないものを
戀の意恨と人はいふ。

おれか腕のこの傷は、
ほんのわけない行き懸りから

生命をかけて渡り合ひ、
相手もおれも傷ついた
おれのおろかの生證據。

おれが向う脛のこの傷は、
仲間の男に闇打されて
竹槍ではらはれた傷
笑つて逃げたゲラゲラ聲。

あの傷、この傷、一つ一つ
しらべ上げれば上げるたび、
おれの心の傷がうづく、
胸に刺されたこの傷か。

おれが致命のこの傷は
愛する女の嚙んだ傷、
風が寒けりや湯につけりや
いつもチクチク痛み出す。

消すに消されぬ傷なれば
隠して果すも何になる、
おれは赤裸にみんな云ふ
おれのおろかさ、みぢめさを。

おれは着物をみんなぬぐ、
褌なしのすつぱだか、
どうでもしろとさらけ出す
三十八の刀傷。

×

よくも云つたナ、
氷の俎に
褌なしの
すツぱだか、
大の字なりに
寢そべるとは。

ピンとした鯉、
いなせな鯛、
風呂場の長兵衞、
男一匹、
氣のすむやうに
料理しろ。

男を賣つて
立つ男、
それは任俠。
これは愚痴、
鯉ぢやござらぬ、
泥鰌（どろじぜう）、

料理するほどの
魚ぢやない、
おれに水野は
ないならば、
自分で自分を
料理する。

愚痴な男も
意地はある、
泥の鰌も
誇りはあるぞ、
莫迦にするない、
弱氣蟲。

弱氣の果ての
この強氣、
なんの世の中
氷の俎（まないた）、
紅く染めよか
凍らぬさきに。

褌なしの
すッぱだか、
寒い海鼠と
凍るより、
おれの生血で
死をゑがく。

×

おれは裸身の苦行者よ、
なんの世間態、かまふものか、
人のおもはく、何のその、
おれは人間、こんな奴だ、
何とでも云へ、何とでも打て。

おれは人をも裸にする、
追剝のやうに着物をぬがし
女泣くとも化粧をはがす。
嘘いつはりはみなあばく、
浮世のカラクリ、こんなものだよ。

さて、おれの仕事もめつかつた、
ザティリッシェ・ディヒテル、
一つの立場ももたぬもの、
すべての黨派の外にあるもの、
ただ一つ、笑へ笑へ、嘲笑へ。

うたへ、うたへ、
うたつて笑へ、
笑つてうたへ、
嘲り罵り、愚弄せよ、
人の矛盾をさらけ出せ。

×

友よ、ゆるせよ、わが歌を、
甘くいためる戀の歌、
その日のパンにくるしみて

喘げる伴をよそにして、
いつも女をおもふとは。

ゆるせよ、罪と知るものを、
とめてとまらぬ、いかなれば、
われも男の數なるを、
今の社會を恥として
正しき世をば求むるを。

生れて一度、一度すら
愛するものを得ざりしは、
貧しくつらき生れゆゑ、
ただ饑ゑたると渇けると
寄りにし夫婦、戀ならじ。

生れて一度、一度きりの
わがこの願ひかなへよかし、
愛するものと相合はば

われは新たの力もて
世の闘ひに入りぬべし。

×

いつまで戀をするものか、
長き願ひのかなはねば
共棲む女のあらざれば、
いつも戀路に踏み迷ふ。

われをはなさぬ人ゆゑに
昔の罪のあとゆゑに、
訪ひくる女に惹かれては
いつまで戀をするものか。

夫に近づく女を自分の友として
なさけかけるが妻の智慧、
義理の絆でくくられて
ロビンも逃げて歸りしか。

いかに心は動くとも
妻の位は望み得で、
やはり日蔭に生きむとは
あまりあはれな富士の人。

われをはなさぬ人ゆゑに
共棲む事のかなはねば、
たまの逢ふ瀬をたのみにて
西と東になげく身か。

いつ果てるともわからない
わがもの狂ひ見る人は、
莫迦な男もあるものと
あきれて物が言へなからう。
四十、五十になるまでも
いつも滿たざる心から
女を求めて歩く姿、
おもひみるさへあさましい話。

戀、戀、戀と泣いて歩くこと、
つひには阿呆らしくなりはせぬか、
早く切上げて納まるならば
われも男となるべきに。

人の五慾を制するみちは
その欲望を滿してしまふ外はなし、
禁慾をして情慾の餓鬼となるより
慾を滿たすが解脱(げだつ)のみち。

それは知れども、何としたものか、
それが出來ない意氣地なし、
いつまで戀に狂ひつつ
いつまで戀の詩をつくる？

いやだ、いやだ、おれがいやだ、

義理人情は昔のことよ、
情熱よりして成される事は
善惡の彼岸ならずや。

つめたき人も折れたるを、
なさけいやます君なれど、
われもあはれと思へども、
とめてとまらぬ戀なれば。

いとしき君と共棲まば
愛ははじめて滿たされむ、
惹かれ惹かれて相寄らば
戀は果實となりぬべし。

戀の狂ひも、戀の詩も
遠き昔の夢として、
雄々しき業にわが立てば
君はやさしく助けてむ。

いつまで戀をするものか、
痴れたる男とみし人も、
家ををさめて世につくす
人としわれを認めてむ。

×

時代の大きな戰ひに
人が戰はなければならぬとき、
いたづら好きのアモレットに
槍と劍とを奪はれて、
花の鎖にからまれて、
戀のよろこび悲しみに
すべてを忘れてしまふといふ
ハイネにわれも似たりけり。

人よ、咎めそ、なまけもの、
裏切りものとむちうつな、

われも爲すべき事は知る。
かのマティルドを得しのちの
ハイネの如く戰はむ。
されどまづ、マティルドを與へたまへ、
わが心の、肉の渇きを鎭めたまへ、
かの愛する女を共に棲ませたまへ。

×

若い女や美しい女や、
いかに美しくとも若くとも
ちつとも目につかず、
欣々然として、たんのうして、
家にぢつとしてゐさへすれば、
何といふ事もないのだが。

家庭の平和をたのしんで
妻とふたり、お茶でものんで
世間話をして暮らす、

これが淸閑、これが閑寂、
むかし好んで云つてゐた
枯淡の春に住めたらば。

あの耳の遠い若い詩人が
おれの閑寂ぶりを見て、
ハイネに傾倒した人ではないか
今時分からあれはをかしい、
あの枯淡好みには無理がある、
今に破れるぞと云つたとぞ。

わづか三十を越したばかりで
枯淡、淸閑、閑寂心、
それは嘘だよ、ボオズボオズ、
さう云はれては不服だつたが、
さすが世間の眼は高い
そんな男でおれがあるものか。

そんな淡泊なこのおれか、
そんな出來上つたこのおれか。
それを願ひはしたものの
なれて納まる日は遠い。
おれは火の酒、歐羅巴魂、
おれはいつでも未成品。

迷ひ迷うて、身を痛め、
煩惱地獄に狂ひ死ぬ、
それがほんとのおれだもの。
戀も女も知らずにすぎて
地味に地道に來た十年、
今はくやしいおろかもの。

これがおれよと知るものの
花はいつでも咲くものか。
好きな女と住めるなら
狂ひの花も果(み)はむすぶ。

願ひかなはば、お茶でものんで、
なんて靜かな春でせう。

×

人にかくして書ける歌、
人にかくして讀みたまへ。
ふたりの事はふたりきり、
よくこそ云ひし、きみなればこそ。

君が好める名をつけて
ただひとりして呼びませと、
きみぞうれしき戀の妻、
はじめてぞ知る、戀のうれしさ。

げにや、きみこそ戀のため、
なさけのためにつくられし。
きみのからだは樂しきも
きみが心はなほ樂しきを。

きみと手とりて入(はひ)りなば
いかなる世をば見るべきか、
きみがかかぐる帷(とばり)のうちに
いかなる夢の待つらむぞ。

やがて花咲くその日まで
きみはひとりの心妻、
きみにその名をあたへなば
それぞ心の指環ならむを。

きみはあるじの手にあるも
われはこの家(や)にとどまるも、
その名を呼べばきみが夫(つま)、
呼ばるるときはきみもわが妻。

たとひ離れて住めりとも
たつた二人の世をつくり、
夢の國での夫婦(めをと)なか、
しばし憂きをも忘るるものを。
いかなる名もてきみを呼ばむ、
きみに足るべき名もありや。
わが好む名も好まぬも
きみの名なればうれしきものを。

×

(すてられて
歸る家なき
わが心、
たそがれを吹く
風の冷たさ。)

これからもしもそんな時がありましたら
おすがりしてよいものでせうか、
そんなになつてからでは遲いでせうか。
遠くから、遠いところから、微かな聲で

そつと遠慮がちにかう訊く人がある。
心と心の無線電話で、
女の胸から男の胸へ、
富士のおろしの風のまぎれに。
魂と魂との觸れ合ふ一瞬でもと、
空しく求め求める人の言葉、
それは女の弱い言葉よ
女らしさの美しい表現、
そのたわやかさはうれしいけれど、
男の言葉はもつと荒い。
甘い言葉は、今はおれも嘲けるよ、
おれはもつと露骨に卒直に云はう。
君は來るのだ、おれの胸へ來るのだと。

そんな時は、女が捨てられたときは、
いつもほかの男が待つてゐるものだ。
だが、おれは待たない、二臺の車、
いつも二臺は用意すると誓つたものを。

おれは俥でも、馬車でも、自動車でも
捨てられた女を迎へに行くよ。
小鳥のためにはいつも一つの巣を用意する。
だが、おなじその巣に迎へとるのに
捨てられるまで待たうとは、
春の日長の畑仕事、
時代ばなれのした氣の長さ。
それは男の恥ではないか、
われも男と生れたものを、
君があるじにかなはずて
おのれの妻にさへられて
世の取沙汰にはばかつて、
心のうちにひとりくよくよしながら
のんべんだらりとしてゐたら、
それが果して道德的な事だらうか。

すてられた女、すてられた女、
ボッティチェリの畫の女のあはれ

そのあはれをこの眼に見るべきか。
君はいつでも捨てられる、
あまり情のこまやかに、心の弱く、
男を捨ててゆく女の強さがなくて
われから出て行く我がなくて、
たつた一人が恐ろしくて
男の力に引かれるばかり。
おなじ仕事を見つけるならば
なんで東京までは出なんだか、
靜岡あたりで中どまり、
女らしさの氣弱さが、男にも中どまり。
惚れつぽい人だもの、あの初戀人の
あまた遊んだ女のなかで
最後まで行つてしまつたのは君ひとり、
男の情にほだされて
すぐにその手にまとひつく女心の、
いとしや、捨てられるまで待たうとは。

（龍爪も
らくだの山も
片かげり、
畑仕事に
今日も暮れたり。）

山がよく晴れてをります、
こんな靜かな景色を、おなじ心持で
靜かに眺める事が出來たなら
どんなに樂しみな事かとおもひますと、
君が思ひはわれを呼ぶ、
あこがれ心いぢらしけれど、
それは女の、ただ感情の滿足ばかり。
それに惹かれた去年の男、
今年は男らしく、その繰返しは厭やだ、
大東館の夜半の涙を
今におのれは忘れぬものを、
ああ、あの子供らしい不決斷はもう厭やだ。

今年こそおれも男だ、一人前の男の道、
なんにも云はず、事をする、
出れば迎へる、巣をかまへて
逃げて來た小鳥を兩手でかばふ。
ミス・ロビンならば、はじめから
家持つ女でなしときはまれば、
行き盡せぬもことわけが立つ。
君は家持つ女にと生れついた人だものを、
家が持てないそんな惱みに
ふたりの家を持たぬなら、
二臺の俥はボロ俥。
捨てられた女の涙は見ない、
解き放たれた女を見たい。
自由、自由は空言(たはごと)ぢやなし、
女一人の自由を成し得たら
おれの自由も踏み出せる。

×

早春はいつもおとづれ、
春の、いのちのそのおとづれ。
去年來た人は、冷たい火、
さしも堅い殼(から)さへぶち割つた
なんて力のある女、いや無鐵砲。
おまへはその眼(め)で、その唇(くち)で、
おれをいのちの波打ち際に
引き出してくれた女だものを。
捨てたのでなく、捨てられたのでなく
云ふに云へないその別れかた、
これが詩人といふものか、
常識の判斷つかぬそのおろかさ。
殼はやぶれた、堰(せき)はきれた、
男一匹、どうなるものか。
とめてとまらず、滿たされず、
何處まで迷うて行くものか。
人のさげすみ、おのれの憎み、

こんなやくざもの死んぢまへ。
死ぬに死なれぬ、まだもう一つ、
消えのこる雪のひとかけ、富士の雪
溶けて消えたらまた降るものを、
かうしていつまで生きるつもり。
生きられれば生きる、無理には死なぬ、
卑怯未練な男だものを。

松の枝ぶり、波の音、
車のそとの白い水、
見ては聽いては、行つては止まる、
いつもいのちがぶらさがる。
戀にいのちをかけると云へど
かけるいのちの戀はない。
世間も名譽も體面も、なんの糞だよ、
さう云ひながら、これが人間.
右を見かへり、左をながめ、
まあなんて、みッともない圖だ。

わらふものはわらへ、打つものは打て、
打ちのめされたら死ぬまでだ。

春のはじめに來る人は
いつも凍えた胸を溶かす。
今年の人は、燃える水、
その眼の水に濡らされて
われもいのちに粘りつく。
今は一人につながれる.
これが最後の切札よ。
ただ一本の綱、ほそくとも
おれを此の世に引きとめる
最後の執着、たのみの綱の
これが切れたら、もう往生よ。
きみにいのちはみな任す。

×

去年の三月、

今年の三月、
春はふたたびかへつたが
破れた夢はもうかへらぬ。

三月二日、雨が降つた、
今年も二日、雨が降る。
去年の涙は眼から眼へ、
今年は胸の中へ降る。

ああ、たつた一年で
何もかも、こんなに變るものか。
たつた一夜の夢であつたか、
あんなに長かつたその一年も。

おそろしい廻り舞臺だ、人生は。
ダアクチェンヂ、
パッとあければ、その一瞬、
舞臺はすつかり變る。

我儘氣儘な人妻は、
華かなシャンデリエのもとに
エプロン姿のウェートレス、
その眼の隈ぞ深まさる。

思ひ出だすは大阪あるき、
三越で割烹着を買つてかへり
蘆屋の二階でそれを着てみて、
細いからだが一層ほそく、

可愛らしいと見て云へば、
うれしいのね、それではこれで
御馳走をしてあげるわよ、
待つてらつしやいと云つたつけ。

それも痴人の夢ばつかり。
白きは似たるエプロン姿で

アカダマの二階の勤め、
思へば夢のなげかるる。

みんな夢だよ、彼女は女給、
そんならおれは何である？
ここでおれが死んだなら
この芝居は一通り筋が通る。

二日は雨、三日は風よ、
銀座から日本橋へと土産買ひ、
その風に吹き分けられて
汽車のなげきをまたするか。

ああ、その煙だよ、戀も望も。
女給勤めも寂しいものを、
寂しさゆゑになほとはしやぐ
その笑ひさへ耳に聞える。

泣くかはりにおまへは笑ふがよい、
おれも歎かぬ、おれも笑ふよ、
おれも最後のたのみの綱が
切れたら笑つて死ぬだらう。

おれが死んだら、それで幕だ、
みんな終りだ、さやうなら。
ちよいとセンティメンタルで古めかしいが、
それでも、まあ一寸した芝居だ。

×

三月五日、
春の大雪、
わかれの涙の
凍る雪。

眞白な雪をつぶして
はしる自動車

人をもつぶし
身も汚す。

一年ほどゐたいと云つてゐた
それは嘘ではあるまいに、
あの重たい三つのトランク見れば。
それにただ半月でかへるとは。

身も世もかろくあしらへど、
さすが女の、義理か、不安か、
なぜにわかれて行くものか、
なぜにおのれは止めなんだ。

みんな夢だよ、
かへらぬ愚痴よ、
消えたあの雪
また降るものか。

三月五日、
春の大雪、
空に降つたと
歎く雪。

×

一年たてどたたぬは心、
まだ消えぬのは心の雪、
いまもいつでも歎きだす
妻の夜啼きに寝られぬ夫。

家をこはして女給の勤め、
罪のむくいと氣がすむものか、
いまはあはれをかくるとも、
妻にそむくは夫の心

かくもはかなき今の身ならば
など斷たむとは極めてし、

など今一度たづねぬと
わが悲しみは癒やされず。

こちらが不滿をいだくだけ
妻は女をいとしがる。
憎み憎んだ女でも
今の姿をしんぞあはれと。

わたしに義理を立てたのよ、
あの子はいい氣だこの子だものを、
あなたと二人で外から歸つた晩、
わたしが國へ歸へるといつたらば、

わつと泣いて、歸つちやいけませんと、
ほんにまごころから云つたもの、
あんなに急に逃げて歸つたのも
それゆゑとこそ、妻のかばふに。

それを聞くだけ、女が苦い、
なんと不思議なふたりの心、
どうしてこんなにまはるやら、
上れば下る釣瓶かしらん。

長の夫婦とつれそうて
今はかうまで背中あはせ、
つくづく悲しとおもへども、
もはや心がままならぬ。

思ひやりから、ふと家持つた
若氣のあやまち、これほどに
重く償はねばならぬとは。
ああおれは阿呆だ、人間本能の横紙破りだ。

×

おれは淸玄、法界坊、
それとも味な安珍か。

色坊主ではたしかにない、
生臭坊主、墮落坊主、
破戒無慚の惡僧か。

いや、いや、おれはもつとひどい、
どうやら民谷伊右衞門らしい。
きのふは理想の良人、けふは伊右衞門、
破れかぶれのふてくされ、
變れば變る人の心よ。

家庭の平和をたのしんで
悟り顏して過ぎたおれが本當か、
心の底に潜んでゐた惡鬼羅刹、
さらけ出して生きるが本當か、
地獄極樂、これがわかれ道。

おれは紳士か、道德人か、
いや、おれは破産の宣告を受けた男、
精神主義、人道主義の總倒れ、
過去の仕事も人生觀もみんな泡沫、
それでまだ理想の夢が破れぬのか。

まづ、一人の女を不幸に沈めて、
それから社會をよくしようとは、
なんのたはごと、勝手ごと、
それは空證文、不渡り手形、
さうは世間がゆるすものか。

きのふまでは我(われ)を抑へて來た心、
なんで破れて荒れ出した？
民谷伊右衞門、破れ傘、破れかぶれで、
それで自由の、理想の戰士となつて
生きようとは、蟲のいい男だ。

×

Pity's skin to love で

可哀相から、つい深入りの
きみをあはれのその戀心、
いつもおもひやりから戀になる、
さうした男も世にはあるもの。

おれはいつでもそんな男、
戀にはあらぬ人道主義で
つひにおのれがあはれになる。
いつも難破の船板の上、
溺れた同士のたすけあひ。

いまもまたまた、また難破船、
救ひと救ひ、ピテイとピテイ、
それで二人が助かるために
ふるいピテイを消さうとは、
むかしのあはれが憎いとは、

あさましい凡夫の心、凡夫煩惱、

愛といへども、まことは利己よ、
わがためいつも女を犠牲.
それで何する、何の理想、
社會改造なんぞはみな駄法螺、
そんなえらい男でもない奴が。

×

もいちど生涯のやりなほし、
それが出來るか出來ないか、
出來ずばままよ、死ぬばかり。
死ぬるつもりでやつてみろ。

過去の善根、惡業、何もかも
愛も、恨みも、みな振捨てて、
もいちど店のたてなほし、
盛りかへせるかかへせぬか。

死物狂ひで、陣立て直す

その氣力がまだおれにあるだらうか、
なければ、これがなんの愛?
きみをあはれといくら云はうと。

生か死か、死か生か、
甦生のこころみ、起上るにも
スプリングボオドが要るものか、
その道づれにきみこそと。

女の力にささへられ、
女の愛に息吹きかへす
弱き男とさげすむものか、
強き男もかくあるを。

われをばたのむかよわい女
それをたのみの愚かな男、
飛び立つ力なくば罪の上塗り、
愛よ、力をわれに與へよ。

×

のがれむと、のがれむと
つひに心は定めたりや、
さしも久しき忍從のその苦しみも
もはや堪へじとわれたりや、
心のたから、光の寶石と
いつくしみし愛もくもれりや。

わが心わが身一つのおきどころ
この裏山の茶畑の中と來て歎く、
女心はいぢらしや、つらきはいのち、
疳癖のあるじと文字なきその妻とに
かしづいて來たいくとせの
妻ならぬ妻のつとめは空なれや。

茶畑の中にすつぽり身を伏せて
君をおもへばわが身かなしと

歎く人、歎く姿の目にも見ゆるに、
わがひととせのなほざりが
そのひととせを泣かしめて、
われも秋、冬、病みけらし。

女(をんな)われ三十路(みたち)近うて今もなほ
娘ごころを持つといふ、
きみはいつでもきむすめ心、
珠はいつでもくもらざれ、
くもらで澄めよ、愛の波、
きずつける心を癒やすまで。

妻ぶりて君がかたへにあらむ日の
夢にだに來よと待ち待つ人よ、
夢ならで、現(うつゝ)にきみを今年こそ、
妻とし胸に圍(かこ)ひなば、われも男ぞ、
きみとしふたり住む家は
浮世はなれし愛の巣ぞ。

この年ごろの營(いとな)みは泡と散るとも、
去年(こぞ)、春、夏のくるひの夢は雪と消え、
二つのきづな今斷(た)たば、
かの日の誓ひ、茲にまことを通しなば、
誰かはわれをたはれ男(を)と見む、
ふたりの珠はくもらねば。

×

妻に苦しめられてゐる男といふものは
ときどき死にたいと思ふものだ。
若しそのきづなの家と家とのなひあはせ、
七重(へ)八重(へ)に身をからめるならば、
死ぬほかにのがれる道はないものを。
妻に苦しむ年長の友の心を
今日ぞしみじみ身に沁みて聞く。

四十を越してなほ純潔な心をたもち、

ただ性格と性格の相惹くところ
朗らかな異性の友の交りをも、
世にありふれた情事よと思ひ込まれて、
稀代の色魔と妻の憎み罵り。
さしも朗らかな友の心も
堪へがたきその憂鬱にくもれるを。

自殺と知られずに自殺したい、
科學的方法で此身の消えるみちもあらばと
歎ずる心、われも去年の秋の惱みに知る。
かのスタンダアルがブラハム卿と死を語り、
自殺の原因をとて私生活を搔廻されるを厭ひ、
漁舟に乘つて海に出る癖をつくつて、
嵐の日過失の如く海へ落ちむと願うたのを。

帝政時代の露西亞の如く離婚の許されねば、
生ける屍、いかばかり世に迷うたぞ。
結婚制度の紐のゆるんだ今の社會、
共によりよき幸を求めて笑つて別れる、
そんな夫婦も隨分あるものを、これはまた
あまりにわれをたよる妻ゆゑ、
心弱さに、われと自ら生ける屍か。

おれはおれの妻をしみじみいとしと思ふ、
こんな詩を書いて、その誇りを
永久に傷つけることを悲しいと思ふ。
いい妻ではあつた。まごころこめて
この幾年盡し盡してくれたものを、
誰は知らずとも自分でよく知るものを、
なぜ、こんな心に成つたのか。

いい妻ではあつた。けれどただ戀でなかつた。
おれの古い道義心はこれをさいなむ、
されど新しい道德が新しい途へと誘ふ。
いかに事無く暮したとても、それは糊塗、
年上の妻に愛される燕や雀、それは厭や、

それより、おれが愛したい、おれの小鳥を。
男になつた男の願ひ、これが罪とは。

妻のためにどんな事でもしてやりたい、
模範的夫婦として一生つれそふ事を除けば。
よき友として、一生盡してやりたい、
彼女の新しい生活を祝福してと思へど、
友となる位なら死んだがましと云ふ。
これで一生續くなら、何といふ生涯、
これが自由人とならうと願ふ男か、これが。

遊戲だけは許してあげなさいと
その夫の遊戲に苦しんで來た妻の友は云ふ。
遊戲ならばいいけれど、眞劍だから
困ると妻はいふ。戀の遊戲をせぬ男、
また眞劍を叱られるか、この糞眞面目。
よかれあしかれ、これがおれの性分、
それこそ罪よ、きみを遊戲に戀ふならば。

妻に苦しむ友は、妻の監視をはなれ、
獨り隱れて住まうと云ふ、ただ獨りで。
おれも獨りで住まうと云へど、
性愛なしに女の友を親しむ友と變りて
おれはまだまだ、まだ充たされぬもの、
それを此世に充たさむと、戀する男、
きみと二人で住まれずば、それぞ死のとき。

×

新しき幸(さち)を
かなたに望みつつ、
などわが心
しづむらん。

遮ぎる力
つよきほど、
愛は力と

燃ゆらんを。
またかの眸(まみ)に
うちむかひ、
涙ならずて
微笑(ゑま)ましを。

きみいとしさの
ますほどに、
心の重荷
ますはなぞ。

×

四月、死なむと
せしころに、
きみの姿に
招かれぬ。

わがくるしみの
ますなべに、
きみのいのちぞ
燃え立ちぬ。

五月のいくさ
しづまらで、
今ぞまことに
戰へと。

きみはいのちを
ささぐれば、
われもきみゆゑ
火を取りぬ。

×

嵐の海に
乘り出でし

舟は事なく
かへりけり。

きみに救ひを
求めてし
去年のなげきも
しづまりぬ。

いまはきみゆゑ
乘りいでむ、
いかに嵐は
あるるとも。

きみも今こそ
死ぬばかり
われに救ひを
求むれば。

×

船は帆あげて
錨を卷いて、
風の出るのを
待ちに待つ。

吹け吹け風よ、
生でも死でも、
けふの舟出に
よい風を。

去年は空しき
港入り、
積荷もなしに
かへり來ぬ。

今はもろとも

この舟出、
海のなかばに
相會はむ。

二月二十日――三月六日（東京）

第三編

×

近頃都にはやるもの、
說教强盜、ピストル强盜、
公盜、贖職、醜僞員、
買收、收賄、利權漁り、
パニック、取付、銀行閉鎖、
幽靈會社、空米相場、
强請（ゆすり）、籠拔け、贋金（にせがね）づかひ、
戀愛賣買、美人局（つゝもたせ）、
猥本、猥畫、猥寫眞、
ブルジョアどもの猥映畫、
二業地增設、地主の運動、
賣家、賣店、閉店、夜逃、
値上値上に、ふみたふし、
保險金とりの放火事件、
親子心中、老人自殺、
不良少年、不良少女、
マネキン・ガアル、ステッキ・ガアル、
カフエエ女給、職業婦人、
ダンスホオルのフラッパア、
人妻までもホテル行、
ストリイト・ガアル毛斷化、
性解放のジャズバンド、
社會科學研究、學生みな退學、
祕密結社に、集會禁止、
失業乞食に、××××、
無政府主義者、共產黨、

白色テラア、暴行團、
まだまだあるぞ、出てくるぞ、
どえらいものが出てくるぞ、
金持新案防射設備を施して
　御用心、御用心。

×

神の國は近づけり、
悔い改めよと、野に叫ぶ聲があつた。
今はいくら叫んでも、無駄なことだ、
悔い改める人間ぢやなし。

針の穴を通る駱駝より
なほ小さきは、
大ブルジョアの人間味、
同胞愛よ、互譲よ、正義心よ。

古き宗教はみな僞瞞、坊主も牧師も、
ブルジョアどもの幇間(たいこもち)、太鼓叩いて
その少しばかりの良心を眠らせて、
喜捨を受けては、天下泰平。

坊主も、牧師も、神主(かんぬし)も、
大檀那方の御機嫌とりに、
舌三寸にをどらす神樣、佛樣、
いい氣持で善男善女を居眠りさせる。

眠るな、友よ、でたらめの
說教なんぞにばかされるな。
金で買はれる神樣よりも
心の中の神樣を信仰しろよ。

××の日は近づけり、
いざ×て、×つて××を取れと
都會に叫べ、農村に叫べ。
××勝てば、それが天國。

×

ソヴェト法によれば、賣笑の取締方法は、賣笑婦そのものゝ取締を行ひ、又はその罪を問ふことではなくして、婦人をして賣笑を行はしむる如き條件を與へるもの、即ちその媒介者又は建物の提供者を監督處罰するにある。

「ソヴェト法と婦人の權利」

金で賣られて、泣きの涙で、
やけのやんばち、日蔭のかせぎ、
闇に咲く花、白粉の花、
靑く蝕む毒の花、
鼻も落ちるぞ、骨も腐るぞ、
附鼻、附頰の大口女、
したたかものの名の通つた
洋妾お何も、もとは處女。
それも誰ゆゑ、ただ金のゆゑ、
女に罪はないものを。

賣笑婦ばかりが罰せられ、
拘留、罰金、えらいお灸。
弱い女の血を搾り取る
奴隷賣買人でなし、
みんな紳士よ、大手を振つて、
ペロリと長い舌はいて、
髭をひねつて市會僞員。
そんなバカな事があるものか、
あるはあるわよ、そんじよそこらの、
ところはロシヤの××國。

ロシヤは赤鬼、鬼のおきて、
娼家の主人ばかりが罰せられ、
娼婦は何の咎めなし、
みんな社會的、經濟的の缺陷からよ、
女の頽廢の罪でなし、とは無茶苦茶な。

何といふこれは無法な法律か、
紳士、僞員を處罰とは。
ブルジョア道德、いきまく蔭から、
これは不屆者め、こそこそ云ふ事きけば、
鬼の方がどうやら正しいて。

×

女は賣淫せねば食はれない、
男は乞食か、强盜か。
それが出來ねば、死ぬばかり、
親子心中、老人自殺、
食へなくなれば、みな自殺。

入學難に、就職難、
×××はみな××。
××しろとの施設して
したらわるいと××する。
無理が通れば道理引込む。

保守的農民、みな過激、
食へなくなれば急進主義。
中產階級、みな倒產、
（一行削除）
行くべき道はただ一つ。

國は狹くて、移民は禁止、
それで避姙はまかりならぬ、
墮胎は法度、刑務所行。
生めよ殖えよの鼠算、
××××と祝ふ頭のよさよ。

すしづめ、共食ひ、何のその、
これで一體どうなる事か、
どうならうとも、こちや知らぬ、
××××でごまかして
うまい汁さへ吸へばよい。

×

女はみんな淫賣と
ののしる事のおろかさよ。
それもみんなこの世の金のため、
金に恨みは數々あれど、
女の恨み、盡きやらぬ。
淫賣しなけりや生きられぬ、
操を賣らねば生きられぬ。
これが女のさだめだものを。
可哀相とはおもはぬか、
フェミニストでありながら。

藝者を買つて、好遇されて、
ほくほくにやにやした奴が、
愛した女の打算を知つて
あとでなぜまた腹立てる？
なんとをかしい人間性よ、

これが男心か、アホらしや。
まあ、恥かしいぢやあるまいか。
女だとても人間だもの、
食はねばならぬを、打算は當り前、
それがわるいとは男のエゴイズム。

かれが女給の身となつたのも、
これが日蔭の身となつたのも、
それもみんなこの世の金のため、
金に恨みは數々あれど、
女の恨み、盡きやらぬ。
男から男へ轉々として
果てはどうなる身の上ぞ。
十年いかに盡せばとて
出されるときは何もなし。
これが女のさだめだものを。

女のあはれ、しみじみと

胸にこたへて、男もあはれ。
どうにもならぬこれが浮世か、
かれは家ゆゑ會ひもせず、
これは妻ゆゑ呼びもせず、
大阪道頓堀のアカダマの
女給のあはれも辛(つら)きものを、
またも日蔭になし得ねば
もとの日蔭に置くも悲しや、
女に罪はないものを。

×

宗教、宗教と口にして、
古聖賢の文字に讀みふけり、
童顔の老師の提唱を聽き、
骨董あさり、古書あさり、
宗旨しらべ、お寺まはり、
われに親しきかの友の導きのまま、
恒産ある人にならひて、
物を忘れて心に醉へる
精神主義、はた日本主義、
そはわが一期のあやまちなりき。

自然の愛を口にして、
芭蕉の寂びにあこがれて、
古心を探り、寂心を得むと
二等車の旅、溫泉めぐり、
俳諧いぢり、庭いぢり、
世を安らかに宥和の眼もて見る人、
その心境の滿ち足れる人にならひて、
人間を忘れて自然に醉へる
古典主義、はた唯美主義、
そはわが一期のあやまちなりき。

もとより、それは僞りならじ、
意味なき事にもあらねども、
ただ、今の世の事ならじ。

今の時代を何とか見る？
非常の時ぞ、嵐の前ぞ。
この非常の時に、何なれば
悟道、超脱、出世間、
閑寂、閑文字もてあそび、
自己陶酔、自己催眠、
そはわが一期のあやまちなりき。

げにや、おのれの五年間、
そはげに、またき眠りなりき。
わが苦しみはとにもあれ、
わが貧しさはかくもあれ、
その日の食にも事缺きて、
苦しみ惱む人の一人だにあるとき、
何のための自得よ、あやふく反動の
手先きにとならむとせし
かの五年間に呪ひあれ。
そはわが一期のあやまちなりき。

×

自然主義より人間主義、
調和主義より闘爭主義、
唯心主義より唯物主義、
古典主義より時代主義、
唯美主義より功利主義、
保守主義より急進主義、
日本主義より世界主義、
個人主義より社會主義。

飛べ、そこへ、ただ一飛びに、
おれも、君も、君の友も。
動かで立たば、おれも君も、
人道主義でも、自由主義でも、
みな一束の反動主義、
キャピタリズムの犬、ブルジョアの馬。
かの×××に、かの××に、

犬馬の勞を取ると知れ。
中立はなし、局外はなし、
赤十字はなし．この××に。

此世に生を享くるものは、
社會の一人と立つものは、
口ありて飯を食ふものは、
赤十字でなし、みな戰士。
全社會はこれ一樣の戰場、
陣營は二つに分たれたり。
弱く貧しき者の陣に入れ、
そこにただわが生はあり。
溝を飛ばずば、生も死よ、
飛び損なへば、身は破滅。

飛び入れよ、ただ一氣に飛べ、
おのが命のすべてを擧げて
無產階級の陣營に入れ。

今は自然をたのしむ時ならじ、
調和と美との時ならじ。
この不調和を何とする、
世界を擧げての大崩壞、
必死の戰さの戰はれるとき。
わが身と心の病を癒やすべき
唯一の醫藥ぞ、ただこの方向轉換。

×

飛び込め、
深淵に。
燃えさかる火の深淵に、
赤き火と燃え果てんため。

をどり込め、
狼の中へ。
嵐に吼える狼の一匹として、
夜の闇に高く吼えなんがため。

一切の虚飾を棄てて、
赤裸と立て。それが生だ。
いのちに火をつけて、火を搬べ、
すべての××を火もて燒け。
火で燒けぬものは血もて燒け。

一切の×を斷つて、
身ぶるひ起て。それが生だ。
かなぐり棄てるものは、一切の過去、
わが方に立たぬものの一切は敵。
敵陣の鐵壁に爆裂するは肉彈、
糸筋と迸り飛び散つて咲くは血の花。

×

不死なる人は
死を思はず、
死を恐れず。

かのブルジョアは
死を恐る、
死を忘れんとて
血をすする。

我等の伴侶は
死を思はず、
死を恐れず。
彼は不死なり、
滅ぼし得じ。
不死なるは
プロレタリエル。

不死なる人は
みづからが神。
ブルジョアの神は
木だ、銅だ。
プロレタリアの

神は人間、
血あり、肉あり、
涙あり。

戀と迷ひと
死の詩人、
わが肉身は
弱けれど、
われも不死なり、
その昔の
プロレタリアに
かへるとき。

×

鎗はさびても
名はさびぬ、
それは武人の
心意氣。

身はうらぶれて
朽つるとも、
昔わすれぬ
落し差し。

ペンは折れても
名は折れぬ、
それは詩人の
心意義。

たとひ時世に
あはずとも、
心の聲は
枉げられぬ。

×

雞軍の中の

一鶴、
はきだめの
鶴、
それは誉れの
詩人である。

鶴は千年、
めでたしや、
鶴は清高、
めづらしや。
君は古典的な
鳥である。

こちらは鶏(にはとり)、
いやしい鳥。
いくら玉子を
生んだとて、
鶏は鶏、
鶴ぢやなし。

玉子をいくら
生んだとて、
賞められはせぬ
あたりまへ。
玉子をうまねば
ころされる。

おれの詩は
おれの玉子だ。
それを食べながら
玉子は玉子、
鶏なんかと
言ひ捨てる。

だが、おれは鶏、
鶴でない

それこそ譽れ。
時代の鳥よ、
鶴と舞ふより
ときつくれ。

おれは鷄だ、
鷄の誇りをもつて
東天紅を
告げるのだ。
嵐の鳥が嵐を
告げるやうに。

おれは一ばんどり、
二ばんどり。
さあ、朝が來たと
聲擧げて、
人の眠りを
さますのだ。

×

朝は來る、
必ず來る。
××は來る、
必ず來る。

ただひと辛抱
ひと勇氣、
待て、待て、朝を、
朝の大氣を。

やがて夜は白む、
朗らかな
朝の大氣をすつと
窓に入れよ。

この夜の闇は

息づまる、
百鬼夜行の
この妖氣。

朝が來たら
幽靈は消える、
ブルジョア化物
みな退散。

希望はない
ほかにはない、
ただその朝の
光りのみ。

眠れる無産者
みな立上る
朝よ來れ、
はや來れ。

×

言葉は肉となり、
肉は血を流す。

理論家の言葉、
戰士を驅り立つる。

思想家の後(うしろ)に立つは
實行の鬼。

詩人の言葉も
人を醉はす。

わが父は酒造家、
よき酒をつくれりし。

最も强き言葉の酒、

その子われ、今ぞ造らむ。

×

萬國の勞働者
團結せよ、
その詩にまさる
詩はあらじ。

木強の學究
マルクスは
美の詩人ならず、
力の詩人。

優雅の詩人
たり得ずて、
階級鬪爭の
詩を成せり。

マルキシズムの
灰のうち、
赤き火と燃ゆ
詩はありぬ。

×

カアル・マルクスはよくこそ云つた、
かつては詩人たらうとしたマルクスだから。
詩人といふものはとんだ變りものだから
好き勝手にぶらづかせて置かねばならぬ、
普通の人間を量るものさしでも
また異常な人間を量るものさしですら
量つてはならないのだと。
かうして彼はハイネの政治的弱點を恕した、
そして、詩人と詩とを愛したのだ、
かつては詩人たらうとしたマルクスだから。

けれど、マルクスはやつぱりマルクスだつた、

ハイネに政治的諷刺詩を書けとすすめて、
永遠の戀の苦情をやめて、君こそは、
あまりに詩的な詩人どもに、正しくも
鞭をもつて詩の書ける事を示してやれとて、
「冬物語、獨逸」を書かせたのは
そのマルクスであつたのだ。さればハイネも、
マルクスの人物を冷淡、獨裁的と難じたものに
答へて云つたのだ、あの男は剃刀なのだ、
剃刀ならば人間はどうでもいいぢやないかと。

小さなイエンニイ・マルクスが病氣したとき、
マルクス夫婦も、手傳ひのヘレエネ・デムウトも
手を拱いて、絶望して立つてゐたとき、
入つて來て、それを見るなり、
子供はゆあみをさせねばならぬと云つて、
手づから用意して、抱き入れて、
マルクスの子供を助けたのもハイネであつた。
さうだ、精神上のマルクスの子の病ひを
ハイネは助けえないであらう、
だが、ハイネはそれを鼓舞し勵ますだらう。

×

一八四七年四月七日、シャルル・フウリエの命日、
サアル・ヴァレンティノでの年毎の饗宴、
舞踏場、戀の宴樂も、今日のみは
信仰の祭場となり變る。
未來を信じ、同胞の一致を信じ、
人生を常に新しい夢の端緒と信ずる人々は、
ここに集つて、その祖師の功德を讃へるのだ。
すでに十年、この記念祭は續いてゐるが、
社會主義の集會のかくも賑つた事はなかつた。
一八四八年の豫感がみんなを呼び集めたのだ。

ほとんど千にもあまる會衆の中には、
百二百、上流の婦人の姿も見え、
眞白な晴着をつけた子供たちも、

平和と幸福の國の到來を祝すとて
花もて飾られた長いテエブルについてゐた。
オーケストラからは樂しい音樂がおこり、
やがて演說が始められたとき、
會場の一隅にゐた獨逸の詩人マイスネルは、
わが名を呼ぶ人あるに、隣席(となり)を見返れば、
それは友なる詩人ハインリッヒ・ハイネであつた。

マイスネルは友の席へと近づいて、
二人は互ひに握手して、話に聽き入つた。
辯士は語つた、全人類の一致平和の
福音を案出したフウリエの天才を、
ライン彼岸の同胞への挨拶を。
瀕死の波蘭(ポオランド)の復活にとて萬歲は叫ばれ、
地上に戰爭のあとを絕たんがため、
婦人解放のために感激の乾杯はされた。
人類の進步のために戰つた死者を偲んで、
人々はみな抱き合ひ、眼には涙が浮んでゐた。

二人の詩人が會場から、瓦斯の燈(ひ)のついた
サン・オノレ街へ出たときに、
そこに佇んでゐる群衆の間を分けて、
快活な顏、廣い額の、青い眼鏡をかけた
ずんぐりした男が二人の前に立止つた。
その姿を見ると、吃驚したやうに、
ハイネはそつと友をおしとどめて、
自分もおなじく立止つて、早口に、
友の耳に口あてて低く囁いた、
「君、まあ一寸あの男を見給へ！」

「あなたもあそこにお出でしたか？」と
誰かがその青い眼鏡の男に訊(き)いた。
「いやなに」と彼は答へた、「わたしはただ、
通りがかりについ立止つて、
雜踏の樣子を見てゐたのです。
どの宗派でもおなじ歌を歌ふですね、

イエス・キリスト様、サン・シモン様、フウリエ様。
一體、誰をも拝まない日はいつ來るんです？」
さう云つて、青い眼鏡の男は
肩をそびやかして、ゆつくり行つてしまつた。

「あれは誰です？」とマイスネルは友に訊いた。
「あれを誰だと思ふ？あれこそムシュウ・プルウドン
それはただ人間の中での名にすぎない、
實はデモンなんだ。僕はあんな人物を見ると、
内心生き返つたやうな氣がするのだ。
商賣人や凡庸人ばかりを見てゐると、
僕はもう生きてゐるのが厭やになる。
美辭麗句にはうんざりするが、
あの男のたつた一言で元氣付く、
あの男の云ふ事はみな正しいのだ！」

「一體どんな人間なんです？」とマイスネルは
更に好奇心を煽られて訊いた。

ハイネは友の顔を見返して、聲を強めて、
「やつぱり人間と君は云ふのだね？
いくら青い眼鏡はかけてゐても、
人間ではないと今も云つたぢやないか。
あれはユウゴオやジュマをも凌ぐ程の
詩人の表現力を身に備へた、
あれは社會哲學者の姿をした
破壞の原理なんだよ」

「あれの著作は（警察用語で云へば、
放火書だが）まるで小説のやうだ。
頁をめくると龍の齒が落ちる。
今にそれが地から生え出して、
すばらしい實をむすぶだらう」
この言葉をハイネは妙な微笑をして云つた。
友の間で興ずる機智の微笑でなしに、
その政治詩に振りかけたあの破壞的微笑で。
そして、龍の齒は一本、日本にも落ちたのだ、

そして、その上に破壞的微笑の雨も注ぐのだ。

×

若き日本のふたりの女、
この四つの冴えた眼よ。
運命の不思議な導きから
ふと相見た人よ、君達を見るとき、
戀の詩人も戀を忘るる。

深い靑のマントにつつんだ
きやしやな洋裝に、詩人は想ふ、
かの佛蘭西のアヴェニュウで
アデュウする佛蘭西の若い婦人を、
ルイズ・ミッシェルと生ひ立つ人を。

眞黑な外套につつんだ
たしかな肩の洋裝に、詩人は想ふ、
露西亞のニヒリストの集會に
眉あげて語る露西亞の若い婦人を、
ヴェラ・サスリッチともなるべき人を。

一人は佛蘭西で暮したこともある、
一人は露西亞へ行きたいといふ。
若き日本の心はいづれに通ふ、
佛蘭西のサンディカリズム、
今は露西亞のボルシェビズム。

戰はずして、戰ひ疲れた
この弱い詩人の悔いの心に、
かすかに望みの火をかざす
新しい自由社會のあこがれと、
嚴しい團體的訓練の喜びと。

一年古き憂鬱に沈める心も
今は微笑みて、心の血を感ずる。
われを省みしむるは若い理智、

われを勵ますは若い情熱、
ふたりの友は詩人の詩をゆるす。

アメリカン・ガアルの斷髮ならで
ロシアン・ニヒリストの戀を斷つ髮、
アメリカ流の友達結婚ならで
主義につながる男女の結合、
ああ、戀の徒勞を醫やすもの是れ。

われにいのちの殘りなば、
生くべき道の二つありて、
戀の詩人も救はれなんを。
若き日本のふたりの女、
四つの眼のいのち輝く。

×

黑い花をめづらしと見る、
あやしくもはげしきものを
シンボライズするその花を、
時代の咲かしたその花を。

若き日本の女すら
いまは血をもて咲くものか、
長き囚はれに血は凝りて
黑くも匂ふ生の花。

獨り置かるる監房は
魂までも尖るとぞ、
頭腦鋭き秀才ほど
ただかくあるに堪へぬとぞ。

書もゆるされぬ獨房の夜は
追憶、沈思、胸を嚙み、
頭冴ゆるは肉負けて
狂ひいづると聞くものを。

よくこそ君はまぬがれし、
かのおそろしき夜を逃れ
また戰ひに入らむとて、
やつれも見えぬうれしさよ。

黑水晶の冴ゆるいろ、
沁み入る花の香は强し、
これぞまことの宗教よ、
その信念に光る水晶。

三月十一日—十五日（東京）

第四編

×

十二日から十五日、
あるじの留守に招かれて、

かの靜岡の市の中ほど、
一流では服に立つおそれがありますので
知合ひのない宿がいいと思ひますからと、
吳服町三丁目の魚安旅館、
宿まで定めて、おひる頃、
こちらにお着になれる樣お立ちになつて、
夕方までの間にお會ひしますから、
宿へおつきになつたらあの替名で、
すぐ電話をおかけ下さいませ、
女中にかけさせて下さいませと、
何から何まで氣を配る人のいふままに、
人目に立たぬその宿に落着く手筈。
ただたまゆらの忍び會ひ、
お互ひにもつと話し合ひ
理解し合はねばなりませぬからとは、
一體何を話し、何を理解しようといふ腹か。
女はやさし、わたしとの同棲生活を

それほどまでに喜んで下さいますの、
わたしは何を持つてむくいたらいいかとまで、
動くは心、それもまことや、
男々と立てられたらば
命投げてもかかるが男、
そなたばかりとのぞまれたらば
女は身をも心をも捧げてくやまぬ。
わたしはエチ様のやうに
頭腦明晰でもなければ、
エーさんのやうにテキパキと
皮肉な毒舌をふるふことは知りません、
然し、いつも洗濯したシャツと
お惣菜に氣をくばること位は
知つてゐるつもりですとは、
うれしい妻の心意氣。今度こそ、
兩親にも了解を得たいと思ひます、
正式の結婚をすれば勘當を許してやると
かつて父もいつたことがございますから、
いい加減に親にも安心させてやりたいと
思ひますとの言葉に籠る女の望み。

この招きの手紙、外套のポケットに
入れて何日、持ち廻り、
返事出さうか出すまいか、
行かうか行くまいかと、とつおいつ、
思案に耽つたのは何のため。
あんなに飛立つばかりの思ひして、
二月なかばに會うた日から、
そのたよりをば待ちかねて、
いつでも舟を出すつもり、
心の準備もしておきながら、
今更、このためらひは何故ぞ。
まづ雲影は、そのうれしい手紙の中に
一寸氣に食はぬところがあつた。
何もかも正直に隱さずいつてくれた
女のなさけはうれしいけれど、

その氣になるところ、一寸ではあるが、
それがどんな躓きの石ともなるまいものでなし。

お互ひにその足かせの重さゆゑ、
そこにこの戀、無理がある。
その無理をさしたる事に思はぬほどの
君ではないに、正直に告げた言葉は、
主人に少しの不平も不滿もないといふ。
はじめからそんな戀愛があつたわけでなく、
氣が付いた時にはお互ひはぴつたりして
長い間にお互ひの情愛は培はれ淨化されて、
深いところにまで掘られてゐると思ひます、
とは云へ、いろいろな係累にわづらはされて
氣持の晴々した事は一度もありませんとは。
係累さへなければ何いふ事もないのに
ただそのためばかりにと云ふならば、
さらばわが身は何となるのだ。
係累のないだけが取得のおれならば、
その係累をなくするために
何ほどの鬪ひ、何ほどの無理、
それをやり遂げなければ、話にならぬ。
やり遂げたなら、それでみないいものか。
愛の掘り返しやればいいのか。

ましてや、もつと辻褄の合はぬことがある、
そのなくしなければならぬ何よりの係累、
その係累について何といつてゐる。
たつた一人の敬愛するお友達ですもの、
エチ様を失ふことは、まして仇(かたき)になることは、
わたしには忍びないことですもの、
お互ひがほんとうに心から打ちとけて
氣持よく了解し合ふことが出來たならとは、
それは自欺、それは何より出來ない相談。
だから、あんなに決行を求めたものを、
非常手段は取りたくないといふ、
四方八方まるく納めて

家の勘當もゆるされて、
正式結婚したいといふ女心は
無理からぬ事とは思へども、
それではどうにもならぬものを。
とりわけわれにすべてを打込める
わが共棲む妻を說きさとすこと、
それは河を堰くよりむづかしいものを、
また、愛し愛されてゐるならば、それもむづかし、
あるじによく話して了解して貰つてといふとも、
何で無事に解決つくものか、
思へば何とも無理な話だ。その賢さの。

その心なら、折角行つてみたところで、
結局、ただたまゆらの忍び會ひ、
思ひを後に殘すばかり。
辛さは前に幾倍か。
もとより、女の性なれば、
強く出さへすれば、それですむ、
行つて、出會つて、話をはこび、
手をとつて、そして、それからと……
男のなすべき道は知れども。
今のあるじも、もとはと云へば、
まづ、家のものをみな外に出しておいて
ひとりの家に招き寄せて、戸に鍵かけて、
これは大變と立たうとするを抑へて
のつぴきならぬ膝詰談判、
それでも手に入れてしまへば愛がわく。
とにかく、暴力でも征服しさへすれば、
女は泣きの涙でもついてくる。
それがおれには堪らぬことだ、
それがいつでも出來ないために
おれはいつでも戀に破れる。
戀ばかりかは、事業もそれよ、
實際運動とても、その意氣が大切だものを、
思へばこれよ、これぞわが性格の呪ひ。

この性ゆゑに行つたとて、何の獲物ぞ。
所詮、無事で納まる事情ぢやなし、
もとより家はぶちこはし、
君があるじとは渡り合ひ、
さて、その後に來るものは
勝つか負けるか、男の勝負、
この勝負に勝算立つと思ふか。
その狐疑する心はや既に負けではないか、
この心ゆゑおれは一生負けて來た、
またその負けのくりかへしかと
思ふぞまこと。女心ははかられぬ、
かつて、その友人の妻を戀ひたりし
昔の友の話した事。
おれが三時間かかつて說き伏せても
もとの夫はつひ十分間で
ひつくり返してしまふんだからナと、
その苦笑ひ思ひ出されて、
六年共棲んだ男の力、莫迦には出來ぬ、
殊にあの女のあの性格だもの。
これがどうして恃まれようぞ、
行けば行くだけ苦しいものを。

十二日から十五日、
ここで行かうか行くまいか、
この戀やめて生きらりよか、
行つてみぢめに破れて死ぬか。
何はともあれ飛び込めばよし、
どうとでもなれ、會つてみて
手に入れられたらその上はなし、
不首尾であつても後には引けぬ、
接吻一つでも骨折損とはならぬもの、
かう思ふのが男、それぞ男よ、
卑しい算段どころか、それぞ戀なるを。
やはり卑怯な、弱い男かおれは、
さう思へども、去年の苦さ今に忘れぬ。
こんな事はもう一度經驗して來た事だ、

かのハイネがアマリイに破れて
その妹のテレエゼに思ひを寄せたとき、
たしかかうした言葉を歌つたが、
蘆屋にあんなに身は痩せて
傷手いやしに行つたときさへ、
しみじみわれをなさけなく思ふたものを。

去年も三月十五日、
死ぬる覺悟で西へ下つた。
下つてをさない女心と
ままごと遊び、ままならぬ
あたりの氣兼ね、夜のひとり寢、
會へば會ふだけ苦しさまさる、
その苦しさに堪へかねて
わかれも告げず逃れ來た
去年の春の物狂ひ、あの涙、
今におのれは忘れぬものを、
今またそれを繰返す。

救ひ求めし君なれど、
君の身の上なほむづかしく、
ああ、あれがこの女であつたら、
この身の上があの女なら、
かうも悲しくあるまじを、
思ふにまかせぬ人の世の
これがさだめよ、惠みなき戀の佗人。

かかる思ひに暮るる日に
暮るる許さぬ心の戰ひ、
かかる思ひに暮れしとは
歌心なす詩のいつはり。
秋、冬、強くなりまさつた
われさへ驚かれる心の變化、
かくもラヂカルになるものか。
いな、これぞまことの正しき脈搏、
熱想の熱に心取られて、
戀のかたむきはばまれし。

手紙の返事かくよりも
頭突き出る詩を書く事の
ただ急がれて、書きに書くとき、
戀のおもひの捲き返し、人は知らじな、
われとわが身に恥かしく
思ひぞ出でしこの日頃、
あやしき迄に風向き變る
心の旗の向くがまま、
長き願ひの共棲みの足もそむきて、
わが病癒ゆるとなしに、なほざりぬ。

時しも、わが住むこの區內より、
わが年少の日に、われを導き
助けてくれたかの社會運動の老鬪士、
無產候補として立候補して、
健康すぐれぬ六十歲の老軀をさげて
必死の戰さみるときは、
綿の如く疲れし身を演說場の
うしろの机の上に横へて
草稿を讀む姿と思ひ合せば、
わが戀いとど恥かしく、
若い女と新生活のその愛の巢に
心傾けあこがれし事の恥かしく、
さらでも今は非常の時なるを、
戀に狂ひてあるべきか。
われを門出にとめたりし
氣力の衰へ、この戰ひに
驅り出す彈機の弱りては
わが命さへ消えんとするを、
戀に空しく消ゆべきか。
十年長きわがなほざりは、
いつも嘆いてゐたやうに
戀にあらずて、この戰ひなりしを、
今ぞはじめて身に知りぬ。

さらば書かまし、今ぞ詩を、

ただこれのみぞ唯一の仕事。
行かず、手紙も出さないで、
社會的諷刺と憤怒の詩、
などかく雲と湧き出しか。
あやしき神か魔のありて
その手持ち添へ書かするやうに、
迸り出る文字の不思議さ、
この憑かれたる詩人の愛、女にとりて
まことこれ程たよりにならぬはなし、
女はそれを感じたか、さてはその間に、
よくよく考へ、話し合ひをもしたものか、
六年間の生活がこんなにまでわたしの心に
根強くこびり付いて居ようとは
知りませんでしたといふたより。
所詮この生活から離れることは出來ませぬ、
たとへ離れて新生活に入つたとしても
彼を忘れる事は決して出來ませぬ、
さうすればまた一つの罪惡を犯すこと、
お互ひがより深刻な悲しみを味はふこと、
思ひとまるがよいやうに
いろいろ事わけ云つて來た。

それぞまことの行く道と、
今はわれさへうなづくを。
われもこのまま思ひを斷ち、
去年の五月の心にかへり、
今はさだまる物あれば
その營みをするばかり。
いかに日蔭はつらくとも
やはりその家のかくれ妻、
それがあなたの運である。
いかに心はのぞむとも
やはりこの家の妻の夫、
それがわたしの運である。
生きて共棲む君ならじ、
共棲むために傷つくは

君があるじ、われの妻、
それよりむしろ君とわれ。
この世で添へる仲ぢやなし、
涙のんでもきつぱりと
斷たばや、悔も少なからむを。
いろいろ無理を重ねたり
横紙破りを押通し、
なんでしあはせあるものか。
今よりさらにふしあはせ、
涙の底にしづめなば
なさけは仇よ、われなれば、
身はからまる十重二十重、
この綱いかに切るべきか。

これを最後の手紙ぞと
別れの言葉書きしとき、
涙は頰につたはれど
これぞ身のため君がため。

薄命の相と人の見し
薄手にほそいその面、
君は悲しや、世の常の
妻とし立たむ人ならず。
いかに切なく望むとも
やはり日蔭に終るひと、
その一生をおもひやれば
どんな苦勞をする人か。
その苦勞の種を蒔くものが、
おれであつたら悲しいものを、
行かず、棲まぬが何よりの愛と思うて、
あなたにはその生活が最上のものであり、
わたしには今の生活が逃れられない宿命です、
恐らくわたしの身にはこれから先き
いろいろの變化も起ると思ひますが、
いつまでもあなたのやさしいいたはりを
忘れはいたしません、共に傷つく事なく
淡く淸らかにあなたの瞳を思ひ浮べる事の

出來るのが何よりの事ですと、
その幸福を祈りつつ筆とめた手紙、
こんな悲しい手紙を書いたこと
生れてはじめての別れの手紙。

生きてまた會ふ君ならじ、
君がいのちはその人に
ささげ盡してあまされず、
われのいのちは社會と詩、
その初戀にささげなん。
その初戀の二人の女、
ソシアリズムとポエムとを
足らはぬ才に結びなば、
我世につひになさざりし
われの願ひもかなはなむ。
女二人を共棲ます
君があるじの業はなしえぬも、
兩手に花のブルジョア根性、
その迷ひを棄てて、世のために
おのれを棄つる心の愛、
心の戀をなしとげて、
その若き日の初戀を
終りの戀と完くせば、
われも幸ある身の終り。
よし世の戀には破るとも
この戀いかで遂げざるべき。
いのちを懸けて、血をかけて
書かばこの身は滅ぶとも、
よしや人等はわらふとも、
弱き詩人とあざけるも、
われも生きぬと誇り得む。

×

友がしらべて來てくれた
かの小田原の十字町、
諸白小路を下つて行つて

海岸通りを折れて入つた
しづかな奥の一構へ、
つひ一寸出ればすぐ海岸の
朝の散歩も樂しかる
八疊、六疊、三疊に
庭も湯殿もついてゐて、
庭には梅の古木も風雅な
二十五圓の家賃の家、
話きくさへ、もう氣が動く、
都はなれて佗住居、
きみと二人の新世帶。

小田原急電一時間半
東京へ出る用達しの
夫を送つて停車場まで
行く若妻の足どりは、
去年の五月、靜岡の
片側町を歩きてし
いそいそしさにまさらむを、
驛の前なる珈琲店に
しばし憩ひて、顏見合せて
そつと微笑むたのしさに、
われも二十七、二十八の
若き心にかへらむと
ひとりにゑがく白日の夢、
その痴れたるを恥ぢもせず。

おもへば十年、見のこした
見果てぬ夢はそればかり。
戀は苦しく傷つくを、
戀とつとめのその中を取る
この結婚のゆるされなば、
蘆屋の夢の破れしも
ここ小田原に取りかへさんと、
思ひしことのおろかさよ、
これぞ終りのわが迷ひ。

われはさびしき人なるを、
われは惠まれぬ人なるを、
女と戀は人のこと、
戀の共棲み人のこと。
など幸福を求めけん、
など醉心地求めけん。
苦しみ惱み死ぬこそは
わがさだめられし道なるを、
わが世に生きし意味なるを。

×

「思ひ出よ、もし運命の永遠に
我を君より別ちなば、
我が悲しき戀を思ひ出よ、
別れし折を思ひ出よ、
我が心の響く中は、
我が心君に語らん
思ひ出よと。」

戀に破れしミュッセの
悲しき歌の思ひ出でらる、
十年のむかし、よしなくて
女に別れしその日ごろ、
朝夕にくちずさみ、
涙ぐましくなりし歌、
またも心に浮びくる。

これを最後の手紙とて
またも會はじと思ふひと、
去年はあへなき別れして
會はじ、思はじ、忘れむと
きはめしときの惱みより
救はむ人とたのみしを。

さだめは人を泣かしむか、

泣けど從ふほかぞなき。
きみは妻としなりえずも、
戀に生きたる女と呼ばれ
戀にいのちを捨つるとぞ。
わがためならで、人のため。

戀に破れて、また破れ、
その救ひの戀にもまた破れ、
成らず、幾度び成らざれば
戀をあきらめ生くべきか、
心破りて死ぬべきか、
いなとよ、われは戀には死なじ、
あきらめならで、戰ひにこそ。

×

海のなかばに
會はむとの
舟は出ださで
終りけり。

風は逆風、
波荒く、
沈むほかなき
海なれば。

涙のもとに
家居する
君うれしとに
あらねども。

怯れとのみは
おもはざれ、
君を沈めて
生くべきか。

×

君とわれとは
相合はぬ
性よ、運命よ、
今ぞ知る。

君に合へるは
君がひと、
われに合へるは
われの妻。

運命はかくぞ
さだめたる、
性はかくこそ
つくられし。

空しき夢と
抗ひに
死ぬべき君か、
われもまた。

×

去年はいのちを
かたむけて、
人のまことを
探りつつ。

かの六甲と
茅渟の海の
間に涙と
血をば捨て。

むなしき夢の
ひとふしに、
身の半らをば
失ひぬ。

失せてはまたも
かへり得じ、
いまはささへむ
その半ば。

×

蘆屋、打出の
濱風に
さらせし傷の
深ければ。

おもては癒えて、
その底に
潛める毒ぞ
身をば嚙む。

わが身を癒やす
人とみし
君はことなる
酒なりき。

病は酒を
禁ちて後、
風と光に
癒やされむ。

×

われをば招くやさしき聲に
耳をふたぎて、日も夜も、
夜なむ思ひの嵐もて
など革命の詩を書きし。

われをいのちにとどめしは
君がなさけと思ひしを、
ただ一篇の自由の詩、
心の血もて染めんため。

戀は救ひにあらずして、
なさけは人の仇たらむ。
君があるじは實業家
われはその業憎むもの。

思はじ、今は、共棲みも、
世を離れたる愛の巣も。
そはわが業にあらざれば、
終ひのいのちにあらざれば。

わがなすべきは心の詩、
心の聲の社會主義、
これぞいのちの初戀にして
またわが終りの戀なれば。

終りの戀よ、君ならじ、
君と共棲みつくるべき
その巣は人とかかはらず、
やがて嵐に破れなむ。

この戰ひの時、嵐の時に
なほふるふべき力あらば、
浮世はなれし營みより、
いのち燃え盡く革命歌。

死にゆくものの魂は
不死の歌と天にのぼるべし。
血汐に頸を染めなして
白鳥は歌をうたひつつ死ね。

×

戀の苦情をやめにして
書けとはうれし政治の詩。
ポオル・クウリエの檄文語、
かのベランジエの嘲弄詩、

「獨佛年鑑」のハイネの詩、
時代の詩人、かくて生く。

わが空しくも斃れなば、
あまたの友よ、あとつぎて
われにまされる詩を書けよ。
ジャン・コクトオや、ヴレリイの
伊達のすさびをやめにして、
書けよ心の血の叫び。

われも十年は悔ありぬ。
まだうら若き身をもちて
翁さびせし枯淡ぶり。
映畫の筋の長篇詩、
はやり小唄をのこしなば、
人のわらひを何とせん。

このすさまじき嵐の日、
文字の細工に得たりとし
その感覺を誇りなば、
詩人のみかは人ならじ。
われも詩人とたのみなば
嵐の鳥と啼き立てよ。

×

世をば空しとみしときに
われを誘ひしは戀なりき。
戀を空しとみるときに
心を搏つは、友情のつながり。

おなじ理想と目的とに
戀よりかたく結ばるる
かのロシアン・ニヒリストらの
かの革命家の男女の誓ひ。

餓ゑと仕事に結ばれし

戀ならざりしわが結婚、
くやみしことのあやまちを
今ぞまさしくさとりたり。

戀はよしなき戯れよ、
ただブルジョアの造り花。
まことの愛は世のために
身をば捧ぐる助け合ひ。

若し無産派の詩人として
戰ひの曲吹き鳴らし、
主義に殉ずべきわれならば、
ただこのままでよかりしを。

いつしか知らずあやまちて、
いたづらに妻の心を痛め傷つけ、
おのれも痛み傷つきし
わが愚かさぞ、いかなれば。

今はわが身も安からむ、
正しき道に踏みかへり、ただ感謝せむ、
われを離さぬことの恨まれし、
友なる妻のわれに殘るを。

×

久遠女性はむかしの夢よ。
われに定められた女があると、
われを引上げる女があると、
女に救はれ勵まされると——
何といふ痴人の痴夢をみたものよ。
それが詩人といふものか。

死なうとしても死なれねば、
酒のみが酒をのむやうに
苦しくなれば戀をのむ、
さめて苦しと知りながら。

女を得て、それで忘られる
悩みでなしと知りながら。

一人や二人の女のために、
ああもいひ、かうもいひ、
ああも思ひ、かうも思ひ、
狂ひ廻つて、死に損ひ、
息も絶え絶え、身は細り、
生(いのち)のなかの千鳥足。

赤裸の詩人、でくの棒、
なんとつまらぬ役割か。
戀のあはれとその痴愚は
ほぼこれで歌ひ盡した。
盡してみれば、われが淺猿(あさま)し、
みんなつまらぬ空騒(からさわ)ぎ。

×

えらい女を妻にした
男のあはれを誰か知る。
妻の力に壓(お)しつけられて
世に嘲けられてゐる男、
友もかなしや、身もかなし。

ああ、この甲斐性なしの口辨慶、
妻につかまつて十五年、
それで男が立つものか。
一人の妻さへ手におへぬ
それで社會がどう出來ようぞ。

女房を取りかへることは
社會組織を變へるより
ちとむづかしいと冗談にいふ、
その冗談の心はあはれ、
あはれなれども、それでよし。

戀女房は持たれずとも
それはただおれだけの事、
よしおれの妻は變へえずとも
×××は必ず變る、
それが慰め、それが望み。

×

戀の情痴を
これほどに
歌ひ得た男は
なからう。

それが何の誇りぞ、
戀の詩が
よければよいほど、
恥になる。

たつた一つなすべき事は
ただこれだけだ、
社會の××、
それだけだ。

政治、政治、いかに嫌ふとも
ただそれのみぞ、
政治は人の逃れえぬ
宿命的課題なるを。

老いも若きも、
みな起ちて、
政治鬪爭に
加はるとき、

われに政治家の
質なくば、
ただその身をば
葬れよ。

×

生田春月
でくの棒、
三十八年
何のため生きた？

こんなつまらぬ
やくざもの、
詩人がこの身の
天命(さだう)とは。

ああ、かの左翼の
猛闘士、
かの雄辯の士と
生れえたらば。

世に立つ甲斐の

ある人は、
かの獻身者、
それのみぞ。

戀の詩人と
うたはれて
生恥さらす、
これがおれか。

人間効用、
何處にあるんだ？
生田生月
でくの棒。

×

生くるは戰(いくさ)、
パンのため
人は相搏(あひう)つ、

世は地獄。

古きさとりと
あきらめの
その獨善に
意味ありや。

いかに心境は
高くとも、
民は塗炭の
苦にあるを。

生くるは迷ひ、
煩惱と
五欲の淵に
身を投げよ。

さとりを云ふな、
あきらめな、
貧しき者は
ふるひ立て。

迷ひの中に
迷ひなば、
それぞまことの
生ならめ。

×

おもへばわれは
昔より
片隅のひと、
書齋人。

たとひ心は
燃ゆるとも、
廣場の中央に

何をせむ。
大衆を前に、
熱狂の
身振りも身には
添はざるを。
など護民官(トリブウン)と
仰がれむ、
立つによしなき
演壇(トリビユウネ)。

×

われは力の
人ならず、
熱と氣魄の
人ならず。
かの高壇に
民衆の
心を奪ふ
人ならず。

政治の中に
生くるとも、
爲すに足らざる
無能人。

かかるよしなき
性(さが)をもて、
生くる悲しみ、
誰か知る。

×

熱と力と
雷音と、

岩をも碎く
大雄辯。

全大衆の
血を湧かし、
第一線に
躍動す。

その辯もなく
氣力なく、
能もなければ
何とせむ。

今は世に立つ
時ならじ、
生くるに足らぬ
我と知る。

×

彼が悲しみ
今ぞ知る、
ツルゲエネフが
ネヅダノフ。

身は革命の
人となり、
心は愛に
燃ゆるとも。

堪へぬは力、
死ぬは夢、
あまりに弱き
詩人ゆゑ。

つひにおのれを

滅ぼして、
折れし悲しみ
いかなりし。

×

去年の春は胸を裂く
死の苦しみと思ひしが、
今年の春の悲しみは
何にたぐへん、何と云はん。

ともに死なむとせし女も、
ともに棲まむとせし女も、
今は空しき思出の
胸をかすむる雲のかげ。

寂しさ超えて、散る心、
世をば一年生きのびて
今は友さへうとむらん、

これがわが身の果てなるか。

氷の溶けて消ゆるごと、
煙の空に絶ゆるごと、
身はばらばらに飛び散りて
殘るは瞳、なほも世を見る。

×

いつよりかかくなりけん、
かく弱きわれとなりけん。
今はただかりそめの人、
世に立たむ力もあらず。

新しきいのちつくると
いま一度歩み出でんと、
心はも強くねがへど、
その氣力すでにあらねば。

われを呼ぶ女のこゑも
勵ましの友のなさけも、
あだなれや、あだなれや、
いつしかに力盡き、心破れし。

ふるとしの狂ひいたつきに、
わが力半ばとなりぬ、
いやましの力要るとき
半ばもて何かなすべき。

いまもなほ生くとおもふか
玉の緒の絶えしも知らず、
かなしきよ、人知らぬまに
死に果てしおのれなりけん。

×

古き家をばうちこはし
古ききづなをみな斷ちて、
新しき女と共棲みて
久しくあこがれし愛の巣の
新生活をはじめんと、
この一年を願ひしが、
その一年のいたつきに
その氣力さへ今は絶え果てぬ。

ましてや、いかに世のために、
身をばささげてなしなむと
たのめる事の成るべきや。
いかに心はあこがるればとて、
わが十七歳の初戀の
願ひを今にかなへむと、
階級闘爭の戰士として
身を挺して戰ふ氣力あるべきや。

空しき年の願ひのうちに
身は果實のごとも蝕みぬ。

長年うちに蓄へし
力は用ゐずに萎え果てぬ。
あまりに心を抑へ來て
彈ぬる力も盡きぬるか。
悲しきさだめ、ぼろぼろに
錆びし劍を地に立てて、
揮ふ力もあらざれば、
ただその上に身を投げてん。

×

おもへばはやも十五年、
われを救ひて勵ませし
かの堺氏の期待に背き、
など空しくもすごせしぞ。
背き離れで戰ひなば
わが生涯は異りけんを、
かかる無慙の難破せで
世に立つ甲斐もありけんを。

今は力も絶え果てぬ、
今起たむとも時遲し、
かしらも肉も傷つけば。
ただ、身は雪と消ゆるとも、
シェリイ、ハイネと相並ぶ
プロレタリアの詩人として、
血と反抗の詩を成さば、
われも空しく生きざらむ。

世の絶望と戀の苦に、
幾度び死なんときはめつつ、
死なずをめをめながらへし
わが未練こそこのためよ、
ただこの詩をば書かんため。
たとひわが才足らずとも
シェリイ、ハイネは夢なるも、
時代はわれを助くるを。

十年(とせ)空しく宗教の、
藝術の夢に醉ひしれて、
ブルジョアどもの豚飼ひし
放蕩息子も歸り來て、
最後の曲を世に吹かば、
いつも忘れず身を問ひくれし
かの老闘士も微笑まん、
わが眼たがはじ、よくぞ成せしと。

×

死後の榮譽を求めるほどの
弱點はなし、虚榮はなし。
若しかかる願ひの影だにも
わが死の前に示しなば、
人はこの身を嘲るもし。

おのれが滅ぶとき來らば、
殘る方なく滅び去れ。
その死の後(のち)になほ生きむとは、
これぞおろかの人の慾、
その一生も足らずとは。

不朽の文字を刻みつけたる
かの藝術家の名は、燦として輝くべし。
わが名は灰よ、塵は飛べ、
泡は消え去れ。消ゆるとも、
ただ微笑みて、次ぎ來る人を生きしめよ。

×

いつかはその人が來(く)るであらう、
あへなくも力弱くて斃れたる
わが精神を受け繼(つ)いで、
わが血肉の詩を踏まへて、
これ以上の詩を書く人が出るだらう。
その人こそ天才だ。

日本の新しい詩を完成する人だ。

十三、詩をつづくりそめてより
はやも二十有餘の星霜はすぎた。
日本の韻律の匂ひに身を沁ませ
夙夜の刻苦に身を削り、
生死の深淵に心わななきふるへ
時代の激動に伴奏しつつ、
よろめきながら今日まで來た。

詩魂なくして詩を吠ゆる
かの民衆詩派の犬ころどもに、
ワンワンワンと吠えつかれ、
感傷詩人、小曲詩人とおとしめられ
無視と迫害の限りを受けて、
まことの姿を歪にされて
低く低く値ぶまれつつ來たこの十年。

だが、その人は來るであらう、
その人こそはじめておれを發見し
おれの眞價を認めるだらう。
おれの志をあはれんで
その敗北に復讐すべく、
天馬の才を驅使しもて
詩天の銀山鐵壁を打ち拔かん。

その人の前におれは何だらう。
太陽に照らし消される月である、
月にうすれる星である、
海に呑まれる河である、
イエスの前のヨハネである。
だが、その薄れて消える日こそ
わが大願成就のときである。

その人が來るとき、われはよき先驅、
つねに失敗、つねに蹉跌、

その生涯を悩みし事も空ならじ、
われははじめて酬はれむ。
さればつたへむ、われもその人に、
わが知る限りの生の祕義、
この韻律の祕法をも。

×

ただ一篇の「マルセイエーズ」、
それがわが願ひの
詩であつた。
ボオドレエル、ヴェルレエヌとなつて、
美の詩人、天才詩人とうたはれるより、
見るかげもない一小詩人でも、
若き日本の
ルウジェ・ド・リイルとなるのが、
わが生の目的であつた。
戀も空しくなり果てたとき。

おれの願ひは革命歌、
その名もなき作者と朽ちなんことぞ。
革命運動、社會運動、
それはおのれの任ならず。
今一飛びの氣力あらば
力と熱と火をもつて飛込むものを、
われはあまりに傷つきぬ、
われはあまりに衰へぬ。
せめては革命の伴奏者、
息の限りを吹き込みなん。

魂消る聲の絶ゆるまで
われは自由を叫ばんを、
それすら今はかなはずて、
やつぱりおろかな戀の詩人で
終るべき運であるのか。
今ぞまことに失敗の詩人ぞ我れは。
ルウジェ・ド・リイルの如く晩年は

貧窮困苦の中に死なうとも、
ただ一篇の「マルセイエーズ」、
さらば詩人としての生甲斐あるべきを。

×

月もあらぬ武藏野の夜は
櫟林に風が鳴つて、
八幡山から北澤までの畑道、
われを導き送つてくれる
その人の姿は黒く、笑ひ晴れやか。
歐洲去つて今は武藏野の土民を生くる
心も若く足どりも若い老アナキストの
照らし出す懷中電燈の光ほのかに、
わが今の心を思はしめる、
その心にさす一道の光かとも。

十年越し會ひたいと願つてゐた人に
まのあたり相見て、
そのやさしい眼の光りにふれたとき、
曾つて、倫敦郊外に
詩人カアペンタアの客たりし人、
白耳義にエリゼ・ルクリュの家に住み、
また温雅なる老チェルケソフと語り、
かの多くの革命家の眼を見た眼を
生きて相見て、語りえしかと
不思議な感動をわれは覺えた。

この感動ぞ、わが半生の夢よりぞ湧く、
二十年前の幼なき心のそれであつた。
此日、共學舍の壁にかかれる
木下尙江の書をみたとき、
わがをさなき夢の思ひ出られた。
かの朝鮮にあつた日に、
「良人の自白」を一冊また一冊、
日に幾度びか借りて來て、
二日のうちに讀み上げし

その感激に外ならなかつた。

自然主義の世に出でたれど
われは社會主義の子であつた。
わが靑春の夢をつちかうたのは
かの赤き表紙の國禁の書。
十七歳の都會放浪の子が
かの麴町の小さな古本屋で
見付けたのは「神愁鬼哭」、
また尙江の「飢渇」であつた。
その後(のち)、堺利彦の「赤裸の人」、
かのルッソオの精神であつた。

「赤裸の人」はわが生涯を決定した、
自然主義を若き夢想に馴らせしも、
そは遙かに「麵麭の略取」に導いた。
滿州の野に斃れた亡友荒川義英、
彼ぞわが不良の友、今ぞなつかし、

そのヒロイズムはをさなかりしも
なほ俗心にはまされるものを。
かの「新社會」の時代、かのよき時を
など空しくも過せしか、あまりに文學、
つひに社會主義者と起たざりし悔(くい)。

身は傷つけど、なほ殘る强き思ひは、
今日この人の言葉聽くとき、
わが胸の底より湧きあがる。
大杉榮死してより、サンディカリズム、
アナキズムの旗はあがらず、
マルキシズムの世とはなれども、
武藏野の冬の夜道に、踏む土の
かたきを聞きつ、その土民生活、
デモクラシイの眞義聽くとき、
わが地上樂園の夢ぞよみがへる。

日本を去つて渡歐の旅に上るとき、

この剰餘者の悲しみよ、この男また
つひに、つひに過渡の一つの泡であらう。

されど、飼山もまた年を重ねて
なほ一人の詩人となるを得た。
シェリイはゴトキンの婿、ハイネはマルクスの友、
詩人はただ人、人格の力に湧き立たむ。
われは思想も定まらず、迷ひ深きも、
なほその胸に一片の情あり。
かのルッソオの精神より踏み出して、
善き人格の輝きに道を照らされ、
われも一羽の嵐の鳥よ、
プロレタリアの戰の歌をうたはむ。
武藏野の小さな停車場にわれを見送る
老アナキストに別れつつ、心にわれはかく叫んだ。

×

心やさしい夫が、その熱愛してゐた
ただ一人横濱まで送つて來たといふ
一人の青年の話を聞いたとき、
山本飼山と直覺された
戸山ヶ原の鐵路を血に染めた
山本飼山、それぞその人、
彼はなにゆゑ死んだであらう?
彼はおれの惱みを惱んだ人か。
わがやさしい嚮導者は可哀相な事をしたと
呟いて、その並んで歩く男を飼山と知らず。

まことに、おれは異なる飼山であらう、
空しく潰えて死ぬる一人であらう。
今、牢獄に呻吟する左翼の鬪士、
その活動力を世に恢復すとも、
われはその日の人ならず。
アナキストとしての思想の深化もなく、
コンミュニストとしての活動力もなく、
未だ未だ迷へる人として、生死を迷ふ

なくなつた妻の命日に、
花をもつて墓詣りをするやうに、
おれも死んだ戀の記念日に、いつかは一度、
心に死んだ女の手紙を探し出して讀むであらう。
あの我手に屆いた最後の手紙を。

「はなれて遠い人を偲びながら、
ぢつと熱つぽい身體を横たへて、
華やかな町並を肩をなべて
愉快に歩いてゐる姿が
ついと頭を横ぎつてすぎる、
――たあいもないロマンティシストよ。

恐ろしくむづかしい義理合ひや、
なやましいまでにうるさい矜持、
あるひは悲しい系累がなかつたら
わたしは世界一の幸福ものになれたらうに、
自分の身體も心も思ふにまかせぬ、
五月の靜かな夕暮は悲しいあきらめである。」

いつかは一度、生涯の終りに、
おれはこんな女の詩を讀むだらう、
そして、その華やかな町の中に働いてゐると
かつて耳にした女の姿を想ふだらう。義理合ひや
子の愛にからまれて身動き出來ぬといひながら、
おれと別れてからその係累を捨てた女を。

「飲みすぎて、すつかり弱つて、
吐いてしまつた後、靑白い顏をして
眞赤な脣をして、浴衣がけで、
ぼんやりすわつて、床の敷きかへられるのを
待つてゐた姿を、わたしは永遠に
忘れることが出來ながらう。

さみしく一人かへつて來た汽車の窓の灯よりも
なにによりもあのわびしい魅惑！

男性からあんなにはげしい――を
愛けた事は始めてだつた。そして恐らく
これから後にもあり得ない
たつた一度の思ひ出ではあるまいか。」

そんなをさない言葉を讀むであらう、
そして、苦い微笑(わらひ)をうかべるだらう。
その靑白く苦しげにすわつてゐる姿が
おれの最後の姿だと、苦々しげに呟くだらう。
大衆の前に熱狂の手を振上げてゐる姿でなく
女の前で悩ましくしてゐる姿がそれであると。

おれはしづかに女の手紙をたたんで、
そのはじめからの一束の中に加へて、
その一束に默つて火をつけるだらう。
そして、その灰になつて行くのを眺めながら
おれも今からして灰になるのだと思ふだらう。
そして、空しい自分の一生を、一瞬顧るだらう。

その悩ましい生命(いのち)の鼓動の衰へを聴きつつ、
自分の香もない生涯に現れた二人の女の事を
今一度、比較して考へるだらう。
自分を本當に愛してくれたのは
どちらの女だらうと考へるだらう。
或ひは二人とも愛してくれはしなかつたらうと。

一人の女は元の男がいいと云つておれを棄てた、
一人の女はおれと別れてから夫を捨てた。
一人は同棲する迄になつてやめてしまつた、
一人は後(あと)で來たいと告げて遮られた。
そのいづれをも運命は欲しなかつたのだ、
運命はおれの悲痛を欲したのだ。それでいいのだ。

一人の女はやさしくおれを慰めてくれたが、
今はおれを苦しめ傷つけた女がいとしい。
おれの救ひを求めた人は救ひ得る境遇でなかつた、

おれの痛んだ女こそ救ひであつたかも知れぬ、
あまりに情の息切れを嘆かれた人ながら
一度は自分を愛してくれた女だもの。

死なんとするあはれなその男は
かすんだ眼で、苦しい情熱の路を振返つて、
その迷ひと夢の殘りなく消えるのを喜ぶだらう。
そして、今は何處にゐるとも知れない
あの悲しい女の幸福を祈つてやるだらう。
二人とも幸福になれさうもない、然し幸福であれと。

華かな文人として世に時めくは彼の運でなかつた、
戀にむくはれ戀に死なむと狂ひたち、
女を求めてあがいたが、それも彼の運でなかつた。
彼はやつぱり痛苦の戰ひに生くべき男、
など被抑壓階級のレヴォルトに加はらなんだ、
彼れが死ぬ時、それが彼の最後の痛恨であらう。

×

おれは打たれる子であつた、
いつも打たれた、なぐられた。
十三歳から十六歳、
山に木のない朝鮮の
赤土道を、韓錢さげて、
草梁、釜山鎭までぶらついた。
みじめな、靑い、瘠せこけた
陰氣な少年、それがおれだつた。

家をたたき出されて、しくしく泣きながら
仕事をめつけにほつき歩いて、
飛込んだ釜山日報社に、解版小僧。
息さへ凍る朝鮮の眞冬の朝、
活字は一つ一つが氷のかけら、
十本の指が鉛と眞黑に凍る。
その勤勞の甲斐もなく、金をくれぬと、
母親が喧嘩をやつて取つてくる。

米屋の小僧、瘠せつぽち、
一斗入りのメリケン袋が二つ、
これがどうしてかつがれようか、
ひよわい肩がメリメリ折れさうな。
半丁行つたら一休み、また半丁、
たうとう堪らずはふり出した拍子に
乾いた土に眞白な雪が降る。
おまけに米代、くれはせぬ。
要塞司令部、だんまり給仕、
走り廻れど、氣はきかず、
意地わるコックにいぢめられ、
默つてこつそりやりなほす
切りよがわるい香(かう)の物。
誰が切つた、コックを呼んで來い、
副官殿のかみなり聲、
どうしてこの場を切りぬけようか。

それがいつでもおれだつた、
プロレタリアのおれだつた。
それは打たれる子であつた、
何か事が起ると、まづおれが打たれた。
誰か盗みをすれば、おれが打たれた、
誰かまちがひすれば、おれが打たれた。
運命はおれを、朝鮮女の洗濯石、
着物を乗せて置いて打つ石にしたのだ。
（以下三十五行削除）

×

因幡の兎だ。へつぽこ兎だ。
皮を剝いて、潮つけにしてやれ。
この憎い憎い、いとしい自分を。
あはれな、みじめなこの自分を。
こんな奴、こんなみじめな奴。
いくら見ても、それが自分とは。

何といふ運命と、嘆いたは昔の事よ。
今はこれでよし、これでこそ自分だ。

おれは死後の詩人だ。生前の名家でなし。
それがわが運、わが呪ひ、またわが誇り。
ただかくぞめぐる、日輪も、月輪も。
人生の事はただ是れ、日面佛、月面佛。

×

イッヒメンシュ、
イッヒメンシュ、
おれは永遠に
イッヒメンシュか。

いつもいつでも自己中心、
おれがおれがの個人主義、
それは恥だ、
それは迷ひだ。

イッヒ、イッヒ、
きりきり消えてなくなれ。
永遠のイッヒメンシュ、
それぞ自分でつくる牢獄。

眞の自由人は
自我意識より自由であれ、
ブルジョアの財布の出口より
もつとちつぽけな我の意識より。

おれの十年の教養は
おれを唯我の巣となした、
ニイチエ、スタンダアルに共感した
昔ながらの個人主義者でおれは死なないぞ。

わたしが死んだら大洪水、
アンシアン・レヂイムの大娼婦

ポンパドウル夫人のこの言葉、
これぞ個人主義者のスロオガン。

おれが死んだらやがて天國、
みんな幸福であれ、救はれよと、
これぞわが世に遺す言葉、
かくてこそおれも喜んで死ぬ。

心の底に深く根を張つてゐる
個人主義の名殘りをも掘り棄てるとき、
おれははじめて眞人間だ、
友の中の友、人間の中の人間なのだ。

實踐上の超個人主義、
それぞわが終りの願ひである。
死を超克するは超我、同僚意識、
そこに滅ぶ個の救ひあり、發展あり。

×

一八九二年――一九二九年、
わが名の下にはかく書けよ。

三十八年、ただ一夢、
惡い夢をば見たものよ。

ただ一生は夢にして、
つかみしものは雲ばかり。

花も咲かずて枯れ果つる
それもさだめよ、是非もなし。

いまは心もやすらぎぬ、
薄き命をほほゑみて。

わが子のなきぞうれしけれ、

またこの苦をばなしなんを。

われに似たるは世になかれ、
また來ん世にもあらざれよ。

おもへば夢よ、たまゆらの、
一八九二年――一九二九年。

×

人生はみんな運だ、
わが運はわが呪ひ。
若し文運つたなくして、
いたづらに身をば刻みて
あはれむべき一小詩人、
空しく斃れなば、
その灰を空にふりまけ。
墓は要らない。
火もて、雨もて
天に書け、地に書け、
靑き墓標に、
黑き墓標に
目に見えぬ文字もて
ただ刻め、
彼は苦しめりと。

×

色は匂へど
散りぬるを、
人は迷ひの
道をふむ。

いかに心は
のこるとも、
わが世誰れぞ
常ならむ。

有爲（うゐ）の奥山
今日越えて、
無爲のかなたに
明日（あす）は住む。

ありしいのちを
見かへれば
淺き夢みし、
醉ひもせず。

三月十六日——二十二日（東京）

第六巻

阿呆の叛逆

——叛逆者ピエロオのとんぼがへり——

Ich will kein Heiliger sein,

lieber noch ein Hanswurst.

Nietzsche.

断絃の曲

兵士は銃をとつて死ぬ、
農夫は鍬をとつて死ぬ、
詩人は歌ひ歌ひ死ぬ。
かのピンダロスの死を知るや。
あまたかたむく耳の前、
琴とり歌ひ、歌ひつつ、
歌の半ばに斃れなば、

これぞ譽れの死ならずや。

昭和四年五月廿四日

×

ダラ幹ダラ幹
阿呆陀羅幹、
白と赤との
ダンダラ幹

政治運動、
黨の維持、
さき立つものは
金ばかり。

妥協も方便、
ブルジョアに
身賣りしなけりや
できぬ金。

清黨運動、
分裂主義、
賣り込み摘發、
除名騷ぎ。

ダラ幹攻擊、
おん出るまでよ、
萬年ダラ幹、
黨は私黨。

これが政治の
からくりよ、
黨と名がつきや
無産黨さへも。

體のいいのは
勞働大衆、

いつも搾られ
利用され。

ダラ幹ダラ幹、
阿呆陀羅幹、
やりそこなふなよ
デマゴギイ。

×

世界一周
して來たら、
お嫁になつて
あげますと
女に云はれて、
ぐるぐると
地球の上を
ひとめぐり。

てくてくてくてく
てッくッて
アメリカボオイの
膝栗毛、
戀のスタアト
切つたなら
女のお臍が
決勝點。

てくてくてッくり
てくる路、
通ふ戀路も
なんのその、
長いわ、長いわ、
世界一、
地獄と天堂の
あひだほど。

やァイ、やァイ、
アメリカボオイ、
長いな、長いな
鼻の下、
さすがアメリカ、
世界一、
日本はダメだよ、
おれもダメ。

×

男とみれば
からみつく
君は朝顔、
なよなよと。

晝がすぎれば
夜がくる、
汽車で送つて
電車で迎へ、

ころもがへかよ
男でさへも、
きてはきられて
ぬぎすてられる。

それが當世、
不思議はないが、
なぜにいつでも
晝夜帶。

×

晝閑夫人、
不良マダム、
みなブルジョアの
閨の花。

ただ愛撫され
もてあそばれ、
おのれも晝は
もてあそぶ。

金で買はれて、
金で買ひ、
籠の中での
あそびごと。

それはわるいと
おもはねど、
みなブルジョアの
黴の花。

×

おれといふ奴、
なんでまた、
愛のなかばに
のがれたか。

あのまたミツルが
なんでまた、
わかれてのちに
夫をすてた。

のがれた筈よ、
遊びでないに、
金で買はれも
買ひもせず。

すてた筈だよ、
サラリイマンの
そのサラリイは
足りぬもの。

×

金でかためた
そのブルジョアの
籠を出たがる
鳥もある。

ひろい世界を
飛びながら、
籠を求める
鳥もある。

浮世さまざま
人さまざまよ、
それでつまりは
みなおなじ。

金で買はれも
買ひもせぬ
戀も金ゆゑ
水となる。

×

戀は光へ
のびる草、
金のこやしで
花が咲く。

戀は金ゆゑ
咲いた花、
金が絶えれば
すぐしぼむ。

戀のあそびは
金ゆゑ出來る、
本氣なりやほど
金がいる。

戀のまことは
いつまでつゞく、
縞の財布の
つゞくほど。

×

財布からでも
戀路はつゞく、
戀はつゞけど
腹がへる。

腹がへつたら
抱(だ)いても寒い、
キスでおなかは
くちならぬ。

七日(なぬか)七夜(なゝばん)
抱(だ)いてゐた

戀もあつたよ、
死にもせで。

いくら抱(だ)いても
苦しいばかり、
腹がへつたら
愛もへる。

×

食ふに食はれず
わかれも出來ぬ
戀の救ひは
死ぬばかり。

紅いしごきで
心をむすび、
水に浮べば
花が咲く。

河豚は食ひたし
命は惜しし、
業が深くて
死ねもせず。

金が盡きても
死ねないときは、
戀を死なして
生きかへる。

×

金がなければ
男は毛蟲、
好いた女も
ふりむかぬ。

きりようよしなら
女は名譽、
車夫の娘も
玉の輿。

金がなければ
男は乞食、
女何處でも
食べられる。

乞食いやなら
泥坊ばかり、
えらい紳士は
みな泥坊。

×

無錢旅行は
男のことよ、
女おなかに

金がある。

無錢飲食
男のことよ、
女からだを
賣ればすむ。

身賣り肉賣り
心は賣らぬ、
それが女の
意地だもの。

いやな男の
金まきあげて、
好いた男に
みつぐまで。

×

今日(けふ)の文士は
みじめなものよ、
乞食、幇間、
もつと增し。

題を出されて
註文されて、
早くとせかれて
書きとばす。

うまく書いても
氣に入らなけりや、
ここをかうしろ
かう直せ。

御無理御尤も
へいへいへいで、
御氣に召すまで

直します。

それがいやなら
用はない、
とつとと失せろと
突き出され。

泣きの涙で
出るビルディング、
これが生命(いのち)の
文學か。

好きで書くなら
貧乏(びんぼ)もうれし、
いやなこと書き、
恥をかき。

明窓淨几に
思ひをこらし、
魂こめた
神の業(わざ)。

文人ごのみは
昔の夢よ、
今は職人、
御用聞き。

早いが勝ちの
大量製產、
ジヤアナリズムの
御意のまま。

俗受第一、
色目の稽古、
それが當世
文學修業。

むかし藝術、
いまナンセンス、
その日その日の
風次第。

箸が二本に
ペン一つ、
衆寡敵せぬ、
それは洒落。

今は五本の
ペンさへ足りぬ、
からの頭で
書き分ける。

孫子の代まで
させぬと云へど、
賣つて食はねば
生きられず。

文士稼業は
此世の地獄、
禿筆へし折つて
首くくれ。

×

今日日、詩人は
あはれなものよ、
カット代りの
小唄かき。

きつちり半頁
わりあてられて、
寫眞の說明、
美人の讃。

やさしく書くのが
少女詩で、
勇ましいのが
少年詩。

それで貰ふは
はしたがね、
それで詩雑誌、
弟子づくり。

自費出版の
世話をして、
頭はねるも
あるといふ。

それにくらべりや、
宣傳用の
ジャズの小唄の
流行節。

映畫小唄に
電車の宣傳、
ブルジョアしぼるが
ずつと増し。

今日日、詩人は
あはれなものよ、
無代の詩を書き
高い米。

食へぬ詩ぢやもの
反古ぢやもの、
小唄つくりも
ぜひもなや。

ぜひもないとは

知るものの、
どうでも詩で食ふ
覺悟なら。

ナイトクラブの
お雇ひ詩人、
客の所望で
近作一つ。

手ふり首ふり、
祝儀をもらふ
男藝者の
なさけなさ。

大道ちよぼくれ、
あの演歌師の
勝手氣儘が
ましぢやもの。

せめてなりたや、
あの啞蟬坊に、
世をばあざける
歌うたひ。

やぶれギオリン
ひきひきうたふ
社會主義者の
啞蟬坊に。

×

鐵は火を打つ、
赤熱の鐵。
赤い鐵打つ
黑い鐵。

鐵と鐵との

たたかへば
ガンと音して
火花が散る。

やい、失せろ、
こん畜生め、
あの火花が
實はおれだ。

一度飛んだら
もうつかまらぬ、
パッと散つて
消えたなら。

×

なぜに氣輕に生きられぬ、
戀は氣輕なたはむれよ、
ただ瞬間の感覺よ、
充たしてしまへばそれですむ。

みんな此世を樂しむ中に、
なぜにいつでも苦しんで、
惱み惱んで何になる、
苦悶なんぞは時代後れ。

時代は變つた、モダニティ、
明朗性よ、バアバリズム、
その時勘定の氣安さよ、
なぜに宗旨が變へられぬ。

古い時代のからの中、
いまだにくよくよ、氣病み沙汰、
テンポのおそさよ、中世紀、
陰鬱性の莫迦野郎。

×

シネマ見ましよかお茶のみましよか
いつそ小田急で逃げましよか、
都會詩人の時花唄、
田舍の果てまでみんな唄ふ。
これぞ現代の時事詩人、
時代の詩人、時の詩王、
おまへもやれよ、眞似をしろ、
金も儲かる、名もあがる、
なぜに臆してつくらぬぞ。
その勸めこそ、おろそかなれ。
おれには出來ぬ、おれがその柄か、
それはその人、おれはおれ、
おれはその才持合はさず、
ジャズとレヴュウとハイ・スピイドの
その現代に合はぬこそ、
おれの宿命だ、おれの意義だ。
そして、おれの敗北だ、死だ。

おれも時事詩人だ、時代の詩人だ、
ただ、おれは全く違つた時代詩人だ。
あらゆる金庫を肥やさんために
おれは現代の僞瞞と享樂とを謳歌せず、
現代を否定し、その虚僞の機構と戰ふのだ。
おれのつくる時花唄は、宣傳料を
資本家によつて酬いられず、
熱炎と死もて酬いられるのだ。
詩人よ、君も一日の生命を知るか、
賢ければぞ、君はよく知る。
われも一日の生命をば知る、
また一日の詩人でよし、
新聞とおなじく生れ
新聞とおなじく死ぬる
蜉蝣の生を天地に寄せて、
永遠が、君に何ぞや、われに何ぞや。
ただ君は今日を生きる、われは今日死ぬ。

時代に歩調を合はしえぬ
詩人の悲しみ、今日も奏づる、
かのブロオク、かのエセエニン、
東に來ては、わが胸に哭く。
滅びよ、滅びよ、昨日も今日も、
わが十年の苦鬪の記念も、
また今日の惑ひ、傷みも。
新生の自由の國へ、あこがれの
ただ一歩擧げて斃るる
病馬こそ、わが蹉跎たる姿。
われは常に傷恨の人、
われは常に逆流の人、
われは常に反抗の人、
眞を求めて世に迷ひ、
實を失して死に惑ふ。
これぞこの世のわが地獄、
わが敗北よ、わが生の意義。

君見ずや、かの時事詩人杜少陵、
江頭を哀しみ蒼生を傷む。
白頭の亂髮、垂れて耳を過ぐ、
短衣しばしば挽けども脛を掩はず、
三年飢ゑて走る荒山の道。
嗚呼七たび歌ひて悄として曲を終へども、
詩巻長く留む天地の間。
これぞわが前生の人、
これぞわが後生の人、
嘗ては社稷を愁ひ、今は窮民。
天地、聲ありてよりこのかた、
人間に詩人ありてよりこのかた、
草も木も水もみな鳴る、
時事詩人、常に嘆かむ。
杜甫は死に、われも死ねども、
常に一人、嵐の中に叫ぶものあり、
憤り、怒り、哭せむ、人間のこの不調和を。

七月二十一日——二十八日（東京）

第二編

×

今年は芭蕉の葉が短かい、
肥料をやらなかつたので、
もう七月も終るのに
まだ去年の半分ほどものびてゐない。
こんな心細い姿のままで
まもなく破れてしまふのだらうか。

籐椅子に背をもたせながら、
夕方の縁側から
かうして庭をぢつと眺めてゐると、
おれはしみじみと
自分の一生を思ふのだ、
みぢめに失敗した男の一生を……

やりそこなつた生、
やりそこなつた戀！
ハイネよ、君もさう思ふか、
おれもやりそこなつた、
これは失敗ではない、慘敗だ！
確かに零點！

それは長い間のおれの悲嘆であつた。
母親ゆづりの愚痴．やめにしろ、
おれは失敗したのではない、
おれとして最善をやつたのだ。
これがおれに許された最善であつた、
おれの力の限度であつた。

敗北でもない、勝利でもない、
おれはおれらしくやつただけだ、
おれはおれ自身を生きただけだ。
ただ一つ、とりかへし難い悔が殘る、

その時機を失した事だ……
女にも、戰ひにも。

おれが立上つたとき、おれは傷ついてゐた、
おれが死から引返したとき、
その傷はさらに傷で蔽はれた、
その上で、新しい戰ひ！
劍を打たれて闘場に追ひ出される
闘牛の憤怒！

裂けた、裂けた、裂けた、
迸る、血の噴水！
甦れ、また、起き上る——
牛の瞳、牛の絕望的勇氣！
よそごとに想ひゑがいた、
それがおれか！

靜かな夏の夕方、
さゆらぎもせぬ庭の緣にむかふ
おれの眼に、その慘澹たる光景が映る、——
去年、おれが痛み傷いて
心の裂けると同時に裂けはじめた
その芭蕉の葉をぢつと見てゐる眼に……

おれは椅子の上に身を搖りながら、
煙草を挾んだ指さきをぢつと見つめる、
恐らくこれがおれの裂け口ではあるまいか、
この五本の裂け口から
いつもおれの血は滴つたのだ
眞白な紙の上に……

×

湖南の友達のたよりを讀みながら、
今年はじめての無花果を食べる。

水無月空も今日はうつすらと翳つて、

朝燒あとの名殘りも何處となく
初秋のおもかげがうかがはれると
友の書いてゐる湘南の夏——
江の島の棧橋の下に戯れる波を
想ひやりながら、手にとりあげて
二つに割ると、無花果の中は白い、
處女の心のやうな粒のかたさで
薄紅にちかいクリイムいろが
唇に甘く、舌に殘る匂ひは
失はれた少年の日の夢である。

日本海に面した一條の道がうかぶ、
大山の山裾が海に入らうとする處、
波に嚙まれる巖の上、御來屋(みくりや)近く、
うしろに崖を負うた一軒の藁屋、
軒傾いた茶話の臺に置かれた鉢に
山のやうに盛られた無花果の匂ひ、
二十年をへだてて今ここにかへる。

沖には二つ、藍玉か、隱岐の島影、
わが物のやうに眺めながら過した一時(ひととき)の
そのおもひでを味はひながら。

[illegible]手の皮を置いて讀む、夏の手紙、
ああ、それはあまりに近い思出である。
片瀨の隅から隅まで都會人に埋められて、
新しいカフエも二つ三つ出來たといふ、
そのモダン氣分を見に來いと友は誘ふ。
昔のあなたなら、八月の片瀨などへは
なぜか誘へないやうな心持がしてゐたが、
此頃のあなたには見せたい氣がするとて。
だが、友はつひに思ひ至らぬだらう、
海水着の媛(たを)しげな、脚(あし)ながながと
鞭のやうに細いからだのモダン・ガアルを
見たらまた古傷が痛み出すだらう、
潮の中にその古傷を浸さうとは!

彼女はなぜ今なほ自分の悔であるだらう。
カフエエに出たといふ話をしたときに
わが善い友は行つてみたらどうだと云つた。
空しく思ひ痛んでゐるよりそれは賢いのに、
自分は敢て行かなかつた、行くを恐れた。
この痛みは彼女を得なかつた悔ではなく、
彼女を得る力のない無力の悔であるのだ。
新しい救ひの愛に心すべて傾けつつ、
その救はれの力さへなく、なほ古きを痛む、
何といふ救はれぬ心、何といふ無力！
わが戀を否定し癒さんとする鬪爭意志も
ただ自ら更に傷つける自己への叛逆に過ぎない。

此間も來た或る友達は、みんな人生を
エンジョイしてゐるのに、君だけが
それをしないのはいけないと云つた。
おれはただ苦痛をのみエンジョイして來た、
おれは苦痛を味はひに生れて來た男だ、

おれが受ければ、快樂も苦痛に變る、
どんな善いものもおれの手に入れば惡くなる。
ゲエテの西東詩集を見て、生活的宦官に
生れた自分を憫んだといふその人も、
おれにくらべれば遙かに善く生きた人だ。
おれは生きる力ある時に生きるを忘れ、
戀してはならない時に戀をしたのだ。

おれはドン・フアンでなかつた、
カサノヷでもなかつた。
彼等の生涯を羨み讃へる
みぢめな失戀の詩人にすぎないのだ。
むなしく無花果の葉につつまれて
おれの生涯は葬られるだらう。
エデンの園の初熟の無花果、
時おくれに摘み味ははうとして、
忽ち追放の鞭を受ける、
ジャズの世界に於ける末世のアダムであらう。

残る一つの無花果を割りながら、
これは女の肉ではないのだと思つた。
おれは最も芳醇な生の無花果を
つひに味ははずして死ぬ人間だと思つた。

×

君知るや
心の白さ、
ひえびえと
素焼の壺の
白けたる
心をもちて、
氷りたる
いのち抱(いだ)きて
世をわたる
人の寂しさ。

わが心
日に白けゆく、
しらじらと
笑ひもすれば
つめたさを
人は咎めつ、
あぢきなき
世をばふるとも、
夜はひとり
泣くとも知らず。

白きもの、
白き心の
わびしさよ、
今日も人妻、
ふたり夫(づま)
もちてゆきかふ
かの人に

會ひて語らむ、
白々と
冴えし痛みを。

×

君はいつでもふたり夫(つま)、
晝は晝夫(ひるづま)、夜(よ)は夜夫(よづま)。
ふたつの家のゆきかへり、
いつも事なく微笑みて。

わが夫(つま)ならぬつまがさね、
それはむかしの武士の妻。
今はジャズの世、遊びの世、
戀もランチに似たりけり。

君を怪(け)しやとおもひしは
世におくれたるわれなりし、
愛を二つにわかちなば
君ぞ時世(ときよ)の妻ごころ。

君が微笑み見るときは
異(こと)なる人のしのばれて、
言(こと)にこそ出(で)ね、胸のうち
われに佗しき思ひあり。

など君に似ぬかれなりし、
かれは君をも凌ぐとも、
などおろかにもわが心、
ひと日夫(づま)よと痛みしと。

×

秋草の花のやうなマダムよ、
あなたの心は白い。
今、わたしの心も白い、
つめたい、佗しい心です。

わたしはあなたに多くの罪を負うてゐた、
あなたの美を認めなかつたために……
然し、それは悲しい誤解です、
わたしは最も美を愛するものです。
ただ、わたしはあなたを彫刻家の
モデルを愛するやうに愛したのです。

あなたの良人は男性の善い部分ばかりを、
退屈な部分ばかりをもつてゐます。
あの申分のない良人に何の不滿があつて
とは、わけのわからぬ女の云ふ事です。
「永遠の良人」の妻は、永遠に滿たされない
深い深い井戸です、沙漠の河です。

或る皮肉な口の悪い男は云ひました、
あれは食ひ荒された皿だよと。
あなたの御馳走になつた男は何程だらう、
がつがつした男たちに食ひ荒されて

あなたはますます料理に上達したといふ。
食慾がおこりませんよ、とは非禮の言葉、
わたしは唯あなたの良人を愛するのです。
わたしは食べられないのです。
わたしの胃の腑は消化力を失つてゐます。

わたしは今、女の肉は要らない、
自分の白い心を料理して食べてゐます。
これをすつかり食べつくしたら、
今度は自分の肉をさいて食べるつもりです、
かなりしわくてまづい肉だが……

氣の毒な男だとあはれんで下さい、
だが、皮肉なやりこめあひの相手が
こんなにいくぢなくへたばつては
あなたも少しは寂しいでせう。
あなたはわたしの好敵手でした、
わたしはあなたを愛してゐたのです。

ただ、わたしは一つの弱點をもつてゐる。
あなたの白い心は食べたくない……

白磁の壺に插された草は眞蒼、
アスパラガスは細く、ゲリイは秋草に似て、
楚々たる影が卓の上に搖らぐ、
この寂しい夏の眞晝
わたしの心も滿たされぬ深い井戸です、
その底に多くの女の影がさします。

熱愛して、つひに愛し切れなかつた女、
いたはり合つて、救ひ合へなかつた女、
その間に、なぜほかの女の影がさすか、
なぜわたしはあなたを思ひ出したか。
わたしの心が皮肉になると
いつもあなたを思ふのです、
わたしは自分の戀を癒やすために
いつもあなたを思ふのです。
心の白いあなたを。

秋草の花のやうなマダムよ、
あなたの心は白い。
今、わたしの心も白い、
つめたい、佗しい心です。

×

蘆屋には花のやうな夫人が澤山住んでゐる。
自動車で大阪に出かける豪華な夫人もあり、
情熱的な歌を作る才色すぐれた夫人もあり、
停車場に夫を迎へに行く貞節な夫人もあつた。
最上層は大阪大會社の重役夫人から、
月收百圓内外のサラリイマンの妻まで——
そして、彼女は最下層の蘆屋夫人であつた。

高商を出て、英國人の商館に勤めて、
やつとのことで妻と子供を養ふ靑年、

これもなほ幸運な一人である。
多くの秀才は、家產を學資に傾けて、
大學を出て、なほ自分一人を養ひ得ない、
この現代の不合理が、蘆屋の健康地帶に
いかに不健康な思想を培(つちか)つたか。

妻のすべての我儘を許容しえても
なほ足らぬ、愛なくして結ばれた結婚は
金の鎖でしつかりと結ばれねばならない。
金の鎖をもなほ斷ち切つて飛ぶ小鳥もあるに、
野放しの鳥、彼女はなぜ飛びえなかつたか、
生れた家と父の眼が彼女をとらへてゐた。
彼女は蘆屋に灯(ひ)ともして愚かな蟲を誘(さそ)つた。

濱蘆屋、海樂園內といふそのアドレスを
樂しんで、すぐ手紙の封筒にまで書いた
こんな愚かな、救はれぬ心もあつた。
四五年も蘆屋に慣れた夫婦のやうに、

愚かな男と愚かな女とが、家を探して、
二三軒見て歩いたら、女の白足袋も
男の黑足袋も裏が眞黑になつてしまつた。

すぐ海に出られる小路の奧のその家、
それはとても夏暑さうな家であつた、
海の眺めが前の家でふさがつてゐて、
二階の十疊はあまり騷くて落着かず、
下の部屋は更に息詰まりさうだつた。
それでも何處が氣に入つたのか、
女はわけもなくこれにきめるわと云つた。

海へ出て砂の上を行き、遊園地の
松林の中を歩きながら、女は云ふ、
どうしませうか、家賃があんまり高いのね、
それにあのお婆さん、感じがわるいわ。
それきり、家の事はなんにも云はず、
今日の遊びのことを云ふ、遲くなつてもいいわ、

ねえ、今日は大阪へ行きませうよ。

いや、今日は、電話で約束したのだから、
西灘のあの人のところへ、
ぜひとも行かねばならぬから……
一緒に行かうぢやないかと男が云へば、
さあと考へて、女は強く首を振つた、
わたし行きたくないの、何だか窮屈だもの、
それに變な目で見られさうで……と、
こんな時に、わざわざいはくありげなよその女の
家へなぞ訪ねて行く男の氣持が怨めしかつた。

蘆屋川をはさんで、木立に圍まれて、
ブルジョアの洋館が、廣い庭を取つて、
あちらこちらに美しく聳えてゐる。
川に面した宏壯な石の門の前には
一臺のクライスラアが悠然ととまり、
遠くどこやらにピアノの音もする……

松の間を歩いて行く二人は寂しかつた。
蘆屋には花のやうな夫人が澤山住んでゐる。
彼女たちは美しく飼はれて、愛玩されて、
多少の退屈を割つて人生の幸福を飲む。
その樂しい日々の祭の輝くところに
寂しい戀人達が互ひの心を讀みかねて歩いてゐた。
彼女は貧しいサラリイマンの妻であつた、
彼は痛み傷ついた貧しい詩人であつた……

×

蘆屋は住むに
よいところ、
ただ、ブルジョアの
別莊ばかり。

ブルジョアならぬサラリイマンの
妻と、プロレの詩人ゆゑ、

身はもおもふにまかせずて、
相死ぬまでに燃えもせで。

蘆屋は戀に
よいところ、
ただ、ブルジョアの
別荘ばかり。

かの關西社交界の花形だつた
蘆屋ずまひの博士夫人と、
戀のテナアの海越えて
つひに結びし夢もあれど。

飽かずわかれて
逢ひもせず、
君は蘆屋も
捨て去りぬ。

×

箱根を西に越えまじと
ふかく心にさだめては、
わがふるさとに歸るさへ
よしなきものを、西なれば。

あまりに心痛ければ
また踏みはみじそのわたり、
涙のあとをさまよへば
いのちそのまま絶えぬべし。

廣き日本も君ゆゑに
ただ半ばとぞなりにけり、
わが心さへその半ば
君に奪られしここちする。

國は半ばをのこせども、
心はいかでのこるべき、
君が捨てたるその半ば、

箱根の西に埋められぬ。

×

なにも思はず事なげに
蘆屋に住める人々は
いかにこの世をながむらん、
世にめぐまれし身と知らで。

去年苦しみし夢のあと、
いまひとたびを見たやとは
おもへど見なばたちまちに
心石ともなりぬべし。

蘆屋は海と山のあひ、
美しき人あまた住む、
その美しさ見るごとに
恨みはさらに深からむ。

その名聞くだに胸のそこ
針刺さるるが如くなる
人ありとしも知らずして、
蘆屋に住める人の羨しさ。

×

蘆屋の海は今いかに
夏の日かげに輝かん、
その濱あるく人妻の
姿今年は見えずとも。

海のほとりの松林、
松の中なる貸別莊、
ふたり借りむとせし家に
いかなるふたり住むやらん。

ひと夏そこに暮しなば
のち死ぬとても悔なきを、

飽かず別れて、かけちがひ、
相合ふ事のかなはずて。

はなればなれに世に痛み、
君は破れし家のため、
われはわがため、相見ずて
わかれわかれに死ぬ身とは。

×

彼女を夢にみた、
彼女のために苦しんでゐる男の夢を。
寂しい結婚生活の一場面であつたか、
砂地の上の宿りの晝であつたか。

後から肩をかかへて
部屋中をついて歩きながら、
上からのぞき込んで見たので、
顔がひどく長く見えた。

泣いてゐたのか、笑つてゐたのか、
それは知らない——ただうつむいて。

むかうの窓に
妹夫婦が住んでゐた。
ふと大きな聲で、
女は妹に何か話しかけて、
破れるやうに笑つた。

その話し方と、笑ひ方とは、
まぎれもない彼女であつた。
いかにも少女のやうにはしやいで、
大變な事のやうに息をはずませて……

男はいつも手持無沙汰だ、
思ひきつて接吻もできない。
苦しさうに、女が壁にもたれて
肩でちよつと息をして、男を見て、

寂しさうに、につこり笑ふ。

その男は捨てられた夫であつたか、
妻の實家を補助できないために
妻をかせぎに出す男であつたか、
それとも、夫にならうとして
夫になりえなかつた男であつたか。

夢は寂しい、自分のやうで自分でない、
彼女のやうで、また別の女にもなる。
人生もつひには夢になるだらう、
個人の意識も、どうでもいいのだ。

ただ、彼女だ、彼女だと
いつまで思ふのだらう。
もう、みんな淸算されてしまつたのに、
まだ、何が殘されてゐるのか。

まだ、彗星は通り過ぎないのだらうか、
地球はいつまで彗星の尾の中に
眠りつづけてゐるのだらう。
二年目の八月が來てしまつた……

×

夫のためより親のため、——
そなたはやつぱり古い日本の女であつた。
どんなに若い男をおびき出しても、
神戸から東京まで旅費を出して、
外套までぬいでみついだ男でも、
ついぞ身體をゆるしはしなかつた。
愛はただ父親にだけそそいだ女だつた。

あの子だけはそんな事はないと
いつも子をば信じた父の愛、
裏切つたか、裏切るよと見えて、
それもやつぱり父ゆゑであつた。

家のためなら、夫を捨てて、
親のためには身をも賣る、
そなたはやつぱり古い日本の女であつた。

三の宮からの歸りの汽車で、
夜學通ひの弟に會つて、
うれしさうに、何とそなたの話したこと！
住吉で弟が下りたら、こちらへ來て、
「晝は勤めに出て、あゝして夜學に通つて
いつも今ごろ歸つて行くんですもの、
可哀想よ」としみじみ云つた。

蘆屋の驛から廣い阪神國道へ出て行きながら、
「わたしが家へ行くのを
あのひとがそれは嫌やがるの、
そのくせ、妹や弟がこちらへ來ると
大變歡迎するんです」と話した。
その夫の心持はおれにもわかる、

實家へ、父へとかかる妻の愛を嫉む夫の心！
そんな話をつい事もなげに聞きながら、
おれは直下に、そんならおれは何だらう、
おれは一體誰を嫉めばいいのかと、
何とも知れぬ複雜な寂しさがあつた。
妻の實家を嫉む夫のほかなる夫！
だが、彼女の愛は夫にもなく、おれにもなく、
ただ、その父であつた、實家であつた。

事業に失敗した妻の父のために、
月收百圓のサラリイマンが
そもそも何が出來るだらう。
だが、東京で、職業婦人で働いたとて
そなたに何が出來たらう。
今、道頓堀のカフエエで、一人の女給、
それは家のゆるしでした事か。

女のつとめはただそればかり、
もはや女給もやめたであらう。
多少その名を世に知られた
貧乏詩人の妻などよりも、
もつと氣のきいた地位は得られるものを。
よかつたのだ、みんなそなたの爲めには。
おれはただ、默つて死ねばよい。

×

「いつもうはべは笑つてをれば
底の心は人知らず」
そんな詩の句を愛してゐた女だ。

あれがありふれた女のやうに、
身の上話をしたがつたり、
しみじみと身の苦しみを訴へたり、
本當の底をぶちまけたなら、
男はどんな心になつたか知らぬ。

今は、そのいぢらしい誇りの高さゆゑ、
あはれも増さり、恨みも出る。

あれはさうした世帶じみた話が嫌ひであつた。
實際的な事は何でも云ふのが厭やで、
憂きも苦勞も心に祕めて、
いつもうはべは笑つてをつた。

あれは祕密性な女であつた、
ほんとの底は見せない女であつた。
肌も見せない、心の肌も、
「今に見せてあげるわ」といつて……

心の肌を見せたなら、
そこにあるしみをしみと思ふな、
美しい愛だものを、
そなたを女王にする愛だものを。

あからさまに、
あからさまに——
みんな云へばよかつた。
愛するものの苦しみを
愛はおのれの身に痛む。

やつと最後に、もう堪へられず、
心からすがりついたものを。
運命の意地のわるさよ。
その言葉は途中で消えた、
火に焼かれて……

だが、駄目だ、よしとどいたとて、
女のために、一人（ひとり）を獲るために
身を粉にしても働くやうな、
おれがそんな殊勝な男であつたらうか、
それにはおれはあまりに傷ついてゐた。

三月は、まだ花があつた、
五月は、まだ緑があつた。
それが過ぎて、みんな過ぎた。
秋は病んで、傷を残した。
女よ、そなたの笑ひは空しい。

どうしてゐるだらう、
まだ笑つてゐるだらうか。
夜中にこつそり泣くだらうか。
おれを憎んでゐるだらうか、
すつかり忘れてゐるだらうか。
おれももうおまへを忘れたい、
おれの笑ひも空しいものだ。

×

逝ける作家芥川龍之介の共に死を語りし女人こそ、妾（わらは）なりしをと、われに語れる女ありき。まもなく狂ひて、久しくなに

がしの病院にありしが、病癒えて、いま千葉のかたにあり、社會主義者中にその人もあらば、結婚して、新生涯に入らんとねがひつつありと聞きて。

猫をいだける狂女あり、
いかに見ますやこの姿
をかしからずや、愛(め)でたやと
女は笑ふ月の庭。

わが語りてしその人は
心あまりに弱かりし、
つれなき人ぞとおもへども
絶え入るほどになつかしや。

日(ひ)も夜(よ)も、今も、その人は
わが目の前に立ちたまふ、
あれあれ、そこに悲しげに
立たすを君は見まさずや。

女は樹かげを指させど、
われも見知れるその人の
睫毛は長く眼(め)の淸き
鶴の姿は見えずして。

人は逝きけり、戰ひに
敗れて花と散りにけり、
あまりに早く名を成して
あまりに早く夢さめぬ。

人は逝きけり、世を恐れ、
世に傷つきてたをれなば、
にごりの蓮の淸くとも
折れて悲しき智慧の眸(まみ)。

湘(しやう)の南(みんなみ)、若うして
拔手を切つて泳げども、

世潮呑まむと犇めけば、
戀はいのちの土用波。

などかく醉はぬ君なりし、
心抑へてのがれしも
病みたまへばぞいとしやと
女は猫をかきいだく。

君は名古屋の生れぞと
聞けばなほさらいとしまる、
するどき才をめぐまれて
愛の日影はめぐまれず。

さわやかなりし容姿、
すずしき聲音、冴えし言葉、
細き姿を鶴とみて、
君も折れたる刄なりけり。

君が狂ひし秋よりぞ
われも心の病みつきぬ、
十年は耐へし世なれども
われも折れなん、破れなん。

猫をいだきて君立ちし
その庭もせに春の來て、
ゆるめる土を踏む人は
君が如くに細かりし。

蘆屋をとめの里よりぞ
われに來れる女ゆゑ、
春を甲斐なくくるひでて、
今もいのちは削らるる。

おなじ名古屋の生れにて
おなじく愛に破られし
なさけの人ぞ、わがくるひ

癒やさむとせし春もあれど。

あまりに高き誇りもて
世に生くるこそ悲しけれ、
あまりに弱き身をもちて
世に立つことの難ければ。

われも敗れぬ、われこそは
まこと無慙の敗れにて、
敗れて勝てるその人に
敗れの敗れ語りなば。

猫をいだきて庭をゆき
樹の間に人の影指せし
狂へる君がなりゆきを
語らば人のいかならむ。

わがなきあとに女ありて、
死を語れるはわれぞとて
狂ひいでなばいかならむ、
猫をいだきて月の庭。

×

切ない戀を癒やさうとして
あらゆる女に愛を分けようとした、
あだかも洪水のやうに漲り溢れる
河水を結ひそめの髮のやうに分ち、
海へ事なく導き放たうと、
幾筋かの放水路をつくらうとした。

切ない心は流れ過ぎる水でなかつた、
堰かれた河のやうに湖水の層を高め、
冬ふりつもる雪、春の消息にすがり、
罰をおそれる細流の忍び逃るるも、
海の上げ潮は苦惱を押しかへし、
さらに鹽辛い悔を混へる。

女性の心は放水路ではなかつた、
それは自ら湧きあがる泉であつた。
彼の愛、なほつねに昔につながる一筋、
それがいつも彼女の苦痛であつた。
それを痛みつつ、なほ純一にありえぬこと、
それが癒やしえぬ男の悩みであつた。

罪に打たれる心は山巓に追ひ上げらる、
ひととせ深く埋(うづ)めつくした氷の上に
贖罪の雪が降る、青く澄む氷の上に
白く、浄く、懺悔の華(はな)は散りかかりて、
苦みも埋め、愛も埋め、裂け破れた戀慕、
いま一體に凍りつき、青空遥かに
魂を擔ふ天使の合唱(コオラス)は響く……

×

寂しい戀の痛みより
多くの愛がわがかたに咲いた。
わが傷ついた心は
バルサムを塗つてくれる、
人の目に見えぬ繃帯を施してくれる
微笑む手を見出した。
心やさしい女性を、接吻の驟雨を、
傷ついた冬枯れの樹は、
あまりにわが近くに見出した。

水車のある川が流れて、
果て知れずひらいた野があつた。
新しい望みはそこに芽生え、
冬の半ばにも、
春はかへつてくるかと思はれた。
たのしい道は丘にのぼり、
小さな祠(ほこら)の傍らに、
曇天をささげる疎林の中に、
愛するものは囁きを深め、

駄馬もなほ一度び高く嘶くのであつた。

一年病んだ豫後の人が野に出るとき、
回心のセント・フランシスのやうに、
まつたく新たな光に打たれるであらう。
戀の疾患より快癒せんとするものは、
何の心か、ふたたびもとの酒精を攝る。
心やさしい夫人よ、
わたしはあまりに生に疲れてゐる、
あなたはわたしを生かして下さいますか、
生きる價のないこの破産者を。
然し、わたしはあなたの水車である。

いつもいつも、愛は薄かつたと、
あまりに多くの花にそそぐ雨、
風の吹くがままに傾く蘆、
たよりがたい男の心であると、
夫人はつねに悲みに打たれた。

それは彼が既に破れたる人であつたからだ、
愛は薄いのではない、脆いのである、
ひびの入つた花瓶であつた。
彼は今、ふたたび悔をいだいて、
なつかしい女のやさしい感情を想ふ。
その愛を受けるに足らぬおのれを思ふ。
夫人よ、あなたは彼を許さねばならない、
彼はなほ空しくめぐる水車である。

×

寂しいものと
寂しいものとが、
よく風の吹き入る
ふたりの家で、
春のひと日を
花環を編む。

それはあなたの戀人のため、

これはわたしの戀人のため、
どちらが美しいでせうか、
あなたの花環、
わたしの花環。

あなたはわたしのために
けつして編んでは下さらない、
さう云つて女は怨む。
いいえ、わたしはかうして
あなたの前で、
花環を編んでゐるではありませんか。

妻の心はいつも
嫉みに熱いのだ。
あなたは妻であつてはならない、
あなたはいつも自由なわたしの戀人、
花環を編んではならない、
ただ贈らせねば。

わたしの戀が古くなると、
あの泉に洗ひに行きます、
わたしの身體が白くなつて
わたしの心が青くなつて、
わたしはそこで死ぬのです。
そしたら、あなたの花環の中に
わたしの涙がいつも宿ります。

×

あなたは勘忍強い、やさしい方です、
この贈物をゝ許して下さいますでせう。
無花果の葉に蔽ひつつんで
この果物をあなたに贈りますのを。
無花果の葉につつまれてゐても、
これは無花果ではありません。
珊瑚の苺、
それとも黄玉の枇杷、

それとも破れた心臓、
それとも涙の晶玉。
または、もつとつまらぬ果物でせうか、
どうせこんなに押隱されてゐるからにはと、
そんな風に惡く取つてはいけません。
この無花果の葉をあなたは許さねばなりません、
あなたのために、
わたしのために、
さうでなければ、この果物は
おそろしく苦くなりますから……

×

ひそかに愛でし君なれば
ひそかに君をおもふのみ、
人には云はぬ戀なれば
歌も人には見せざらむ。

君にささげしかずかずの
ねがひも今はあだなれや、
星はみそらにかがやけど
いのちは水の泡にして。

宵々てらす螢火の
はかなく草に消ゆるごと、
つひに憂ひもねむりなば、
君は風にも祈るべし。

心の底に祕めたりし
君が名こそはたふとけれ、
ひらくときなく閉づる眼の
中にぞ君を率て行かむ。

×

君たをれますそのときは、
生木の裂かるるに
似たる痛みをおぼゆとぞ、

君はかたりぬ道すがら。

林のみちは盡くるとも
盡くるは惜しき夢なりし、
いまひとたびとおもふまに
夢をささふる身は折れぬ。

細くかよわきわが身こそ
蘆のたぐゐとおぼさずや、
大木(おほき)の枝は裂くるとも
裂くるに呼ぶ力あり。

かの川風になびく蘆
折るるけしきは見えざるに、
など折るべきとのたまふか、
あまりに夢のおもければ。

×

心は熱き君なれば、
世のわずらひにほだされて
あまりに薄きなさけをば、
さびしといかにおもひけむ、

世に立つ力なほもちて
なほよき業(わざ)をなしなむと
君はわれをばたのみけん、
その妻心(つまごころ)知るものを。

愛も力も薄ければ
生くるに足らぬ身なれども、
男ざかりにたをれなば
可惜(あたら)と君はなげくべし。

われをば送る葬ひの
鉦(かね)にもまして悲しきは、
冬の木の間(ま)の風のごと

胸のうつろに鳴る音よ。

×

わが斃れむとせしときに
われをささへし人ありき、
わが踏み迷ひせしときに
あかり照らせし人ありき。

女ごころは知らねども
なさけは君がものなりし、
風にも雨にもわが上を
安かれとこそ祈りしか。

男に力なかりせば
女の愛にあたひせず、
弱さに君をきずつけし
しれものなどて幸(さち)あらむ。

いのちをかけて戀わたる
若き清水も涸れはてて、
見果てぬ夢ものこらねば、
今ぞ世を去る時と知る。

×

いくたび夢にあこがれて
いくたび人にきずつきし、
おろかなればぞ、こりずまに
迷ひの夢にあざむかれ。

おろかと知れど寂しさに、
迷ひと知れど床しさに、
またまた人に求めよる
男は蟲に似たりけり。

灯(ほ)かげ慕ひて飛び入らば
蛾はいさましき神なるを、

翅やかれて引きかへす
蟲ぞみにくき人のかげ。

ああ、あはれにもおぞましき
われなりしかな、いくそたび
飛び入らんとて逃げ去りし
みにくきものの、われぞとは。

かくていつまでながらへなば、
いかに立つとも、生きながら
地獄に墮ちし身ならずや、
われを救ひて、人よ死なしめ。

七月二十五日——八月三日(東京)

第三編

×

晝は蜩、夜は河鹿、
山百合の香りにむせて
溪流のひびき枕の下に、
山また山の重なりて、
わがために、ささがにの
いぶせき絲さへはらふ人なく、
實に、君遠し、あまりに遠し……

その人の山の消息(おとづれ)、
あまりに遠き人のおとづれ。
山の宿、水のほとりに
ただよふは君がためいき、
風となりてわれに觸るるか。
また得がたき人とおもへば
風をすら息と捉へむ。

箱根を越えて、君は住む、
ただ五時間の汽車の旅、

近しと云ふか、荊みち
踏み分け行かば幾年か。
山の宿よりかへるとも
ひがしに向かぬ足なれば、
君し來るは夢のたまゆら。

あまりにも弱かりし
あまりに正直なりし
奔のためらひ、今ぞ悔むと、
悔多き君は、女か、
涙もろき女よ、君は、
ほとほとと叩く扉に
今もなほわれをおもふと。

その罪はわれこそ負へれ、
かの日など行かざりしか。
今はさらに心よはりて
死ぬといふねがひもあれど、

わが行く道に君こそは
など重き鎖とからみ、
海路よりわれをとどむる。

夏空の虹のごとくに
はやも消えてかへらぬ人は
難波潟よしあし知らず、
かなしければ、思ひ出さじ。
夕月の今もほのめく
君なれば、われを照らすや、
ひととせの夢も遠きに。

遠し、遠し、すべては遠し。
たはむれて泣きつる人も、
手をとりて死を語りしも、
みな失せて、のこせし人の
風に搖るる蝶をとらふる
ささがにの絲もはらはず、

たのみてし業も甲斐なし。
十年の孤獨、その後ぞ知る
今ぞまことに孤獨なるを。
地の母のふところのごと
あまりにも孤獨なるを。
未だ生れ出ぬ子のごとくに
うごめくをあはれとも見よ、
君遠し、あまりに遠し。

×

五月、薔薇さへ枯れたとし、
まづ、根を斷たれ離れたひと、
その救ひまた空しうて
ゐにしの絲の絶えたひと、
斷たぬなさけのたよりして、
私の心の記念日に
臨濟寺にまゐりましたと
ほのかにもつたへた言葉、
うれしいは、その心、あの日の瞳、
人こそ知らね、今も忘れぬ。

わが一生にまつはると
手の筋にあらはれてゐる
女か、君は、なさけの深さ、
かのミツルこそ、あへなくも
ひと夜咲き散る花と見し、
君は常盤樹、常綠、
いつまで煙、下這ひて
心の庭に影おとす連理の松の
根と根を合はせ、枝交はし
抱き相寄るその日まで。

五月、いのちの遣る瀬なさ、
都大路のさすらひに
燃ゆる洋酒に醉ひ痴れて、

去年の秋のわづらひを
またかへすさへ恐れもせで、
洛陽の酒徒ともあらで
あまた樂しい詩人にまじり、
本牧のホテルに更かす男心
あさましとこそ君は見め、
君に似たるを抱きしを。

みたされぬ、みたされぬ、
なにをして、なにを飲んでもみたされぬ、
これぞこの身の呪ひよ、さだめ。

戀の苦情をやめにして
書けとはいへど、書くはよそごと、
腹くろぐろの政治家とはなれぬおれ。
世の憤り、わが弱さ、身を嚙むのみ、
身を嚙むはインテリゲンチア、
戀に死なれず、鬪爭に生きず、
なんとするぞと問へど答へず。

これがおれよと知るときは
おれの腸しぼられる、
やけツくそ、やけツくそ、
そのやけツくそもまだ足らぬ。
戀は駄目だ、女は無駄だ、
その力さへないものが
なんで革命の詩に生きられう。
かのベランジエはポリツソン、
わがハイネまたフリヴォール、
おれもエロスの申し子か。

願ひは二つ、身をひき裂く、
うしろへ戻す聲はやさしく
われを押しやる力は荒し。
どうなるぞ、どうなるぞ、
行くか歸るか、この瀬戸際に
ただ鬪ひに雄たけびに奮ひ立てども、

ふりしぼる弦のよわさよ、
ひよろひよろとまたもたわむよ。
君もゆるせよ、友もあはれめ、
この弱さ、これぞわが呪ひよ、さだめ。

×

靜岡から五里ほど山の中へ入つた
岡部溫泉、冷泉でわかし湯ながら、
山の中なのがうれしく、笹百合が
たくさんたくさん咲いてゐました。
歸りは宇都ノ谷峠のトンネルを
拔けて歩いて歸りましたが、
それはそれは月のよい夜でした、
大きな螢がスイスイ飛んで居りました。
そのたよりみて、思ひいだすは
山の湯は私のあこがれの的ですものをと
いつもいつも君がいうた言葉。

あの臨濟寺からかへるとき、
今川義元の墓の前から
路のべの草まで浸した水たまりを
つひ手をとることもなしえずに
避けて出たときに云つたこと、
ふたりで旅ができましたなら、
靜かな山の溫泉に浸つて
のんびりした日をすごせたならと、
しみじみと云つたその言葉。

二人で、二人きりでとたのしさうに
くりかへし云つた事も無理でない。
いつも一家眷屬ひきつれて
親子夫婦に女中までの大名旅の
その世話係りにまはされて、
苦勞は旅でも絶えないものを、
これが浮世はなれた氣散じか。
男一人に女いくたり、

その大名ぶりが嬉しいとは
おれにはとても分らぬ氣持だ。

上信、東北の山の湯のかず、
加賀、越前から、因幡、出雲まで、
いつもひとりでさまようて行つた
旅は寂しいおれだもの、
寂しさ味はふ旅だもの、
ふたりでしたらどんな旅、
たのしいか、うれしいか、
並んで宿のてすりにもたれ
おなじ湯槽にひたつたら、
山をゆびさし、山の花摘み、
山の好きな人と山行き。

伊香保の裏のガラメキに
あこがれる人をつれ立つて
行く旅を、幾度びか夢にゑがいた

それは去年のおれであつた。
一緒に山の中に入つて、
新生活の準備をととのへて、
それから二人の家をつくると
一夜さだめただんどりも
夢でみたされ、もうすんだ。
今日もやつぱり家族づれで
山行く人のたよりみて、
それがそなたの一生の旅とおもうた、
そして、おれはやつぱり一人旅だと。

×

停電した闇りの中で
しみじみと東のなつかしく、
思へば思ふほど矢も楯もたまらず、
不覺にも涙がとめどなく流れ出して、
いつの日にか、あまりに弱かつた
あまりに正直すぎた

自分があはれにいとしまれてと……

飛び立たむ勇氣は足らず、
つひ人情にほだされて、
氣やすめの言葉をたよりに
居つけばやつぱり元とおなじ、
いつも末座の第二夫人の
生きる甲斐ないその日々を
今またくやむ女心。

その心ゆゑ、君こそ妻に
いとしやほしやとおもうた
その心ゆゑ、やつぱり元の隱れ妻、
君は朽つべき女か知らぬ、
おれがあのとき行きさへしたら
何もかも一遍に變つたかも知れぬ、
それになぜ行かなんだ。

責めるはおのれ、君ならで
みんなおれの罪だ、
おれがあまりに弱かつたのだ、
あまりにエゴイストだつたのだ。
おれは戀より、女より
やつぱり詩をば愛したのだ。
これが詩人だ……

いや、詩よりもおれは死を愛したのだ、
愛の飽滿よりも戰ひを愛したのだ。
いかに東をなつかしめばとて
おれは君を幸福にする男でないものを、
その心受けるに足らぬ男だものを、
おれは墓だ、おれは無だ、
時代の嵐に飛ばされる蝶だ。

君に救はれ君を救ふ
その共棲みの新生活に

愛する女と暮す樂しみおもへば、
その生甲斐に恥も忘れて、
隨分何でもやつた事だらう。

もともと、絶望からの戀である、
その戀救はむ戀である。
ああ、こんな戀をした男が
一體、何處にあつたらうか。
惡魔、弱い弱い惡魔だ、
おれを愛した女よ、女たちよ恕せ、
おれはこんな男だ、おれは無だ。

また一年を生きのびた今日、
世はいやましに生き難くなつた。
心は揺れて、傾き傾く、難破の船か。
今はただ生きるは一つ、戰ひの道、
おのがためでも、女のためでもなく、
ただ、この烈風の中、激瀾の中、
甦生の一歩を力強く踏み出さうと
思つた事もあつたが、もう駄目だ。
もう駄目だ、もうおそまきだ、
三年おくれた、
何でも手遲れするやうに。

三十四五のおれであつたら
まだ、大丈夫、やり直せた。
過去の一切をかなぐり捨てて
獅子のやうに立上つて、
いかに打擊は重なるとも
愛する女をかばうて、天上天下、
裸一貫で生きられたらう。

心に染まぬ賣文しても、
新聞小說、少女小說、
大衆物の續き物を書いてなり、
飜譯してなり、國文學の研究してなり、

不動の巖壁にぶツつかる必死の戰さ、
この無力をばいや更に身に知りながら。

これが今日のおれである、
おれは立てるか斃れるか、
おそらく、おれは斃れるだらう、
翅破れた蝶だもの。
嵐にたたき伏せられて
再び起てぬそのときは、
君よ、恕せよ、この愛なきものを。

×

わが生は火と劍にむかふ、
貧と苦鬪と死とにむかふ。
云へ、友よ、我も行かむと、
來れ、女と云はざれ、今は。

薔薇の園生は路盡きて
今は花なき荊棘みち、
蒼ざめし馬に乘りてゆく
愛するものをみな捨てて。

愛する女は人のもの、
わが手に抱く人ならず、
女のわれに求むるは
愛と快樂と平安なれば。

今わが得べき人はあらず、
ただわれと共に死ぬ人ならでは。
しかも、愛するものを死には誘はじ、
死なせたくなし、奪ひたくなし。

幸あれ、女、わが愛でし
人なればこそ生きてあれ。
われはひとりの路をゆく、
蒼ざめし馬に乘りてゆく。

×

静岡の人に出であひ
静岡の話を聞けば、
さしぐめる君が影みえ
なつかしく、ひそかに悲し。

安倍川の流れしのばれ。
用宗の夜のしのばれ。
賤機の涙しのばれ。
茶屋町の柳しのばれ。

今一度びかの河わたり、
かの富士に肩をつらねて、
かの道を君と並びて
歩くべきわれと思はず。

わかれてはまた見ぬ人を
空しくも思ふは悲し。
なさけある君とおもへば
わが胸に消えてかへるな。

×

「柱によりて
山みれば
山のあなたに
君住みて」

君をおもふと
知りますや、
君をなげくと
知りますや。

「一年君と
歩きつる
あの山道も

夢のやう」

夢をうつつに
かへさねば、
今はひとりの
君ならん。

「せめてこの夢
すてぬやう
胸に抱きて
寢やうもの」

箱根の山の
山越えて
通ふ夢路も
ないものを。

「山の女は山の中
住めば都ぞ
徒らに山を下りよと
なんになろ」

なんになろとのあきらめ心、
女心は弱いといふか、
山に上らず山を戀ふ
男心もあるものを。

×

すつかりあきらめては居りましても
折にふれては淋しさがこみ上げてとも、
ああ、もう一度情熱の燃ゆるがままに
何も彼も忘れて、目かくしされた
馬のやうに走つてみたいとも、
燃えようとする情熱にいつもいつも
水をぶつかけて居なければなりませぬ、
けれどいくらぶつかけてもぶつかけても

下の方からブスブスとくすぶつて居ります、
埋火がいつまた火の手をあげますやらともいひ、
もつと早く、あの時に、あなたが私に
働きかけてくださつたらなんて、
そんな愚痴は言ひますまいとはいひながら、
女の言葉はますますからむ蔓草である。

ただ一つのものを、女は待つてゐる。
電光の一撃に、石や木までも生きてくる、
今まで眠つてゐたものは醒めて、歌をうたひ出す。
彼女はただその閃電のシグナルを待つてゐるのだ、
この三月も、今も、また秋も、——
彼女は男の出かけて行くのを待つてゐる。
いつまで彼女は待たねばならぬだらうか。
おれはいつまでイんでゐるのだらうか。

生きてゐるのが退屈で、何の希望も
氣の張りもないあまりにつくり出した、

これは夢です、幻ですと、女の言葉、
處を離れても時をたがへずに、
同じ方法で自殺したとしたら、
それは心中にはならないでせうかと、
それは靜かな嵐の夢である、
はなればなれの戀人の最後のたのみ、
たつた五十里はなれてゐるだけで。

女心は弱いもの、女は身ままにならぬもの、
女はいつも灯ともして男をさそふ。
お互ひに危險を冒すだけの勇氣があつたら
機會のあつた場合、私の指定する方法で
あなたは逢ひにいらして下さいますかと、
半年ぶりで、またこれだけの力が出たか。

手とり早くイエス、オーライで
妥協してしまふのが近代の戀愛なら、
十年も二十年も一つところに停滞して

心の底深く思ひ込んでゐるなんて、
當世には向かない古風なお笑ひ草でせうかと、
まことにそなたの云ふやうに、
われわれはあまりに古風な戀人である。

思ひ切るのにまだ十年かかるといふそなた、
おばあさんになつても
處女の心を失ひたくないといふそなた、
わたしがまだ十年生きて、
やつぱり弱い不決斷な戀人であつたなら、
そなたはやつぱり十年待つつもりか。
それは可哀想だ、おれが死んだらなほ可哀想だ。
でも、人生には仕方がないといふ事がある。
わたしも仕方がない男、そなたも仕方がない女、
思ひ合ひながら、別れ別れに死ぬのかしらん。
われわれはアベラアルとエロイズほどに、
古風な戀人であるのかしらん。

×

たうとう彼女に名をあたへた、
長いこと望まれてゐた名をあたへた、
わたしは俊子といふ名をあたへた。
この名がわたしは好きなのだ。
この名をあたへることは、心の結婚である。
わたしの俊子よ。
今日からわたしはそなたをさう呼ぶよ。
お互ひの間ではさう呼んで下さいませと
前から云はれてゐたその名前、
わたしの替名の下にその名を書いて、
いまはわたしの妻である。
わたしの俊子よ。
そなたはわたしと一緒に旅がしたい、
あの靜かな山の温泉で、その宿帳に、
わたしの替名の次ぎに、妻とかき、
俊子の名前をかきたいだらう。

それがそなたの夢である。
わたしの俊子よ。
愛するふたりが樂しい旅をしたら
そのまま死んでもいいと思ふだらう、
いや、そのまま死んでしまふかも知れない、
蜜の中で蜜蜂が死ぬやうに。
そなたは旅で死にたくはないか。
わたしの俊子よ。
そなたも長い旅をして來た、
妻のある男から、妻のある男へ、
今また妻のある男へと。
これが女の宿命なのかしら、
一度踏出せば、生涯がその繰返し。
わたしの俊子よ。
そなたはあんまりやさしい女、
あんまり人の氣を兼ねて、寂しい女、
わたしにも少し押しがあつたら、
わたしがもつと圖々しかつたらと
なげくそなたがふびんでならぬ。
わたしの俊子よ。
どうしてこんなにそなたが好きなのだか、
あの女、身をゆるし合つた仲だもの、
その十日、夫婦氣取りでくらした女だもの、
今も忘れはせぬけれど、
そなたを思へば、消されてしまふ。
わたしの俊子よ。
ふたりの間も長い旅であつたね、
はたちのときから知つたそなた、
かうなるまでに十年かかつたのですもの、
また思ひ切るのに十年かかりますよと
そなたは寂しく微笑むのだね。
わたしの俊子よ。
思ひ切らうか切るまいか、
わたしも辛い思ひを幾度びかした、
思ひ切られぬ、添へない身なら、
せめては心の夫、心の妻、

そなたもおなじ思ひであらう。
わたしの傻子よ。
そなたは女、とりわけ受身な女だもの、
勇氣のないのはわたしのことだ。
だが、わたしはあまりに疲れてゐる、
そなたを生かす力がない、
わたしの旅はもつともつと長かつたのだからね。
わたしの傻子よ。
そなたが死ぬなら、わたしも死ぬよ、
女と死なうとは思はないけれど、
そなたとならば、傻子だものを。
でも、そなたは生きてくれねばならぬ、
寂しいわたしを偲んでくれるために。
わたしの傻子よ。
そなたはいつまでも生きて、
わたしの幻をいだいてゐてくれるだらう。
わたしがそなたに與へたものは
ほんとになんにもありはせなんだ。
でも、そなたは妻となつてくれた。
わたしの傻子よ。
この詩がこの家の妻の眼に入つたら、
妻はどんなに怒り悲しむだらう。
だが、妻も許してくれねばならぬ、
心ばかりの交はりだもの、
妻となりえぬ妻だもの、
わたしの傻子よ。

×

傻子よ、
そなたの顏はわたしの好きな顏、
そなたの手はわたしの好きな手、
そなたの足はわたしの好きな足、
そなたの頸は、そたの胸は、——
無花果の葉をのぞいたならば、
もつともつと好きなものを見出すだらう。
かうも白い肌へに、

からも床しい淡紅(うすべに)の彩り、
それは浮世繪師春信の苦心の彩色であるか。
おもへば、織物の上によこたへるには、
あまりに惜しいからだである。
それはただ、花のしとねに、
泉の淸らかな水のしとねに浸すべきもの、
匂はせつつ、きらめかせつつ。

俊子よ、
わたしはそなたと、ただそなたと、
眠り知らぬ幾夜をすごしたい、
最も強い酒をのみたいと思つた。
おれははじめて神々の美食を知るだらう、
滿那(マンナ)か、麝香か、沒藥か、
それはあまりに匂ひ高い花であつて、
花瓣のおくの小路に花粉を求めて
蜜蜂はふたたび姿を見せぬであらう。
そなたは風をも狂氣にしてしまふだらう。

そなたの好みはこまやかで、
年に一度の七夕の二つの星の逢瀨のやうに、
いのちの河のなかばに息絶え絶えに、
そなたは戀の祭りを古代の希臘人の如くし、
ふたばしらの神のために花を撒くであらう。

俊子よ、
そなたの黑耀石のやうにきらめく眼は、
この時ぞ、不思議な呪文となるであらう。
その閉ざされるとき、口はひらき、
おなじ幅あるものに蔽はれて、
宇宙の一片を魂のかけ橋とするであらう。
また瞳はひらくだらう、凡てのもの開くだらう、
最も強く、最も優しく、最も美しい神にむかつて。
そなたはダナエのやうに身をそらし、
レダのやうに身をば曲げ、
ユウロオパのやうにたわむであらう。
そなたは黃金(こがね)の雨にうるほひ、

白鳥のなめらかな羽毛をも撫で、
牛の力をも受けるであらう。
それは草木も眠る牧神の午後であらう。

俊子よ、
かつてわたしの見た夕の夢は、
あまりに恥らひの處女さびして、
小鳥はただびくびくと死につつあつた。
小舟は靜かな淺瀬を靜かに漕いだ。
そなたはいかに搖れ動く扇であらうか、
いかにたわやかなもの、地行き空行き、
人は鳥となり、魚となり、また獸となり、
イギリスに行き、印度に行き、
アラビアの匂ひの園に行くであらう。
赤旗を揭げた一隻の船、煙を吐きつつ、
運河の中を遠く遠くたどるとき、
兩岸の蘆さわやかにゆらめき、
紅海より地中海に醉へる魂は搬ばれ、

旅人はなほ遠く行かん哉と叫ぶ。

俊子よ、
そなたはいとよきテクニシアンをもつた、
それはそなたをいみじきメエトレスとした。
そなたはさらにすぐれた哲學者を求める、
彼の嗜好を訊き、彼の知能をきはめて。
そなたは更に高雅なヘテエレとならねばならぬ、
いとも單純な管音の樂器をもつて
いとも複雜な愛の音色をいだすために、
そなたは疲れを知らぬ樂人を求める。
管絃、錦襴を織る夜の交響樂に、
トリスタン・イソルデの切なる悲戀、
美なるものの極み、哀しきものの極み、
溢るる杯になほ油なす甘露をそそぎ、
ああ、この上はただ死、死の眠りへと
沈みゆく時ぞ、生は一夜の花である。

俊子よ、
わたしはそなたと愛の祕密を學びたい、
アルス・アマトリアの美辭をそらんじ、
そのあらゆるヴリエーションの
用の盡されたあとにもなほ、盡くる事なき
天才の獨創力もて樂譜を案じいで、
ベエトオヹン、ベルリオ、ドビュッシイの後、
なほいかに未耕の處女地殘れるかに
印度、ペルシアの樂人をも驚かしめ、
カアマ・スウトラの補足すらも案出するであらう。
ニノンもカサノヴァの技に驚くとき、
行き盡して、殘るものただ、智慧である、
あまりに遠き旅路の疲勞と倦怠とから
旅人は一杯の淸水に潤ほはねばならぬ。
君が言葉、君が歌、君が才こそ譽れである。

俊子よ、
そなたは風にも破れさうな小さな花であるのに、
その花粉もて惜しみなく蝶を焦がす。
そなたはあくこと知らぬ愛の泉、
愛のはじめのひかへめの次ぎに、
たちまちアマゾンの女軍ともなるか。
愛のさなかに死なぬならば、蟷螂のやうに
そなたがわたしを食ひ盡さぬならば、
ふたりは歸依と祈禱に靈を淨めねばならぬ。
かくもわたしに樂慾を抱かす女はない、
またかくもわたしを純潔にする女もない。
かくもまとはぬ衣の言葉を聞きもせず、
しかもまだ手さへも觸れぬ人もなかつた。
それは深く深く藏はれた生の祕義である、
わたしはそなたの上に最後の晩餐の幻を描く。

×

あるときは、
細長いからだが
わたしのまへによこたはつてゐた。

中高の細面が
わたしのまへに咲いてゐた。
わたしの好きな細長いものが——

わたしの細長い顔と
細長いものが出合つて、
唇をあはせると、
それは二つの蛇のやうだつた。
あまりに長い、
あまりに長い、
それは苦惱の道である。

今、わたしは丸いものが欲しい。
あの小さなからだが欲しい、
あの丸顔が欲しいのだ。
わたしの情をうつす鏡は
いまはまるくなくてはならないから。

その鏡の中にすばらしい國がある。
山があり、河があり、
花があり、夢があり、
いくたりかの男も住む。
小さなアリスのやうに、
わたしはその中に迷つてゆく。

×

おれはいくたりも妻をもつた、
心の妻をもつた。
晝間だけの妻をもつた、
遠國の妻をもつた。
會ひ得ない妻をもつた、
相得ない妻を。

得ずして失はれる妻である。
來ては來られぬ妻である。
招けど行けぬ妻である。

人と棲みえぬ妻である。
妻とよばれぬ妻である。

おれは一人の妻をももたなかつた。
妻といふ名は、強いもの、
おれはいつでも影法師。
棲めば女はつらいもの、
男は夢のさめるもの、
心の妻よ、そなたはいつも
夢の女ですませぬか。

×

おれはいつもあの姿を思ふ、
男になぐられたといつて、
おれの寢床のところへ
泣いて來た彼女をおもふと、
おれの愛の薄さが恥かしい。

顔中すつかり涙で濡れて、
まだ瀧のやうに涙を流し、
むしろ顔がみにくく見えた、
けれど、そのときの彼女が
おれには一等いとしかつた。

外から歸つたばかりの洋裝で、
小柄な人ゆゑ、
まるで十四五の子供のやうな氣がした。
打たれたといつて、訴へに來た
その姿はいぢらしかつた。

その時から、彼女はおれの妻だつたのだ、
あのとき、引止められるままに、
一層圖太くとまり込んで、
惡黨ぶりを發揮したなら、
おれも見上げた男だつたらうに。

それができないおれであつた、
おもへばいつもいつも
おれは落武者、のがれてばかりゐた。
おれは逃れる事ばかり考へてゐる、
おれはそのおれを鞭ちたいのだ。

おれは浅猿しい獣だ、
獅子や、狼のやうな獣でなくて、
鹿や兎のやうな弱蟲だ。
おれは人生を逃れたがつてゐる
おれといふものが厭はしいのだ。

×

秋風につけて
なつかしいといふたよりがくる。
一度死を誓ひ合つた人が、
まだ生にむすばれてゐる男の、
絶えてそのまま
風のたよりもない男の、
最後の杯をくみにくる
愛もない男の
心をいかに汲むものか、
秋立てば
なつかしいといふ。

洛北の秋は
早く木の葉にしめやぐだらう。
つひに足踏まなかつた
あの寺院のまちに、
そのひとは白粉もなく、
髪もむすばず、
秋も立つ庵の中に、
松風の音しめやかに
茶を立てながら、
蟬も黙す梢仰いで、
わが身の秋を寂しむであらう。

春は山のかなたに、
生また空のかなたに、
美しい夢はほろびた。
さしもはなやかな、
匂ひの帶も褪せつつ、
かずかずの男の唇に
殘した紅はただ昔の俤、
秋は佗しいか、
たはれ心も靜もるか、
君が眉のあたりに
なほ迷ふ一點の秋を偲ぶ。

×

わたしといつしよに、
愛の夢と死を辿りたいと
しみじみといつた女よ。
あなたの捧げものはうれしいものである、
それゆゑ、わたしもあなたに捧げるもの、
あなたの手に重く置くべきであつた。
ただ、遲かつた、
あなたの罪ではないけれど、
わたしの春が遲かつたのだ。
あなたはその日、
わたしを滅ぼす女ではなかつたのだ。
みんなふたりの罪ではない。

あの純情な靑年が
あなたの濃情から逃げたときに、
その面は蒼く、恐れの汗があつた。
そのとき、わたしがいかに思慮なくとも、
すぐそのかはりにはなれないのです。
女から强ひられる操作は苦役、
漕刑船の奴隷であると、
わたしはかつて年とつた寡婦の男妾、
或る壯俳上りの白い男に知つた。

美しい匂やかだつたあなたが、
いかに四十を越せばとて、
かの信徒にその思ひ抱かせたとは、
わたしはあなたのために泣くのです。

あなたは趣味の人であり、
みやびな遊藝の人である。
わたしの貧弱な肉など求めてはいけません、
どうしてそんなにこの痩せこけた
細い身體なんぞが欲しいのですか。
いやいや、あなたの望んだものは、
それではあるまい、このみすぼらしい
詩人の名前ではなかつたでせうか、
わたしが何よりも輕蔑してゐるこの名前では。
けれど、それと云ひ切るのは侮辱です、
あなたはもつと高い心の人である、
あなたはわたしの心が欲しかつたのです。
この心こそ、わたしの唯一の贈り物、
あひにくそれはそのとき或る女の手にあつて
わたしの手にはなかつたのです。

今、その心は破れて裂けちぎれて、
むざんに、もみくちやになつてゐます、
この心さへ欲しいといふ女(ひと)はある。
だが、わたしは愛するがゆゑ、
なほさらこの心は贈れない。
心はわたしに背いて飛んでゆく、
けれどすぐまたわたしは引き戻す。
あなたもわたしはいとしんでゐる、
あなたにも贈れはしない、
これは自分でずたずたにして捨てるまでです。
だが、あなたはわたしと生きようとは云はない、
死ねばあなたと、さう思つた、
すぐ次ぎにわたしは一人がいいと思つた。
わたしは芝居をしてはならぬのです。

わたしといつしよに、
愛の夢と死を辿りたいと
しみじみといつた女よ。
あなたの愛はわたしにうれしいものである、
ただ、わたしの夢はもうあまさない。
あなたは僧房の秋のふすまに、
蓮華の夢、花鳥の夢を描きなさい。
あなたは蓮月尼のやうになるべき女だ、
わたしが弱く弱くなつたなら、
あなたをさそひに行くでせうが、
わたしはそれより、一生の一日、
あなたとらくやきをしたい、
歌をつくりたい、
佗茶を味はひたい。
それがわたしのあなたへの愛です、
また、わたし自身への愛なのです。

×

濃みどりの
茶をたてて、
わが匂ひ
偲ぶ人あり。

繪襖の
繪の中の人、
夜はいでて
君と眠るや。

いつもいつも
われと眠るや、
白菊の花
かたむけて。

秋ごとに
男をおもふ、
來て抱かぬ
男ゆめみつ。

君がなさけ
いまは杁影
夜鴉の
啼けば凄しや。

夢に痩せて
十年へたれど、
うつつには
白魚笑むとぞ。

相纏けば
消ゆる泡雪、
おろちなす
夜のかねごと。

曼珠沙華、
けふも敷き伏し、
股長に
人は寝るとぞ。

らうたけき
君が三十路を
しらぬまに、
われも老いたり。

君が手に
のこる匂ひは、
きずつきし
男の迷ひ。

男こそ
君が身の毒、
女こそ
わが世の劍。

寺にゐて
想ひ絶たぬか、
濃みどりの
茶をばかたむけ。

詩に痩せて、
痩せぬ心は、
君ならぬ
女をおもふ。

秋の寺に
いのちいとしむ
君はなほ
われを思ふに。

相死なば
二つの氷魚、
相寄らば
落葉に似たり。

×

わびしきものは法師の妻.
髪もむすばず、
紅もささず、
さつぱりと白粉氣もなく、
さしも昔の匂やかな
艶女の俤、水桶の切花、
媚はのこれど、戀は空しく、
京の水は飲みながら、
山寺のわれから侘びて、
だいこくといふ名もつめたく、
許されぬ妻ならぬ妻の隱れ場、
庫裡にさす日影もまぶしや。

昔のはなやかさ
戀しいか、

貧しさにも慣れ、
世にも慣れ、
しばし譽れある人の妻とて、
雲の棧ふむころの
思ひ出も枯れし白菊、
南蠻黍の紅い毛を愛で、
蛇山の蛇にむつれて、
山姥となるべき身をも、
いまは薄茶の薄みどり、
たつ泡と身をば觀じて、
なにをくよくよ川端柳、
白魚を汲んで
秋いくたび、
君が眉もやや老いた。

和尙は酒に醉うて
便々たる腹をたたいて、
童顏の眉垂れて、
さても悟りはなかなかできてゐる。
ぺろぺろ舌を出すよりも
蛇の全身まる出しぢや、
みんな修業ぢや、
柳はみどり花はくれなゐ、
おもしろの世の中ぢやなあ。
これ一つ、歌でもうたつて聞かさぬか、
舞のしまひはどうぢやなあ、
おまへのために、管長を棒にふつた
莫迦な和尙といふまい、いふまい、
わしは破れ寺の和尙が氣樂ぢやよ、
なあ、夜深うして同じく着る千歲の雪ぢや。

×

自分がこれほどに多藝多才の男だとは
自分でもつい此程までは知らなかつた事だ。
ただ一圖な男とばかり思つてゐたのに、
愛をいくつにもいくつにも分けながら、

そのいくたりかの女を愛し得ようとは――
いくたりかを――本當にさうなのか。
心のすべて、身のすべて女に傾けて、
世間にはすつかり口をふさぎ、
ただ女の口へだけこぼすからか。
それを專門にするのはカサノヷ、
そのカサノヷすら賭博の情熱があつた。
しかも、カサノヷに戀があつたか。
いくたりかをおなじやうに愛するといふ、
それは噓だ、神樣でない男だもの、
愛する人、愛される人、愛し愛される人、
好きな人、嫌ひでない人、どうでもいい人、
いろいろ、いろいろ、あるだらうと思ふ。
人の愛しかたは人の生き方である、
その人の戀を見れば、その人がわかる、
おれもおれらしく愛するだけだ。
おれは本當はカサノヷを羨まないのだ、
おれがカサノヷだつたらどんなに寂しい事か、

おそらくもつと早く自殺してゐたらう。
おれはやつぱりスタンダアリアンだ、
戀をするのを目的に巴里へ出た男、
いつも女、女、戀、戀と說きながら、
こつそり口を拭つてゐるドン・フアン共の
眼からは滑稽に見えたであらう
それほど彼の勝利は覺束なかつた、
戀の哲學に天才を示したほどだもの。
それゆゑスタンダアルがおれは好きだ、
奴は見かけほど多藝多才ではあり得なかつた。
おれはそのスタンダアルを十分して、
サン・プリュウの涙を混へた殉情主義者、
自分で自分の多藝多才に驚くぐらゐ、
おれはなさけないほどの藝なし猿であつた。
今、然し、それがおれの自恃である。
おれはおれを愛してくれた女達の、
おれと種類の違つた男との幸福な愛を祈りつつ、
おれの寂しい一人の路を行きたい。

おれはそこで、はじめておれが一藝に
秀でた男だつたといふ事を示すのだ。

×

おれはたつた一人の女をも
幸福にしてはやれない男だ、
おれを愛してくれた女たちは
豚に眞珠を投げやつたのだ。

女を愛する事の出來る男は、
強く生きる力をもつてゐなければならない。
女はその全生命を擧げて頼るのだから
力強く抱擁してやらねばならない。

それにおれは女の愛によつて
その弱さと苦しみから救はれようとした。
何といふ愚昧、何といふ罪惡！
おれは愛してはならない男だ。

おれはたつた一人の女をも
幸福にしてはやれない男だ、
おれを愛してくれるならば
みんなおれを捨てて行つてくれ。

×

みんな旅に出てゐる、
山からのたより、
海からのたより。

こんな時分に
東京に殘つてゐるものは、
半身不隨の人間だらう、
精神上の半身不隨。

いつも旅のたよりで
人を羨ましがらせた

旅人も、今は夏籠。

人にそむき、おれだけは、
昨日も卓により、
今日も卓により、
賣れもせぬ詩を書いてゐる。

これが八月のおれだ、
九十度を越える夏、——
今に氷ほど涼しくなるんだ、
おれも旅に出るんだ、
詩もやがて千枚になる……

七月二十日—八月十九日(東京)

第四編

×

秋がもう來たやうだ、
一嵐さつと來たとおもふと
風が秋の響になつた。
蘭の花が咲いた、
大きな鉢に盛りきれなくなつた葉の中に、
紫がかつた白い房が、薫り初めると、
いつも秋の寂しさだ。今年も秋だ。
芭蕉の葉も破れた、
高い欅の梢の葉も落ちる。
山はもう寒いだらう、
キャンプ生活の學生達も
もうそろそろ引上げてくるだらう。
おれもテントをたたまうよ、
旅もおれにはたまらない。
自然はおれの眼を鞭つ、
一つ一つ、心を鞭つ。
あまりに季節の移りが迅い、

残る日數はもはやいくらもない。
しかもなんにもまだ出來てゐない、
死刑囚の最後の日、思ひ深きはこの秋か。
痩身になほ鞭つて、なほ一走り、
此世の業を成し遂げねばならない、
わが身にゆだねられた一つの業を。
おれは生前、一等ビリの詩人に過ぎない運命だ、
おれはポステユマスに生れてゐるんだ。
生前發表しない作品を毎日積上げる、
それがおれの潜行運動、地下運動だ。
一體、こんなものを書き殘して、
それがなんになるんだ――
まあ、そんな意地惡を云ふなよ。
これはおれの吸ふ煙草の煙なのサ、
おれの一生もこんな煙にすぎないのサ。

ツエッペリンが來る、
みんな口を開けて空を仰いでゐる。
北原白秋はすばらしい歡迎の詩を書いた。
おれはいつも横紙破りの天の邪鬼だ、
おれは空を見ない、
おれは地の底を見てるんだ。
おれは《地底の日本》を見てるんだ。
おれの待望する世界は
きつとそこから出てくるんだ、
けつして空からぢやない。
どつちの空を見たつて、
おれのツエッペリンは飛んで來さうもない。
空ばかり仰いでゐた過去の幾年、
それはおれには空しい秋の收穫ではなかつたか。
そのあげくには、自分がツエッペリンになつて
飛んで行くほかはないのだ。

飛行船で空を飛べ、
くだらぬ戀の苦しみや、
野心の破綻や、

ちつぽけな誇りなんぞ、
みんな一ぺんにすつ飛んぢまふぜ。
そりや本當だよ。新聞記者はうまい事を云ふよ。
だが、なさけないかな、明日はおろされる、
どんな大きな飛行船でも着陸せねばならん。
煩惱といふ引力でもつて
しつかり地球に結び付けられてゐる人間だ。
するすると格納庫にをさまるが最後、
くだらぬ戀の苦しみや、
野心の破綻や、
ちつぽけな誇りなんぞが、
またぞろかへつてくるんだ。この野郎め！

去年の秋も死なず、
今年の春も死なず、
まだ何かやらうとしてゐる、
滿身の創痍によろめきながら。
また秋か、
二度目の秋だ。
今年の秋風は身を斬られるやうだ、
去年はただ身體が痛んだだけだが、
今年は魂の底までうづく。
おれはやつぱり鐵の鎖で地上に引止められてゐる、
ますます地の底へめり込むやうだ。
去年のおれは淡泊な男と思つたおれが
こんなにもパッショネエトな男だつたかと驚いた、
今年のおれは、思ひ切りのいい自信のあつたおれが
こんなにも執着の強いのにあさましくなつてゐる。
おれもやつぱり色食の獸（けもの）であつた、
おもふは色女、
とめるは飢渴、

おれの戀は愚劣な道化で、
おれの社會主義は阿呆の叛逆だ。

ああ、また秋になるのか、
このうへおれをどうしようと云ふのだ。

光が眼にしみる、
空氣まで痛いやうだ。
肺を病む靑年が、湘南の病院の窓から
秋風を吸つて、失はれる靑春を嘆くとき、
木の葉の落ちる音が胸に痛く響くのを、
おれはふと思ひやつて、
そんな運命にならなかつたおれが
幸福かあるひは不幸か、分らぬのだ。
淸らかな病詩人はおれの運命でなかつた、
獸のやうな阿呆になつて、
無力の拳固をふりまはす
悲慘な道化の叛逆がおれの宿命なのだ。

おれはエセエニンの最後の一月を思ふ、
イサドラ・ダンカンが離婚の屆をするために
探し廻つても見出せなかつた、
それもその筈、世界中を飛び歩き、
晝も夜も、暗い地底をさまよひ廻り、
小露西亞の强盜どもの中に入り、
叛徒に交はり、酒に溺れ、
あらん限りの死の前味を味はつた
かの不幸な詩人のトオテンタンツ、
おれにもわかるぞ、おれもやるぞ。
おれもそんな詩人だ、
詩壇文壇、糞くらへ、
おれは名譽の大家ぢやない。
おれは阿呆だ、
おれは叛徒だ。
おれは見せてやる、おれがどんな獸であるか、
どんな追ひつめられた狼であるかを。
ひと思ひに喉をしめられるまで、
おれは吼えるんだ、
吼え死にするんだ、——
狼、狼、糞でもくらへ。

×

ヴアンサンヌとバステイーユとの間で、
狼が出て、子供を食つた時分の巴里だ。
フランソア・ヴィヨン、——
何といふ痩せた長い顔だ、
まるで頬といふものがない。

風と雨とにさらされた樹のやうに
おまへの骨は飛出してゐる。
あまりに日に焦がされたものだから、
高い額は早くから禿げあがつて、
濃い眉の下の鋭い眼を壓してゐる。

魂を賣り、色女を賣るばくち打ち、
ソルボ　ヌに學ぶは人智のたよりなさ。
カルティエ・ラタンの不良少年、
餓ゑたら盗み、渇けば剝ぐ。
メエトル・エ・サルトのニヒリズムは
巴里人の嘲弄の口笛の音だ。
打つてくれば打ち返す、おまへの禮儀は
ナイフを身體に突き刺すことだ。
巴里の警吏がいくらおまへを追廻さうと、
メエトル・フランソアよ、
なんとすばらしい詩ぢやないか、
おまへの手は血で眞赤になつてゐる。

廢墟になつた靈魂よ、
おまへはその眞實のために一生を賭けたのだ。
背德こそ人生の眞を覗く眼鏡だ、
おまへはあんまり神に近づき過ぎた。
放埒は涙をなすつて食ふ御馳走だ。
放埒はふとつたマルゴオの肉の味がする。
熟れすぎた無花果のやうにどろどろした
だらしのない女の肉は甘い、
甘ければ甘いほど後味が苦い。
メエトル・フランソアよ、
おまへはおまへの放埒も、放埒の悔も、
みんな笑ふのだ、十五世紀のヨリック。

雨はおれたちを洗ひさらして、
太陽はそれを乾かして黑くした、
鴉はおれたちの眼を掘り出し、
鬚も眉も拔け散ると云ひながら、
おまへはまたぞろ風を食(くら)つたな。
絞首臺がおまへを待ちあぐんでゐる、
大きな眞黑な鴉が上を飛んでゐる、
死骸の臭ひをかぎつけて。
逃げるな、もうおまへも年貢(ねんぐ)を納めろよ、
したら、基督と同格になれるんだぞ。

三十三歳でくたばつた
博學なこのマギステル、
放蕩無頼なおまへはまだ死なぬか。
秋雨のしとしとと降る巴里の街を
犬のやうにうろつく禿頭、
ポオヴル・ルリアンとまた出たか。

こぞの雪いまやいづこに？
フランソア・ヴィヨンいまやいづこに？
ヴイヨンは地獄にゐる、詩人地獄に――
おれの目的は地獄を示すことだ。

おれの目的は一匹の獸を示すことだ、
ひもじければ人のものでも食べる、
欲しくなれば人の女も盜む、
怒り、打合ひ、泣きわめく
けがらはしい二本足の獸を。
その獸の中に神を示すことだ。
どんな高遠な哲學を說いたところで、
胃袋と生殖器とをもつてゐるやつは、
やつぱりただの二足獸なのだ。
獸は獸らしく正直に、赤裸になつて、
四つん這ひになつて、吼えながら、
森の中へ駈け込めばいいんだ。

眞率が詩人の唯一の德だ、
そのため社會から追ん出されようと、
地獄はちやんと迎へてくれる。
彼が道德的な冥想の詩人であつた間は、
彼はなまぬるい、影の薄い詩人に過ぎなかつた。
煽動者として、放火者として、
姦淫者として、法外人として、
はじめて一人前の詩人になつたのだ。
やうやく地獄を許されたのだ、
ヴイヨンと君僕で話せたのだ。
Cant(カント)よ、そんな水つぽいお粥は捨てろ。
グリユウネワルトのヨハンネスのやうに、
おれは生の聖痕に指を觸れるのだ、
地獄の火のやうな此の赤鐵(しやくてつ)に。

×

彼女はもう上海(シヤンハイ)へ着いたであらう……

愛すべき冒險家、
小さな人生探求者、
おまへはその白いからだを投出して、
代りに人生の眞實を掴まうといふのか。
派手な錦紗のキモノを着て、
頸にはすばらしい頸環をかけて、
指にはサファイアの指環をはめて……
これがあのなりふりかまはぬ二十歳(はたち)の娘であつたか

去年の十月、神戸へ行つてから
杳として消息もなかつたので、
どうしてゐるやらと案じてゐたのに、
一年ぶりで訪ねて來たのをみると、
態度も言葉もすつかり變つてしまつて、
おまへは立派な女になつたものだ。
だが、その立派さに、おれは少し憂鬱になつた。
ヴイヨンの仲間と云つた男が、
これはちとなさけない話だ。

おれはまだまだ囚はれてゐるな、
まだまだ小心なモラリストだな。

おれは詩人だ、純潔なものの滅びるのが
惜しいのだ、おれは純潔を愛するのだ、
それゆゑ、自ら純潔を汚しえなかつたのだ。
だが、それは古い詩人だよ、
さうした感傷性は早く洗つてしまへ。
なに、かまふものか、純潔なんぞ、
何處へ行つたつて、何をやつたつて、
それも渡世だ、これも一生だ。

何處へ行つてもこはい事はありませんわ、
上海はこはい處のやうに云ひますけれど、
行つてみると、ちつともさうぢやありません、
それはそれは面白い處と、彼女は云ふ。
神戸には一月ゐたきりで、
すぐ上海に行つたのだといふ。

この春、父が死んだので、その墓詣りに
一週間ほどの豫定で歸つて來たのだといふ。
いつも子供の身を案じて、
くれぐれもよろしくとたのみに來た
あの人の善ささうな老人も死んだのか。
娘の今の身の上を知つたなら、
どんなに憤り、歎き、悲しむことか。

娘は今の生活にすつかり滿足してゐる、
今の自由な身分を、華かな生活を。
日本へなど歸つて住まうとは思ひませんわ、
みんなが親切ないいお友達ですもの、
アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、
フランス人や、支那人や、
イタリア人も來ますが、なつかしいわ、
ピエトロ、アントニオなんて、
みんな小說でよんだ名前なんですものと
子供らしく喜んでゐる。

いま、アメリカの副領事とセエラアとの
どつちと結婚しようかと迷つてますの。
副領事の方（はう）はお金もあるし、いいんですけれど、
わたしはセエラアの方を愛してますの。
日本の女と結婚したら出世が出來ないと
自分でも云つてはゐますが、副領事は
どうしてもわたしと結婚すると云ふのです。
その人と一緒になつて、アメリカへ行つたら、
どんなにいい勉强が出來ますでせう。
どうせ日本人とは結婚したくございません、
壓へつけられて、ろくに勉强も出來ませんもの。
ほかの外國人でも、女をなぐつたりします、
結婚するならアメリカ人ですわ。
そのセエラアはわたし本當に好きなんです、
貧乏でもこつちにしたいんです。
若しそのセエラアと結婚したら、
今度は漢口（ハンカオ）に行くかも知れません。

仔細らしく物をいふ人で、
何でも説明をつけていふ、
それで肝腎の生活の中心のぼんやりしてゐる
そのきれぎれの話の中から、
おれは國際的なディルネの生活を組立ててみた。
女は一年二年會はないでゐて、
今度會つた時にはすつかり變つてゐる。
女の身の上はすぐ變るものだ、
して、變るといふのは男の變ること、
出會ふたんびに男の變つてゐた女もあつた。
たとへば、蘆屋のあの女でも、
五年ぶりですつかり變つてゐたが、
その他のいろいろの女もみなさうであつた。
けれど、この女ほど、わづかの間に
こんなに變つた女もすくない、
こんなに不思議な世界に飛込んだ女はない。

この女は自分でも知らないで、
おれたちの運命に一役つとめた女であつた。
去年の三月、蘆屋の女が來てゐたとき、
この女とおれの書齋で落合つたとき、
いつも女と女とがするやうに、
無意識の、本能的の接戰があつた。
蘆屋の女は急にプイと歸つて行つたが、
その夜の夜中、突然書齋の雨戸を敲いた。
着物の裾はやぶれ、髮は亂れて、
何でも上野の公園から本郷臺を
今までうろつき廻つてゐたといつた。
涙にはげた白粉は、何を思うて、泣いたのか。
二十五の女と二十歳の女、
若さに對するジェラシイは
女の致命の傷手である。あんな女が、
あんなに大膽におれをおびき出したのは、
たしかにこの女のためでもあつた。

こちらはまだ子供、そんな事ともつゆしらず、
蘆屋へも靜岡へもおれに手紙をくれて、
その後も、あの女の事をよく訊いた。
それが今、上海くんだりで、この身分、
今年は實に驚く事ばつかりだ。
あの女がアカダマの女給になつてゐると
聞いた折りのショックとは比べものにはならないが
三年越し、ただかりそめの交りながら、
身なりでそれとは察してゐても、
上海と聞いては胸がドキンとした。
だが、驚く方がをかしいかしらん、
こんな時勢だもの、女だもの。
でも、若しかして、あの女が上海へ行つたと
聞いたなら、どんな氣持がするだらうか。
おれは又もや強くあの女を思出したが、
ふと、若しおれがこの女の處女性を奪つたので、
それでこの女がこんな身分になつたのだとしたら
どうだらう、おれはどんな心もちで

今この女を見るだらうかと心に問うた。

おれには到底、かの高踏派の詩人のやうに、
多くの純白な紙を血で染める事は出來ない。
蘆屋の女が既に人のものであつたのは、
殉情主義者おれには幸福だつた。
いや、それだからこそ動けたのだ。
おれはまだまだ、ヴィヨンには遠い、
人道主義の殼がまだお尻にくつついてゐる、
何處まで駄目な奴かなと、おれを嗤ふ。

それにしても、女といふものはえらいものだ、
世界三界、股にかけて、恐れるものがない。
勉強が好きで、それで家を飛び出したのだが、
今はどんなすばらしい人生を讀んでゐることか。
下町の大きな洋物問屋の娘でも
母親の愛がなければ、かうもなる。
蘆屋の女より、も少しせいが高くつて、

いかにもニッポン・ムスメらしい
あいくるしい顔だちだから、
外國人は好くであらう。
どうなる身の果てか知らないが、
どうであらうと、好きに生きてさへ行けばいい。
世界的な戀の本場で腕を磨いたら、
一人前のいいコオテザンになるだらう。
今に、若しこの次ぎにでも會つたなら、
文士なんかお金がなくつていけないわ、とでも、
おれに笑つて云ふかも知れない。

彼女は是非上海へ遊びにいらつしやいませ、
きつと面白くつて爲めになりますわといふ。
おれが上海へ行つたなら、
一體、何がおれを待つのだらうか。
おれの詩を白話詩に譯してくれた
あの謝位鼎に會へるかしらん、
西湖や蘇州の秋に會へるかしらん。

いや、おれはこの女を訪ねて行つて、
そこで自分の好きな女を見出して、
ありつたけの金をはたいてしまつて、
それから何處へ行つたか知れなくなる。
日本詩人之失踪、そんな記事さへ出やしまい。
揚子江はおれをのむのに事缺くまい、
ずぼんとはまり込んだが最後、
誰がおれの事なんかかまふものか。

だが、おれは上海へは行くまい、
大阪にさへ行かないつもりのおれだもの。
戀を知らない女、おまへは漢口に行く、
それから、香港にも行くだらう、
シンガポオルにも行くだらう、
アメリカにも行くだらう。
シャトルにも、フレスコにも、ニュウヨオクにも、
それから、ロンドンにも、パリにも……
そして、地獄でおれはおまへに會へようよ。

だが、まづ、差當つては副領事とセエラアだね、
セエラアは揚子江通ひの船乘りか、
上海から船で四日もかかる漢口に
小ぢんまりした家をもつ……

彼女は漢口に行くであらうか……

×

上海から來た女と話をしてゐたとき、
おれは今年の五月ごろ、
詩人達の會のあげくに、横濱通の
×××の案内で出かけて行つた
本牧の一夜を思ひ出した。

それは Kyo-Hotel だ。
階下の大ホオルの眞中では、
外人や混血兒や、サラリイマンらしい
靑年なんぞがをどり廻つてゐる。

ぐるりの卓(テエブル)には、みんな女をひきすゑて
麥酒やウヰスキイを飮んでゐる。

男はみんな脚に毛をはやし、蹄は割れて、
額に角を並べてをどるところだ。

女は大方、振袖のニッポン・ムスメの姿、
中には洋裝斷髮、半裸體もあり、
ウタマロ風な島田に黒繻子の襟もある。
ホテルのクインと云はれるお濱といふ女は
脊の高いすばらしい中年增で、
湯上りの浴衣一つが凄いほど意氣だ。

一面の硝子戸の外は海だ、
その海の中へさし出した小さな棧橋へ、
噴水から流れる水の上に据ゑつけた
踏石代りのガラスの中は電燈を入れて明るく、
濤わたる女の足を白く照らす。

海岸には幾つも亭(ちん)が出來てゐて、
夏は海から上つて、ここにかけて
女をかかへながら酒を飮むのだ。

二階のベットに女と寢てゐる
シンガポオル行のフランス船の水夫は、
もう出帆間際の船がまだ出はせぬか、
五分間毎に船を見にやる。
小女(こをんな)は棧橋へ船の灯を見に行つては、
また慌しく二階へかけあがる。
明日(あす)、明後日(あさつて)は神戸、門司、上海へ、
今宵一夜が永のおわかれだ、
門口には自動車が待ちかねてゐる……

詩人は樂しい愉快な人達である。
××は醉ひ、
×××はをどり、
××はどなる。

××はそばへ來てかけた
すばらしい太い女の
かまぼこのやうな膝を撫でてみて、
君もさはつてみろとおれに云ふ。
詩人どもの名前がみな知れて、
おれの詩の愛讀者だといつて
おれの膝に乘つた女は、
泊つてゆけと云つてきかない。

長居は無用だ、すぐ出るんだ、
ちとゐすぎたと×××は云ふ。

今度は Star-Hotel だ。
そこにはロシア人の女もゐた。
おれのえらんだ女は、
おれの思出を振袖につつんだ女、
藝者に出ようかどうしようかと考へて、
こちらに來たと云つてゐた。

おれは廊下の角の空いた部屋に入れて貰ひ、
そこの長椅子にかけて、一人でうつむきながら
一體、何を思つたとおもふ？
おれが今夜ここで死んだら面白からうと思つたのだ。

フランソア・ヴィヨンみたやうな混血兒の
不良青年のジャック・ナイフが、
おれの胴腹を突き刺したならどうだらう。
また、その混血兒どもと打ち合ひして、
ピストルに打たれて死なうか。
あひにくにも、そんな親切な奴がゐなかつたら、
女の扱帶で首でもくくらうか。
女と一緒に死ぬことは
いつもおれの誘惑だつた、
だが、ここは女と一緒に死ぬ處ではない。
本牧のチャブ屋で詩人の怪死――
一寸日本ばなれがしてるぢやないか。

求道の人、冥想の詩人なんていふ定評を
もののみごとにぶち破つて、
くだらないやくざな死に方をしたら、
それも反抗兒のおれにとつてはうれしい事だな。
あの一世の師表と仰がれてゐた文學者が、
情痴の人となつて、輕井澤の別莊で
人妻と縊れ死んだのは、
此上もない痛快なざまァ見ろだ。
自分と社會の頰ぺたへ一擊くらはせたのだ。

だが、おれはまださうはせなんだ。
いつも死ぬことばかり考へてゐて
そのくせまだなかなかくたばらぬ業ざらし、
おれといふものがつくづく厭やになる。
おれはこの女たちの身の上を思ひやつて、
入つて來た女と、かうした稼業の話をした。
どうだい、こんな生活は面白いかいときくと、
ええ、面白かつたり、辛かつたりよと、平凡だ。

三十分の間に着物をぬいでまた着るのが、
それがとても大變よなどともいふ。

おれはそんな話をしながら何を思出した？
この女たちの末路の事を。

この女たちの末路を誰も知るまい、
その女自身も或ひは知らないだらう。
つかへるだけをつかつて、
もう男をしぼる力がなくなつて、
すつかり駄目になつたなら、
いつのまにか見えなくなつてしまふ。
何處へ行つたんだらう？
女は船底に投げ入れられて、
息絶え絶えに、半分死にかけたやつを、
太洋のまんなかで、小氣味のよい程どんぶりこ、
水雜炊にしてしまふのだ。
世話ァ要らない――これが一生だ。

おれは下町の洋物問屋の娘の顔を見ながら、
ふっと、そんなシインを思つた時の自分の心持を、
そんな悲慘を考へながら女の顔を見た時の心持を
まざまざと、再び更に強く胸に喚び出して、
ふたたび憂鬱に襲はれたが、なにッくそを、
どうせ、おれもその仲間ぢやないか、
あのスタア・ホテルの女も、この女も、
それで本望、めでたしめでたし、サ、
いいよ、世の中はちやんと工合よく出來てゐる、
神樣に感謝しろよと、おれは心で云つた事だ。

×

わたしたちが戀人のところへ持つてゆくものは
もはや心臟ではなくて、財布である。
心臟はなんにもならぬ、それは金で買はれる、
金は心臟では買はれないのだ。

アメリカン・ガアルは愛をただ金ではかる、
男は財布の一種に過ぎない。
凡ての要心深い人は約束手形を信用しない、
愛も現ナマで支拂はれる事を望む。

今や、生命は金であり、經濟力は一切を決定する、
金のないものは、愛もないのだ。
今や、女性にとつては、戀愛も一つの投資である、
利潤は離婚後の安穩である。

わたしたちが戀人のところへ持つてゆくものは
もはや愛ではなくて、金である。
囁かれる愛はただ空しい言葉に過ぎない、
金こそ凡てを與へる、眞實の愛だ。

×

金のためにすべてを捧げぬものは、
此世に用はないのだ。

とつととくたばつちまへ。

金のためにその貞操を賣らぬ女は、
飛んでもない勘違へしてるんだ。
とつととくたばつちまへ。

金のために厭やな事を書かぬ文士は、
とてつもない阿呆だ。
とつととくたばつちまへ。

金にならねば何一つしない、
金になるなら何でもする。
それが時代の常識だ。

唯物主義だ、唯物主義だ、
これが時代の指導精神なのだ。
その眞理のわからぬ奴は
とつととくたばつちまへ。

×

金、金、金、金、
金ばかり。
そのほかは無だ、
すッからかん。

金があつたら、
爵位をお買ひ。
金がなければ、
刑務所へ。

金があるなら、
博士におなり、
金がなければ、
安月給。

金があるやつ、

藝者を身うけ。
金がないやつ、
湯屋×××。

金があるやつ、
別莊ぐらし。
金がないやつ、
ビル勤め。

金があるなら、
輸血もできる。
金がなければ、
行き倒れ。

金、金、金、金、
金ばかり。
金がなければ
首くくれ。

×

敢てするものが、時の英雄だ。

リンドバアクは大西洋を横斷した。
たつた一人で、小さな翼に乘つて……

海と空とは、幾千萬の女の魂だ、
リンデイはアメリカ女の魂を征服した。

現代のイカロスは、女の胸に落ちる、
その心を鋼鐵によろつて……

鳥人はただ飛ぶことをのみ愛して、
二本の腕の鎖に鳥とならうとはしない。

これは個人主義時代の最後の英雄であるか、
ただ無邪氣な紅顏の少年である。

敢てするものが、時の英雄だ。

×

千番に一番のかねあひも
いまは家常茶飯事。
きのふまではプロレタリア、
けふはブルジョア、
プロの柱の尖端から
ブルの柱の尖端へ、
ひよいと飛びつく早技(はやわざ)の
これぞ時代の輕業師(かるわざし)。

不眞面目結構、輕薄萬歳、
裏と表とで一人前サ。
まじめの病菌、退治しろ、
人間元來、うそつき。
プロの後衞、ごみくさい、
ブルの前衞、一ついかう。
銀座、丸ビル、モボ大衆、
やんや、やんやと喝采す。
敢てするものが、時の英雄だ。

×

金がなければ女を愛してはならない、
金を得るには身賣りをせねばならない、
魂賣つて女の愛を買へば、立派な男だ。
戀を心でするものと思つたのは、
それはずつと昔の、昔の、昔の夢だ。
戀は感覺、眞實は刹那々々の波である。

女は買ふもの、身は賣るものと
きめてかかれば大したものよ、
恥もかかねば、へこたれもせず。

はやり唄をかくドン・ファン、
大衆物かく一代男、
ラヴ・ハンタアの英雄兒。

敢てするものが、時の英雄だ。

×

おれが三十八年かかつて發見した事は、
人生が一つの欺瞞に過ぎないといふ事だ。
何等新しい發見ではない。
ただ、おれの絶望だけが事珍らしいのだ。
おれはおれの阿呆のかぎりを晒すために、
何千枚といふ詩を書いたのだ。

社會組織がどう變らうと、
利巧者が勝つにきまつてゐる。
どんな自由平等の思想が語られようと、
智慧者がいつも利益を収めるのだ。

既に十年前にその苦い眞實を道破したおれだ、
その底のをりまで飲まうと十年生きのびたのだ。

人間は救ひ難いエゴイストで、
あらゆる美しい思想は頭腦に咲く花だ。
他人の小市民性を攻撃する無産派作家は、
自らまたその個人主義を暴露してゐる。
これが人間の本性なのだ。正直まつぽふに
思想の實踐を企てるものだけが損するのだ。

結局、あの不眞面目を標榜して、
道學者を嗤ひ、僞善者を嘲り、
自ら不眞面目の限りをつくして、
公然とブルの尖端、モボと手を握る
あの圖太いナップが一等眞實かも知れない。
これが人間だ。未來永劫、この通りだらう。
それでいいのだ。人間は人間でいいのだ。

×

世をもおのれもあざむかねば、
われは生くるに堪へかねし。
弱しと人はあざむとも、
裏なき心、なになれば
破れざりけん、一葉(えふ)の
紙にも似たる薄さもて。

おのれを知るはおのれの裁き、
きはめつくして、世は空(むな)し。
われとわが身を嚙むほかに
戰ひのすべはありや。
われとわが身を破るほかに
眞を見る道はありや。

すぐれし人もたをれたり、
するどき人もやぶれたり。

力のかぎり戰はば
つひにとりでは落ちぬべし。
戰ひは勝利に終る、
然り、ただ自然の勝利に！

神の、非情の、自然の勝利、
それぞ人の死。落したる
とりでの上に立つ影は、
血汐に紅きむくろのみ。
むくろにあらず、人ならず、
今はも自然、非情そのもの。

×

ふりさけみれば、月細し、
忘れて久(ひさ)の月なれば
ものおもはする月なれば、
しばしイみ、ながめたり。

見なれし國の山河(やまかは)の
その面影もおぼろにて、
とらへがたなき影なれど、
忘れぬ眉目(まみ)ぞ匂はしき。

人は去りけり、たまゆらの
夢のすさびにきずつきて、
夏の夕のいなづまに
涙ふたすぢ照らされき。

われにあたへし君が手も
君にあたへしわが胸も、
はなれてまたも重ならぬ
風の木の葉に似たりしか。

いつも甲斐なきものぐるひ、
わが世も今はかたむきぬ、
君に忘られ、君を忘れ、
われも夜影(よかげ)に消え去らむ。

×

秋風立ちぬ、暑き日も
やや傾けば、葉のそよぎ、
秋はさらでも身に沁むを、
ことしの秋はいかにして
痩せしこの身をささへなむ。

見ずて久しき君なるを
など下心、消えやらぬ、
空に心はみだるれど、
秋は西より來(きた)るとも
雁のつかひもよしなしや。

人のはなしの半ばにて、
わが頰にふるる風の手に
しばし言葉もあとつがず、

あらぬかなたを見入る眼を
客はあやしみ見たりしか。

さりげもなげの笑顔して
人のおもては見たれども、
聲も涙にふさがりて
言葉も風にみだるれば、
默すほかなき秋隣。

けふも暮れたり、いたづらに、
なほよのつねの姿して、
世に立つ人ぞあはれなる、
人におもひは語られず、
嘆きはうちに身をば殺ぐ。

またこの秋を堪へぬとも
ねがひの春の來る身かは、
またうち見べき君ならで
暮るるいのちは惜しまるる、
秋の果てこそ堪へられね。

×

かの六甲のふもとにて
長き病をやしなへる
舊き友よりたよりして、
ことしの秋は來よといふ、
かへしをいかが書くべきか。

その西灘のおもひでぞ
蘆屋の里とむすべるを、
かの日招かれたづねてし
女の友をまた見なば、
いかが語らむその後を。

わがかりそめの留守のまも
泣きてし待ちし人の住む

大阪を越え、蘆屋越え、
會はずにいかで過ぎられむ、
會はばこの秋いかならむ。

春の舞子のさまよひに
ふたり乘りてし汽車の窓、
窓にながめし六甲の
山は燒くるとけぶりては、
その日のわれに似たりしが。

色も黄ばみておとろへし
その山みれば、枯れ落つる
わが世の果てのしのばれて、
去りにし秋をささへつる
身のいたつきぞ恨まれむ。

×

人に會ふさへこのごろは
いよよくるしくなりはてぬ、
心にもなき笑みつくり
世間話はかはせども。

ましてやいかで堪へられむ、
わが著書(ふみ)いだす社にゆきて
ふるき馴染の人にあひ、
そこばくの金借りること。

おもへばいかにながらくの
賣文ぐらしなりしかな、
もの書く業(わざ)も飽きはてぬ、
はや切上ぐる日ならぬか。

母の失せたる去年(こぞ)の秋、
電話のしらせあやまりて
わが失せしごとつたはれば、
社はどよめくと聞くものを。

げにその日こそ死ぬべきを
今もむなしくながらへて、
なほうつろなる身をはこび
人に會ふだにあさましや。

われは白日のまぼろしか、
生ある身とはおもはれず、
などさまよふぞ日の下を、
墓こそわれを待つものを。

×

文賣る業もつたなくて
世に立つことの難ければ、
うつる時世のはやあしに
心も足も合はざれば、
あるに甲斐なき世となりぬ。

おのれを殺し、世に媚びて、
うはのそらなる暮しせば、
しばし榮えある身ならむも、
わが一生に言ひしこと
みなそらごととなりはてむ。

おのが心をまもること、
おのが言葉にかかること、
すでに時世におくれたり。
今は日毎に旗をかへ
日毎女もかふるとぞ。

ああ、世とわれと離りては
また結ぶべき紐もなし。
女ひとりの愛の紐、
いかに強くもなにかせん、
ささふる力なきものを。

女のわれにささぐてふ
そのまごころも何かせん、
われのささぐるものなくば。
ただ世とともに推し進み、
金とる業につとめずば。

女の愛はえたれども
われにはつらきおくりもの。
君幸あれと祈りつつ、
時世の風にひるがへる
蝶のゆくへを誰か知る。

×

わが手は書くにつかれたり、
いのちの限り盡すとも
いかで思ひは盡されむ、
眞實はつねに殘れるを。

ペンの尖よりほとばしる
この青黒きインキもて
眞實を書くとおもへるか、
指より出づる血にあらで。

指の血をもて書けばとて
そはよのつねの文字のみ、
血は生命なり、生命なれど、
文字としなればあしきインキのみ。

頭腦通して出で來なば、
みなよしもなきカスとなる。
その頭腦をば打ち碎け、
そのときの血ぞまことの詩。

そは文字ならず、文字以前、
そはインキならず、それぞ血よ。
ペンを捨てろ、捨てて手を洗へ、

して、拳銃を取つて、詩を書け、死を。

×

Ich bin nur ein Worte=macher:
was liegt an Worten!
was liegt an mir!

Nietzsche.

「おれはただ言葉づくりだ、
言葉が何だ！
おれが何だ！」
ニイチエはおれの口をふさぐ。

ニイチエがうまく云つた後で
おなじことおもふは莫迦よ、
おれの空虚の證明なのサ、
おれの無用の證明だけサ。
おれはいつでも時おくれ、

後の祭りの囃し方、
喧嘩すぎての棒ちぎれ、
力むほど、愈々をかしい。

まづ頭腦から死んだニイチエ、
額に拳銃をあてたパラント、
つい傍からかけぬいた
同年の文人もあつたのに、
おれは死でさへ時おくれ。

だが、おれも云ふ、おくれても、
だが、おれもやる、おくれても。
おれはただ言葉づくりだ、
言葉が何になる、
おれが何になる。

だが、その言葉が實をむすぶ、
おれの心に實をむすぶ、

言葉は種よ、夢の花。
おれは敗れて、砕けて、勝つ！
よしや、死だとて！

×

一切のものを失つた、
おれは無だと、男は叫ぶ。
それが全だよ、
失ふべき．ものなしと知る。

放下着、
放下着、
重くなつたら投げ出せ、
投げ出せば、荷は肩に在り。

絶望こそ生のはじめ、
無に歸せば、人こそ神、
友は祝へど、
敵は哭けども。

人、罪を盡せば神、
神、人と生れば詩、
めでたし、罪は、
うれしや、苦は。

笑つて死ね、
死んだら笑へ、」
放下着、
放下着。

×

信徒は
絶望者となり、
戀人は
姦淫者となり、
哲學者は

道化者となり、
寂人は
反抗者となつた。

おれはすべての汚れた詩人の中の詩人、
すべての不幸な詩人の中の詩人、
すべての呪はれた詩人の中の詩人、
すべての叛逆的な詩人の中の詩人、
これがおそろしい一つの運命である。
かうなるまでには長い歴史があつた、
あらゆる失望と、打撃と、重壓と、
沮喪と、挫折と、受難と、破産とがあつた。

おれはすべてのすぐれた詩人とは
およそ逆のコオスを取つた。
彼等は地獄から天國へ上(のぼ)る、
おれは天國から地獄へ墮ちた。
彼等は罪もまた愛であり、

おれは愛もまた罪であつた。
おれは詩を書かねばよかつたのだ、
いや、おれは生れねばよかつたのだ。

モラリストは
ニヒリストとなり、
人道主義者は
アナキストとなり、
精神主義者は
マテリアリストとなり、
スケプティックは
ファナティックとなつたか。

然し、それが凡てであるか？
實際に、さうであるのか？
おれには分らない、また分りたくもない。
ただおれは知つてゐる、おれはいつも莫迦だと。
おれはいつでも二つに裂けて、

蛇と蛇との嚙み合ひに死ぬのだと。
轉身やまぬプロテウスの
姿はつひに水と溶け去るのだと。

×

煙の出ぬタバコをすつて
タバコをすつた氣がするだらうか。
おれの一生の事業は
煙の出ぬタバコであつた。
すつても、すつても
煙は出やしない。

だが、煙の出ぬタバコがあらうか、
藁くづだつて燃やせば煙がでる。
おれのタバコもさかんに煙を出したのだ。
ただ、それは目に見えぬ煙であつた。
人はおれのうまさうに吸ふ顏付を見て笑つた、
おれのパイプをあざけつた。

それでもいいのサ、
おれはタバコをすつたのだ。
それはうまかつた、
また苦くもあつた、
その上たつぷりニコチン中毒もしてゐる。
自分ですつたのだから滿足だ。
もう不遇だなんて云つて貰ひたくない、
おれのタバコは上等だつたよ。

×

おれはこの詩稿を終へようと思ふ、
詩はあまり多くを書くべきではない。
おれは實に澤山の詩を書いた。
誰かこの詩筆を取上げてくれないか。
この筆が手の中にある限り、
おれはいつまでも詩ばかり書いてゐるだらう。

今は實行の時代だと犬まで云つてゐる。
そんなら、おれは何をしたらいいのだ、
おれの實行はなんであるのだ。
詩か、今日も卓に倚つてまたぞろ詩か、
上海へ行つてコオテザンになつた女がおれよりえら
い。

（十二字削除）
おれはツルゲエネフがルウジンの最期を思ふ、
巴里革命のバリケエドの上に攀ぢ登る
白頭の男、流彈にばたりと倒れる。
言葉の英雄も、最後には一老兵。
だが、それは何といふ間の抜けた死だ。
そこに男子の志を誰か汲むものぞ。

インテリゲンチアが何をやらうとも、
力なくんば、みんな阿呆の叛逆だ。
うまく梶をとつてゆくのはデマゴオグだけだ。
おれが政治業者になるなんて滑稽だ。

莊嚴と滑稽とは、ただ一歩の差だ――
力あるところに、莊嚴があり、
力なき叛逆は、滑稽である！

つくづくおもふに、
おれはピエロオの外のなんでもなかつた。
おれは人間痴愚の象徴だ、
おれは阿呆の親玉だ。
おれはニヒリストで徹底しよう、
おれは阿呆らしく叛逆しよう。

蘆屋のあの女は、大阪言葉で、
よく、あほくさ、と云つたつけ……
おれも云ふよ、
人生にむかつて、おれにむかつて、
あほくさ、と……
あほくさ、と……

八月十九日―二十六日（東京）

第七巻

まだ詩人だ

——戀と鬪ひとの終曲——

第一編

×

おれも詩人か。まだ詩人だ。
おれが自由を愛するだけ、
詩人はおれの宿命である。
この我儘者はぶち殺せ、
ボルシェヴィキよ、この叛徒を。

プリンツ・フォゲルフライ、
日本なんぞに生れた莫迦め。
日は朗らかだ、日本は春だ、
秋のなかばもやつぱり春だ。
屋根の上に啼いてゐろ。

身を律法の外（そと）におき、
心を流行の外におく。
時の合言葉は忘るとも、
嵐のときは、嵐とならば、
ツェッペリンより高く飛べ。

詩人は四季の中に住む、
詩人は晝夜を詩につなぐ。
南の果から北へ行け、
地獄から天國へのぼれ。
時代を超えて、なほも飛べ。

マルキシズムのイデオロギイ、
そんなものにはしばられるな。
詩人は絶對自由の子である。
矛盾から矛盾へ躍れ、
極から極へ沸き返れ。

詩人は魂の厠（かはや）にすむ、

靈屋にとまり、祖に尿する。
女郎屋も殿堂、教會も痰壺だ、
しかも、暮夜ひそかに天に祈るは誰。
神は詩人のペンに棲む。

主義に詩人の靈はなく、
靈ぞあらゆる主義を含む。
畫ける龍に眼なく、
眼は地底も射し通す。
詩人よ、自由を失ふな。

詩人はだだッ子、自由人、
浮いた世間の人氣なんぞに
この自由は代へられぬ。
藝人としては落第でも、
阿呆としては大したものだ。

自由、自由、自由のみだ、
詩人を生かす神の恩寵、
これを棄て、魂を賣る
流行節詩人、際物詩人、
死ぬときぞ、生よよ、阿呆詩人！

おれも詩人か。まだ詩人だ。
恥かしくも、おれは詩人だ。
されど、自由のために死なば
おれも誇りの詩人である。
自由は詩人の靈に棲む、
靈の苦難ぞ、詩人天國。

×

人に死のなきが如く。
我に生の不盡なる如く。

夜毎飮むは、蛇酒、
一日織るは、死の機。

甘露の中に蟲とうかべば、
生は輕し、空の鳥。

かくれ簑、今は身に着(き)よ、
冬近し、魂に風邪(かぜ)をひかすな。

翼ある言葉に乘りて、
飛べ、生のその本源(みなもと)へ。

生きよ、死のなきが如く。
死ね、生の不盡(ふじ)なる如く。

×

死を忘れよう、
死を忘れよう。
おれはあまりに死を歌つた、
いつも死ぬ覺悟ながらも、

死を云へば、人は死に得ず。

死ぬ死ぬといふものは生き、
生きて死の恥に遭ふとぞ。
いつも死と、死といひつづけ、
人旣に死者に數へて、
まだ死なぬ男をわらふ。

死をいふな、
死をいふな。
おれはあまりに死を誓つた、
死を輕んじた、死をもてあそんだ。
死はおれを憎んで、捨てる。

身は滅(ほろ)びず、夢が滅びた、
肉は死せず、戀が死んだ。
おれは死を瀆(けが)し、生に罪せられる。
世に死のなきが如く生き、

生によつて死を解決せば、
おれはおれを拾ひ、
おれはおれに克つ。
生と死の彼岸に立てば、
自由人、ここに地につき、
詩人われ、ここに翼あり。

×

おれは演說つかひにはなれない、
演說つかひみたいな詩人にはなれない。
おれはただ自分の實感を歌ふのみだ、
策略のために自己を空しうはせぬ。
鬪爭意識のさか　なときには
鬪爭意識をうたふのだ。
痴情に惱むときには
痴情をうたふのだ。
おれは聖人君子ぢやない、
おれは二枚舌の政治家でなく、
黨派心の奴隷なる黨員でもない。
おれは詩人だ、自由の詩人だ。

ボルシェヴィキ詩人は昂然としていふ、
靈感は中央執行委員會から來ると。
中央執行委員會の決議命令から
靈感が來る詩人は重寶ものだ、
これぞ幸福な機械主義の天才だらう。
丁度映畫會社の資本家の金庫から
靈感が來るあの重寶な小唄詩人のやうに。
おれの靈感はおれの心から來る、
おれの生活から來る、苦悶から來る。
彼等には名譽と金とが來るが、
おれに來るのは貧乏と死とだ。
だが、そこにおれの唯一の誇りがある、
おれの生涯はまちがひだらけだが、
おれの詩はおれの眞實なのだ!

×

この一月に會つたきり、たよりもなかつた
友の手紙が、再びおれを驚かした。
君に會つて後、歸阪して早々、
例の人に會つたが、そのときには
先方に便する意思がなかつたので、
つひアドレスも知らせなかつたが、
その後間もなく姿をかくしてしまつた、
(古巣に歸つたといふことだ)
八月になつて突然たづねて來て、
何か仕事はないだらうかといつてゐた、
金にも窮してゐるらしく思はれた、
その時つれて來た子供がひどくむづがるので
ろくに話が出來ずに別れたが、
本日君宛の手紙を開封でよこして
屆けて貰へまいかと云つて來たと、
友の簡單な言葉の中に、まざまざと
この一年間の女の全生活が
活動のフィルムのやうに見通された。

去年、おれと二人で並んでかけた
あの大きな新聞社のすてきに廣い
埃つぽい應接室のかたい椅子に、
子供をつれた寂しい女の姿を見る。
むづがる子供をあやしながら、
でつぷり肥つた中年の紳士、
痩せこけた詩人の友人のまへに、
その持前で、氣輕に笑つて、
はつきり底をもぶちまけられず、
とりとめのない話をしてゐる女の姿を。
何といふ女だらう、女の心は分らない、
女給もたうとう勤まらなかつたか、
もしや病氣でもしたのぢやないか。
さては男をつかまへる意志もなかつたか、
あるひはその勇氣と腕がなかつたのか。

またもとの古巣に舞ひもどつたとは、
そしてまた、去年の三月に戻らうとは、
あまりにも意氣地のない、
あまりにも善良な女の心だ。
彼女は貞女であるのだらうか、
又は、あの平凡な、鞭をも恐れぬ
母親の一人であるのだらうか。

アカダマのミツルには、おれなんぞ
用のない路傍の男であつたのに、
なぜ今ごろおれを思出してくれたのだ？
おれに助けを求めるのだらうか、
おれに恨みをいふのだらうか。
おれはもはやおまへに何をも求めない、
恨みも今は云へない、ただ悲しいのだ。
まのあたり、うらぶれた姿を見るならば
よそめに見過ぎる事はよもや出來まい、
あんなにいぢらしい女だものを。

だが、やつぱり元の男と共棲んで、
秋をふたたび身に知る今日を
心は三百哩の上をもへだてた今日を、
三人ずまひは心でも出來はしない。
それほどおろかな女であらうか、
背に腹はかへられぬのか、
なぜ開封の手紙なんぞ友に委ねたのか、
特別にいひたい事があつてだらうか。
金、金、呪ひの金の世なれば
金ゆゑ君も心裂けたか。

二度目の春は、花もよそに
汚れた金の支配するこの社會への
反抗と鬪爭との詩にすぎて、
秋はふたたび心に沁みる。
庭もせに落葉はつもり、風に舞ふ
蝶も何處で命絶えたか。
おれの詩も、理想の戀も空しい、

うつし世の戀はなほさら。
さしもはげしい狂ひもしづまつた、
女の面影も遠い昔の寫眞のやうに
ぼんやり黄色く薄れてしまつた。
いまは心の妻であるおまへの昔の友の
そのなさけさへ、熟(う)れるほど
おれには食へない果實(このみ)となる、
愛は聞くさへ、ただ悲しく痛い。
その今日のおれ、半死のおれに
何がおまへにおくられようか、
ただ限りない悔いのほか、
わが思ひ殘らぬことは、あはれ歳月(としつき)、
歳月(としつき)の、時の力の波に打たれて、
よしなしごとのくりかへし、
秋の一夜(ひとよ)をとつをいつ、はや傾きし
わが世の運を思ひめぐらす、
これぞわが運の果てよと、
君が果て、わが果ていかにつらきよと。

×

時おくれの薔薇が一輪、
芭蕉の葉も破れたあとに
何の心でひらいたのか、
さても小さな花である。

はなれて遠い人のおとづれ、
今また夢にひらくとや、
きずついた心の血もて
秋づく庭をいろどるや。

かへらぬ昔なげき節(ぶし)、
死ぬまで心うたへとや、
散るとも散らぬ花のいろ
此世に名殘(なごり)盡きずとや。

五月の夢は散りはてて、

薔薇の月、苦しみの月、
刺のみ胸にのこれるを、
秋にも春をかへすとや。

思ひのこしはあるとても、
生きる力のない戀は
秋の薔薇、十月の薔薇、
咲いてなほさら悲しいものを。

散れ、散れ、薔薇よ、秋の薔薇、
心かたむけ、血をそそぎ
いのちの秋をいろどらば、
今ぞかたみの眠りどき。

×

若し失つた凡ての女の心が
一時にわが身に集まるならば、
細い細い一筋の糸につながる
男の身は忽ち落ちて砕けるだらう。

おれを忘れた凡ての女の心が
一時にわが上にのしかかるならば、
たわめるだけたわんだ枝が
ポキリと折れてしまふだらう。

なぜおれの愛した女たちは
いつまでもおれを忘れてくれないのだ、
もうとつくの昔、おれの事など
忘れてしまつたものと思つた女さへ。

おれを許してくれよ、女たち、
おれを忘れてくれよ、後生だから、
もうおれは何の勇氣もない、
今は戀もおれには苦しい重荷だ。

おれはただぢつとしてゐたい、

ぢつと自分の最後を待つてゐたい、
森中の朽葉のかげに
身動きもせぬ小鳥のやうに。

×

おなじ日に、おなじ消息、
なになればかく、われに落つるや。

友の手紙がゆくりなく、
一年あまり絶えてゐた
はなれて遠い西ぐにの
海邊の人の、聞くに悲しい
消息をわれにつたへた日、
また聞くは山蔭の人の消息。

一月あまり音沙汰なし、
なんとしたぞと思ふた人は、
病院の白いベットにうちふして
日を經たことを、この事を
あの方にだけはつたへてよと、
見舞の友にかたり、その友から
彼女の友に云ひよこし、
その女の人の口から聞いた。

おれの愛した女たちは
なぜかうも記憶がいいのだらう。
遠ざかりてはまた近づく、
心の野邊の狐火か、
夜毎は燃えて消える心に
かはるがはる去つてはもどる。
それはこのおれのせゐかしら、
おれが記憶がいいためか。

絶えれば胸のしづまらず、
空行く雲にも氣にかかる
人の身の上、つい聞けば、

女心のかかると知れば、
ふと胸の重くはたわむ、
おれの心があやしいばかり。

わたしの夢のふたりの女、
いつまでわれに響く音か、
つめたきものも冷えきらず
熱きはさらに燃ゆるらん、
いやさらにもつれ重なる
面影をたもつ双手に
ふるふもの、人かおのれか、
見てさへに思ひ重たし。

おなじ日に、おなじ消息、
なになればかく、われに落つるや。

×

それからそれへと引いてゐる
ゐにしの糸の不思議さよ。
いとしの人の友なれば
會ふもうれしい、ともどもの
親しい人の話ゆゑ、
つい會うたびにうちとけて、
もう長年の友のやう。
やさしい戀人、善い友達の
その人の日々の暮しや、昔のこと、
話聞いたり、聞かせたり。

富士の麓の町なれば
きみが生れもなつかしや。
おなじ寢床に起き伏して
一の友よと知る人の
友の話は聞き飽かず。
きみがほころぶ唇の
二つのひまを洩れてでる
言葉はいかに響きよく、

笑ひはいかに爽やかに
秋の愁ひに沁むやらん。

ほんに善い友、わたしの友よ、
心の妻の友なればか、
きみが面(おもて)をみるたびに
富士の裾なる人を見る。
どこかものごし似通うて
幾年(いくとせ)ともに暮したる
人の匂ひの殘るらん。
爪のかたちもわが好む
人さながらの指さへ長く、
その手ぞいかに似てみゆる。

きみを友とし、きみが友、
心の人のおき伏しの
その幾年(いくとせ)の日を閲けば、
互ひに知れるそのきだて、
わが知らぬ人の弱身すら
なほいぢらしき姿して
さながら前にうかみでて、
話すきみさへいとしくて、
いまはよしない鳴澤(なるさは)の
底にはなほも鳴るとかや。

×

友と友とはをかしなものよ、
ことに女の友と友、
男がなかにはいるなら
友もいつかはかたきどし。

おのれは會へぬ男に會うて
心のままに話すよと
おもへば友もねたましい
女心はむりもなし。

友のうはさに興ずるばかり、
そなたのことを聞きたさに
われもうれしい人ながら、
そなたのねたみ、むりもなし。

男と女の仲なれば
會うたび心うちとけて、
友のためなる出會ひすら
戀に落ちゆくためしあり。

むりならねども、そのねたみ
身を責めがちのあはれさに
わが世みぢかき秋更けて、
いまはそなたも何とせん。

あまりに多く人を戀ひ
あまりに深くきずつけば、
いまさら誰を戀ふべきや、
戀はわが世のほだしにて。

そなたの昔の友なりし
西の人さへたよりする
秋はいそぎの旅のそら、
落葉のいろぞ身に知らる。

友より友へうつる戀、
今また次ぎの友枝に
うつる小鳥とみたまふか、
翼やぶれし鳥なれど。

心の妻のねたみ言(こと)、
心のねたみかきいだき
なほいくとせを重ねなば、
夢の果てこそいかならめ。

女の手もて織られたる

衣は破れむ、友と友、
なほしたしくもうち寄りて、
やぶれし衣をつづりたまひね。

×

まだ十時すぎだのに、
街はもうひつそりとしてゐる。
秋も十月、少し寒くなつて、
雨がボロボロ落ちて來さうだ。
下の人はもう眠つてゐる
暗い玄關から送り出された男は、
心が重く、苦しく沈んでゐた。

暗い玄關から暖かい挨拶で
わたしを送り出した女の人が、
わたしの背中に乘せてくれたものは
重たい佗しい荷物であつた。
彼女は友のことを話してくれた、
わたしの愛した女のことを。
貪るやうにわたしは聞いた、
彼女が云ひたくないきはどい事をも
鎌をかけて聞きさへもした。
だが、それを今は悔いた。
わたしは聞くまじきことをも聞いた、
聞けばそれよと察してゐた事まで
今更心の重荷となるではないか。

はじめて會つたとき、次ぎのとき、
友をたたへ、ふたりの戀を祝福した人も、
それが女心といふものか、
あまりに愚かな男心を見かねたものか、
今まで隱してゐましたが、正直者のわたしには
おやさしい心を僞るに忍びなくなつたとて、
その眞實を口に當てた指から洩らした。

それははじめて知ることではない、
けれどよく知る友の口から聞けば
いかに強い力で迫ることか。
彼女の愛の不純であることも、
いかに虚榮と榮耀に充たされて
たのみがたい心であることも、
ただもしかの場合のとつておきに
わたしを捉へてゐるのにすぎないことも。

多くのことをわたしは知つてゐた、
けれどその生活の日々(ひび)のフィルムを
目の前にまざまざ繰られてゐると、
今まで輕く見てゐたことも
大寫しとなつて心をひしぐ。
このごろ、東京に來ながら會はずに去つた
人の心も、男の所爲(せゐ)とは思はれず、
その愛の冷えたのだとばかり思ふ心を。

あまりに暗く嶮しい心であるか、
戀するものの心の曇りであるか、
知らねど、抱く疑ひの火にこれは油か、
だが、わたしも彼女を愛してゐたらうか、
かの日、かの時、わたしは愛した、
あらゆる美をもつて彼女を飾つた。
彼女もかずかずの愛の言葉を酬いたが、
それはただ退屈しのぎの戯れだつたか。

この親切なやさしい彼女の友達、
ことさら友を陥れる人でないのは、
その言葉、すべて實あり。
ただ、聞く心、いま、またく冷えたか、
ただ深く、重く沈んでゐるのだ、
愛の水平から沈んで行つて、
憎みの底へも達しえないで、
ただその半ばに漂うてゐる。

なぜこの女はわたしの夢を破らうとする、
いや、わたしが自分で破つたのだ、
自分でもはや夢みる力がなくなつたのだ。
女の愛はいまわたしには重荷である、
すべての女、自分を捨てて行くことを
つねに望みつつ、その女愛なしと知れば
忽ち心沈むとは、
さてもおろかな心の迷ひである。

生きの限りはこの迷ひ断ちえぬ身か、
わづかな事にも心喜び、
少しの疑ひにも心騒ぐ。
飾り見た日もまことの君でなく、
いま黒く見る日も君でなく、
まことの姿はいつもかろがろ
動き、出入る人であらうに。

それはただ身を十重二十重からまれた
弱い、用心深い女にすぎぬであらう、
はなれてもとの友として、その幸福を
祈るべき人であるのに、あやまつて
求め寄つた身こそ不覚よ。

今ぞ思ひ切るべき時であると
天がおろかな男をいましめて、
この女の友をおくつたのであらう、
なぜか涙ぐましい氣がいたしますと
云はれた言葉をなぐさめにして、
わが世は暗い路を辿る男の胸に、
これもまたわが戀の果て、
わが身の果てぞと思ひ知られた。
だが、これでいいのだ、かうあるべきだ。

×

そなたの一番仲よしの友、
そなたはわたしに引合せたが、

わたしがその人を訪ねた事を聞いて、
病院でそなたは身悶えして、
見舞ひに來た友にむかつて、
わたしがこんなに苦しんでるのに
ハアさんはひとりで勝手に
いい事してゐるといつたと云ふ。

そなたの手紙はなほ強く、思ひを語る。
なんだか、なんだか氣がかりな
ハアさんの自由な生活がうらやましい、
ミイラ取りがミイラになつて
終ふやうな氣がして、せめてもつと近ければ
ウンとやきもちだつてやけるのに、
勇氣のないかなしさには
やきもちだつてやく資格がないんでしよ。

やきもちをやくことが
そなたは馴れて上手な女である。

自分の會社の女事務員に
いつも手を出す男のために、
焦げないやうに上手にやいて
男の心をよろこばす。
男の前に跪いて、膝をかかへて、
泣いてくどくがそなたは上手。

だが、わたしには要もないこと。
ただ、その人の口からいろいろこまごま
そなたの事を聞きたいばかり、
その人も話すはそなたの事ばかり。
話の好きなその人の口から
そなたの共棲みする家の生活の
裏の裏までよくわかつた。
それをこそ、そなたはくやむであらうか。

いつそ聞かねばよかつたか、
聞いた方がよかつたか、

そなたのために、わたしのために、
毒であつたか、薬であつたか。
わたしはよかつたと思ふのだ、
そなたの友の眞心をうれしく思ふのだ。
そなたの苦しみもよくわかり、
今日の惑ひも嘆かれる人のなさけを。

そなたのあるじの家に滯留してゐた
あるじの友達の小説家が
律義者だと云つたといふて、
ハテ律義者とは何を意味してゐるかと
友に語つた言葉を聞けば、
そなたとまた會ふ機會もない男、
そなたを忘るべき日は今とさとつた。
おれはあるじの敵だもの、
そなたにも敵であらうよ。

×

枕をもつて交代に
男の寢床に行く女たち。
二人の寢床はただ一つ、
非番のものがそこに寢るのだ。

トルコ、ペルシアのハレムのこと、
題材としたポルノグラフィ、
その痴戲の場面さながら、
おれにその夢ゑがけとか。

こんな生活が世にはあるのだ、
しかも、おれの愛する女が
その二人の女の一人なのだ、
その生活を捨てえないのだ。

男一人に女二人、
一つの家の二人妻、
それで仲善く、喧嘩もせずに

まるく治めてゆくとはえらい男だ。

だが、おれがそんな男だつたらどうだ、
どんなに嘔吐を催すだらう、
自分の全身に唾はきかけて
肥壺に浸してもあきたるまい。

こんなに女をはづかしめていいかと
フェミニストは憤つたが、
おもへば、おれに憤る資格があるか、
二人の女の愛をくらべるおれに。

彼は肉體的に女をはづかしめ
おれは精神的に女をはづかしめる、
彼の方が罪は輕いのだ、
おれにトルコ人が咎められるか。

だが、金さへあればどんな事でもできる、
そのブルジョア根性をおれは憎む。
榮耀の暮しに惹かれて、その生活を
恥かしいとも思はない女をあはれむ。

まるく治めるとはおもてばかり、
腹の底では角づきあひ、
互ひに相手のアラさがし、
おもへば辛い暮しである。

その辛さをば訴へながら
やはり惹かれて離れられない
女心は弱いもの、はかないもの、
憎めもできぬ、咎めもできぬ。

これがわたしのたつた一つの樂しみと
當番の夜を待ちかねる
そのいろごのみのあはれさを
いとしむべきか、さげすむべきか。

夜は太陽にもなる女である、
眠つた獅子をよびさまし
馬に跨つて荒野を走る、
その生甲斐のはかなさよ。

救ひ救はれようとおもうたのは
相も變らぬロマンティシズム。
金儲けして女を御する、
ただそれだけの話ぢやないか。

何たる無趣味、何たる味のなさ、
金さへ儲ければ、どんな遣り方しても、
小僧のやうな男でも、妻妾同居でも、
女は離れられない、それが世間だ。

おれは女を憎みもせぬ、さげすみもせぬ、
ただ世の相(さま)をはかなむばかりだ。

すべては運命のくひちがひ、
罪はおれにあるかも知れぬものを。
ああ、戀もなさけもみんな痴戲だ、
戀は財布の金で買へる一片の肉、
犬のやうにくらひ付け、愛はフレエズ、
おれは地上の戀の空しさに唾(つば)するのだ。

今は色欲の醉ひをおもふばかりで
おれは宿醉(ふつかよひ)のやうにむかづきさうだ。
おれは女と二人で身を淨める代りに
今はひとりで心を淨めたいのだ。

×

お目にかかりたくつてたまらない人にも
お目にかからないで居るわびしい女だと
誰にか傳へて下さいませと、
友へのたよりの終りの言葉、
うれしと思ふた事もあつたが。

いかに心は變るものか、
春の浮雲、こちらに漂ひ、
秋はそちらにまたかへる、
何といふやくざな心だ、
その日その日でいつもぐらぐら、
恥かしいおれだな。

恥かしいのはおれの未練、
これを最後の手紙ぞと
涙をさへも籠めながら、
いろよい文にまた心そそのかされて
またも針にくひつくおろかな魚。

かの呼び招きに行かうとて、
思ひかへして行かなんだ
その日すでに戀は終つた、
人を愛してゐる女、
おれには用のないものを、
などおろかなる返し文。

その罪ゆゑに、けふもまた
聞くまじき事のかずかず、
わが疑ひの薄雲の
心の空を蔽ひかくせば、
絶たざりし事ぞ恨み。

もはや純な昔のをとめでなし、
戀のいろはをつい見習ふて
讀本を何册もう上げて、
いまは戀路の果ての秋、
戀や、涙や、うるさいことは
いつも温泉で洗ひ流す女。

そなたは戀にはもうくたびれた、
三十路にちかくおもふこと、

ただ身の末のことばかり、
妻になりえぬたよりなさゆゑ
ひかへの男を持ちたいばかり。

すてられてかへる家なき日のことを
おもへばそれも無理ならぬ女心、
そなたも寂しい秋の女だ、
艶に侘び住むその山莊に
葉がくれ月は冴えるとも、
その月をおれは見まいよ。

九月二十二日——十月十八日
（東京）

第二編

×

両手で二つの林檎の重さを量るやうに、
時をおなじうして手に入つた
二人の女の手紙を胸にしづめて、
言葉と言葉をひきくらべては、
愛の重さを量らうとする。

さても、こんな男心があるものか、
女は蔑むがよい、憎むがよい、
行きがかりとはいひながら
我ながらあさましい男心、
女の愛に値せぬ、これぞ卑しさ。

おもへば愛は足りなかつた、
春は短かく、冬が長い、
蘆屋を捨てて、靜岡に、また蘆屋にと
身と心との幾度びとなき繰返し、
愛の方向轉換、おもへば恥辱よ。

愛を愛もて癒やさむとかけた願ひは

救ひとならず、二兎を追ふ
獵夫の慾にはあらねども、
苦しと逃れ、滿たずと變る
心、浮雲、さだまらねばか、
一人を失ひ、他をも得ず。

得がたき人は得べき人か、
才ある人の言葉ゆたかに
わが心をば喜ばせども、
心の妻も名ばかりか、
われには薄き緣なれば、
空しき風に散る言葉、
言葉の花を撒きちらす。

微笑みかるく湧くにくらべて、
直線的な文字のもどかしく
思ひのたけをも十分盛りえない
女の言葉は、鋭い矢のやうに
男の胸を刺し通す。

ああ、私はあなたをどんなに憎んだ事か、
私は絶對にあなたからは
卑怯なんて云はせませんよと、
女は昂然として云つてゐる。
何といふ強い實感のこもつた言葉だ。

それはおれの重みを身に受けた女の言葉だ、
おれのために苦痛を背負つた女の言葉だ。
たとひどんなに滿ち足らぬ
思ひに惱み、傷つけばとて、
家を捨てえぬ事のかこたれたとて、
最後に身を擧げて來た女の言葉だ。

おれを本當に心の一部とする女は、
おれを本當にわかつてゐるのは、
やつぱりおれの抱いた女であつたか。

相見むとしもおもはねど、
ともに傷つき、ともに豁れ
息づくままに膝に抱き、
ともにさだめを泣く人は
げに君であると今ぞ悟つた。

×

久々に女の手紙を見た思ひを
いかにして云ひ現はさうか。
絃の斷れた琴をかき鳴らす
手の觸れの胸に痛さか。
貝がらを耳におしあて
海の響を聞く思ひか。
すべての失はれたもの聲を揃へて
胸ふかく叫ぶ思ひか。
ただ一突き、裂けた胸へと
メス深く突き込む思ひ。

たとひ再び會へない身でも、
いのち傾け會うた女だ、
身をばゆるした女だものを。

今われはよくぞ悟つた、
その苦しみもて知るをえた。
まこと自分を愛した女は
愛の弱さを嘆いた女、
わが傷ついたその女だと。

まことわがため燃えたのは
その冷めたきを怨んだ女、
これぞわが一人の女であつたと
また得がたき今ぞ悟つた、
得むと欲りせぬ今ぞ悟つた。

これもみなまはり合せか、因緣事か、
浮世のさだめのつらければ

静かであるべき秋がやつて來ました、
（女の手紙はかうはじまつてゐる）
あなたは此頃どんなにして
お暮しなんでせうかしら、私は始終、
餘りに始終、あなたの夢をみます。そして、
幾度お便りを差上げようかと思つた事でせう。
でも、あなたの家庭をみだしたり、
お心を亂す事があつたら
大變惡いと思つて控へてゐました。

さう云つて、女は大阪の友に會つて、
友からおれの消息を聞いたときの、
自分の心持を語つてゐる。

「何とも思つちやゐない」と云つたのでしたけれど、
でも、ほんとうは、ああ、わたしが
あなたの許へ何もかも捨てて走らうとして
手紙を出したとき、あなたからは
お返事さへも下さりはしませんでした。

私はそれがためにとても意地を持つて
あなたと私とを嘲笑したんです。

ええ、私はあなたをどんなに憎んだ事か、
でも、それがあなたのせゐでないかも
知れないと思へたんです、ティ氏の言葉で。
でも私はすでに澤山の
苦痛を背負はされすぎました――
女のこの短い言葉の中には
云ふに云へない悲痛が籠められてゐる。
色々の追憶がどんなに私の心の中深く
折り込まれてゐる事でせう、ああ、
時にはあなたと散歩がしてみたい――

依然、私は淡々とした生活をしてゐます、
血の出る樣な生活もしました。
けれどかうしてゐるのが一番いい樣です、
私の宿命でせう―― 卑怯だとお思ひでせうか、

でも私は絶對にあなたからは
卑怯なんて云はせませんよ。
女の言葉は鋭い劍である、
今は身にひけめなしと信じて、
男の顎を持上げて云ふのだ。

ああ、すべては遲かつた、
おまへの出足も遲かつた、
おれの走りも遲かつた。
おまへも傷つき、おれも傷ついた。
ああ、私の筆はどこまでもどこまでも
限りなく續き相です、でもやめませう、
これがあなたの許に屆くか否かも
わかりもしないに――と讀み來つて、
おれの胸は何を思うた、思ひは死んだ、
遲かつた、遲かつた、ふたりは傷ついてゐる、
おまへはおれに死に、おれはおまへに死んだのだ。

×

毎日々々、佗しい雨續きです、
久し振りに、實に久し振りに御音信、
私は全く何と申上げてよいやら分りません。
十月も十三日は私の二十五年の誕生日、
二十五年も生きない間に
私は心の生甲斐を葬つてしまひました、
機械のやうに生きてをります。

灰色は愚かな事、
私はさしづめ何色でもありますまいよ、
時には人間らしい欲望も起してはみますが
又思ひなほして眠つてゐるのです、
永遠の墓場！

ジャズの響は私の心を輕くしてくれて、
心も身もズタズタになる迄引廻されて

私の身體はめちゃめちゃになりました。
今でも始終寢たり起きたりしてゐます。
亂痴氣な生活がもたらしたものは
生への深い倦怠と借金許りです。
ああその借金故にこそ
かそかながらもエコ地な生甲斐を
感じようとしてゐるにすぎません。

私の生命は
もう餘り長くはあるまいと思つてゐます、
自然に來る永遠の安息をこそ
ただ樂しみに生きてゐます。
私は魂の破綻者、心の自殺者……

おれはこの手紙を電車の中で讀んだ、
省線の電車の窓にひとり凭れて、
阿佐ヶ谷の女の友を訪ねるみちで。
讀み終つて、茫然として
濠の水を見てゐる男の顔を、
次ぎの車體の硝子越しに、若い女が
不思議さうにぢつと眺めてゐた。

ああ、おれの生涯の終りに
こんな戀が待つてゐようとは、
二年越しの苦しい戀の終りに
こんな悲痛な思ひが待つてゐようとは！
それがおまへの一年であつたか。
おれはもつと幸福なおまへを想つてゐたのに、
おれの事など忘れてしまつて、
華かに暮すおまへを想つてゐたのに。

おまへはやつぱりおれの色女(をんな)だつたか、
おれのやうな男を愛する女だもの、
常識的な悧巧な女ではあるまいよ。
妻の下なる苦しい立場、
妻妾同居の生活でも、

會社の社長のぜいたく暮し
はなれられない人をおもへば、
おまへは損な女だねえ。
おまへは誇りの強い女だものを。

その誇りゆゑおまへは屈せぬ、
齒をくひしばつても耐へてみせる。
その誇りゆゑおれも屈せぬ、
身を裂きながらも笑ふのだ。
おまへは餘生も長くあるまいと云ふ、
おれはおまへよりもつと短かい。
おまへが魂の破綻者、心の自殺者ならば、
おれは何であらう、おれは？……

突然、おれは、突然、から叫んだ、
詩人は哲人にならねばならぬ。
おれはおれの悲愴な顏付を恥ぢた。
若い女の前から顏をかくした。

おれは芝居をやる男だ、
いつもなさけない道化者だ。
おれは女の苦痛を尊重せねばならぬ、
おれの感傷の主（あるじ）とならねばならぬ。

阿佐ヶ谷のマダムの應接室で、
美しい笑顏のやはらかな秋に向つて
おれも晴れやかに笑つてゐた。
女の事、手紙の事など云ひだしもせず、
ありふれたアドヴェンチュアの話、
信州の溫泉場の挿話（エピソオド）などを話してゐた。
マダムのすぎ去つた戀の話も聞かず、
その少女時代の無心な話を聞いてゐた。

廣い日あたりのいい庭には
コスモスの花が亂れて、
ブルジョアめいたのびやかさに、
おれは蘆屋にはこんな家が

いくらも續いてゐた事を思つた。
そして、おれの心の中に
いかに別の思ひが行つた事か。

何ともわかぬ憤ろしさ、くやしさが、
つらい思ひがおれを責めた。
金の支配する世の戀を思つた、
女は金ゆゑ妾にすらも滿足する
此世の戀の空しさを思つた。
そして、あの女の幸福になれなかつたのを、
おれの愛に値した理由だと知つて、
なほさら辛く思ひやられた、
結婚をしそんじた女の不幸を。

×

ああそれにしても、
マダムの弟ともあらう人が
人の親展の手紙を讀むのさへ僭越なのに、
勝手に處置してしまふなんて、
わたしの心はまるで煮えくり返る樣です。
それに對して何一つ云ひもせず、
屈服してゐるかの樣な人の事を思ふと
私は腹を立て樣より
佗しさに泪を感じます。
何故にかうもままならぬか。

何故にかうもままならぬか、
女の言葉は深いためいきだ、
叫んでも、叫んでも、
悔いてよしない嗟嘆である。
女はおれの意氣地のなさを嘲るのだ、
嘲られておれはなんと答へる。
これがあはれなおれであるのか。
家のものにも抗へぬやうに、
女にも答へるすべのないおれか。

いや、おれは默つて屈服してはゐなかつた、
その不都合を知つたときは
狂氣のやうにいきり立つて、
どなつて、わめいて、面罵して、
茶碗を壁にたたきつけた。
何をぶち壞してもあきたりなんだ。
だが、それが何にならう？
機會は永遠に逸したのだ。
急いで問合せの手紙を出しても
なんの返事ももうなかつた。

若しあの手紙がおれの手に入つたなら
事情はすつかり變つたであらう。
あるひは生の勇氣がかへつたかも知れぬ、
新しい戰ひに心は奮ひ立つたかも知れぬ、
おれの生甲斐は見出せたかも知れぬ。
少くとも、その夏のあの苦しみ、
酒と女の狂ひはなく、その結果なる
あの秋の病はまぬがれたであらう。
いかなる日が、夜がおれには來たか、
おもへばくやしい過去である。

だが、それが二人の幸福だつたか、
すくなくとも、女の幸福だつたか。
戀も愛もただ言葉ではなく、
日々の地道な營みであるをおもへば、
この男と女、その性格を思ひかへせば、
悔いの心もまたしづまる。
まことにおまへの云ふやうに、
その生活がおまへには一番いいのだ、
それがおまへの宿命なのだ。

おまへはやはり今の夫の妻である、
去るをも許し、かへるをも許す、
いかなる恥も苦痛も耐へ忍ぶ
おまへの夫こそ、おまへの愛よ、

おれはただおまへの夢にすぎない。
その夫の心を苦しめぬこそ
おまへのまことの愛であらう、
子までなした夫婦ではないか。
おれはただおまへの幸福を祈るばかりだ、
みんなこれでいいのだ、よかつたのだ、
おれは無量の悲しみもて自分をさとすばかりだ。

×

去年の九月二十九日、
生きの身のまま、
手術臺にのぼつて、骨と皮、
三日目にさうらうとして、
ジャズの巷、カフェエに入り込んで、
二月まで、四ヶ月あまりを
馬鹿な男のおもちやになつて、
飲んで、歌つて、笑つて、かげで
血の泪にくれて暮しました。

破れた心が
どんな喜びを感じ得ませう、
酔つぱらつて、管を巻いて、
男を煙にまいて、日に日に荒んで。
私は日に八箱のバットをすひました、
睡眠不足は私から食慾を
すつかり奪つてしまひました。

やけくその戀もしてみた
(おこらないで下さい、
おこられてもすんだ事です、
もう手紙なんかくれるなと
仰しやればそれまでです)
そして地にたたきつけられて苦い泪!
起き上ることも出來ない泪!
自嘲でなくて何であらう、私の心は
イライラと尖つたキリの様に
わびしく鋭かつた。

悲しみを失ふために身を賣つたかも、
いいえ、心も賣ればよかつた、
惜しい事をしました！
ああ、身體が痛みます、
雨のふる日は身體が痛んで
起き上られないんです、
あはれなるむくろよ！

おれがどんな心でこの手紙を讀んだと思ふ？
この悲痛ないたましい生の詩を。
それはおれの巧みな詩よりも力がある、
とりわけこの終りの七行の中に
何といふ女の反抗と悔！
おれはそんな批評をして讀んだのか。
いやいや、それは後の事、
おれはいきなり細い革の鞭で
ピシャリと顔を打たれたのだ。

去年の九月二十九日、
手紙の來たのも九月と聞けば
それはきはどい時だつたのだ。
おれの返事を待ちかねて
飛び出す用意をしてゐたのだ。
たよりにならぬ男ゆゑに
アカダマの二階の勤め、
ミツルの名さへ悲しくて、
何を思うて踊つたか、
どんな心で歌つたか。

ああ、あの華かにお化粧をして、
樂しげに笑つてふざけてゐる
アカダマ、ユニオン、美人座の
女給の一人一人が、一人毎に
みんなこんな惱みをもつてゐるのだ、
みんなこんなに傷つき、うちのめされ、

血の涙にくれ、苦い泪にくれるのだ。
ああ、ただ金のため、
金のために身を賣つて……
魂までも賣つてしまふのだ！

アカダマ、ユニオン、美人座の
女給ばかりでない、東京の
タイガア、クロネコ、ライオンの、
いや、日本中のカフエエの女給が、
いやいや、カフエエの女給ばかりでない
あらゆる二業地、三業地の、
あらゆる藝者が、あらゆる遊廓の
あらゆる娼妓が、いや藝娼妓ばかりでない、
あらゆる貧しい賣物の女たちが
血の涙を流して金で身を賣るのだ。

おれの愛した一人の女の運命が
無數の苦痛をおれに思出させた、

おれの憤激、おれの反抗、——
ああ、それが何にならう、
おれは無力な詩人にすぎないのだ、
その一人の女すら幸福になしえない、
否、不幸へ投げ入れさへもした
弱い、弱いやくざな詩人だ。
おれに蓋世の力があれば、
むしろこの世を粉微塵にたたき潰したい、
所詮、救ひがたい世だ、人間性だ。

雨のふる日は身體が痛むといふ、
どんなに心は重たいか、
弱い身體で無理な勤め、
一日何里を歩む持ちはこび、
藝者代りのお客の相手、
煙草をすつて、酒を飲んで、
面白をかしく歌つて、笑つて……
それでよくまあそれですんだ！

おまへの今日を想ひやれば
おれは憤激の餘りやみくもに叫びたいのだ、
おれ自身に向つて、社會に向つて、天に向つて！

×

夜半の寢ざめにおもふこと、
思出つらくなつかしき
蘆屋を捨てて吹田にと
住める女の憂きくらし、
いかに今宵も寢られぬか。

むかし吹田に住めりてふ
若き友より聞きたりし
土地のすがたも變りけむ、
君のすがたも變りけむ、
うきふし繁き世にしあれば。

雨にも風にも身の痛む
人ぞやぶれし戀の人、
夢には人に追はれつつ
うつつに人を悲しめば、
われの寢ざめも安からず。

雨戸ゆるがす風聞けば、
瓦をたたく雨聽けば、
身は傷きてもとの巣に
伏す小鳥の夢やいかに。
吹田の夢は寂しからむを。

×

われも傷つき、
君もまた
生けるむくろと
なりぬとぞ。

刄物と刄物

相ふれて、
胸にひとすぢ
血を染めぬ。

刄物は引けど、
引きえぬは
尖る心の
いな光り。

戀のちからに
生きざりし
罪の罰ゆゑ
このむくろ。

×

落つるは君が
涙かも、
暮るるは秋の
光にて。

ただたまさかに
相見ては、
いのちの限り
かたむけし。

そのたまゆらに
かけたりし
いのちは露に
似たりけり。

君がまつ毛に
ふるへなば、
秋ぞ重たき
罪のかげ。

×

なさけかけたは
昔のむかし、
さめてぜひない
夢だもの。

もつとねむつて
夢みてすごす、
夢は死のほか
ないものを。

まだも死にえぬ
いのちは辛し、
死ねぬ身ゆゑに
戀死なす。

秋も終りだ、
木の葉は落ちる、
戀も終りよ、
身も終り。

×

あなたが死ぬときには
指か髮の毛でも
切つて送つて下さいと
いつて來た女よ。
おまへらしい言葉だねえ、
男の心臟ぐらゐ
ちよいと嚙れる女の言葉だねえ。

そのおまへに何をおくらうか、
指や髮の毛ではつまらないよ、
おれはこの傷ついた心臟をおくらう。
おれの死骸が燒かれたとき、
おれがシェリイのやうに
「心の心」の詩人であつたとして、
若しか心臟が燒け殘つたら、

それをおまへに贈らせてやらう。

だが、それも今では駄目だ、
おれの心臓は脆く壞れて
腐れ林檎のやうに蝕んでゐる。
その上、古風な薪で焚かれずに、
あの火葬場の電氣で燒かれたら、
いかに「心の心」でも、
去年死んだ弟とおなじやうに
ただ、骨をあますばかりだらう。

骨なんぞが何になる、
生きて動くものがおくれぬならば
いつそ何もおくらぬ方がましだ。
いや、おれは死んでそなたに
そなたの指に觸れられるより、
この生きた指で
そなたの心臓をおさへたい、

そなたの髮の毛をさすりたい。

ああ、もう半ば死んだ身で
まだこんな思ひが湧くものか、
まだこれほどの情痴があるか、
おれはまだ未練が絶たれぬか。
おれを生につなぐ一筋の綱、
それは女の髮の毛であるか、
おれをしつかりつかまへるのは
女の長い指であるのか。

いや、もう終りだ、終つてくれよ、
おれの惱みも、おれの未練も。
指か髮の毛でもといふ女よ、
なぜおれの胸を刺さなんだのだ、
おれの首を絞めなんだのだ。
おれは怨みに思ふよ、
おれに生きろといふおまへを、

何處かの片隅にでも生きてていといふおまへを。
仕方もない事。さう云ひ切つて、
今も西へ走つた昔とおなじ。

×

女は男に語つて云ふ、
あなたが此世にないことは
到底さみしくてやり切れないんです。
さみしい、さみしいといふ女よ、
そなたの生きてゆくために
おれも生きねばならぬのか。
生きて時たま會ふために、
なほ憂き事を身に積んで。

いいえ、私はそれでゐて、
私のねみだれ姿や、缺點を
あまりあなたには知られたくはないのです。
ただ美しいところ、化粧したところだけを
あなたに上げたい。
あなたを夫としたり、
くだらない相手にするのはいやなんです、
おわかりでせうかしら私の心を。

私の心はあなたにはわかりますまいつて。
さうだな、おれにはわからぬ事にしとかう。
せめてあなたの身のまはりの
お世話を一度してみたい、
あのかびくさい空氣から救つてみたい。
が、あの方があなたをお好きなら

いつもおなじいその心、そなたの心、
それを辛やとおもひもしたが、
今はそなたをうれしい女とおもふ。
此世で添はぬふたりゆゑ、
ふたりは不死の戀人である。
そなたはいつも、いつまでも、

おれには夢の女であればよい。
夢でほろびて、夢に生きたら、
おれもそなたの夢であろ。

×

色つぽい人の色文字、
色つぽい眼でにらまれて、
ひたひたと惹き寄せられた
色深い男なれども。

色深い人のいろごと、
あまりなる深なさけをば
人の上に聞いてあさまし、
わが上に思ふはくるし。

おれも昔は色ごのみ、
色深いよとおもへばぞ
女の熱い息を吸ひ、
床しと心ときめいた。

男ざかりになんでまた
いやになつたか知らないが、
色事なんぞはばからしい、
色深女はあさましい。

色つぽいしなもしぐさも
絶えてないその女、
色のみちではまだ初心、
それはもうさつぱりしたもの。

あんなに戀の道行きに
なさけの弱さうらまれたのに、
その水のやうに淡い女が、
今はしきりにおもはれる。

人の心は不思議なものよ、

男はかうも變るものか、
女思うて寢られなんだに
腹がみつれば食ふもいや。

夫を一月もよせつけぬ
色はよしないその女の、
ただ、言葉もて戯れる
をさな遊びがけふはよい。

どんなきれいな藝者でも
今のおれには床の花、
花筒に見るがよし、
そんな遊びがなに面白。

地色、地色に咲く花の
いのちの香り、まことの色、
それぞ見ごもり見も飽かぬ
ただ女の魂の花。

心の愛の空しくば
閨の睦言また空し、
愛は心のいたはり合ひ、
あとはみな色事。

色に迷ひ、色に溺れ、
いろいろに身を痛め、
秋を身にひたと知るとき、
色深も色が褪めます。

色つぽい好色女、
一代女も寺まゐり、
さすが色をたつた一つの
樂しみと思ふ女も、

龍爪の山にこもつて
その尼寺の庵室に

侘び住まうとの志し、
やがて行かむと友をさそうた。

色の奥までふみ入らば
その發心ぞまことなる、
われも道心きざしては
この年ごろの色懺悔。

そなたの色もやがて灰、
おれの骨も草が靑々、
佛樣だよ、悟れば今も。
色卽是空。色卽是空。

×

秋は一人の苦しみどきか、
みなそれぞれに寂しいものを。
雨は葉を打ち、葉は地をたたく、
この世の夢もみな落ちる。

みな苦しいのが浮世のくらし、
世に生きることのたよりなさ、
しみじみわれに訴へる女心、
浮いたと見えるその人でさへ。

寂しくなればたづねてくれる
女友(とも)もおのれも滿ち足るものか、
胸にかざした一輪の薔薇
もらうて襟にはつけたれど。

苦しといへど、苦を逃れては
さらにいやます苦があるものを。
寂しさ堪へえですがりつく
人の胸はなほさら寂しいものを。

所詮、浮世よ、心も秋よ、
男は四十にちかづいて

女は三十にちかづいて、
秋を身に知る今日の雨。

苦し苦しといひいひ生きる、
死にたい死にたいといつても死なぬ。
これが人の身、木の葉は落ちて、
夢は散れども、身は散らず。

×

澤瀉の葉のかるくうく
野中の清水しづかにて、
昨日もけふも水すまし
澄みたる鏡、影をひく。

野中の清水澄むごとく
心すまして、しめやかに
十年（とせ）はすぎぬ、戀もなく、
願ひも底にしづもりて。

日も夜も書（ふみ）に讀みふけり
思想（おもひ）の路をたどりつつ、
今身に足らぬ事わざは
やがて成らむとたのみつつ。

西上人のあとを追ひ
芭蕉の寂びにきはめ入り、
いのちかすけき香を焚き
心ひとすぢくゆらしぬ。

しづかなる人、あきらめの
寂しき人の姿よと
女はわれをあはれみつ、
友は若さを寂しみぬ。

かくて終らば死なりしか、
幸（さち）なき幸（さち）にめぐまれて

さびしけれども世に立ちて
直なるままに終りけむ。

小さく清らの詩人とて
ただ一管の笛を吹き、
事なく世をば終ること、
そはわが運にあらざりし。

一天急にかきくもり
嵐はよもに吹きおこり、
この片隅の巣をこぼち、
心の構へかたむけぬ。

くもり拭ひて年をへし
鏡のおもて曳く影は、
雨のまへなる軒下の
蜘蛛の走りに似たりけり。

などわが心狂ひてし、
狂はで立たむ力なく
西に東に飛び散らふ
木の葉のごとくふためきぬ。

おきすましたる水のおも
壺のごとくにかきみだし、
濁りの中に飛び入りて
いのち何處と求むれど。

いのちはすでに身にあらず、
世は弱き身をうちひしぎ、
蘆のやうなる痩脚の
よろめくままに斃れなむ。

夏の夜空のいなづまの
鋭く矢をば投ぐれども、
人を射るべき力なく、
むなしく消ゆるわがさだめ。

悲しけれども、わがさだめ、
今のこの世に生き惱む
人の惑ひをうたへとぞ
定められたる弱き詩人ぞ。

×

おれは遠方の人間だ、
この日本での未知の客だ。
この息苦しい空氣の中では
おれは死ぬほかはないのだ。

おれはあやまつて日本に生れて來た、
あやまつてジャズの世紀に生れて來た。
遠い遠い旅をして、その旅先きで
おれは空しく斃れるのだ。

おれはカスパアル・ハウゼルか、
誰もおれが何者か知るものはない。
えたいの知れない奇妙なやつ、
その嘲笑が此世でのおれの所得であつた。

一體、誰がおれを理解したか？
十何年を同棲したその妻からさへ
少しも理解されてゐない男が、
なんで他人に理解されようぞ。

それが運だ、おれの役割だ。
いかに日本語を巧みに驅使しようと
おれの言葉は通じなかつた、
言語不通、それがおれの運である。

それがおれの誇りだ、おれの悲みだ、
詩人連はおれに唾しろ、
文士連はおれをはねのけろ。
おれは牧場の中の狼のやうに死ぬのだ。

おれは遠方の人間だ、

遠い遠い旅をして來た。
おれはその遠方の故郷を慕ひつつ
この日本の冷たい空氣の中で死ぬのだ。

十月二十日——十月二十八日（東京）

第三編

×

主義の看板さへ背負へば幸福である、
完全であり、偉大である人々よ。
君等はいまどんな看板を背負ふか、
常に一定の眼鏡もて人生を觀る君等は、
曾ては自然主義、人道主義、
いまマルクス主義、レニン主義。
マルキシストだとさへ叫べば、
すぐ、おお同志よと反響する。

それは相も變らぬ日本人の形式主義だ。
この日本の傳統的な弱點をもつて、
インタナショナルを叫ぶ人、
なんと君等はお人が善いぞ。

宣傳、流行の世となつて、
看板さへよければ酒はどうでもよい。
酒はよくとも看板がわるければ
飮むものもない時代となつて、
價値の幻影、鴉をも鷺と見せ、
借物の主義、孔雀の羽毛となる。

まことその主義に殉ずる人は
ただそのために生れた人、
眞のマルクス主義者は
公式によるアヂ・プロの叫びよりも、
文學など眼中に置かぬ唯物論者、
ただ政治と實行とに生くるだらう。

おれはマルクス主義者ではない、
いな、むしろあらゆる主義の敵だ。
おれはこの世の主義ならぬ主義、
あらゆる形式主義、看板主義、
見せかけ主義の否定である
內容主義、すなはち無主義主義、
主義に囚はれぬその精神に生く。

形式主義は日本人の傳統、
形に從つて、實を逸する
日本人氣質(かたぎ)に叛逆して、
よし八方から壓し潰されようと、
その鬪ひに斃れなば、
外形上の失敗をいかに嗤はれようと
本質的の勝利ではないか。

人を生かすものは主義でなく、

信念を守るものはただ人である。
尊ぶべきは看板でなく、
ひそかに鬪る熱誠である。
かの犧牲者に光榮あれ、
たとひ空しく斃れるとも。

×

おれはおめき叫んで滅びたいのだ、
ずるずると砂が崩れるやうに、
ぼそぼそと火屑が盡きるやうに、
あはれ果敢(はか)なく滅びたくはない。
おれはこの血肉を社會に叩きつけたいのだ、
勞働者セキリヨフのやうに、
追ひつめられた渡政のやうに。
だが駄目だ、ぼそぼそ消えるのが
おれの運だ。悲しいインテリゲンチア、
非力のおれの末路である。

おれは死にかけた一匹の蟋蟀を
掌に載せて眺めてみるやうに、
一人の人間の末路を見てゐるのだ、
冷然として觀察してゐるのだ。
すべてに敗れ、すべてに擊たれ、
一匹の弱蟲が、まだ死にも得ず、
蟲の息で、かすかに蠢いてゐる。
その醜さを見るときは、觀察者の
冷然たる眼も忽ち怒りに燃えて、
この醜い蟲をひと思ひに捻り潰したいのだ。

我事畢る、大事は去れり、
旗を捲いて將は兵をかへす。
阿呆はやつぱりうろうろして、
いい切上げ時を知らないのだ。
戀は空しい幻である、
鬪ひも絕望である。
戀を終つて鬪ひに生くべき日に、
鬪ひもまた空しくなつた。
詩人默せば、戀は歌はず、
戀が眠れば、生も滅ぶ。

詩人の中に哲人がめざめ、
あらゆる宗教的の狂信を、
あらゆる昆蟲の焦れ死を、
冷然として眺めんとする。
人間性のみにくさを見て
希望を見ぬはわが罪と知る。
このニヒリストを打て、打て、打て、
その打擲に値するおれだ。
裏切者か、おれは、インテリゲンチア、
はじめから仲間でないのだ。

インテリゲンチアよ、歎くな、
ただわが地位を正しく見よ、
汝こそ沒落すべき白手階級。

だが、おれはもとインテリだつたか、
いや、おれは貧しい勞働者だつた、
あはれな少年印刷工だつた、
給仕であつた、小僧であつた。
二十餘年の苦を積んで
ひとかどのインテリとなつた日に、
それが罪となつたとは――

ブルジョアからのインテリゲンチア、
その白手人こそ幸福である、
デマゴオグとして活躍する。
帝大を出た秀才の銀時計、
忽(こつ)として新興階級の闘士である、
左翼の非合法主義をふりかざす。
勞働をやめた勞働者は
ただこれ死物にすぎぬのだ。
態(ざま)ア見やがれ、この阿呆め、
身の程知らずのそれが罰なんだ。

地上はただ奸黠なるものの世界だ、
奸悪な資本家が勝利を占めるのだ。
人間を支配するものは欺瞞だ、
大衆の指導者は屢々大衆を賣る。
今、勞働者は自力をさとり、
白い手のインテリを排除する。
さあ、一切は來(く)るところまで來た。
インテリの實力も意義も今試驗ずみだ、
おれの空虚と愚鈍も試驗ずみだ。
戀も終りだ、闘ひも終りだ、すべて終りだ。

×

おれの闘ひは兒戲であつた、
お釋迦樣の指と指との間を
何萬里も飛んだ孫悟空のやうに、
おれは書棚にぎつしり立て並べた
書物と書物との間を飛んだ。

おれの闘ひは痴戯であつた、
力を十分出さないうちに
決勝の鐘は鳴つた。
おや、しまつたと云つたところで
もう駄目だ、もう追ッ付かぬ。

いつもいつもの敗戰(まけいくさ)、
コロリコロリの炭團山(たどんやま)。
今度こそ、愈々、愈々の
どんづめの、慘敗、慘敗。
苦笑(にがわら)ひして引退(ひきさが)るばかりだ。

おれがもつと圖太ければ、
そこで四方の觀客を見返して、
舌をペロリとはいて見せるところだ。
この野郎、人を食つた奴だ、——
觀客の叱(し)ッ叱(し)が聞えるやうだ。
愉快だらうな。

×

人形をつかふ男あり。その顔泣くが如く笑ふが如し。あはれむべき道化姿よ、今その寫眞に題するうた。

吉右衞門好みの浴衣の上に
麻の葉つなぎのチャンチャンコ、
これでギニヨオル人形をまはす。
その道化の姿、友は見て、
あの狂うた作家が狂ふまへに
羽織の下にこんな陣羽織を
着てをつたぜと笑つて云へば、
急いでぬいだしをらしさ。

まことにおれも狂うてゐたか、
狂ひか狂ひでないものか、
狂はないための息抜きか、

ごまかしか、この道化の假裝。
世をば道化の芝居と見て、
その立役者、アヤッツォオ、
旅から旅を打つてまはつて、
地獄の隅での初興行。

おれの正劇、受けぬなら、
この笑劇を見てござれ。
人は見ずとも、おれがみる。
泣いてゐるのか、笑つてゐるのか
一寸見當つきかねる
その顏を、つくづくみれば、
あさましい、なさけない、
さても細い腕だわい。

インテリのニヒルとはこれか、
ニヒル、ニヒル、何にニヒル、
ニヒリニヒッたこの姿、

苦しい夏を、ひと夏を
この姿もて狂うたる
男は悲し、あさまし し、
そのあさましさ極まつて、
秋はくるひもやむならん。

×

銀線のふるへるやうなリズムもて
果てしなくおれは歌うた。
秋の長夜のこほろぎか、
鈴虫、松虫、チンチロリン、
冴えてかすけき銀のこゑ。

ありとも見えぬ銀線の
ふるへわななく風の中、
するどき光り、靜脈の
血しほ奏づる樂の音は、
いのちの細り極まらず。

リズム湧き立つ眞夜の海、
果てしもあらぬ波を盛る。
高きは天を打つおもひ、
低きは地をも穿つさま、
破れむほどの船の搖れ。

縷々として盡きぬは香の煙にて、
わが命ただ一筋に細けれど、
絶えなむとして絶えぬ絲、
靑き靈のいとなみは
神にも魔をばつなぐらし。

いつまでおれは歌ふらん、
いまはいのちを傾けて、
鬪のうた、ときのこゑ、
必死のさけびつたはれば
切れなむとする銀の線。

銅のこゑ、鐵のこゑ、
をたけび、をめき、高鳴りの
この銀線に嵐せば、
リズムの絲のつと切れて
默せば、いかに後のこゑ。

×

死か、死か、今は死が生か、
生がおれの死であるか。
死の蔭の谷を行きつつ、
おれは無限の生に充たされる。
世も、業も、空しと見るとき、
生命感、愈々脈搏ち、
詩の泉、更に迸る。

彼、閃光を放つとき、
跳躍して死地を脱するとき、
その生命は燃焼して、

叛逆の藝術を生に描き、
その血もて繪を塗らば、
不滅の一瞬、星の如く
燦として輝くのだ。

生によつて、生なきもの
死によつて、生を描く。
空しき果ての空しさに
その魂を注ぎ滿たす。
空洞の地下より湧いて
おれの詩は地上を浸す、
善い哉、生、善い哉、死。

×

わたしの小說を愛讀して
くりかへしくりかへし讀んだといふ夫人よ。
おそろしく背の高いといふ夫人よ、
おそらくわたしぐらゐ、
あるひはもつと高いかも知れないといふ。
北越の雪の中から生れたあなたは
美しい人であると聞く。
あなたを知つたなら、わたしの知つた
女の中のもつとも長い女であらう。
あなたの背丈だけでもわたしを魅するであらう。

だが、わたしはあなたに會ひたくない。
わたしは實に澤山の女に幻滅を味はつた、
今はもう新しい女性に會ふ事を恐れてゐる。
おそらく又、わたし自身も澤山の女性に
幻滅を味はせたにちがひない。
わたしの愛した二人の女は賢い女であつた、
一人の女はわたしと一緒にならないで、
自分の美しいところだけを見せたいと云ふ。
一人の女はわたしを永遠の男性として、
遠くから一生愛してゐたいと云ふ。

夫人よ、あなたも遠方の人であつてほしい。
あなたはただわたしの作品によつて
わたしを味はつてゐて下さい、
わたしはあなたの友達の話を通して
ただあなたを想像してゐたい。
女性の讀者が愛する小説の作者に會ふ事は、
舞臺の裝置を裏から見るやうなものです、
人形芝居の黒ん坊の覆面を取るやうなものです。
それはよしたが上分別の愚行ですが、小説の作者が
その美しい愛讀者に會ふのはなほ危險です。
退屈するか、戀着するか、二つに一つですから。

夫人よ、わたしは自分の小說の中で
自分の理想の女を描いたのです。
敏子、敏子、だがおまへも描いてみると
もはや理想の女ではなくなつた。
ましてや、地上の現實の人はどんな人でも
會つてみると理想は裏切られる。

男も女も、そこはおなじ事です。
わたしの求めてゐる女は地上にないのです、
わたしは一生理想の女性の幻を追つてゐるのだ。
わたしはドン・フアンでせうか。

ドン・フアンは單なる女たらしではない、
彼はその理想の女性を、この現實で
あくことなしに求めてまはる男です。
彼は戀愛上のドン・キホオテです。
だが、わたしは日本人です、
さとりも早く、あきらめも早い。
わたしは早くも女に懷疑し、戀に絕望して、
醉ひざめの水を呼んでゐるのです。
だが、かの獨逸人、瑞典人のやうに女を憎みもせず、
幻はただ幻の花として美しく見ようと思ふ。

熱狂の醉ひに天女と見るのもあやまりだが、
醉ざめに惡魔と見るのもあやまりだ。

女はただ女、それだけのもの、
涙もろく、移り氣で、惑ひやすく、
情(じやう)に惹かされ、媚びを忘れず、身はなほさら。
女は子をば生むもの、月に病むもの、
生きて飯くふ動物と知つたならば、
善くも惡くも、みな男の慾の迷ひと知る。
これは失禮、どうも少し惡口になりましたかしら、
でもわたしの本心です、せいぜいお手柔かな。
わたしは戀のハムレットでせうか、
むしろ、ホレエシオかも知れませんね。

わたしは今、哲學者になつたのです、
だが、それは頭だけの話です。
美しい女の笑ひと息と聲音(こわね)とは
たちまち感じやすい詩人を暴露します。
わたしは先夜、ある演奏會で
若いピアニストの横顏を見たとき、
忽ち胸が熱くなつて顫へて來ました、
その横顏はわたしの愛した女に似てゐたのです。
あなたの長い身體のやうにあまりに長く、
すつきりと、彫刻的な顏の線、
それを想像するのはわたしに危險なのです。

哲學者がたちまち詩人に逆戻りして、
飛行の仙術も忽ち破れてしまふ、
久米仙はその滑稽な男の象徴なのです。
こんなやくざなものが男なのです、
女の惡口なんぞが云へるものですか。
これがわたしのあなたに會はない理由です、
あなたは驚かれるでせうか、
小說家とは面倒くさいものとお思ひでせうか。
實はわたしが小說家でないからです。
小說家なんてものは氣樂で氣輕なものですよ、
い、い、い、
のんこのしやあとしてますよ。
夫人よ、あなたの愛讀(あい)なさる小說を書いた男は
詩人と哲學者との混血兒なのです。

あなたは彼がどんなに面倒くさい男か、
あの小說でおわかりにならなかつたでせうか。

×

彼女たちはおれの足に足かせをかけ、
おれの手に手錠をはめる。
なぜ　彼女たちはおれを救はないのだ、
なぜ、救はなければ滅ぼさないのだ？
なぜ、なぜと云ふだけ野暮よ。
救ひもせねば、滅ぼしもせぬ
これが女の性質だもの。

男が女に救はれるといふのは
實は男が自分で自分を救ふのだ。
女に滅ぼされるのも同じこと、
男が自分で自分を滅ぼすのだ。
女は自分では何の手出しもせず、
そばで見てゐるだけなのだ。

男の宙返り、どツてんがへし、
女はにこにこして見てゐる。

おれの愛した女たちは
とりわけそんな女だもの。
男の中でも並外れ、
天保錢でつゝりがくる
ひどい男の宙返り、
いつまでぢつと見てゐる氣か。
天と地の間にぶらさがつて
上りも出來ず下りも出來ぬ
七顚八倒、面白いか。

×

日夏耿之介氏の「明治大正詩史」中の批評を見
て感あり。

おれは一體どんな詩人だい？
詩史を書いた評家はおれを評して

生活のために碎けたと云つた、
餘りに多くを歌つたがために
殉情寂しくかすかな野の花の
風情を失ひ、處女性を失つたと。

おそらく間違ひのないところだらう。
だが、それがおれの恥か。
莫迦を云つちや困る、それでこそ
おれは立派なおれなのだ。
生活の重荷に壓し潰されて
碎けた事こそおれの誇りなのだ。

おれは勿體ぶつてすましちやをれぬ、
微塵、掛値なしに商賣するつもりだ。
一厘一毛も高く買つて貰ふまい、
ねぎり倒されてもかまやせぬ。
おれは多辯に多辯をかさね、
おれの腸をさらけ出すんだ。

よしや一萬の詩を書いたところで
おれの世界が云ひ盡せるか。
千里、萬里一條の鐵、
語り盡さず雲山海月の情。
二元の爭ひ何のその、
おれは多元の世界に棲む。

處女性なんぞは糞でもくらへ、
おれはあばずれ、年増女。
おちよぼ口した生娘時分、
かあいかつたと云はれても、
もとの白地になるものか。
色の苦界で死ぬまでよ。

おれは極道者、ならずもの、
絶對自由の願を立て、
不逞はあへて共産黨の

赤賊どもにゆづるまい。
ただ、お孃さん育ちの悲しさに
むかしのしつけの根がぬけず。

思ひ切つてやれぬのが
おれの一期の恨みだよ。
士可殺、不可辱 とはよく云うた、
殺されずして辱しめられる
運命悲しき秋を哀れと思ふなよ。
なアに、おれはヴィヨンとばくちを打つつもりだ。

×

著書の扉についてゐる著者の肖像は
何とかいふ癲狂院の前に立つてゐる
その創立者の記念像を想ひ出させる、
どちらもおなじやうに、その中には
もろもろの狂念が渦巻いてゐるからサと、
皮肉なハイネめ、よく皮肉つた。
だが、奴だつて癲狂院の創立者だ。

ところで、おれもまた莫迦だけに、
その詩集の前に肖像をつけるといふ
その没趣味のあやまちをやつた一人だ。
その詩人風のサンティマンタリズムは嗤ひたい、
だが、今は違つた意味で敢てやつて貰はう。

これがヴィヨンの友の顔であると、
その醜貌を世上の眼に晒して貰ひたい。
日本橋の畔りに生恥さらす生臭坊主、
これは死に損ひの人間の顔だ、
言葉だけの、力のない阿呆の姿だ、
かう云つて一つやつて貰ひたい。

弱い無力なインテリゲンチアの
證據には手をのつけろと云つたが、
手どころか、おれの尻尾でも、足のうらでも

おれの身體中の一番滑稽なものをつけるがよい。
面なんか月並だ、珍妙至極のこのシャツ面でも。

何でもつけろ、おれの祕藏の醜物を。
氣取つても、すましても、追ツつく事か、
それがおれの身についてるんだから仕方がない。
おれはやつぱりルッソオの弟子らしい、
（裏返しにしたロベスピエール？）
いや、その「精神機能の病氣」がサ、
「缺乏からの名譽」と萩原は旨く云つてのけた。

實際、おれはどんな意味から云つても、
革命のために熟してゐるのだ。
おれは每日每日の惣菜に倦きた、
コットンコットン車の動くのに倦きた、
人間の眞面目な顔付や考へ方に倦きた、
アナキスト、ニヒリスト、etc……
その一寸風變りな帽子にも倦きた。

おれの頭が、ヴェルレエヌのやうに
禿げちよろけてゐない事が恨みだ。
なんの、心が禿げてゐる……
そんな大禿頭をもちながら、
色男面が笑はせるぜ。
禿げろ、禿げろ、兀鷹の鋭い眼付
見せかけの附燒刃、銀鍍金の哲人風。

おれは一挺の破れ風琴、風に鳴る、
おれの心は禿げて破れて雨が漏る
ブリキを叩いて世を罵る、
悲風慘雨、なんでもござれの糞度胸、
おれは宇宙の一浪人よ。

豆をかじつて英雄を罵る快、
徂徠なんぞは規模が狹い。
英雄、王覇、みな寸馬豆人。

おれは天地開闢このかたの
この宇宙の一大不調和を
罵り、罵り、罵り拔いてやる。
これがおれの使命なのだ。

おれは宇宙の叛逆者、
一切被造物の悪運を
瓦礫となして投げ返す、
森羅萬象の宇宙的誤謬、
神の髯面に叩きつける。

こんな阿呆な宇宙でも
宇宙といつたらでつかいぞ。
虫が一匹何をやる、
なにをブサクサ云つてゐる。
キリキリ消えて失せろ、
微塵となつてふッ飛んぢまへ。
六根淸淨、六根淸淨、
掃ひたまへ、淸めたまへ。

十一月六日——九日(東京)

第四編

×

また、冬が來た。
懷手なんザ不景氣だぜ。
拳固を一つ、
ニヨッキリとつん出せ。

突け、それで、
資本主義のどてッ腹を。
鐵の扉で碎けたら、
新手で、またつん出せ。

おれの心もいま拳固だ。

ニユッとつん出せ。
微塵になつてけし飛んだら、
もつとえらい奴が出るだらう。

詩も、愛も、この寒さで
コチコチにかたまつたんだ。
えい糞ッ、どうなるものか、
絶望的勇氣で、ぶッつかれ。

×

要するに、食へないんだ。
ただ、それだけだ。
おれにも食はせろ。
ただ、それだけだ。

人はパンばかりぢや生きられないッて。
パンがなけりやアどうするんでい。
まづ、パンをよこせ。

ほかの事は、みんなそれからだ。

稼ぐに追ッつく貧乏だ。
働けば働くほど食へなくなる。
米がとれればとれるほど、
百姓はくらしが苦しくなるんだ。

政治、文學、みんな餘計だ。
食はせろ、おれに食はせろ。
街から、野から、みんな叫ぶ。
餓死するまへに、一暴れ、やつてみろ。

今年は滅法寒いといふぜ。
この寒空に向つて、出るははなみづ。
これから何を着りやアいいんだ。
外套はボロボロ、蒲團もボロボロ。

あの錠前のやうに銹のついた親爺め、

質屋の青錆びた因業爺め。
二貫は貸せぬと云やがつた。
おれの財産は二貫きりか。

くだらねえ、これがおれの冬か。
禿げちよろけた鴉が一羽、
阿呆、阿呆と啼いてゐらア。
糞ッ、おれにどうしろといふんだ。

×

おれは主義の人間ぢやない、
迷ひの人間だ、矛盾の人間だ。
多元的宇宙の多元人だ。
統一はない、體系はない、
あるは混沌、支離滅裂、めッちやくちや。

おれはたうとう自分自身を、
自分の思想をも統一せずに終るのか。

アナキストでもなく、ニヒリストでもなく、
思想のアナアキイ、頭のニヒル、
そんなおれだよ、虚無の王様、全の混沌。
思想體系、みなウソッぱち、
都合のわるいものは見て見ぬヘエゲリアン、
莫迦め、そんなゴマカシ、やめにしろ。
三千世界を一册の書物なんかで
體系づけるなんて、口幅ッたいや。

眞は混沌、生は虚無、それでいんだ。
虚無で働き、混沌がそれで體系。
いや、おれは統一のみちを知つてゐる、
ただ一本の綱でくくられるのを、
ただ一本の双で串刺すことを。

×

甘んじて殺されろ、
徐々に首を絞めさせろ、

宿命の囁く智慧の言葉だ。
だが、死ぬまで反抗したらどうだ。
唾を吐きかけて死ぬのがましではないか。
死にもの狂ひにジタバタして、
打たれて、突かれて、虫の息になつて、
たうとう息が絶えたらどうだ。
おれはあの四人のやうに死なう、
おまへもおなじやうに死ね。

醉つぱらつて道頓堀の道の眞中で
管を卷いて連れに來た妹をさんざ困らしたり、
醉つたまぎれに酒場の地下室に寢込んで
マネエジヤアの狼に送られて歸つたり、
醉つぱらつて二日も三日も下宿先へ
かへらずに泊り歩いたり、
みんなそのアガキだ、必死のあがき。
殺せ、殺せと泥醉女(よたんぼ)は喚くのだ、
溝の中に寢る赤髮(あかげ)の百姓女。

おまへも死にもの狂ひでやつたのだ。

今はなきがらのやうな身體を、
父母の悲しみをやはらげるために
元の夫のもとによこたへて、
眞面目さうに暮してゐる女。
可哀相だと思つてやつて下さいといふ。
どうせ捨てた身なんですもの、
外から平穩に圓滿らしく見えさへすればと、
カフエエをやめる時、心に決めて懸つた事、
動けなくとも起つて行きますよ、
病氣は自然消滅、さうすれば近親に
恥をかかさなくともすみますからね。

女といふものは繰返しが好きなものだ。
繰返し繰返して飽かないが女だ。
また、おれに來いといふ。また、おれを招く。
大きな望みも、餘計な望みも今はない、

ただ會ひたいと思ふだけ、と女はいふ。
だが、二人は最早や會はぬがいいのだよ、
二人で生活をはじめるよりも
かうして分れ分れに殺される方が、
おまへらしくもあり、おれらしくもある。
會はずに死んだ方が、おれは好きだ。
おまへは自然消滅、徐々に絞められて、
おれは死にもの狂ひにのたうち廻つてだ。

×

雨風の音を聞きながら寢てゐると、
佗しくて、泪が流れます。
こんな片田舎の田圃の中で、
私には追憶がある許りです。
あの部屋で、あなたはもうおめざめでせうか。
痩せた指をしみじみ眺めながら、
(此頃私はひどく痩せてしまひました、
睡眠が全然とれないんです、
日によると一時間も眠れない時もあります)
自分をいたはつてやりたいやうな氣が
湧き上つてまゐります。
どうせ長くは生きられもしますまいが、
少しでも思ひの儘に振舞ふ
瞬間を得て死にたいものです。
私はもつと暴(あば)れてみたい心はありますけれど、
身體がいふ事をきかないんです。
こんな身體で何が出來ませう。
かう云つて、女は自ら憫れむのだ。

世の中に私の心を知る人は、いいえ、
一番よく知つてゐる人はあなた丈、
私のためにでも生きてゐて下さい、
私は折にふれて訴へる人がほしい。
かう云つて、女はおれに苦痛を訴へる、
世に敗れ、戀に傷ついた無力なおれに、
生に敗れ、弱さに傷いた身の苦痛を。

日に幾度となく取りつかれる寂寥！
救はれる事のないこの佗しさ。
いやないやな寂寥、
深い深い底ひも知れぬさみしさ。
寢起きなどにはそれが特にひどいんです。
生きてゐるのが佗しくて、
なぜ目がさめたのか、泣く事も出來ない、
全く氣が狂ひさうな暫くです。
今迄かなりはつきりしてゐた筈の私の人生觀、
それらは物のみごとに吹き飛ばされて、
指針も何も何處へ行つたやらと云つて。

女よ、おれは今おまへを愛する自分を感ずる。
別れて再び會ふまいと心に定めたいま、
おれはおまへを最上のものに數へる。
おまへの苦痛をおれの廚子に納める。
おまへはおれに永久に失はれない女だ、
おまへの苦惱はおれの苦惱となひ合せになつて、
おれの胸にとこしなへにうづくであらう。
おれはおまへのために生きる事は出來ない、
おまへはおれのために死ぬ事は出來ない、
然し今、おれの生も、おまへの死も、
おまへの生も、おれの死も、
もはやわかちがたくなつてしまつた。
いつか、おれの死がおまへの耳に達するとき、
また、おまへの死がおれにひそかに囁かれるとき、
わが半身の滅びのいかに痛く痛いか。
おれはせめてもにそれを信じたいのだ。
おまへはあののち多くの男に接しながら
つひにおれ以上に愛する男を見出さなかつた、
おれもあののち多くの女を求めて
つひにおまへ以上の女を見出さなかつた。
それゆゑ、二人は相合はずして死ぬべきだと、
おれは今、おまへを愛する自分を感ずる。

×

大阪に宿をとつて、九時すぎに
毎日、吹田にかけて行くか、
女が出掛けて出會ひにくるか。
伊勢の菰野で落合ふか。

この戀、いまは枯葉にて、
心は向かぬ風の旗。
緋桃咲く吹田の春は床しとも
蘆屋川邊のくりかへし。

西の都に色をんなもつて
ときどき會ひに行くといふ、
そのたのしみは人のやること。
おれは破れた戀を悼めばよい。

一度び心が行きすぎたなら
またもとへは引き戻せぬ。
杯を傾け盡し、一滴も
底に残らぬ今日のおれだよ。

×

あけ方夢をみたといふ、
會ひたくて堪らなくなつて
苦しい思ひをして會ひに行つたのに、
みつかるといけないから歸れ歸れつて、
私の思ひの半分もわかつちやくれず、
あたたかく抱いてもくれない
男のなさけつらい夢。

丁度その折りみた夢を
われもそなたに語らうか。
高い屋根の上に座席があつて、
何と云はれた善知識か、
小手をかざして都のいらかずつと見て、
かへりみて云はれた言葉、
「おう、これは、地獄極樂一目ぢやなあ！」

地獄極樂、おれも見たよ。
町のいらかは焦熱地獄、
阿鼻叫喚の聲も聞えた。
それから上、雲間の極樂に
蓮華、珊瑚は華咲けど、
おれとそなたは、刀葉林、
身をば引裂くおれを見たよ。

×

一家を擧げて、元日に、
淺間神社に初詣で、
主人の後から、妻と妾、
女いくたり書生までの
いつも乍らの大行列が
門を出るのにあつたといふ、
靜岡にかへつて來た
そなたの友の話である。

紫がかつた派手な羽織を着て、
斷髮をして、十も若く見える
人の姿をきくときは、
さも今の身の上に滿足して
何のくつたくも無ささうで、
妻ならぬ妻の暮しの苦しさを
さぞな辛やの思ひ遣り、
しみじみ今はおろかにて。

男心は冷えるもの、
水をかけられ凍るもの。
そなたの友は眞實心、
僞らぬ言葉は迷ひを照らす、
迷ふ心の傷を照らす。
あの人は誰でもいいのです、
その言葉は噓か、そなたを傷つける
たくみのわなの言葉と云ふか。

わがことなんど囁いたのが
餘計な事ではありつらん。
そのおろかな女、ゆるし給へや、浅間(せんげん)の神。

×

女は男をたしなめる。
この世では結べない二人だつて、
もう結ばれて居るではありませんか。
氣持の上で、こんなにまで
結ばれて居るではありませんか。
そんなにまで私の氣持は
進んで來て居るんですもの、
これきりで終るべき運命だなんて、
あなた樣は、これきりで終らせて
なんともないんですの。
一緒に住まなければ、
路傍の人にも等しいとは、
あんまり現實すぎるではありませんか。

われも女の心を知る、
そなたの心の奥底を
きつぱりと云ひ切つて、
さしものその人を驚かした、
今更なんで惑ひはする。
そなたのやうな性格の女には、
自分を愛してくれる男なら、
金さへあれば誰でもいいのだと、
思ふはわれのまちがひかしら。

淺間神社に初詣で、
ふたりの妻の足並揃へて、
主人(あるじ)大切(だいじ)の心を揃へ、
家内安全、無事息災と
うち競うての願ひごと、
神もよみしたまふらん。
小わきに呼んで、そなたの友の

あなた様がどうお思ひになつても、
矢張り私の心の人、夢にみる人、
あこがれの人であるのです。
あなた様は私にとつて、それで十分
私の心はうれしいのです。

男は女を思ひ惑ふ。
女心はわからぬもの、
信じすぎれば甘くなり、
疑ひすぎれば卑しくなる。
この女、この賢い女、
あまり美しく見すぎたかしらん、
今はあまりわるく見すぎるかしらん。
女に友はないものを、
友の言葉に心騶ささせ、
動きすぎた輕率、
いなとは思ひ思ひ、傾いたか。
女の文を見るときは

わが思ひ、足らぬ心地す、
その言葉、胸に量れば
輕々と飛ぶ心地す。
君が心のまことすら
神の支へにたわむかや、
細い嫩枝の心ゆゑ
微かな風にもたわむかや。
知らぬ、知らぬ、知らぬ、
君のまことも、君のうそも。
心ひとすぢ、われも惑へば
君のまことも空ぞかし。
うそであれ、うそであれ、
君もわれをだまして
うれしがらせてゐてたもれ、
それが何より、君が愛。

×

離れ住めば死ぬまでも、

死ぬまでは離れ住まうよ。

今すぐ逢へないといつたつて、
いつかは逢へるでせうよ、
計は百年の後にあり、
そんなにまで長い先きの事に
希望をつないでゐるそなた。
おなじ土地に住むやうになればと
いま一生懸命に、東京へ
住む事を考へて居るのですの。
東京へ行きたい、東京へ住みたい、
それが私の口ぐせなんですの。
來年はきつと東京にまゐります、
住むためにねといふそなた。
その暮の言葉、心も暮れたのに。
希望をすてないで下さいませ、
私も勿論すてはしませぬ、
私のたつた一つの希望なんですもの、
すてるもんですか、
離れ住めば死ぬまでも。

いつそ死ぬまで離れ住まうよ、
そなたの夢をふとらせて。

×

一人の女はかう訴へる、——
良人でもなく、戀人でもなく、
父でも、母でもなく、
あらゆる感情から解放されて、
私を抱いてくれるものはないか、
私の心をいたはつてくれるものはないか、
私の心は荒みすぎてゐる。

一人の女はかう訴へる、——
あらゆる男に捨てられて、行き場がなくなつて、
もう死ぬほかにみちがなくなつたら、

いつでも來いと云つてくれる從兄、
ああその永遠の男性の心を
私は從兄ならぬあなた樣に求めたのです、
求めようとしたのが無理だつたでせうか。

女はみんなおれに求める、
おれの持たぬものをおれに求める。
そして、おれの求めるものを與へはしない。
それが女だ。女はただ愛されたい、
愛することを女は知らない。
おれになれといふのだ、寂しい永遠の男性、
冷たい血の氣のないオシヤカ樣。

愛してくれる男なら、そして金のある男なら
どんな男でもいい女、
自由にさせてくれる男なら、
どんな男でもいい女、
そのくせそれでは物足りない、
滿たされぬその寂しさを滿たしてくれる
永遠の男性と呼ぶ偶像が要る。

おれにその木像になれといふ女たち、
女の可愛らしさは勝手だからだ。
女は男の業である、地獄である。
女なんて下らないと云つた友の
言葉をおれはほんとだと思ふよ。
女よ、おまへたちは默つて咲いてゐろ、
おれは振向きもせず通りすぎたい。
女よ、おまへの呼びかける男は骸骨だぞ」

さても、不思議で、不思議でない、
あんなにちがつたと思つてゐた女が
今はおなじ女になつた、おなじ夢の女、
抱いた女も、抱かぬ女も。
おれも女の夢の男、オシヤカ樣、
身をゆるした女からも、

ゆるす機會のなかつた女からも。

戀の果て、鬪ひの果て、
思へば荒寥とした冬の海、
凍つたやうに重苦しい空虚、
みんな夢だ、むなしい夢だ。
戀に心はふさはないで、
鬪ひに身は堪へられないで、
杯を手にもてど、酒は空しく、
力を出さずして腕は萎えた。

これが人間の末路といふものか。
業に襤褸屑、女は紙屑、
もみくちやにした男の一生。
おれはみんな擲つ、みんな要らん、
戀も、女も、生も要らん。
おれはおれ一人を抱いて死ぬんだ、
おれは一人だ、たつた一人だ。一人だ、一人だ。

×

おれはこの詩篇が世に出る日を恐れる、
それは自分のためでなく、他人のために。
おれは既に名譽も何も地に擲つた、
一生を棒にふつてしまつた男だ。
おれはもはや紳士の道は歩かないんだ。
だが、そのおれにも捨てられぬもの、
なほその柔弱な思ひ遣りが殘つてゐる。
おれはこのために幾人の人を傷つけるか、
幾人の女の心を碎くであらうか。
一體、おれがそんな事をしていいのか、
おれが愛した事のある女を苦しめ、
女の生活を、詩のために亂していいものか。
それは道德的な事であるか、
それはおれの背いた藝術至上主義ではないか。
おれは赤裸の人、一糸纏はぬ眞實もて
日月の下に煌々と輝き出る無垢清淨、

紫摩黄金の身を露出する誇りありとも、
あらゆる懺悔錄の著者の罪と恥あり、
かの豫審廷の被告の白狀の心理を見ぬか、
行きがけの駄賃、卷きぞへに引込むその汚らはしさを。

だが、一人の女はおれを許してくれた。
私はどんなに傷ついても迷惑しても
かまはないから、本當の事を
思ひ切つて歌つて下さいと、
あの女はおれを勵まして云つたのだ。
そして、おれの世に出す詩を嘲つて、
發表されたものは私みな嫌ひ、
ウソ許り書いてあるからとおとしめた。
いつも世間を相手に商賣してゐるやうで、
逆襲されない樣に、御機嫌を損じない樣に
氣をかねて、なんていやな事！
唾棄したい嫌惡を感ずるとまで云ふ。
あなたの心、あなたの持つてゐるものは
こんなものぢやないんです。
ああ、私はそのウソのかげにも
眞實のものを痛いやうに感じます。
思ひ通り思ふ事の凡てを激烈に云へない
憤懣までも漲つてゐますと云ふ。
その女の心は、おれと一緒になれなくも
おれの詩に生きるおのれを喜ぶだらう。

私はあなたの一番よき理解者でありたいと
いつもいつも思つてゐましたといふ女よ。
私はいつも眞劍な心をもつてゐます、
そしていづも傷ついて許りゐます、
それでいいんだと思つてゐますといふ女よ。
おれは此中でおまへをいかに辱しめたか知れない、
おまへを冷めたい女と嘲つた。
だが今、おれはおまへの本心を知つてゐる、
おまへはあばずれでなかつたのだ、
おまへは氣の弱い女であつたのだ。

おれはおまへをもつともつと悪く思つてゐた、
そして、おまへに求むべきものを、
他(ほか)の女に求めようとしたのだ。
常識的な、悧巧な、用心深い、
分別心(ふんべつごゝろ)の女に求めようとしたのだ。
おれの迷ひは今強く罰せられてゐる、
おまへはそれをも許してくれるだらう。
おまへはおまへの缺點でもつて
おれにおれの詩を書かせたのだ。
だが、おまへはそのおまへの美點でもつて
おれの詩を喜んで愛してくれるだらう。
おまへ一人の言葉でもつて、おれはこの詩を
破らないで世に出さう、そして、どうぞこの
非常識な二人の罪を許して下さいと、
常識的な、悧巧な女の人たちに、
おれはおまへと二人分、頭をさげていいのだ。

×

男はみなその得なかつた女と眠る。
墓の中で、男は失はれた女と眠る。
男の墓に生え出でる草は悔である。
雨毎に草は茂り、闇には螢が飛ぶ。

男はみんな出來損ひのドン・フアンだ。
女はすべたでも立派なカルメンだ。
男の誘惑はすべて自然への叛逆だ。
女の存在は惡魔の出したおとりだ。

男が女に救はれるとは
自分で自分を救ふのだ。
久遠女性は男の譬喩だ、
ファウストは結局詩人であつた。

女に滅ぼされてしまふ男は
自分で自分を滅ぼすだけだ。
男は女を失ふ事によつて、

永遠に女と一緒に眠れるのだ。

×

おれを溺らさうとした波があつた。
おれは必死に泳いだのだ、
波の間に白くきらめく人魚を追うて。
人魚は逃げた、逃げながらおれを招いた。
いま、その影は遥かに遥かに薄れてしまつた。

おれは又、新しい渦巻の中に捲込まれた、
新しい岸へそれはおれを搬ばうとした。
だが、おれは生きてその岸へ行き着けるか。
人魚ではない、幻の女でなかつた、
巨大な鰐、鮫のたぐゐか、
おれはその背に乗れるか、
その口に呑み込まれるか。

どうなるものか、魚は何丈、おれは五尺、
いつそ呑まれてしまふまでだ。
尻尾に跨つて、威張つてたつて
山なす波がさらつてしまふ。
どうなるものか、呑め、呑め、呑め、
さらつて行け、おまへの好きな方へ。
おれは観念つけて浮んでゐようよ。

×

必死になつて
失敗の記念塔を建てる男がある。
みんな嗤つてやれ、
其奴（そいつ）の未練を。

まづ、自分で自分を嗤ふのだ。
その後から、石が飛ばうと、
唾が飛ばうとかまふものか。
おれはもう降参したのだ。

おれは世間から滅ぼされる前に
自分で自分を滅すのだ。
何とでも云へ、
おれは自分の意志で死ぬのだ。

おれが必死になつて
腦味噌を塗りたくつたのは、
自分を滅ぼすためだつたのだ。
次ぎのの時代に生き殘らうためぢやない。

おれはおれの失敗を
完全無缺なものにするために、
この一年を生きのびたのだ。
もうかなり仕上げは出來た筈だ。

おれはやくざな人間が
どの位ゐ始末にをへぬものか、
その見せしめに生きたのだ。

何とでも云へ、もうすんだ。
もうすんだ。

×

「新詩人生田春月、彼の時代は來てゐる！」と、
若い詩人はおれを祝賀し、激勵して叫ぶ。
おれは次ぎの時代に生き殘る詩人と云はれ、
新興詩人の一人にさへも數へられる。
おれがそれを喜ぶと思ふか。喜ぶのは、
十年前のおれだ。今のおれぢやない。
おれは今、おれの無力に飽和してゐる。
おれが今いかに奮ひ立つとも、それは道化よ。

おれの時代が來たつてどうなるものか。
おれは時代の苦悶をうたふ詩人だ。
インテリゲンチアの悲哀をうたふ詩人だ。
その敗北と破滅の中にこそおれの眞實がある。
おれが勝つのは、ただその道だけだ、

このおれを克服し、おれを淸算する。
それはおれが詩人をやめることだ。
詩人をやめて、實行家になる事だけだ。
それが出來ねば失敗だ。おれは失敗だ。

おれは昔、最も悲痛な反抗の聲を擧げた日に、
可憐な砂糖水の詩人と卑しめられたが、
今、痛み傷つきよろめく時に、
意氣颯爽たる闘爭の詩人として讃へられる。
これが世間といふものだ。その世間の
毀誉褒貶に心動く、それが詩人といふものだ。
おれの時代なんぞはすッ飛んぢまへ。
新時代の詩人、少壯の士は奮ひ起て、
勞働者、農民、すべて起て、君等の時代が來た。

一九三〇年、一八三〇年七月革命の百年祭、
この光榮ある年にまだ生きのびて、
おれはまだ何をしようといふのか。

三年越しのトオテンタンツ、まだ引延し、
無産階級の尻尾として壽命をつなぎ、
左翼陣營の中に右顧左眄、千鳥足、
闘爭心絶した時もなほ空聲しぼる、
それがおれの光榮ある未來だといふのか。

おれは又、あらゆる女を蔑んでゐる。
今すべての詩人が目をみはつて、
そのめざましい轉向を注視してゐる
こんな大切な時に、何たる事、
主義でつながる女ならば知らぬこと、
他愛のない女につかまつて
ぐづぐづしてゐる氣が知れないと
歯痒がつて云ふ女詩人の友よ、
おれは戀なんてものには唾するのだ。

無力なインテリゲンチア、失敗詩人、
戀も闘ひも、おれには無意味だ。

おれもアナキストだ、ニヒリストではないといふ。
いや、ニヒリストだ、アナキストではないといふ。
何でもない、おれは何でもない。
ただ、みぢめな、敗れた人間なのだ。
不幸な、やりそこなつた人間なのだ。
おれは人間の末路といふものが、
いかに悲慘で、くだらないかを示すのだ。

だが、それでもおれはおれだ、おれは人間だ。
たしかにおれは人開性の眞中まで來たのだ。
おれは阿呆の眞實を示しえたのだ。
おれは自分を欺かなかつたのだ。
世間の眼はなほさら欺かなかつた。
その點で、おれの時代は必ず來るのだ、
詩よりも眞實を重んずる時代が。
だが、それはおれにはポステュマスなのだ。
おれは生きておれの時代に出會へたなら、
確かにそれは宇宙の大きな手違ひだらう。

×

まあ、よく喋るねえ、
よく笑ふねえ。
身振りもうまい、
濡事もなかなか上手だ、
キスの仕方もとてもすてきだ。
あれはどんな人間だい？
あれは役者といふものサ。

役者といふものは重寶なものだね、
面白くもないのに笑ひ、
自分でも分らぬ事を喋り、
好きでもない女をくどいて
人の目の前でキスをして、
時には惚れた女を本當に抱いて
それで給金まで貰ふとは。

どつちが本當だい、役者の生活は？
舞臺か、樂屋か？　どつちもウソだ。
ウソの中のまことだ、まことのウソだ。
だが、おれも役者だ、詩人といふ役者だ、
おれの詩もウソ、おれの生活もウソ。
プロレもウソだ、シュル・レもウソだ。
おれは一つの眞實のために詩を擲つ、
おれは詩に唾する、自分を突き殺す。
見ろ、おれが詩人か、おれは人間だ。

×

熟柿のやうな泥醉女の肉に食ひ入り、
肺病の女の接吻を味はつた。

あまたたび禁斷の果實を盜み、
頰をかすめて冷氷の劍を感じた。

千尺の斷崖の上にをどつて、
海の落日を飽かず眺めた。

裏切の爆彈の上にすわつて、
その口火で煙草の火をつけた。

これがおれの一生だつた。
なぜおれはまだ生きてゐるのか。

いま、おれは惡魔を探して歩く、
いかに彼がおれから逃げようとも。

惡魔の巧みな變裝を看破るとき、
下界はおれの天上であらう。

唾せられた眞實を裂き、
踏み躙られた善を碎く。

かくて、生死なし、危險なし。

ただあるは恥、あるは不面目。

みんなおれの面を張りとばせ、
おれの死骸に小便をひツかけろ。

おれを殺せ、おれを殺せ、
殺されながら、生きるおれだ。

十一月十六日——一月八日
（東京）

——これで終りだ。
もう書くまい。

終篇

愚かな白鳥

×

一生、正直に何もかも歌つた、
バカな詩人だね。
もう默つてゐろよ。
まだ默れなくば
象徵の絃(いと)につたへて、
眼に云はせ、
心に云はせ、
涙ぐむ眼が知り、
惱ましい心がをどる。

おれはあまりに饒舌だつた、
もう默り込んでもいいぞ。
象徵の奥儀はここに、
言葉なく、命なく、
ありなしの記憶の底に
時ありて閃めくもの、

一生は稻妻、
まぼろしを人はとらへて
詩はここに、死もここに。

歌ひ出でてはならぬこと、
この禁斷を幾度犯した、
バカ詩人だね。
一人祕めてたふといものを
歌ひ盡して、滅ぼした。
無花果の葉につつみ、
神にそなへて、
無にそなへて、
不壞(ふゑ)の珠(たま)、地下に輝やく。

その三日、今はうたはず
眠りの床に持ち去らば、
生の祕義、全(また)く殘され
摩訶不思議、夢の護符とて、

君を護り、
われを護り、
言葉の寺の龕の中、
とこしへに祀らるる
その歌はれぬ歌。

×

菰山の夢、甲山の夢、
甲山の夢は切なく
菰山の夢はもの狂ほし。
むかしはつらき晝の夢。
いまは見飽きぬ夜の夢。
日も夜も知らず、身も世も知らず
一生はただ、この日この夜。

冴えし瞳にくもる色、
うるむ瞳にさす光、
女心をおなじと云ふか、

おなじ廊下の椅子にかけ
てすりに凭れてすごせども、
かすめる海に見しものは
今見る野邊といかに違へる。

なさけは弱き切なさを
歎きしむかし、つらかりし。
いまはなさけの濃紫、
淺かりきとは、いつ思はむ。
いのちの果てに觸れし袖、
濡れてあらざれ。その袖に
救はれむとはしばし思ひし
迷ひもあれど、世に敗れては、
女心のなにかせん、
ただひとむきに滅びばや。
かの山川の岩藤の
その藤色のなさけいだきて。

×

山の宿の緣にむかひ
若楓の波を見おろし、
顏見合せて微笑めば、
君が心のまことをば
神はいのちにつなぎけん、
細い若枝(わかえ)の直ぐなれば
落ちる涙もはらひけん。

三年(とせ)の後(のち)に、思ひかなうた、
かぼそい若木をうちまけば、
乙女の蕾にも似た花が
風にふるへ、わなないた。
魂消(たまぎ)る消耗のあとに
さむることなく眠らんとて、
君を得たと君は知らぬ。

孤山に夢は全うされた、
最後の晩餐の葡萄酒、
その紅き色に祕義は啓(ひら)かれ、
刹那の永遠がわれに來つた。
いざ、今は思ひ殘さじ、
うしろ髮曳かるれば切れ、
なつかしき人、いやなつかしくとも。

×

いつも涙で見た人は、
晝も微笑み、夜もわらふ。
しばし樂しき今日の日の
ただひとときも惜しやとて。
危ふき橋をわたれども、
溪水靑くたぎれども、
おそれもせずに微笑める
その面影をかたみとて。

いつも空しくあこがれた
珠は手に鳴る、冴々と。
ひと夜の床に光りつつ、
いのちと望みささやきぬ。
われにいのちは殘らねど、
われに望みはあらねども、
このひとときに君を得て
朗らに笑みぬ、おのれすら。

×

靈蛇を洞に封じ込む
高き聖にあらねども、
山また山の奥ふかく
千年の夢を鎖し籠めて、
けふぞいのちはみち足りぬ、
また世にかくる夢もなし。

夢の果てまで見る人は
おろかな悔に死ぬるとぞ、
いのちをかけて傾けし
小さく香れる杯に
夢はのこらず盛られたり、
いきは醉ひつつ死ぬべきを。

×

もう死にたくなつたでせうと
あのたのしい一瞬に女は云つた、
そのときぞ身は死んだ、
君に殺され、君を殺し、
その死は生につながる死、
見ずてやむべき夢であつたか。
見た、見た、見た、
見たのちは、ただに忘れて、
のこりなく身にゆだねて、
そののちに、まこと死ぬ身と
ひとり死ぬわれとは知らず、

いや靑やかに、いやにこやかに、
君はいのちによみがへる。

友の言葉にうたがひ、ねたみ、
意地惡に、さかしらに、
刺ある言葉しるせども、
けふぞ心の妻の名を書き、
地獄と天國の結婚式、
影と光の結婚式、
愛と狂ひの默示錄、
いまは肝にぞ書き刻む。

女の身の上安らかに
波風もあらせじと
ただ默すこそ、
これぞまことの愛と知る。
たのしき事のかずかずは
その眼に籠めて、
この眼に籠めて、
わが一生の最後の榮冠、
わが一生の最大の詩を
溪河の水に流した、
わが名も、君が名も、
岩床に長く苔むせ、
文字は空しいしるしだものを。

×

女は女王である、
すべての愛せられる女は。
おろかな奴隷、
二人の女王につかへつつ
二年三年來たといふ。

おれは奴隷か、
おれは暴君、愛なきもの。
多くを愛するものは

一人をも愛しないのだ。

いま、おれの心に
月の影さす、夕月の
匂ひの光、白々と
沈むいのちに照るものぞ、
まことおれのための女王である。

×

都はなれて
奥山ずまひ、
いくら好きでも
出來ないものを。

長のわかれに
なるために、
辛(つら)いおもひで
會ひに來た。

山又山の
果て知れず、
君は心を
馳せるひと。

山のかなたに
幸(さち)なくて、
海にかたむく
われは月。

×

わたしのやうな川だわ、
安つぽい威力よと
女はいつた、その川、
安威川、水まんまんと
蘆も茂る草みち行けば、
水もない蘆屋川、その松林、

思はじとすれど思ひいだされ、
をととしの五月と今と、
なんと身も世も變つたことか。

女給ぐらしのつらさもすぎて、
死んだやうに生きてゐるといふ
女の顔をつくづくみれば
むかしの冴えもくもりがち
笑ひもいまは高く響かず。
過ぎた日の怨みも、悔いも、悲しみも、
おれも云はず、女も云はず。
いつまでゐらつしやるのと
女はきいて、またと東に
かへらぬ身とは知りもせず。

蘆屋は高級だけれど
ここは下級社員のゐるところよ。
蘆屋夫人の榮華も享けず、
新開地に寂しく暮す
それがさだめか、この女、
安威川邊のさまよひが
おれも似合ひの貧乏詩人、
またくりかへしに來たものか。

おろかだ、おろかだ、いや今日は
ただ一目みて、それとなく
わかれ告げんと思うたが、
三つの子供もはや五つ、
おばあさんよといふ女の
まこと寂しい身のこなし、
みんなむかしの悲しい夢よ。
よし、よし、もうなんにも云ふまい、
ただよそごとに、強ひて笑うて、
家毎に節約勵行の札を張つた
ごみごみした町を歩いて
とりとめなく肩を並べて……

一生は他愛もなく過ぎるのだ。
人間は人間で終るのだ。
痴人は痴人で終るのだ。
もうおさらばだ。
美しい世よ、醜い世よ、
もつと美しくなれ、
もつと醜くなれ。

×

堂ビルホテルの八階から
おれは大阪の街を見てゐる。
街のきらめく火の海を見て、
人の營み、いよよ寂しく。
これが人の世。
これが一生。
利は寂しさを消すだらうか。
おれはもう切上げる……

五月十四日—十八日(菰野—大阪)

エリゼ・ルクリユを想ふ

珠の如き人、火の如き信、
聖徒の生活、眞摯の思念、
美果、個人の中に實り、
德性完くして、世は春なり。
一八四八年、學舍を脫し
革命に投ぜんとした少年の彼。
巴里コンミュンの檣壁の上、
銃をとつて立つた壯年の彼。
大作、『地人論』を世に出して、
革命を叫んで死んだ老年の彼。
美しい哉、君が生涯、
正しかりし哉、君が思想。

投票、それは墮落である、

二十年にして、アナルシスト成る。
策略で人を欺くは政治、
僞瞞の選擧、虚僞の選良、
今、民衆を惑はすの日に、
エリゼ・ルクリユ、君を想ふ。
愛は身に溢れ、世をば照らす
人をおもふ、眞の人をおもふ。
人生のこと、ただ眞實、
地上の至福、ただ人格。
君生れて百年、世は荒きに、
至醇の人、ルクリユ、なほ生あれ。

一九三〇・一・三〇

カアペンタアを想ふ

君は粗末な小舍に住んだ、
だが、それは自由の小舍であつた、」
宇宙的意識の小舍であつた。

木の葉の茂みに蜂はうなり
駒鳥の飛ぶところ、
君が詩は、露とかがやく。

君は知る、まことの智慧を、
希臘の美、希伯來の愛、
印度の智慧、ここに統べられ、
自由人、鳥の如く生き、
ただ見る四山黄また靑の
悠久の生を君は歌つた。

トワアド・デモクラシイ、
トワアド・フリイドム、
闘ひの中に歌はひびき、
人を汚す文明のかなた、
土に生きる土の人、土民生活、
これぞまことのデモクラシイ。

詩人こそ、まこと哲人、
哲人こそ、まこと豫言者、
强權、權威、私欲を敵に
ただひとすぢに八十年、
地の子の業(わざ)は地下に働らき
ひそかに友を君にはこぶ。

一九三〇・五・一一

遺稿詩

——葦丸船中にて書ける——

×

のら猫が仔を生んだ。貴婦人のやうな樣子をした。
尻尾の長い眼の凄い三毛猫が。
眼の下に隈どりをしたあの女を想ひ出させる猫が。
あの女の子供の手を引いて歩いたやうに、男はその
猫の仔を膝に抱き上げた。

×

愛する女に會ひに行つた。愚痴な心である。でも、
一目でも會つて、それとなくいとまごひがしたかつた
のだ。

×

出發のきつかけがなくてはならなかつた。それを或
る女性が、自分でも氣付かないで與へてくれたのだ。
が、同時に、彼女は自分を君の方へと幾分か引き戻し
た。彼女に會つた爲めに、折角の心持がかなりにぐら
つき出した。

デスマスク

自分は後世、大文豪とか、大詩人とかいふ尊稱のも
とに殘らうといふ自信などは少しもない。自分はマイ
ナア・ポエトに過ぎない。從つて、その書くところも、
果して書くに値するかどうかは疑問である。然し、世
には隱れた詩人の傳記に興味をもつ人のある事をも自
分は知つてゐる。自分はただそうした好事の、そして
自分にとつて最もなつかしい人達のためにこれを書き
遺すのである。その人達こそ、本當に自分を愛してく

れる人達に相違ないのだから。

マイナア・ポエトとして、たしかに自分は模範的な人間だといふ自信を自分はもつてゐる。かうしたつまらない詩人は、文學史的の價値はとにかく、その人間的な弱さや、愚かさや、醜さによつて、多少の興味はあるだらうと思ふ。

海　圖

甲板にかかつてゐる海圖、それはこの內海の海圖だ

ぢつとそれを見てゐると一つの新しい未知の世界が見えて來る普通の地圖では海が空白だがここでは陸地が空白だ

ただ僅かに高山の頂きが記されてゐる位のものであるがこれに反して海の方は水深やその他記號などで彩られてゐる

これは今自分の氣持ちをそつくり現はしてゐるやうな氣がする今までの世界が空白となつて自分の飛び込む未知の世界が彩られるのだ

內海を歌ひ四國の連山を歌ひつつ

×

部屋の鏡に自分の顏がうつる。これが最後の顏だ。

遺書

○

いろいろのところをまはつて、ここまで來た。くはしい事はあとで書く。

十五日

名古屋にて

春月

花世様

○

たうとうこの手紙を書く時が來た。今度の機會に、一昨年から考へてゐた結末をつけることにした。この手紙の着く時分には、僕はもはやこの世にはゐないだらう。何だか積年の重荷をおろしたやうな氣持がする。もつと生きて、家のことなどよくすればいゝのだが、もうその力もなくなつたのだから、ゆるして貰ひたい。時代は變つた、今切上げるのが、まだしも賢いだらう。この行詰りは、人間業では打開できぬことだ。一日生きのびれば、一日だけ敗北を大きくするばかりだ。

いづれ後始末についての詳しいことは船の中で書くつもりだ。

五月十九日

大阪花屋にて

生田春月

花世様

○

長谷川巳之吉様

いつぞやは參上、久しぶりにお目にかゝりいろいろお話を承りえて、大變うれしいと思ひました。あれからおうかゞひいたさうと思つてゐるうち、こちらへ來てしまつたので、もつと立入つてお願ひしたい事も出來なくて殘念でした。

私の詩人生活も隨分長く續きましたが、もうその終るときが來ました。昨日は堂ビルホテルに一日引籠つて、別封の斷章をまとめました。これがいつぞやお目にかけた「象徵の烏賊」の終りに入る分です。最後にこれを大阪からお送りするのです。いろいろの感慨を抱きつつ。

あの「象徵の烏賊」はおそらく私の詩人としての最高の境地を示したものだと云ふ自信があります。そして、若し全詩集の出るやうな場合にも、當分の間はそれに入れないで、全く別のものとして置きたいと思ひます。

あなたには最もよく分つて頂けるだらうといふ氣がしましたので、お目にかけたのですが、もし價値ありとお認めの上、あなたの手で出版していただける事となつたら、私の何よりの幸福です。そしてその際には、すべてあなたの御配慮御批判に一任いたしますから好きなやうにして出版して下さい。總題も今考へ中ですけれど、まだ思ひ付きません、全體を御らんの上、あなたのお好きな題を付けて頂ければ、うれしいと思ひます。

又、これは前に萩原君と福士君とに見せて、賞めて貰つたので、序文を貰ふ約束になつてをります。これもあなたの御一存次第で、いいやうに取計つて下さい。

まだいろいろ書きたい事もありますが、只今來客で、殘念ながらこれでやめます。また私のアフォリズムの集なども まとめたいと思つてゐましたが、つひにそのひまがありませんでした。友人にたのんでおきますから、その話がありましたらまたよろしくおねがひいたします。それから萩原君の「虚妄の正義」の批評、いつかお目にかけたあの分、たうとう完成出來ませんでしたが、原稿はあとでうちから屆けるやうにいたします。

右とりあへずまとまりのないことを申上げました。あなたの御多幸をいのります。

五月十九日

生田春月

長谷川巳之吉樣

○

先日は失禮しました。十四日に東京を發つて、十七日にこちらに來ました。昨夜は堂ビルホテルに泊つて、そこで別封の原稿をかきました。これはいつかの「時代人の詩」の終りにつく分です。これに自宅にある別の二篇を附して、全體になるわけです。そしてこれは私の遺稿となるでせう。

隨分長いこと、十八歲ぐらゐの時からですから、もう二十年の上にもなります。その長い間、佐藤さんやあなたに隨分いろ〳〵お世話になりました。どうやら生きて來られたのも、みなあなた方のお蔭でした。けれど、私ももう切り上げて、安息に入りたくなりました。實は一昨年、蘆屋に行つて、あなたに御心配をかけたあの時に、今日のやうにすべきでしたが、あのときはまだそこまで熟してゐなかつたのでした。

今は別にほかに心配もありませんが、遺稿のことだけは、多少氣になります。今、一寸思ひ付いたゞけ、個條がきにして、御配慮を仰ぎたいと思ひます。

一、舊版を新たに組直して出版する場合には、自宅にある訂正の臺本（感想集だけは全部を年代順に編纂するつもりで、バラ〳〵にはしてあります。「生命の道」といふ今度の集に入る以前の分は、その中の一部です。大體、この題が全感想集の題なのでした。）によつて、訂正していたゞきたいこと。

一、明白な誤字でない限り、校正の際に、みだりに訂正を加へないで頂きたいこと。校正は友人の石原健生君にたのみたく、同君にもさう申してやります。（同君は漱石全集の校正者です）そして校正に訂正の加へられる場合にも、一應同君にはかるやうにしていたゞきたいこと。

一、「時代人の詩」は大部なものですから、組方などのことは特に指定も出來ないと思ひますが、伏字にする分は、特に、愼重を要すると思ひますから、石川三四郎さんに見て頂くやう、遺族にたのませてもよろしいのです。そして、自宅にあるヒカヘ原稿と對照して朱筆で訂正したところをそれによつて訂正し、又、伏字の指定のある場合はそれに從ふこと。

一、自宅にはまだ「人生詩論集」といふ詩論感想の集と、その他まだ何かあつた筈です。若し出して頂けるのでしたら、他の方は差し留めます。（中西書房に話してあつたのですが）

一、若し機會があつて、全集の出るやうな時もあれば、譯ではハイネ全詩集等の譯詩は入れていたゞきたく、大體の指定は自宅に書き殘してあります。千枚位宛で十卷になります。

それから經濟的な方面のことですが、何分私は他に遺産も貯蓄もないのですから、遺族に殘してやるものとしては、著作權のほか何もありませんから、今度の近代詩人集と、ズウデルマンとで、前借の淸算できるとき、譯詩の留保の條件で拜借した六百圓は、その出版の時期まで保留をねがふとか、又詩の作り方も訂正できませんでしたけれど、やはり印税に引直していたゞくとか、さうした點でよき御配慮たまはれば何より難有く思ひます。いつも御無理なお願ひばかりして來ましたが、然し、これが最後です。終りに、佐藤さんやあなたの御健勝御多幸を切に祈ります。どうぞ佐藤さんによろしく御傳聲下さい。

五月十九日

大阪花屋にて

生田春月

中根駒十郎様侍史

○

こちらに來ました。今夜船にのります。そして、もうかへらないだらうと思ひます。どうぞ僕の弱さをわるく思はないで下さい。仕方がなくなつたのです。

そして、僕のあとの事を、又、何かとお世話を願はねばなりません。校正なども、どうぞよろしくねがひます。新潮社にもさう申しておきました。

もつと詳しく書きたいのですが、今、來客があるので、またあとで書きます。

五月十九日

大阪花やにて

春　生

石原健生兄

○

石川三四郎様

つひに先生におわかれいたさねばならなくなりました。あんなに親切にして頂いたのに、つひに御期待にそむくことは、悲しいことですけれど、もうこの上、生きる力がなくなりました。同志の一人として、微力ながらはたらきたいと望んでゐましたが、何のはたらきもしないうちに、自分の無力のために斃れねばならなくなりました。どうぞこの弱さをおゆるし下さい。百合子さんにどうぞ〳〵よろしくおつたへ下さい。先生のお仕事と「デイナミック」の多幸ならんことを。

五月十九日

大阪にて

生田春月

「地人論」の紹介を書くつもりでゐましたのに、期日が早められたゝめ、それが出來なくて殘念におもひます。

○

加藤武雄兄

隨分長いことお目にかゝらないで居たので、出發前に一度お會ひしたかつたのですが、或る期日までに、或る土地に急いで來なければならぬ事情が突發したので、それも出來無くて殘念でした。僕はいろんなところを廻つて、最後にこゝに來ました。

僕は今最後のまちがひをやらうとしてゐます。しかし、これはどう考へて見ても、僕にとつて最も正しく、且つ最も合理的な行爲としか思はれないのです。これは行く可きものが、その行く可きところまで行く事に外ならないのです。

人間は一度まちがつて生涯をはじめると、餘程えらい人でない限り、終生とりかへす事が出來ません。僕はしみ〲その事を感じました。

僕は文學者生活をはじめた時分に二つの大きな間違ひをしでかしました。そして、今尚ほその呪咀から免れる事が出來ないのです。この三四年間、それを挽回しようが爲めに僕は生きたやうなものでした。しかし僕にはつひにその力がありませんでした。自分の間違ひの爲めに傷ついたものは、もはや、その間違ひを訂正する力は無いのです。いろ〱の都合から長いこと一日のばしにのばして來たやうなものですが、今度丁度いゝ機會が惠まれたのでこちらへ來たのです。今はもう體裁などを顧慮する氣もなくなりましたし、僕のやうなものには、死だけが幸福です。さだめし腑甲斐ない奴、エゴイステツクな奴とも、お思ひでせうが、

これも運命としての性格の必然的結果ならば仕方がありません。

僕が遺族に遺すものは、恥づかしながら貧弱な著作權しかありません。遺稿の出版其他に就いて、又何かと御配慮を仰がなければならないかと思ひます。一生面倒をかけるばかりで、何の酬いも出來無かつた僕の無力をどうぞ憫れんで下さい。終りにのぞんで長い間の深厚な友情を感謝します。兄の藝術的生活の益々多幸ならんことを。

五月十九日

大阪花屋の一室にて

生田春月

○

先刻は失禮した。いろ〳〵話したい事もあつたが、その百分の一も話せなかつた。君がわざ〳〵送つてくれたあの船で、僕が自分の一身を始末しようなどゝは、君は想像もしなかつた事と思ふ。そして、僕の腑甲斐なさを憤ろしく思ひさへもするかも知れない。だが、これはもう仕方のない事だから、どうか惡く思はないで、許して貰ひたい。たゞ僕は、自分の最も古い友人の君と最後に相談ずるをえた事に心からの滿足を感じてゐる。

今日、君の話で二つ僕の胸をうつた事があつた。Ｓ公使の死についての話、及び車上でのあの話。後の事ではいろ〳〵僕も云ひたい事があつた、聞いたこともあつた。だが、今更そんな事に興味をもつても始まらない。終りに三十年にあまる君の長い友誼を厚く〳〵感謝する。どうか幸福で健全で、社會のために、一層力強く働いてくれむことを。

すさまじく流れ去る波を見てゐると、不思議な力強さを感ずる。今の僕の恐怖は、誰かに發見されて、止められることだけである。

さらば君よ、永遠の別れだ。

五月十九日十時しるす

生田春月

田中幸太郎兄

○

今、別府行の菫丸の船中にゐる。今四五時間で僕の生命は斷たれるだらうと思ふ。さつき試みに物を海に投じてみたら、驚くべき迅さで流れ去つてしまつた。僕のこの肉體もあれと同じやうに流れ去るのだと思ふ。何となく爽快な氣持がする。恐怖は殆んど感じない。發見されて救助される恥だけは恐しいが。

今日は田中幸太郎君が宿にたづねてくれて、六時に今橋のつる家といふうちへ行つて、晩飯を食べた。座上、たま〳〵佐分利公使の自殺の話が出た。その表面に出ない或る原因を聞いて、成程とうなづいた。僕は詩にもかいた通り、女性關係で死ぬのではない。それは附隨的な事にすぎない。謂はゞ文學者としての終りを完うせんがために死ぬやうなものだ。たしかに、此上生きたなら、どんな恥辱の中にくたばるか分らないのだ。それも然し、男らしい事かも知れないとは思ふ。が、僕は元來、男らしい男ではない。だから、これが僕らしい最期で、僕としての完成なのだと思ふ。

僕の生涯も愈々玆まで來たのだと考へると、實に不思議な朗らかな寂しさを感ずる。

今、神戸に船が着く。相客のないうちにと急いでかく。

今、原稿其他家事上の事などで、一寸氣の付いた事だけを記しておく。大體は整理しておいたが、何分今度は急いだものだから澤山仕殘した事がある。○訂正用臺本のあるものは、それによつて改版の際訂正すること。○滿洲郎の詩集は、第一書房の長谷川君にたのめば、或は引受けてくれるかもしれない。同君宛の手紙にはその事を書かなかつたけれど、同君ならば義俠心からでも相談に乘つてくれさうだ。自費出版の場合、

あれだけで金が足りなければ、どうしても僕の遺稿の方の收入をさいてほしい。僕の供養はそれだけだ。序文を書く事が出來なかつたのは殘念だが、いつか文章倶樂部に出した彼の詩への序の言葉と、いろ〱の感想中にかいた彼についての言葉とを用ゐてほしい。○新潮社の前借は、二千六七百圓位と思ふ。(今度は三百圓借りた、それも入れて)或ひはもつと尠いかもしれない。日記をみれば大體わかるだらう。今度の近代詩人集、猫橋でうまい工合に行けば殆んど返せるかと思ふ。返せなければ、ハイネなどのために借りた六百圓だけはその出版される迄保留して貰ふこと。その他今後の出版からは、悉く印税が入るわけだから、まづ〱やつて行けるかと思ふ。詩の作り方も印税にして貰ふこと。これらの事では中根さんにくれ〲もたのんでおいた。加藤君にも配慮をたのんでおいたから、面倒な場合には、同君にたのんで話をして貰ふこと。○春秋社には四百圓位借りあり、小說ハイネはつひに書けないでしまつてすまないのだが、何かの本でかへせれば何よりだ。春秋社にハイネの訂正した分が行つてゐる。今度ハイネを出す場合、それによつて多少訂正ができる筈だ。○僕の原稿の校正その他、石原君に萬事相談してほしい。同君にもたのんでおいた。○原稿は散逸しないやうに、大切にしてもらひたい。○石川先生にも手紙をかいた。ことによつたら僕の詩の伏字をどの程度にするかについて先生に閲覽を願はねばならぬかもしれない。よくたのんで下さい。○鳥取の自由社のための講演にはたうとう行けなかつた。あのときは、行つてから、そのかへりでと思つたのだが、もうそれが堪へられなくなつた。第一、今講演するとなると、いかに自分が破滅しなければならぬかを、即ち白き手のインテリの悲哀についてしか云へないのだ。そんな事をいふのは無駄なやうな氣がするのだ。だが、

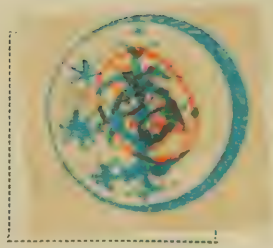
鳥取の村上氏と尾崎さんとにはあざむいたやうですまない。お詫びを云はうかと思つてやめた。よく詫びて貰ひたい。〇西島治子さんには實に世話になつた。蔭日向なくよく働いて盡してくれたので、あの子の一身上の責任をなげうつのをすまなく思ふ。あなたのよき助手として、面倒を見てやつてくれなくてはならない。〇諸友人には一々訣別の言葉を書かなかつたが、よろしく〳〵皆様に傳へて下さい。〇同封の百圓はつかひ殘りの金だ。何かの足しにはなるだらう。その他いろ〳〵書きたいがもうよさう。

さらば幸福に、力強く生きて下さい。僕はあなたの惡い夫であつた。どうかこれまでの僕の弱點はゆるしてもらひたい。今にして、僕はやはりあなたを愛してゐる事を知つた。さらば幸福に。

春　月　生

五月十九日夜

生田花世様

生田春月全集

第三卷

昭和六年五月廿五日印刷
昭和六年六月一日發行

編輯者　生田花世
同　生田博孝
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町七十一番地

發行所　新潮社

電話牛込（長）八〇五番　八〇六番　八〇七番　八〇八番　八〇九番
振替東京一七四二

印刷者　佐々木俊一
富士印刷株式會社
製本者　大出清次郎

全十巻目次